加藤紫舟著

# 俳人芭蕉傳

天來書房

# 芭蕉翁像

越中　宇野次四郎氏藏

芭蕉翁眞筆

(はつ時雨猿も小蓑をほしげなり)

金澤　板垣順作氏藏

芭蕉翁眞筆

（佐々木志律馬氏宛書簡）

渡邊刀水氏藏　王埼

# 芭蕉翁眞筆

（出羽三山の句）

大阪　北田彦三郎氏藏

# 俳人芭蕉傳序

帝大の古事記の講義を了つて歸宅し、一風呂浴びて今し晩餐に向はうとする折柄であつた。隣家に住む長男一信が、親友加藤紫舟君を案内して、逢つて欲しいとの事であつた。予は古典研究の必要上、和歌には多少の趣味と自信とを有して居るが、俳句には必らずしも堪能の士ではないので、斯道に造詣深き君の御來訪に接し其の非凡なる蘊蓄の一端をお聽きする好機を得たことを非常にうれしく思ふた。氏はその態度極めて眞面目で且つ非常に熱心な俳句の研究者であり、實に芭蕉傳研究の第一人者であることは何人にも看取せられるところである。

俳句と和歌との比較談から始まつて、自他作品の批評に及び、話は益〻佳境に入つて盡くる所を知らず、遂に君が、懇請の序文を欣然快諾、禿筆を揮ふことになつた次第である。

君の談に依ると、君は十四歳の時、始めて發句を口遊(クチズサ)んでから今日に至るまで、

或は早稻田大學に學び、或は書肆泰文堂に在つて編輯に從事する暇にも、常に俳句の鑑賞と其創作とに沒頭せられたのであつた。君が主幹せられる月刊「黎明」が、創刊以來既に十箇年に垂んとするにも係らず、能く其聲價を博し得て居るのも亦是の眞摯なる態度に由るのであらう。

君が此度著はされた俳人芭蕉傳を一見するに、多年の研究に成つたもので、其長所美點は固より多々あるけれども、就中其特徴は、實に君が其の創作的才能と、鑑賞的識見とを兼ね併せて、之を君の現代意識から再吟味した點にあるやうである。

一體世間では、芭蕉と云へば直ちに俳聖と決めて、甚しきに至つては其藝術を殆ど鑑賞すること無く、只僅に五六の名句に依つて、偉いものと決めて居るものが多い。俳句だけでは芭蕉の半面しかわからない。夫れと同時に俳聖であるといふ意識を以て、芭蕉その人を觀る時は、又其の半面しか判らない。然るに君は其間に在つて、正しい芭蕉を眺めようとして、藝術的作品を、常に芭蕉その人の生活と結び付けて檢討せられた。神でも佛でもない人間として觀た時の芭蕉の偉大さを描かうと

して努力せられたのである。

宗教的考察に走らず、英雄崇拜的考察に陷ることを避けて筆を進められたから、從つて俳句も、公平な態度を以て藝術上から眺められたと思はれる。君が創作と鑑賞とに秀でゝ居られる所から、世の研究のみに沒頭して居る者とは自ら異つた芭蕉が眺め得られたのではあるまいかと考へらるゝのである。

君の熱心な談を傾聽して感に堪へず、聊か卑見を記して序に代へる次第である。

昭和九年七月一日

文學博士　穀堂　山本信哉

# 序

知友加藤紫舟氏は俳誌『黎明』の主宰者である。「印象俳句」を標榜して、現俳壇の何れの派にも屬せず、獨自の位置を把持しつゝある新銳俳人である。家集『森林』に、句集『峰座』に、その所謂「印象俳句」を具象的に鮮明して、注目すべき將來を約束してゐる。

かかる氏が、溢るるばかりの熱意を以つて、芭蕉研究に志し、曩に『芭蕉夜話』を公にし、この度又、裝をこらして『俳人芭蕉傳』を刊行した。古俳人に不案內な現俳壇人の中に在つて、氏の如きは、まことに稀に見る篤學の士と言ふべきであらう。過去の偉俳人の全面貌を考察し、明日の俳諧に備へる氏は、「溫故知新」を文字通りに行くもので、一方の盟主として、當然執るべき敬虔な態度である。

しかも氏は、世の多くの人々が、無意識裡に培はれた芭蕉に對する旣成概念——人としての芭蕉、藝術家としての芭蕉とその作品に一瞥だも與へず、芭蕉を以つて

直ちに俳聖となす盲目的信仰に多分の不滿を感じ、玆に創作家としての氏の鑑賞的識見と現代意識とを通して、人間芭蕉・俳人芭蕉の再吟味を企てたものである。古來芭蕉に關する研究書のすくなからざる今日、本書が對外的にその存在を主張する理由がここに闡明され得る。

多年に亘る研鑽の結果、俳人芭蕉の姿を、潑溂たる生命を以つて現前せしめて呉れた加藤紫舟氏の業蹟に對し、深き喜びを喜びつつ、拙き一章を本書に捧げる。

昭和九年七月一日

松本義一

# 目次

第三章　壯年時代の芭蕉（一）……………………四六

## 第八章　芭蕉の強年時代（四）……一九九

## 第九章　芭蕉の强年時代（五）……………………二三六

## 第十三章　晩年の芭蕉（一）

## 第十四章　晩年の芭蕉（二）……三八六

# 世界的詩人としての芭蕉の特質

國亂れて忠臣現はるとは先哲の喝破せる千古の箴言である。天下泰平の倦怠漸く兆ざし飽くなき淫靡輕薄の世に、哲人芭蕉の世に現はれたことをば、或ひは例外、或ひは單なる不可思議を以て片付けてしまふ人があるかも知れない。併し我々は複雜多端なる元祿前後の世相より觀察して、單に浮華といふ二字の皮相的潮流の下にこれを看過してはならないのである。

德川初代將軍家康公が天下を統一してから主として文教に力を注いだ。それはいふまでもなく武を忘れてではなくて、消極的には戰亂を遠ざける爲めの手段であり、積極的には文を以て國民を醇化せんとする政策に他ならなかつたものであらう。其の結果日本文化史上に於て學問・宗教・藝術界に異常の向上發達を促進し、やがて彩華燦爛たる劃期的元祿の文化時代を齎したことは萬人の認むるところである。

看よ、漢學の伊藤仁齋幷びに新井白石、歌學・和歌の北村季吟・僧契沖、人情小說の井

原西鶴、戯曲の近松門左衛門、淨瑠璃の竹本義太夫、繪畫の土佐・狩野派に於けるが如き其の他美術工藝はいふに及ばず、和漢學の隆盛等は、悉くわが元祿の誇し得るところではない。されば是れらが直接間接文化進展に與へた甚大なる功績は、今更ら筆者の喋々の言を俟つまでもない。

諧謔・洒落・滑稽趣味を愛好する我が國民の性格として、和歌より連歌に移つたことは止むなき情勢と言はれやう。而かも和歌・連歌は先づ僧侶・武人階級に培養せられ、漸々として平民間に迎へられるといふ趨勢を辿つたものである。

なほ連歌が俳諧調となり滑稽連歌となりては、愈々民衆の好個棄物となつて來たのである。斯くして漸く德川の泰平爛熟期を招來し、いやが上にも遊戲文學の跋扈したことは、餘りにも顯著なる史實である。

茲に於てか、俳諧はその眞髓を逸して邪道に陷り、徒らに形式に囚はれ、頽廢混沌、遂に收拾すべからざる時に際會し、これを正道に引上げんが爲め、図らずも芭蕉の出現を見たのも、亦天の配劑の妙機と云ふべきであらう乎。

時、殆んど干戈を他所に泰平の惰眠を貪つてゐたもの丶、猶ほ武家は武家としての傳統

的權力を揮ひ、且つ大衆を壓迫するといふ、斯かる時代に、一般大衆が自由を唱へ、自然を求むることは人心の自らなる發露である。啻に思想方面に於てさうであるばかりでなくありとあらゆる方面に新興革新の氣運が鬱勃として社會の裏面に低迷彌漫しつゝあつたのである。そこへ偶々俳聖芭蕉が現はれたのであると云つてしまふことは、說明には甚だ好都合であるかも知れないが、餘りにも妥當を缺く虞れがある。

芭蕉は物慾の恩縁に惱みつゝも尙ほ自己を凝視して、視野を內界に向け、本然の囁きを聽きつゝ、而かも社會の潮流に乘つてその能を誤またず、唯だ俳三昧、只管に自己を鏤刻して現はれた强き情熱の詩人であつた。芭蕉は單なる天才でもなく、幸運兒でもなかつた。實に彼は謙虛孤獨、浮世の榮燿榮華を外に、飄々乎として雲水に身を托し、一蓑一笠、而かも大自然との冥合のうちに、我が魂の尊嚴さを歡喜し矜持したる稀に覩る俳道の行者であつた。眞に蕉翁は一生涯自己內心の光妙に安住しつゝ、克明に努力した俳聖であつた。それ故に芭蕉の作品といふ作品は、旅の子芭蕉の活きた全貌を傳へずには置かぬ淚ぐましき魂の記錄であり、永劫遍照の一大金字塔である。

實に蕉翁は日本が生める世界に誇るべき大詩人であつて、其の作品の僅か十七字の短詩

のうちに、端的に把握含蓄せる彼れ獨自の直觀の世界の雄渾洒脱にして、幽邃閑寂、深さ枯淡の極致を――大觀せる純日本的東洋的な風格と高雅なる趣味の點に於ては、未だ嘗つて世界いづれの國に於ても類例を見ざる大藝術家である

　げにも、今や漸く彼れの眞價が世界的に認識せられ、鑑賞讃美せられつゝあるも亦宜なりといふべきである。

# 第一章　芭蕉の幼少年時代

（自芭蕉一歳至二十二歳
自寛永二十一年至寛文五年
自西暦一六四四年至一六六五年）

人が偉くなれば其の人の生立ちを知りたくなり、其の人となりを觀照したくなるのが人情の常である。世はさりながら、必ずしも天才は天才としての少年時代を持つものではない。從つて世に偉人・傑士・聖人に纏はる僞作、誣説の多いことも亦止むないものと云はなければなるまい。我が俳人芭蕉の全貌を見るに、實に渾沌錯雜たる謬説のみ夥くして、彼が眞相を傳へるものは皆無といつても敢へて過言でもあるまい。それは彼が自叙傳らしきものを書遺さなかつた爲めに原因することは勿論であるが、門弟等が徒に師を神格化して自己の勢力擁護たらしめんとしたからである。芭蕉讃仰の書及び彼れが作品に、師芭蕉をして超人間的存在として取扱ふたる書を梓行したゝめ、いやが上にも芭蕉の偉大さを潤飾流布してしまつたからである。

芭蕉自身が過去の自分を全然云はぬではない。併し乍ら往々自分の眞を語り得ないもの

である。多少に關らず幼少時代の忘却もあることながら、自分の現狀よりして、即ち現在の地位・名聲より將來に想到する時、云はうとしても過去の眞實を云ひ得ない場合が少くはないのであつたらう。如上以外の原因も多々あることであるから、本人が自らいふところ、又自ら書くところの口述・傳記にさへも、多くの疑問が介在するといふことになる。事實自分に就いては、自分が誰よりも尤も詳しく自分を知るものである。況して第三者が云ふところ、書くところのものに至つては、更に疑惑の個所を多くするのが當然と云はなければなるまい。

　俳聖と云はるゝ芭蕉翁のことであるから、眞僞不明の傳記が傳記を生んで、遂に迂餘曲折してその變化の止まるところを知らざる狀態である。或は偉人芭蕉、聖人芭蕉或は畸人芭蕉・煩惱人芭蕉と、源なきが故に、其の説くところ傳ふるところ、又相反してくるのも當然なことと云へやう。されば私は筆を措いて、只々途方に暮れるばかりである。

　かゝる時芭蕉の傳記をものすることは、大膽極まりないことであるかも知れないが、淺薄なる私の考察よりして、人としての彼れの一生を靜かに遠望してみたいと思ふ。

　今後、芭蕉と改號せざる以前の彼を云ふ場合にも、單に芭蕉と書いてゆくことのあるを

正保元年に生る

承知せられたい。

## 芭蕉の生年

芭蕉の歿年を元祿七年五十一歳とすれば、正保元年が確かなる生年になる。尚五十二歳、五十三歳、五十五歳、五十七歳等の說を樹てゝゐるので、自然生年も不確のものもたらざるを得ないのであるが、併し芭蕉自身が自分の年齡を何に入れたものなどより推測して、歿年五十一歳と見るのが或ひは當を得たものゝやうにも思はれるのである。又考證家中にも歿年五十一歳を正とする人が多いやうである。芭蕉翁繪詞傳は勿論正保元年であり、芭蕉翁全傳・芭蕉翁正傳・芭蕉翁略傳・綾錦にも正保元甲申歳生れ給ひて、と記してある。次郎兵衞物語には御出生の年號などは得斗承り申さず候と次郎兵衞が申してゐる。素堂の芭蕉庵春秋には正保元年甲申月日未考としてある。生年月日などは一面から見ればどうでもよいやうなものでもあるし、又往時は今日と違つて生年月日などを誰しも輕視してゐたものであらうと思はれる。故に或ひは兩親以外、子としての芭蕉などは正しき生年月日は知り得ずに終つたかも知れない。こうした實例は昨今と雖有り得ないとも限らない。作句などからも推し測られる如く、本人芭蕉が思惟してゐた年齡を定說とするより致し方はない。依

つて正保元年を生年とするのが、先づ正しき考證とせざるを得ないのである。

## 芭蕉の生地

芭蕉の生地は伊賀國阿拜郡柘植村と云ひ、又伊賀國上野赤坂町ともいふ。優れたる芭蕉研究家山崎藤吉氏は前者を主張して居られる。然るに茲に掲出する文よりして見ると、上野が生地であることが確實であるやうに思はれる。それは芭蕉自らの書なる「貝おほひ」の序文のいふところ、即ち

寛文十二年正月二十五日伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にしてみづから序す

と。山崎氏は湖中の芭蕉翁略傳の「芭蕉菴桃青は伊賀國阿拜郡拓植村の人也」に據られたものであらうと思ふ。初めは芭蕉の祖先も父親も拓植庄に住んで居たのであるが、芭蕉の未だ生れない前に上野に移つたもののやうである。これは父親の墓も祖先の墓と同様拓植の萬壽寺に葬られてあるのに反し、其後の松尾家は上野の愛染院に葬られてあるのに照對しても、芭蕉は上野に移りて後生れたるものとするのが正しいやうである。これに就いて樋口功氏は拓植に居た時は禪宗、上野に移つてからは眞言宗に改宗したらしいと述べ、更に角翁の兒である半左衞門の時から改宗云々と愛染院主の話を掲げて居られる。

一説に拓植とも書く

伊賀の上野が生地である

「代々拓植庄に住めり、其末に松尾與左衛門と申せし人、初めて國の府なる下野の赤坂に住めり。是れ芭蕉翁の父なり……」

と芭蕉翁繪詞傳に云つてあるのを見ても明瞭であるやうに、芭蕉の父與左衛門が早くより上野赤坂に移つたことゝ考へられる。斯様にいろいろの點を綜合して見ると、どうしても芭蕉の生地は上野であるといふことになる。上野の地形は風光幽寂・纖麗優美。故に詩人芭蕉を生んだものであらうなどといふ説は、何等採るに足らぬ推論であつて、結果より見たる偏見たるを免れない。

### 家柄及姓名

芭蕉の祖先に就いては異説百出して其の歸するところを知らない狀態である　或はいふ先祖は平氏で源頼朝を助けたる爲めに伊賀阿拜・山田の二郡の數村を與へられた。依つて居を定めんとして、栢植の一枝を植ゑてその地の吉凶を占ふたところ、その栢植の木が翌年繁茂した、そこで栢植氏となつた。松尾氏は其等の後裔の分れたるものゝ氏族なりと。或はいふ、頼朝の祿を全く受けずと。或はいふ、桃地の黨なりと。又

「…… 夫より五代を歷て淸正と云ふ人に子數多ありて家を分ち山川、勝島、西川、松尾

北河と名乘る。代々柘植の庄に住めり。其末に松尾與左衞門と申せし人初めて國の府なる上野赤坂に住めり。之れ芭蕉の父なり。母は伊豫國の人とや、姓氏さだかならず。其子二男四女あり、嫡子儀左衞門命清後に半左衞門といふ、二男半七郎宗房、童名忠作これ蕉翁なり。後に名を改めて忠右衞門といふ。正保のはじめに生る」と。

先に生年を述べたところ（繪詞傳）にも引用した爲め重複したことにはなつたが、此文を擧げると兩親幷に兄弟の事柄が明瞭になる。父の名が儀左衞門（芭蕉翁正傳）と與左衞門とある。兄半左衞門の名が儀左衞門（次郎兵衞物語）であるとすれば、父は與左衞門といふことになる。又介我曰く「彼の實父は上野なる鐵砲鍛冶松尾甚兵衞なり」と。思ふに與左衞門が父の名らしく、實兄なる半左衞門の手蹟と芭蕉の手蹟が酷似してゐる點より推して父の職業は鐵砲鍛冶に非ずして手蹟師匠らしい。これに依つてこれを觀れば、蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」が一番信ずるに足るやうである。二男四女のところを三男ありといひ、その三男が即ち芭蕉であると說を構てゝゐる人（芭蕉翁正傳の伊賀の竹二坊）があるが、それにしても芭蕉の兄が早死したものとすれば、生涯芭蕉がもう一人の兄に云ひ觸れるところがなかつたといふ點も辨解に立つことになる。併し孰れが眞で孰れが疑であるか、容易に解

決されるものではない。憐れや松尾家一家は寳暦年間僅か三代にして、流行病の爲めに斷絶してしまつたのである。若し芭蕉が妻帶してゐたら、今日迄家系を正しく傳へることが出來たかも知れない。尙ほ太田南畝がいふ「今も松尾半左衞門と云へるは弟の家筋なり」といふ說は甚だ疑問とせられ、信ずべきものではあるまい。

松尾家の斷絶

次郎兵衞物語に芭蕉の母親のことを云つてゐるから、今左にそれを摘記して見る。

「又母御樣は四國伊豫の國の御人と申せとも、折ふしは九州豐後の國、脇と申所より御狀も參り、旣に我親次郎兵衞は御使に參りたる事も御座候と、母か申たるを承り候。母御樣の御家も御先祖は新田氏のやう承り候。芭蕉翁樣御物語も御座候」と。

果してその幾何を信據してよいかは、甚だ疑問としなければならぬ。「次郎兵衞物語」の眞疑については後に觸れることゝしたい。

芭蕉の幼名と俗名

芭蕉の幼名。俗稱を檢べてみると十餘に及び、所據を明にしてないものも尠くはない。大體が幼名。異名などに曖昧なものゝ多いことはいふまでもない。或は呼名を訛り、或は呼名に同音異字を充てたり、或は幼名を呼び捨てして半分しか云はぬ場合もあり、或は呼び易きやうに六ヶ敷い文字を省略することもあり得ないではない。そんなところより幼名や、

確からしい芭蕉の幼名と俗名

異名を索つて行つたならば、其の道の雅事らし小借でも、五つや六つの名はあることにな
る。それが芭蕉のやうに一世を震駭させた人に至つては、益〻益〻、であらう。彼の雅號
からとんだ名前を冠せられないとも限らない。先づ俗名として數へられてゐるところを擧げ
てみると、金吾・金作・與作・半七・半七郎・藤七郎・友七郎・甚七・甚質・甚七郎・甚
四郎・中右衛門・忠左衛門・宗房等である。

凡そ正確であらうと目されるものは、金作・甚七郎より忠左衛門となり、末に宗房となつ
たものであらうといふ說である。何故ならば、これには相當信賴するに足る記錄を證引す
ることが出來るからである。又半七の名が正傳に出てゐるから、これも本當かと思はれる。
素堂の「松の奥」には「芭蕉菴桃青……俗名松尾甚七郎……都の季吟の門に入久しく東武に
潜り給ひ……」とあり、香月牛山が志太野坡の依賴によりて書きたる傳文に、桃青子姓松尾
字甚質とあるから、甚七郎の間違であることが察せられる。又「俳諧大系圖」にも桃青、松
尾氏、俗稱甚七或は忠左衛門とあるから、甚七郎は先づ先づ正確といふべきではあるまい
か。天地庵素蓮も亦通稱甚七郎と云つてゐる、これは素堂迹松の奥を所據とした說である
かも知れないが、忠左衛門の名は芭蕉翁正傳及諸書に出てゐる。尙ほ壽人覽には忠左衛門の

名高野山報恩院過去帳に見えたりとさへ記してゐるから、恐らくは間違ひのないことであらうと思はれる。幼名の金作は芭蕉翁略傳と書畫便覽に出てゐるが、又彼の次郎兵衞が物語りの中にて、幼時を金作樣々々と始終繰返してゐるところを見てもまんざら據ん所の無いものでもあるまいと思はれる。宗房が眞正眞銘の彼芭蕉の名であることには寸豪の疑ひを容れることを許さない。芭蕉自ら筆を取れるもの、即ち自序・發句等がよく之を證明してゐるからである。

以上擧げた金作、甚七郎、忠左衞門、宗房等の名が幾歲より幾歲の間に於て用ひられたかは、未だ詳かにすることが出來ない。先づ名前の鑿穿はこの位にして幼時の彼の生活に移ることゝしやう。

### 芭蕉の幼時

芭蕉母を失ふ

芭蕉は生來病身であつたゝめ、二歲にして病氣を防ぐ意味から名を金作と改めた。其の後母は一年餘病んで遂に世を去つたのであるから、芭蕉は後の壽貞尼なる次郎兵衞の母を乳母として養育せられたのである。丁度次郎兵衞も芭蕉と同齡だつたので、二人は仲よく遊び過ごしてゐた。六歲の時に、後に芭蕉が仕へた主蟬吟公即ち若殿樣の遊ごと相手に召

始めて發句を作る

出されたといふ、八歳の時には手習を始めたが、筆勢稍々優れてゐたと傳へられてゐる。それは父が手跡師匠をしてゐた位であるから、その血筋を受繼いでゐたものであらう。芭蕉が始めて發句を作つたのは十四歳の折、主君蟬吟公が季吟に俳諧を學んでゐた關係からである。其の時の句は

いぬとさるの世の中よかれ酉のとし

藤堂家の料理人勤め

であつた。翌十五歳にして元服、名を半七郎と改名し、三人扶持並に品物。金子等を藩侯より頂戴したと云はれてゐる。それでは芭蕉が如何なる役目をもつて藤堂家に仕へたかを考究しなければならぬ。これについては孰れも信頼するに足る記錄を殘して居らない、想像すれば想像するだけのことであつて、如何やうにも解釋を附けることが出來るのである。今日で云へば秘書といふやうな役ではなかつたらうかといふ人が多いが、料理の賄方が主としての役目であつたかと思はれる節もある。その間には文武修業、扨ては遊びごと等のお相手まで侍るといふ極めて樂な役目に置かれてあつたのかも知れない。併し乍ら直接芭蕉からきいたと云はれてゐる破笠の云ふところに從へば、芭蕉は藤堂家の料理人であつたことになる。料理人だからと云つて卑下されるといふこともない。殊に年輩は同じく、趣味の一

芭蕉の仕官と役目

致といふ好條件もあるのだから、常に若殿樣の近くに侍ることも出來たであらうし、又食事など口に合ふやうに作ることなどもあつて、層一層親密の度を加へたとも考へられぬことはない。それにしても主蟬吟公との對話などに於て芭蕉と食事料理のことなどに少しも觸れてゐないといふことは、甚だこの料理人說を危ふくするものでありはすまいか、尙ほ且後年芭蕉が半俗半僧の獨身生活に這入りて自炊せる時に於て、門弟達と料理の事などに關して一言も云ひ交したことがない。それのみならず芭蕉が大食家であることは有名であるが、美食家であるといふことは未だ聞かない。御馳走を褒めることは屢〻あつたが、自分の料理した膳物に就いては、聊かも誇つたことは無かつたやうである。こう考へて來ると、料理人勤めを暫らくの間否定して置かなければならぬやうな氣がする。

私は思ふ、父親こそは地位低き武人であつたが、芭蕉は相當地位よき武士たらんと念じて仕官したものではあるまいかと。幸ひなる哉、文學的性能の豐富な主蟬吟公に仕へることが出來たので、芭蕉も一入好く道であるから情誼を厚くすることが出來、益〻寵愛せられたものではなからうか。若し主蟬吟公の夭折に遭はなかつたならば、芭蕉は武士として如何程上位の地位を獲得することが出來たか、察してなほ餘りあるものがある。仕官中は

北村季吟と芭蕉

芭蕉も若きがために、左程の役目を振り當てられることもなく、料理助定兼近習として若殿樣に從ふてゐたものと見てよくはないだらうか、詳細は芭蕉の無變のところに於て述べる。傳ふるところに依ると、主蟬吟公によき家來が出來たといふて御自慢なされ、今夜は其處、明晩は彼處といふて必ず芭蕉と共に俳諧の座に臨まれたといふことである。主蟬吟公の名は良忠、良勝の子なる宗徳は十五歳にして封を襲ぎ、名を良精と改められた。其の子が良忠である。次郎兵衛が「其年(十五歳)若殿樣にも主計樣と稱し奉り候」と云つてゐるのは良忠のことである。

芭蕉の主蟬吟公が幼時殊の外文學を愛せられ、和歌を冷泉家に學び、俳諧を北村季吟に師事されたといふことは、よく云ひ傳へられてゐるところである。そこで芭蕉が俳諧に一入の關心を持つようになり、又季吟を知るやうになつたといふのも、成程と合點がゆくわけである。時に季吟は京の新玉津島社に祠官をしてゐたといふことであるが、芭蕉が主蟬吟公の命によりて、屢〻新玉津島社に季吟を訪ふて主君の使を果してゐたといふことは、多くの傳記の示すところである。後年のこと、芭蕉が鄕里を脫出して逆境に在りし頃、季吟のもとにて寫字なんどをしつゝ口を糊してゐたといふことは、右のやうな關係があつてよく季吟を

知つてゐた爲めではあるまいかと推察されるのである。

これに就いてどうも腑に落ちないのは、北村季吟傳と新玉津島社說との記錄に全く相容れないものゝあることである。北村季吟傳に依れば、季吟が新玉津島社の宮司をしてゐたのは天和時代である。天和と云へば、天和元年に芭蕉は既に三十八歳に達してゐる時であり、此時芭蕉は深川の杉風の別墅に移りて、佛頂和尙に參禪してゐる。故に主蟬吟公の使者として新玉津島社の季吟の許に出入したといふことは、全く噓のことになつてしまふ。之に反して新玉津島社說には、伊賀上野城主蟬吟、和歌を嗜みて冷泉家の門人となり、季吟その師範となる、甚七郎は使者として、新玉津島に行往して季翁の弟子となる云々とあるといふ。何れを疑つて何れを捨つべきか、私などの容易に決し兼ねるところである。これはこれとしても、俳諧の添削やら或ひは敎へを乞ふために、主蟬吟公の依賴があつて季吟の許に使ひしたといふことは、前にも觸れたやうに、又後年の芭蕉を眺めても事實と見て差支ないであらうと思ふ。芭蕉翁正傳・芭蕉翁略傳にも「此人季吟の門にして宗房と兩吟の卷あり其外反故とも數多あり一とせ大坂の役に戰死し給ふ藤堂新七郎良勝（主計の祖父也）遠忌法莚に

大坂や見ぬ世の夢の五十年　　蟬吟

とあるやうに、武士としての二人は主從の關係にて、嚴然たる容姿を保ちつゝ城中に在つたであらうが、事風月に及ぶに至つては睦しき夫婦の仲にも似たる如く、相笑ひ相悦しんでゐたであらうことを想像するに難くはない。

俳諧に遊ぶ動機

徃々人の世に生くるや、一寸とした動機が永き一生涯を支配してしまふことが珍らしくはない。どう見ても芭蕉が俳人として一生を費したといふことは、俳諧に熱心なりし主蟬吟公の感化といふより他ない。勿論芭蕉をして俳諧に安住せしむる心境を形づくるまでには、大きな波と幾つかの小さい波が影響したものであらうが、大きな波は確かに主蟬吟公を知つたといふことである。伊賀の自然がよく騷人を作るに適してゐたからであるといふ說を樹てゝる人は、芭蕉の心境の過程を見ないで、矢鱈に芭蕉を謳歌する餘り、こじつけたる論法である。又芭蕉が生來絕世の詩藻家であつたといふ說は、誤謬も甚だしい極論である。何となれば、若し天才ならば、初期の發句等に於ても、旣に天才的の閃光を放つべきではあるまいか。看よ初期の句の餘りに拙きを。又主君蟬吟公の死に逢ふて世の無常を感じ、爲めに俗界を逃れて俳諧に遊んだものであると。これ又芭蕉の生活の全面を見ないで、宗

蟬吟公を知りて始めて俳諧に遊ぶ

蒲柳の質の芭蕉と伊賀の風光

教的考察を加味して芭蕉を眺めたるの說でしかあり得ない。以上云ふところのものは、波には相違ないが小さい波である。動かすべからざる大きな波は、主蟬吟公との交涉である。云ふべくして實現されるものではないが、假りに少年芭蕉が主蟬吟公を知らなかつたならば、恐らくは俳諧なぞを爲はしなかつたであらう。とは云ひ、天性蒲柳の質にして多情多感の芭蕉なるが故に、詩的才能に豐富であつたことは爭ふべからざる事實であらう。風光よろしき伊賀の地形が、朝夕芭蕉の詩藻に新鮮なる刺戟を與へたことも、芭蕉の俳諧進展に如何に有利であつたかは、今更云ふまでもないことである。加之主蟬吟公の死が、一つは賴む主を失ひたる心の激しき動搖から、一つは同じく俳諧の道に遊んでゐたといふ追懷から、計り知れない心境の變化を受けたものであらう。これが芭蕉の俳諧精進に可成りの波紋を與へたことは誰しも首肯出來ることである。

此處に大波小波と相關聯して見逃すことの出來ない力は、世の風潮と云はうか時勢の影響である。宗教的・政治的・社會的な思想が雜然と混交して流れる見えざる力は、全く違つた個性を作る場合も有るであらうし、思ひも致さなかつた職業に一生を使驅させる場合もあるであらう。こうした影響に依る芭蕉の性格や生活等は後章に於て述べる事とする。

# 第二章　青年時代の芭蕉

（自二十三歳至二十九歳 自寛文六年至寛文十二年 自西暦一六六六年至一六七二年）

蟬吟公の夭折に遭ふ

高野山に蟬吟公の遺髮を納む

## 故郷出奔

芭蕉二十三歳の寛文六年四月二十五日、主君なる藤堂蟬吟公が早世された。芭蕉の悲みは一ト通りではなかつたであらう。芭蕉はその年の六月、一般の例に從つて主君の遺骨を抱いて高野山に登り、手厚き供養を濟ませて歸國した。これからの芭蕉の行動が殆んど判然してゐない。實錄らしい實錄がないから、止むを得ないといへばそれまでのことである。世の一般の說に從へば、十中の八九までは蟬吟公の急死によつて芭蕉が主家脫出・故鄕出奔を念じたといふことになつてゐる。

さうすると鄕里を出奔したのは何時であるかといふことになる。蟬吟公の歿年月が四月二十五日であるといふこと、そして六月半に高野山の報恩院に遺髮を納めたといふことは報恩院の過去帳に松尾忠右衛門殿と記して今にも在ると、伊賀の竹二坊が著書に申してゐる

故郷出奔の七月說

故郷出奔を二十四歲とす

るのを見ても確かなことである。次にこの事實を進めてゆくと、芭蕉の故郷出奔が竹二坊のいふやうに七月頃に當るわけである。併し其の時に同僚孫太夫といふ者（隣家に住んでゐた親友）の宅門に一封を殘すとして

雲とへだつ友かや雁の生別れ　　宗房

と書いた短冊を手紙と共に置いてあつたといふのであるから、此處に疑問が生じて來る。といふのは此の發句の季語なる雁の別れが舊二月頃のものであるから。それも別離の句であるから、芭蕉の心中はそんな季節に拘束されたものではなかつたらう、と勝手な解決を與へるならば、至つて簡單に片付いてしまふ。これは餘りに得手勝手な解釋で、甚だしく正鵠を欠いてゐる。之を飜す說としては、芭蕉の一生を通じて其の作品を觀るに、季節を無視した作句は殆んど稀であるといふて差支がないのである。されば右の雁の生別れの句とて、必ずや季節を意中に置かなかつた作ではあるまいと信じられるのである。此處に於て、私は故郷出奔の月を七月とする說に賛同出來ない。

翌年寬文七年、芭蕉二十四歲の春二月に讀んだ句と見るのが妥當ではあるまいかと思はれる。いふまでもなく此の說とて確たる記錄に據るものではない。只「雁の別れ」を含む

句であるが爲めに想像する說に他ならない。芭蕉の主家脫出や故郷出奔の直接原因に就いては後に說くが、故郷出奔の年齡を二十四歲と主張したいのである。これを立證するに有力なる資料としては、別に提供することは出來ないが、以上說き來つたところを見ても略推量されるではなからうかと思ふ。

### 一 故郷出奔について次郎兵衛の說

尙ほ信賴に足るものではないかも知れないが、次郎兵衛物語の一節を借りて述べることとしよう。これは二十三歲に出奔せることを主張してゐるのであるが、其の當時の有樣を幾分なりとも匂はせて吳れるものとして揭げる。

然るに寛文六年四月若殿樣御病氣もなく御急死(此急死の事故有て不記)忠右衞門樣聞せられ、取るものも取あへず御館にかけつけ、御亡骸を見て愁嘆かぎりなく既に追腹もなさるべき思召に候へとも、御一類の人々より御公義の御憚を恐れ、漸くに押しつめ給ひけるにぞとゝまり給ふ。若殿御葬送の後はや賴なしと思召候や、日々發心の思ひ止るなく、七々の間墓參怠りなく、其日過候て十日の御暇申請、高野山に登り、報恩院に御遺髮を納め奉り御命日〳〵の讀經回向賴ミ置下山し給、即御供には僕也。御奉公元の通り、時も違へす

朝五ッに御館に相詰、百ヶ日過させられ候て、半左衛門様に御出家の御願ひなされ候得共御承引不被成、又三十日も過て、御同役城彌太夫殿をもつて出家なりの旨趣を、細々と書認めて差上給ひけれども、殿様より御許し無之、其後より御積氣差起り、七八十日御引入被成候而、又御出勤の上、殿様より直に御前に召出れ、主計亡跡に頻りに出家とは、彼者亡跡には其方外に主人はなき事にやと仰せられ候へは、忠右衛門様最早御手討と覺悟して、乍恐申上候、臣襁褓のなかを遣はなれて、七歳未満にして令嗣君の御側に召出され、東西不辨より御寵愛にあつかり、其御高恩のふかき事たかき事須彌蒼海もくらへかたし。しかるに五ッ六ッになり候時分、令嗣君の御側に溢レ遊廻候節、令嗣君を御指なされて仰られけるは、此阿兒こそ其方が主よ、必ス生涯見ワすれなよ、阿兒は能キ臣を持しよと仰られし事あり。夫より令嗣君を大功成ル御主君と奉存しより、成長するにしたかつて、主君とあれはかく有かたき者なるかや、されはこそ古來より御馬のさきにて打死せし事よと存まはせは、日夜に御厚恩か次第に思はれ、尊とかり中に、今度御急死あらせられ、思ひまふけし事も水の泡と存奉れは、此世にて御高恩を報し奉る事なきゆへ、出家となりて御菩提を弔ひ奉らんと奉存て御願申上奉りし事也。かく骨髓に

故郷出奔に對して、十九歳說、二十三歳說及び三十歳說の薄弱なる理由

てつし侍れは、天に二ッの日たく、地に二ッの主なし、我忠心にてはなけれとも、二人の主を賴まさる心中、御賢察あそはしくたされ候はゝ、いか樣とも仰付させくたさるへしと悲歎の泪にくれ、御手討と覺悟を究さたる體を、新七樣御覽遊はして、開ぬ體にて襖を引明て奥にそ入ラせ給ひける。忠右衞門は、すこ〳〵家にかへり、鬱々と書見もし給はす、同役中村貞次郞半左衞門殿に潛に今日の樣子を物かたられけれは、半左衞門殿明日を待かね、忠右衞門殿部屋見られけるに人なし、半左衞門殿大きに驚き〔下略〕

とある。

火の無いところに煙が立たぬといふ譬ひもあるやうに、右に拔粹した物語が全く事實無根の作りごととのみ見捨てることは出來まい。これに幾らか類したことがらがあつたからこそ、このやうな物語が生れたものではなからうか。而かも此の物語は芭蕉歿後の正風を顯揚するために書き置かれたるものである、と文曉が云つてゐるのであるから、さうして見ると芭蕉の出奔を二十九歲或は三十歲なりとする說が非常に力を弱めることになる。

二十九歲を鄕里出奔の正年なりとするものに從へば、仕官を辭して甚七とあらため、東武に赴く時、友たちの許へ留別

故鄕出奔の二十九歲及び三十歲說の主張

故鄕出奔と「見おほひ」の上梓

　　雲とへだつ友かや雁の生別れ

と。これ俳諧を志して江戸へ發つ時に、同僚孫太夫に別るゝ挨拶吟なりとするのである。それから三十歳の出奔を主張してゐるのは伊賀實錄である。二十九歳を主張する前者の竹人の芭蕉翁全傳と相通ふところが面白い。此の說に力瘤を入れて居られる樋口氏の說を聞くと遽かに否定する事も出來ないやうである。「予は豫てから鄕里で『貝おほひ』を公にした事實は、鄕里を出奔した宗房としては、どうも聊かそぐはぬ處があるやうに思ふてゐた。それで事に依ると、（雲と隔つ）の句は、江戸に出る時の吟といふが、實際かも知れぬ。而して蟬吟公に死に別れた後も、なほ引續き藤堂家に仕へてゐたのでないとも斷言出來ぬ」と。此の考察は、主蟬吟公の死に逢ふて遁世の意を決した芭蕉が、卽ち二十三歳の芭蕉が寬文十二年の正月、二十九歳にして故鄕伊賀上野の天滿宮奉納三十番發句合せの判をなし「貝おほひ」を出してゐるのが不思議だ。實際ならば殉死するか、又は出家してしまふのが順序である筈なのに、六年目に故鄕に來て平氣で句合せなどをしてゐるのは、どう考へてもわけがわからない。依つて故鄕出奔は此の「貝おほひ」上梓後と見るべきだといふのである。成程さう云へばさうかも知れない。併し此の考察は出奔の原因を主君蟬吟公

の死に置くから成立するものである。

私は芭蕉の故鄕出奔を二十四歳とし、それが直接原因を蟬吟公の死に據るものではないと思ふ。これをいふ前に、蟬吟公の早世が芭蕉を出奔させたものであるといふ說に觸れることとしよう。

## 「故鄕出奔」について、路通の說

路通の「芭蕉翁行狀記」は芭蕉の故鄕出奔を蟬吟公の死によると強調してゐる、——若かりし程、賴む方に別れ、同じ道にと思ひ定めけれど天が下の掟きわまりて許ひ難く、世はらからの憂目一方ならねば甲斐なき命の露をうけて、武藏の國の廣きあたりには、そきれ行くわざもやあらんと、中頃より住所を江戶に求む……」と、又主君早世により古への殉死に傚ひて遁世し、と蓼慰舍も云つてゐる。

幾度か殉死しようと試みたが許されなかつた。其後ひそかに遁世の志があつて、二君に仕へざる由を告げたが許されなかつたので、遂に一大決心をして故鄕を脫出したのである（芭蕉傳）といふ說が非常な勢力をもつてゐるもののやうである。芭蕉の愛弟子路通のいふところであるが爲めに、無條件に信じられてゐるのも亦止むを得ないものであらう。

併し路通は正しい芭蕉翁の自叙傳を誰に聞いたか、何に據つて記したか。此處が甚だ疑問である。路通を愛した芭蕉、或時は共に旅をして寢食を同じうした程であるから、心に垣を作らず談笑したかも知れない。だが路通を拾ひ上げた時の芭蕉は鳴り響いた名俳家芭蕉である。路通は乞食であつた。乞食路通の眼に映つた芭蕉は聖僧でなくて何であらう。この先入觀念に支配されてゐた路通は、如何に師芭蕉に親しむとも、只一介の俳諧宗匠とのみ見終ることが出來なかつたであらうと思ふ。反對に芭蕉も、如何に路通を愛して親しい生活をしたとしても、己れの過去、卽ち人間としての自分を語ることは語り度いとしても語れなかつたではあるまいかと思はれる。此處に於て路通が知る芭蕉翁はどの邊まで眞實であるか、非常にあやしいものであると云はねばならぬ。

芭蕉が蟬吟公の死に逢ふて、殉死する程の堅き決意があつたとするならば、出家して蟬吟公の靈を供養するなり、又は全然俗界を離れて何處かに死を求めるのが自然ではなからうか。然るを元祿元年芭蕉四十五歲の時には、蟬吟公の弟君なる探丸侯に召されて「さまざまのことおもひ出す櫻哉」の吟詠をなしてゐる。此の他芭蕉は四十一歲後幾度も故鄕を訪ふてゐるのである。蟬吟公の死後斷然主家を去り故鄕を去り、而かも誰にも意を告げずに

蟬吟公の死は故郷出奔の原因を成さず

秘かに遁走した芭蕉としては取るまじき行動ではあるまいか。さうすると必ずしも蟬吟公の死が出奔の直接原因ではないといふことになる。尙ほ主家に叛いて出奔したといふことなどは、全然信じられないことである。又右の事情よりしても、故郷を出奔するに際して、再び故郷の土を踏まずといふやうな決意があつたかどうか。それから故郷脫出の直接原因は何であつたか。漸次にこれらを調べてみることゝしよう。

## 芭蕉の故郷脫走び遁世說

今に至る迄芭蕉の遁世に關する曲說は非常に多い。それが又孰れも事ありさうに記錄してはゐるが、どの邊まで信賴してよいものか見當が附かない。大抵は滑稽極まる捏造であると一蹴されてゐるやうである。假令芭蕉傳・伊賀傳說其他芭蕉研究家の述錄であつて出所明かな噂であるとしても、噂といふ噂が蕉翁に採つて非常に不利な噂であるが爲めに、彼を尊崇する人は、一も二もなく否定してゐるものゝやうである。止むないと云へば止むないことである。といふのは悉くが噂であり傳說であつて、眞實の手記ではないのだから。併し徒に芭蕉を信仰するの餘り、如何なることにも耳を借すことなく、芭蕉の遁世に女人を配する如きは、俳聖芭蕉の人格を傷くるの甚だ容易ならざるものとして、激昂する人がある

故郷出奔に關する噂のいろいろ

とすれば、これ又笑ふべきことである。次に芭蕉に纒はる噂の種々を記して、それらの考究に禿筆を進めることゝしたい。

一、芭蕉十九歳の折、蟬吟公夫人の侍女と通じたといふ寃罪を蒙りたる爲め主家を出で、後蟬吟公の死を聞いて再び歸り來り、主君の遺髮を抱いて高野山に赴き、而して後故郷を脫走したといふ。

一、主君の花見に陪してふとしたことから袴を損じた。これを彼の親戚の侍女が繕ふて與れてゐるところを同僚に發見され、遂に主君に告げられたゝめに、侍女は思ひつめて入水した。芭蕉はこれを悲しみ、且つは世の無情を感じて遁世したのであるといふ。

一、蟬吟公の死後相續の爭ひが起つたので、芭蕉は主の子なる三歳の良長を擁して蟬吟夫人に加擔したる爲め、未亡人との醜聞を傳へられたので厭世したといふ。

一、家兄なる半左衞門の妻、卽ち嫂との醜關係ありたる爲めに、故郷を遁走せざるを得なくなつたといふ。

一、乘馬の際誤りて落馬したる爲めに甚だしく右手を痛め、遂に刀を執ることも出來ないといふところより、宮を退く意を固めたものであるといふ。

故郷出奔は女性關係に據るか

何故芭蕉がこんなに多く、女人に關した噂を有つてゐるであらうか。一種に單なる作りごととして見流してしまふわけにはゆかないやうな氣もする。

こうまでも女人との噂を立てられるからには、其處に多少の臭ひがある筈だからである。何もないものには噂も却々立て難いものである。假りに芭蕉が偉くなつたから、それを羨望の餘りの噂であるとして見ようか。芭蕉から去る人はあつても、且つその人でさへも芭蕉を怨むことをせず、事實反對派に立つ俳人、卽ち云へば敵といふやうな人でさへも芭蕉を尊敬してゐたといふ位であるから、羨望の揚句擠へられた噂とは信じられないのである。又蟬吟公の死の前後の周圍が、芭蕉が女人との關係を噂されるに左樣に好條件であつたゝめ、無根の噂として撤去することが却つて妥當を欠くやうにも思はれるのである。

芭蕉の故郷出奔は、確かに女性に關したることが直接の原因であつたと見て差支ないからうと思ふ。これを立證する資料は提供するよしもないが、出奔當時の芭蕉と後年の芭蕉を想像して見るとき、これに庶幾き推量を敢てし得るものがある。人の噂も七十五日とやら、何とか身を立てゝ、而かも多少に關らず門弟を有つやうになつた芭蕉が再び故郷に歸る、其處には昔の噂を忘れて芭蕉を迎ふる故郷の人々である。女性との關係、深慮に考ふれ

ば甚だ忌はしきことであるかも知れないが、人間的に考ふれば何ともないことである。二十代の芭蕉であるから、假りに女性との關係が眞實なりとしても、若げの至りとして寛やかに考へられるるがために、左程の重要さを以て關心する故郷の人々ではなかつたらうと思ふ。情事に關して因襲的に遙かに緩漫な見方を持つてゐた當時にありては、現代から考へる程謹嚴なものではなく、案外平氣な還境ではなかつたらうかとも考へられる。そんなことから伊賀傳説には女性との醜聞などを傳へてゐるのかも知れない（これは勿論侍女との關係が本當らしく、只女性との醜關係といふ噂を間違ひて）。

「芭蕉も女色の間に身を觀じて」などと支考の云ふてゐるところを見ると、芭蕉も遂ひ口を滑らして本音を吐いてしまつたのかも知れない。芭蕉が女色を知らぬ、又女性との關係等は全くの謬説に過ぎないとしたならば、後年の芭蕉、否芭蕉の一生は平凡な生涯としか見ることが出來ない。一時は人間として女性との情生活に浸り、共處に始めて飜然自覺するところのあつた芭蕉であればこそ、益々燦然たる光りを放つてゐるものであらうと信ずるのである。閉關說及び俳諧諚等に於て、しきりに女色に溺るゝこと勿れと戒めてゐるのは何故であらうか。情慾に無關心な芭蕉であつたならば、こうしたことは全然云はぬ筈であ

る。ニイチエ及びトルストイ等が盛に制性慾を説いてゐるのは、以て自己の悔悟に他ならないものであると同様に、芭蕉の戒色も亦自己を物語つてゐるものではなからうか。これは私の卑見に過ぎないものであつて、極論であるかも知れないが、聊か參考まで陳べたゞけのことである。

生れながらにして脆弱な體質の芭蕉であり、加之文學的素質の優秀であつた芭蕉のことだけに早熟でもあつたらう。温容のうちにも熱情家であつたらう。

こうした考察を進めて來ると、二十四歳にして故郷を出奔したとしても、二十九歳の春に故郷で「貝おほひ」を上梓したことが成程と肯定されるであらう。又主家に反いたのが出奔の直接原因でないのだから、再び江戸にて官に仕へたこと（水道工事）も肯定されるであらうと思ふ。又探丸侯より花觀の宴に招かれたことも、尤もなことと頷かれるであらうと思ふ。

有力視される噂

私が先に拾ひ擧げた芭蕉に關する五つの噂を吟味すればどうなるか。第一と第二の噂が尤も有力なものではあるまいかと思はれる。第一の噂なる蟬吟公夫人の侍女といふのは、後に脫俗したる壽貞尼であると（風律の小ばなし）云はれ、若き頃芭蕉の妾であつたと稱さ

れてゐるのである。次郎兵衛物語に據ると、次郎兵衛の母にして芭蕉の乳母であるといふことであるが、貧しき芭蕉の家にして乳母を雇ひ得たかどうか、芭蕉が壽貞尼の死ぬまで尋常ならざる仲にあつたことが、種々の消息文などより察せられるところを見ると、此處に大きな疑問が横たはつてゐる。次に第二の噂は、若き芭蕉に思ひを致す時成程さもあらうかと思はれるのであるが、資料といふべき資料がないので、このまゝに置くより致し方がない。第三の噂も想像を逞しうする時には現實の如くに展開するけれども、これとて確證すべき資料が無い。第四の噂は、若しかすると第一の噂の誤傳ではあるまいかと考へられる。何となれば、萬一女性との醜關係が家中の者に洩れ、遂には郷中にも洩れたとするならば、五六年後に涼しい顔をして歸郷は出來ない筈である。又其の後と雖も度々歸郷は出來ない筈である。兄が如何に心大きくとも芭蕉の心が承知しないものと見るべきが正しからう。假りに事實として一面からこれを考へれば、後年の芭蕉が嫂に關し、若しくは兄に關して懺悔に似たやうなことを、或は口に洩らし、或は筆にも殘したことと見るべきが當然である。依つて嫂との醜聞は絶對に否定すべきものである。そんなことよりも兄半左衛門に子が無かつた爲めに、芭蕉に相續して吳れるやう兄から頻りと懇望された事實に據つても、以上

の説は全く信ずるに足らない。第五の噂なる落馬説は、出奔説を重からしめるのに非常に貧弱な內容である。そして又その位の事件であつたならば、敢て官を退くこともしなかつたであらうし、主家としても別に適當した役に振替へさせるのが順序でもある。それに一生涯を通じて、芭蕉の口から落馬に依つて手を痛めたといふことを聞かない。此の説は全く牽強附會のものとして斥けてよいと思ふ。一番有力視される第一の噂なる侍女との密通、並に芭蕉と女性との關係等の詳細に就いては、芭蕉と戀愛について」の章に讓ることゝする。

## 鄕里出奔後の芭蕉の生活

二十四五歳ころ

二十四歳にして故鄕を離れた芭蕉が、寬文十二年二十九歳の正月鄕里伊賀にて「貝おほひ」を上梓するまでは何處に何をしてゐたか全く五里霧中で、其間の正確な消息は如何なる書中にも現れてゐない。故鄕脫出の原因すら判然としてゐない位であるのだから、其後何處に何をしてゐたか、正鵠を期し得ないのは又止むを得ないものと云はなければならない。世に傳ふ、難波に走りて西山宗因宗匠に俳諧を學んでゐたものであると。又北村季吟の著述を手傳ひゐたるものであると。又季吟其他京の學者を渉り歩いて筆耕せるものであると。又、鬼貫の俳諧の書籍整理やら執筆などをしてゐたものであると。これ皆芭蕉を正視

宗因に俳諧を學んだといふ說

したものでなくて、徒に前後の關係より牽强附會した傳說に過ぎないものである。

何となれば芭蕉が宗因に就いて談林派を專らにしたる記錄は、芭蕉自身も語らず、又門弟等も語らず、而かも宗因も談林徒輩も、芭蕉に就いて詳しく這般の消息を傳へてゐないのである。當時卽ち芭蕉二十代の頃の俳壇は、談林の勢力天下に轟々たるものであつたばかりでなく、芭蕉自身も筆に「先德多かる中にも宗鑑あり宗因あり白炭の忠知あり。上に宗因なくんば我々の俳諧今ま以て貞德老人の涎をねぶるべし。宗因は此の道の中興なり」と洩らしてゐるやうに、蕉風開發はどちらかといふと貞門派よりは談林派の影響に支配されたものである。それ故に故鄉脫出後は、專ら宗因に就いて學んでゐたものであらうといふ說を下したものではなからうか。

季吟に俳諧を學ぶ

次に季吟に就いて學んだといふことは、實際らしいところもあるから詳しく記して見るが、著述の手傳をしたとか、又は萬葉集の或事柄を季吟に敎へた、などといふ說は全く信じられないことである。其頃京の季吟と云へば堂々たる國學者である。それにも拘らず、一介の靑年芭蕉が季吟に敎へたとか、著述の手傳をするなどとはどう考へても合點出來ることではない。これは徒に芭蕉を天才視したる謬見に他ならない。熟々考へて見るに、芭蕉は

少年の折、蟬吟公の使ひによつて季吟を知つたので、そしてそれから熱心に俳諧を初める動機となつたのである。

鬼貫の世話になる

次に上島鬼貫の俳席に出でて執筆をなし、それによつてたつきを得たといふ。これは如何にも有りさうなことであるが、よく考へて見ると何かの間違ひではあるまいかと思はれる節がある。伊丹の上島家は素封家である。割合に能筆な芭蕉が同じ俳諧の道に遊べる鬼貫の世話にて、衣食の安住を與へて貰つてゐたといふことは考へられることである。又鬼貫が云つたと傳へられてゐるものゝ中にも、桃青が來たといふことにも觸れてゐる。併しこの說は芭蕉と鬼貫（餘りにも年下であるから）との年齡の開きによつて根底より覆へされてしまふ。どう眺めても三十歲前の芭蕉としては成立しないことゝなる。

泊船堂と稱したといふ說

竹人の芭蕉翁全傳も路通の行狀記も、此の間の芭蕉に就いては、何等詳しく述べてはゐない。芭蕉翁正傳は「此頃東山の麓に住す泊船堂桃青と號す」と、尚ほ湖中の略傳には「宇陀法師釣月軒宗茂とも書れしと云」と附け加へてある。併しこれとても全く異說と稱するより他ないであらう。素堂も强言してゐるやうに、泊船堂の號は天和二年「波はくろし夕日や埋む水に舟（揭水）夕がらすみん虹の假橋筑波山（同）」によつて、此頃泊船堂といふ號の出

來たのが確かであらうといふのである。依つて此の號は云ふ迄もなく、江戸深川の草庵の號であある。又宇陀法師とは拾芥抄の樂器の名を持來りて許六が編集したる書物の名であつて芭蕉の號ではない。

斯く觀察し來りて尤も眞實らしく思はれるのは、京都に出でて季吟に俳諧やら和歌を學んだものであらうといふことである。想ふに餘裕ある人々が師に就いて學ぶやうな學び方ではなく　或時は師季吟の種々の用事を足してやつたりし乍ら、云はゞ居候的に學んだものではないだらうか。此處に重要な問題として一考しなければならぬものは、彼の芭蕉の生活問題如何である。當時如何に生計が今日より弛やかなものではあつたかも知れないが、二十代の亡命人芭蕉が、京に出て安易に生計の出來る筈はない。と云つて故鄕よりの仕送りのみを仰いでゐたといふことは尙更信じられない。偶ゝ故鄕を訪ふて、幾らか小遣を貰ふことはあつたかも知れないが、鄕里の實兄も、生活に有り餘る程の財產もなければ働きもなかつたやうである。勿論靑年芭蕉を後援するやうな人のありやう筈がない。自然彼が曾て藤堂家に仕へてゐた時知り合つた、學者季吟を賴つて寄食してゐたものと推測したくなるわけである　之に就いて眞僞の解剖は暫く措いて、二三の傳記もある。又後年の芭蕉より歸納して

桃青と改名したといふ

も、芭蕉の發句が甚だしく和歌の影響を享けてゐること、殊に西行を愛誦したことなどは、矢張季吟より和歌を學んだ結果ではなからうかと思はれる。

季吟が萩野安靜に送りたる消息を見るに

「夕方より愚亭にて相催し候間　御來臨可被下候、桃青にも相待被居候、

昨夕伊賀より宗房上京仕候て桃青と改名いたし候由、其名かへのため、俳諧致度候様申候間、則申入候、御覽可被下候、

名をかへて鶉ともなれ鼠どの」

これに據ると、伊賀を出奔するや京に上りて直ちに季吟を訪ねたやうに見える。桃青の俳號が東下以前のものであるか、或は東下以後のものであるかといふ議論も、これに從へば容易に解決することになる。私は此處に考へるのに、故郷脱出が蟬吟公に直接原因を有つものであるとすれば、京には逃げ隱れたるもの丶、萬感胸に迫りて容易に知人を訪れることなどは、出來得なかつたものではなからうかと思ふ。まして故蟬吟公が學んだ宗匠季吟を、直ちに訪ふといふ芭蕉の大膽は及びもつかない。これらを綜合しても芭蕉の故郷脱出は、一寸した異性關係の煩はしさからではなかつたらうか。話が大分横道に入つたが、芭蕉が季吟に

坦庵に漢詩を學ぶ

就いた事は山口素堂も又「松の奥」に云つてゐる。

右と共に肯考される說は、學者伊藤坦庵に漢詩漢文を學んだといふことである。これもどんな方法でどの程度に學んだか、何等證據とすべきものがないけれども、唯坦庵に就いて學んだといふことは、都名所圖會や芭蕉堂再興記等にも見えてゐる。これについて故淺井瓢六氏は「續明がらすの序者自在庵道立の大祖父坦庵先生は芭蕉の漢學の御師匠さんであつた事は蕪村の寫經社集（安永五年版）に見えて居る。（中略）そこで芭蕉が坦庵に師事した年代は、寛文六年七月遁世後同十二年九月江戸下り迄の間、即ち芭蕉二十三歲より二十九歲迄の或る期間と推測するのが適當であらう。」と云つて居られる。芭蕉が唐宋八家の詩文を愛誦したことや、彼の俳諧に文章に老子・莊子の影響の多かつたことなどは、之を聊か物語つてゐるものではなからうか、例へば其角も「鷺の足雉子脛長く繼ぎそへて　芭蕉」の句を這句以二莊子一可レ見矣とさへ云つてゐるではないか。

さうして見ると芭蕉は常に京に住んでゐたかどうか。決して京にのみ住んでゐたとはどうしても考へられない。季吟との關係に於て些か觸れるところがあつたやうに、病身でもあり、又生計にも充分なる力を持たぬ芭蕉であるがため、知人を訪ねることもあつたであら

う し、又幾度か故郷へも歸つたことであらう。それ故に餘裕のある時は學者に就いて學びもし、又書なども稽古をしたこともあるであらう。それやこれやを推考して見ると、心に落着のない生活をしてゐたものであらうと思はれる。富者の執筆などをしてゐたといふことも、成程と思はれないではない。先に言つた貞貫の執筆をしたといふこと――嘯山が「俳諧七車」の跋に云つてゐることも、年齡の甚だしい相違より全く信ずることは馬鹿氣たことに屬するかも知れないが、多少これに類する芭蕉の行爲があつたからこそ、斯樣の風說も存するものではあるまいか。

半ケ年一年後には故郷を脫走した芭蕉に就いての噂も、火の消えたやうに忘れてゆくのが自然である。時には暫らく故郷に隱れ住んでゐたことがあつたかも知れない。平凡な當時の芭蕉に就いて、一旦故郷より身を隱したものが又故郷へ來たからと云つて、それを重要視する程敏感でなければならぬ故郷人ではないのである。されば鄉里伊賀にて一貝おほひ」を上梓したといふことも、何等の不思議が無くなるのである。

勿論俳諧をもつて渡世することも出來ないのであるから、生計は甚だ不如意である。その爲めに住所の一定しない事は止むを得ないわけである。或時は京に或ひは東山に、或時は

西國の旅に出づ

故郷出奔に異性關係の有力なる理由

故郷に、或時は故郷近き何所々々等々、彼の住所に於ては如何なる推量も許されることになる。此の間に芭蕉は友人と三人して西國の旅を試みてゐる。それは元祿二年秋芭蕉が門人北枝に遺りたる消息が之を證明してゐる。

――西國へは何卒同行に致度候間其御心得賴入候左樣に候へば兩吟急ぎ申事もなく候二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候外連貳人我と三人にて步行候へども知音もなく候て見物所斗尋歸候宗房時分の事に候得ば所〱發句留候へどもおかしからずとゝのはぬ事而已にて一句も咄事なく候間此度は吟じ直し度存念ニ候其元同行においては十人にもまさりちからをえ候事ニ候間決定の御返事待入候――」

これは多分二十四五歲の頃だらうから、發句は好きでも良い句の出來なかつたのは當然のことである。二十六歲說を立てゝゐる人があるが、それにしては二十九歲に「貝おほひ」を宗匠然として上梓したことが受取れないやうである。この他諸所に小さい旅はしたことであらうが、それ等を一々詮議立てゝ見る必要もあるまいと思ふ。

私は此處迄、芭蕉が異性關係に依つて一時故鄕より身を晦ますことになつたものであると、假說を念頭に置いて論究したのである。それが爲めに故鄕を去つた芭蕉の行動が、可成

異性關係貶すべきにもあらず

實際に近く見渡し得られたものではあるまいかとも考へるのである。これを證據立てる有力なるものとしては、故郷脫出直後季吟を訪ふたことゝ、幾年とも經ないうちに再び故郷に歸つたと思はれる節のあること、「貝おほひ」の上梓、友人と九州行脚を試みたこと等を數へ擧げることが出來る。

若し、蟬吟公の死に逢ふて、人生の無常を感じて遁世したものであるとすれば、右の事柄は悉く難解のものとなり、謎となつてしまふ。否難解や謎といふ言葉は、全く正しからずして矛盾だらけといふことになつてしまふのである。再三繰返すことになるかも知れないが、出奔が藤堂家を中心としたものであれば、心ある芭蕉が如何なる顏を下げても藤堂家の領有する故郷に歸れるものではない。主の後を追ふて何處かで他界してゐるか、さもなくば生涯世を離れて、人知れぬ生活を送つてゐた筈である。いふまでもなく故郷で「貝おほひ」などの出來やう筈がない。

青年時代のあやまちなる異性關係が芭蕉を奮起させ、而して大俳人にしたといふ事が種種の點よりして立證されて來るではなからうかと思ふ。これは常識的な考へから云つても有り得べき事であつて、芭蕉崇のための私論ではあるまいと思ふ。芭蕉を超人的な神格の存

小澤卜尺の家に入る

在に祭り上げてまで青年時代を敷衍潤色するのは、却つて偏狹な小主觀ではないだらうか。

寛文十二年二十九歳の九月、江戸へ出る前どんな發句を作つてゐたか一瞥して見よう。

いぬとさるの世の中よかれ酉の年　（明暦三年）
姥櫻さくや老後の思ひ出　（寛文四年）
月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿　（同）
雲とへだつ友かや雁の生別れ　（寛文七年）
五月雨も瀬ぶみ尋ぬ見馴河　（寛文十年）
五月雨に御物遠や月のかほ　（寛文十二年）
きても見よ甚べが羽折花ごろも　（同）
女をと鹿や毛に毛がそろふて毛むづかし　（同）

### 芭蕉の江戸行

寛文十二年の九月、江戸に出て小澤友次郎といふ人の家に寄つたのである。といふのは小澤友次郎の父、卽ち一世卜尺が京に遊んで季吟に俳諧を學んだ時芭蕉に逢ふたので、窮してゐる芭蕉を連れ歸つたといふことになつてゐる。後日此の人の世話に依つて、關口水道工

事の官吏となつて務めるやうになつたのである。何故江戸へ出たかといふに、窮せる生計の轉向も大いにあつたであらうが、江戸へ出れば頼る人も二三あるばかりでなく、大江戸の事であるだけに、自分の俳諧修練、延いては俳諧を以て世に立つにも非常に好都合ではないか、といふやうな考へ方も手傳つたからではないだらうかと思はれる。丁度芭蕉が京を去る前に、季吟は幕府に歌學をもつて召されたといふ説もある。これが本當だとすると芭蕉の江戸行も成程と頷けてくる。併し季吟が幕府より江戸に召されたのが、元祿二年であるといふ記錄に依ると甚だ心細いことになる。

江戸行に纏はる異說

先に小澤卜尺と共に江戸に出て來たと云つたが、これについては、從來三四の異說がある。或は芭蕉の甥である伊兵衞が、幕府の御用商人なる鯉屋杉風の手代をしてゐるので、それを頼つて來たのであるといふ。或は杉風とは京の季吟を共に師とせる關係上、交りが親密であつたから、それを頼つて出て來たものであるといふ。或は偶然江戸を指して來た時、東海道々中にて江戸中ノ鄕の定林院住職默宗和尚と相知る仲となり、かくて定林院へ辿り着いたものであるといふ。或ひは江戸へ向ふ道行者は、藤堂佐渡守家來向井八大夫卜宅と一所であつたが、小田原町の杉風宅へ着いたとも云はれてゐる。然るに「續錦」も「芭

蕉傳」も小澤卜尺說を採つてゐるから、これに從ふのが尤も妥當であると思はれる。「梨一嘗て東都に遊ぶ間、本船町のうち八軒町といふ所の長、卜尺といふ俳士に交る事あり、彼者語りみるは、我父も卜尺を俳名として、其ころは世にしる人もありき、一とせ都に登りし時、芭蕉翁に出會て東武へ伴ひ下る（菅菰抄）と。梨一とは右の芭蕉傳の著者であるから、此の言には信を置くべきものがあるであらう。因に鯉屋杉風の家も、小澤卜尺の家よりは程遠からぬところにあつたのである。そんなことから屢〻杉風宅（伊兵衛の居る）を訪ふたことも事實らしい。

ところで芭蕉の生活は、第二世の卜尺の家にあつて家事を手傳ふこともあつたであらうし、又京に在つた頃と同じく、誰やらの執筆などを手傳ふて生計の糧を得たことなどもあつたであらう。

# 第三章　壯年時代の芭蕉

（自三十歳至三十五歳）
（自延寶元年至延寶六年）
（自西暦一六七三年至一六七八年）

## 江戸に於ける芭蕉の生活

水方の官吏となる

芭蕉三十歳の時に、小石川水道修築の官吏を勤めたといふことは、彼の門弟なる卜尺が云つゐてる、而かもこのことは卜尺が父卜尺（父も子も同じ俳號であり、父同じく芭蕉を師としてゐた）よりしみじみ聞いた話であるとして掲げてあるのだから、大いに耳を傾けてよい資料ではあるまいかと思ふ。今それを此處に轉記してみると、「我父も卜尺を俳名として其比は世にしるべもありき。一とせ都へのぼりし時に、芭蕉翁に出會して、東武へ伴ひ下り、しばしがほどのたつきにと、緣を求めて水方の官吏とせしに、風人の習ひ俗事にうとく、其任に勝へざる故にや、職を捨て深川といふ所に隱れ、俳諧をもて世に業となし申されしと、父の物がたりに聞ぬ」と。

寛文十二年は九月を以て改元、延寶元年となつたのであるから、芭蕉が必ずしも延寶元

年になつて水道工事に從事したかどうか、或は東上後小澤卜尺居に厄介になると間もなくこの仕事に從事したのであるかも知れない。此間卽ち延寶元年の芭蕉の住所が、殆んど不明であると傳へてゐるものもあるが、思ふに此の年は主として卜尺の世話に依り、時には何處かに棲んだこともあるかも知れないが、多くは卜尺の家に居たのではないだらうかと察せられる。何故ならば、翌年榎本其角入門、翌々年松倉嵐蘭入門するといふ次第で、芭蕉の俳諧的名聲もぽつぽつと光り出してゐるのであるから、彼が三十歳の折は可成熱心に俳諧に身を入れてゐたものと思ふことが出來る。さういふ見地よりすると、水道修築に從事してゐた時及び辭職後の彼の居所を、流浪人の居所と等しく考へることは、當を得ないものであらうと思ふ。卜尺居を去つた芭蕉が、轉々と居を變へてゐたことは事實であるが、京にゐた時程精神的幷びに物質的な不安はなかつたであらう。それは京よりも緣故ある人の多いために、安堵の心持も手傳つてゐたであらうし、又年齡も幾らか多いだけに、生活の不安に對する恐怖も尠いのが當然であり、俳諧を以て身を立てることの希望も愈々强くなり、事實それが實現へも近づきつゝあつたからであらう。

水道工事でどんな役を奉じてゐたか、又幾何の年月を從事してゐたか、此邊は餘り判然

水道修築官吏としての業務

としてゐない。多分それといふ役目を仰せ付けられたわけではなく、時に應じていろいろの仕事に携つたものではあるまいか。云ふ迄もなく、筋肉勞働は虚弱な芭蕉の身體を以て堪へ得るところのものではないから、爲もしなかつたであらうし、又爲せもしなかつたであらうと考へるのが穏當である。仕官して間もなく、水道工事に關する或勞働をさせられたこともあつたかも知れないが、それは後日、芭蕉の身體を見て止めさせられるやうになつたであらうと見て置き度い。

水道工事に從事した年齡

　或説には備夫として働いてゐたといふのもある。又或説には藤堂家より普請奉行として廻されたものであると云つてゐる。又或説には設計を擔當させられたものであると云つてゐる。又或説には記錄係として働いてゐたと云つてゐる。又或説には金錢の係りを奉じてゐたと云はれてゐる。その爲めに官金を横領して所罰せられたとさへ傳へられてゐる。然るに以上の諸説は、孰れも確かなる記錄の無いところより、當時の芭蕉やら周圍やら、或は後日の芭蕉などの或點より推量して拵へ上げられた臆説であると見て差支なからうと思ふ。尚ほ甚だしい説になると、水道工事に從事したのが芭蕉二十一歳か二十二歳、若しくは二十三歳であるといふのである。これらは傳記の不確實なる處に乘じて、種々都合のよいものと關

係を結び、而して異說を事實らしく傳へるものでなくて何であらう。試みに考へて見るがよい。二十二三歲頃、卽ち主君蟬吟公逝去の一年前又は逝去された其年に水道工事に從事し、功を修めたといふことなどはどう考へても信じられるところではない。若し此の說を眞實らしく樹てるならば、故鄕出奔も亦其の時の別離の句なども其の存在を疑懼され、年代に驚くべき錯誤を招來することになる。

頑として動かすべからざるものは、芭蕉傳にある卜尺の實話である。私は此の說に從ふことに躊躇しない。私は芭蕉が水道工事に從事した年齡を略ぼ三十歲とし、從事年月を一兩年位と見たいのである。それは先にも例引した如く「……風人の習ひ俗事にうとく、其任に堪へざる故にや、職を捨て深川といふ所に隱れ、俳諧をもて世の業となし申されし」(此時延寶四年にて年三十四)にて推考されるやうに、幾何も經たないで役を辭したものであらう。樋口氏は「修二武小石川之水道一四年成、速捨レ功而入二深川芭蕉庵一出家、年三十七」といふ「風俗文選」說に非常に加擔して居られ、その爲めに水道工事に從事した年齡を三十四歲として居られるが、どうであらうか。私の未熟な研究に依つてそれを反證する資料を提供するわけにはゆかないが、只管に卜尺の話を信じたいと思ふ

俳諧渡世に伴ふ苦惱

芭蕉と第一世卜尺は知らぬ仲でもないから、芭蕉の爲めには卜尺は如何なる力をも惜しまなかつたであらう。それだけ芭蕉は非常に焦慮し一日も早く生計の道を立てたい、何時までも厄介になつてゐるのが心苦しいと思つたであらうと察せられる。やがて卜尺の世話に依つて官吏となつた芭蕉はどちらかといふと、生計を立てる事、云ひ換へれば生活の安全を得ることの第一目的よりも、仕官して出世しようと思ふ心の方がより大きかつたかも知れない。それは未だ確然と俳諧を以て一生涯渡世するとまで考へつめてゐないやうであつた。

### 俳諧渡世の心境と生活

鯉屋杉風が芭蕉庵を與ふる頃まで、否それより後まで芭蕉が俳諧を以て世に立つといふ決心はあり得なかつたであらうと思ふ。身體の弱きことも自覺して居り、又幼少より好める風雅の道であるだけに、絶えず俳諧の勉强はしてゐたのであらう。それ故に門弟も漸々と出來たのであるが、それとて曉の星にも似たる如く寂寥たるものであつたが爲めに、果して俳諧を以て渡世出來るかどうかを、自ら疑つてゐたこと〻も考へられる。孰れにしても所謂俳諧に長じてゐるが爲めに、總ての事柄に當つて能く氣轉がきく芭蕉であつたことは推察出來よう。又それだけに惱みが多いわけである。このやうな一面の性質は唯の詩人

高野幽山の執筆をしたといふ

駿河臺の濱島氏を訪ふ

芭蕉、俳人芭蕉たらしめず、策に富んだ芭蕉たらしめたであらう。爲る氣ならば學者にも成れる、相當の役人にもなれるといふ心が多分に動いてゐたものゝやうである。祖先が武人でもあり、尙ほ且、自分も曾ては藤堂家に仕へて仕官出世を希ふて來たのであるから、官に就かうか、官を捨てようかといふことには、相當頭を惱したものであらうと思はれる。

併しよくよく考へて見ると、自分は役人にも適さないやうであるし、又商人などには全然適してゐない。して見ると俳諧で立つことが一番適してゐるやうでもある、と考へざるを得なかつたであらう。これには身體の弱いことゝ、詩文を嗜好する素地のあつたことが原因したものである。

この頃江戸八百韻の撰者なる貞德門の高野幽山の執筆をしてゐたといふことであるが、東上後間も無くのことであるか、それとも水道工事を辭職してから後のことであるか、私には解らない。

又芭蕉は東上後駿河臺の中坊家の文庫を守つてゐた老臣濱島氏を訪ふたといふことである。濱島氏とは同藩の因緣があるから暫らく身を寄せてゐたと考へられないこともない。此の文庫は慶長五年に立てられたもので、明曆三年の大火には其の災を逃れ、後年此の文

談林派の勢力

庫を芭蕉庵と稱したと云はれてゐる。此の文庫守の濱島氏の厄介になつたのが東上直後であるか、それとも水道工事を辭職した後のことであるかは判然しない。何れにしても暫らく身の世話を請ふたことは考へられるが、深川の芭蕉庵燒失の際、居所に迷ふて世話になつたものであらうとする說は、都合のよきやうにこしらへた說に過ぎないものであらう。

水道工事辭職後は其角・嵐蘭は別として、其他の俳人が次々と入門してゐる。それにも拘らず芭蕉は、何を以て身を立てやうかとさへ決し兼ねてゐた狀態であつたらう。時恰も宗因の談林派が、天下の俳諧を牛耳つてゐたのであるから、芭蕉が貞門の俳諧よりも談林に夢中であつたことは自然なことであると言へやう。併し非凡な才能を持つてゐた芭蕉であつたが爲めに、忽ちにして異彩ある句を作るやうになつたことは、誰しも認め得るところである。談林に非ざれば俳諧を談ずる資格なしなどと、いふ位に世を風靡してゐたのであるから、談林派連中の豪勢は又察するに餘りあるものがある。芭蕉の周圍にも、蕪雜な談林派の風流士が群をなしてゐたものであらう。

三十代にして獨身の芭蕉であり、若い頃故鄕にて異性關係の噂を蒔いて出奔した芭蕉であるが爲めに、彼の生活も可成放縱なものであつたらうと察することが出來る。彼を繞る

遊蕩の芭蕉か

周圍の人等と同じく、芭蕉も女色美酒に陶醉してゐたものであらうと眺め得られるのである。人並以上に酒を愛した彼である。遊蕩三昧の其角を愛した芭蕉である。又山口素堂なる信章との附合に

通ひ路の二階は少し遠けれど　　章

かしこは揚屋高砂の松　　青

といふやうな句を作つてゐる。これは勿論談林派に心醉してゐた延寶初期の句である。その一例であるが、これを見ても芭蕉が當時遊廓情緒に精通してゐたことを裏書するものである。彼の俳諧や生活は又各年代に於て共に述べることにする。

### 延寶二年其角入門

延寶二甲寅（行年卅一）の歳薙髮し給ひ、風羅坊又（號杖銭子桃々齋）と云。杉風（俗名鯉屋藤衛門號採茶庵杉山氏時ニ廿八歳）志厚して、深川に庵を結びて入まゐらす。門人李下、芭蕉一株を栽。

ばせを植て先にくむ荻の二葉かな

繁茂するより世人呼て芭蕉庵と云。〔芭蕉翁略傳〕とあるが此說は甚だ當を得てゐない。此

其角十四歳なりき

素宣と號す

年少年榎本其角（十四歳）が入門してゐる「五元集の自序に「延寶のはじめ桃青門に入しより」と其角が云ふてゐる。

又此頃剃髮して素宣と號してゐたといふことである。それは杉風が云ひ傳へたといふものを記したる「杉風秘記」に……松尾甚四郎殿伊賀よりはじめ此方へ被落着候」剃髮して素宣と改められし時、衣更着は十德をこそ申なれ、杉風、斯申送りぬ」と。これは聞き違へたものをそのまゝ傳へたものであらう。さうでないと、伊賀より江戸へ來るや否や髮を剃り落したことになるので、辻褄が合はないことになる。芭蕉がそんなに早く己を決めて剃髮したといふことは、事實として受取れないばかりか、水道工事の職に就いたといふことが打消されてしまふことになるので、甚だ事實より遠ざかつたものになつてしまふ。この芭蕉薙髮說は延寶二三年頃であつたと見て置き度い。水道工事を辭職した芭蕉が愈々熱心に俳諧に身を委ねてゐたので、兼ねて知り合ひの、否弟子としての杉風が芭蕉に「衣更着は………」の句を送つたものであらう。

さうして來ると最初に掲げた「芭蕉翁傳」の說、即ち延寶二年に深川の庵を結んで杉風が芭蕉を入まゐらしたといふ說は、全く年代を無視したものとして一蹴されてしまふこと

になる。私も此說にはどうしても賛同することが出來ない。

其角入門の正しい月日は知る由もないが、其角の入門前に芭蕉は水道工事を辭したらしい。それからの芭蕉は再び官に仕へようとする心が甚だしく鈍つたであらうが、却々落着かない心に在つたであらう。強いて云へば、世を擧げて喧しい談林の俳風に押されつゝ俳諧に心を向けてゐたものであらうと考へられる。

談林派心醉時代

## 延寶三年（三十二歳）

此年には肥前島原の古城主の裔なる松倉嵐蘭（年二十八九歳）が入門してゐる。尙ほ此の年には、長谷川馬光の門人露什・芬露等が相謀りて芭蕉の「五月雨にかくれぬものや瀨田の橋」の芭蕉自筆の短冊を埋め、此處に塚を建てゝ五月雨塚と稱したといふが、それは芭蕉が水道工事に從事してゐた時、關口の龍隱庵あたりが近江の琵琶湖畔の光景に似てゐるので、特に愛したといふことに因んで記念されたものであらうが、後年附會された說（蓼太）であつて眞疑の程は不明である。現在でも碑があるさうであるが、後年芭蕉の德を敷くために拵へられたものであるかも知れない。

松倉嵐蘭入門す

五月雨塚

度々記したやうに、其の頃は談林の全盛時代で、丁度此年は御大なる西山宗因が百韻を

興行せんとして江戸に現れた時である三十三歳の芭蕉は、この盛況を目撃して何を感じたか、芭蕉の俳魂成育の爲めに如何に大なる影響を與へたか、今更私の贅言を費すまでもなからう。

## 延寶四年（三十三歳）

芭蕉庫のこと

此年芭蕉は元伊賀上野の城主筒井定次氏の臣なる中坊秀時氏の留守居を預つてゐた濱島と云ふ人を頼み、此の文庫に厄介になつてゐたといふことが傳へられてゐる。先には書き落したかと思ふが、中坊氏は奈良の奉行であつたけれども、その頃留守だつた爲めに濱島氏にその文庫を護らせてゐたものであらう。芭蕉は藩を同じうするの關係から、この人を訪ふたものである。芭蕉が東上すると直ぐにこの濱島氏を訪ふて身を委ねたといふことは、一面同藩の人を頼るといふ關係上、有りさうなことにも聞えるが、種々なる芭蕉の生活行動を綜合して見ると、どうも初めて江戸へ上つた時に身を寄せたところとは信じられない。これ等の事柄は、この文庫を稱して芭蕉庫といふやうになつた後の記錄なる芭蕉庫に出てゐるものである。

彼芭蕉が濱島氏に身を寄せたのは辭職後（水道工事）か、若しくは此の後伊賀に歸つて

再び東下した時の事であると推論して居られる山崎氏の說に直ちに贊成する私である。併し芭蕉が深川の庵に入りて剃髮したる年月を、素蓮は延寶四年であると云つてゐるが、と云はれる山崎氏の言葉は何處より來たものであらうか。これは確かに間違ひである。素蓮は彼の著述に於て「芭蕉傳ニ延寶四年深川ニ庵ヲ造。天和二年迄在住ス。此間七ヶ年ト云ハ誤也。」と云つてゐるのである。

杉風祕記に出てゐる「松尾甚四郎殿伊賀よりはじめ此方へ被落着候。剃髮して素宣と改められし時………」云々といふのを延寶四年であると說を樹てゝゐる人もあるやうであるが、何をもつて延寶四年としたのであるか信ずるわけには行くまい。

## 故鄕へ歸る

此の年芭蕉は江戸へ出て初めての故鄕歸りをしてゐる。歸心矢の如くして居堪らず歸鄕したのか、それとも歸らねばならぬ事情があつたものか、這般の消息を確然と掴むことが出來ない。察するところ、是非といふ事情があつての歸國ではないやうである。何故ならば、後年に至りても此の初回の歸國に關して特別なことを云つてもゐないし、又書き記してもゐないやうである。又いふまでもなく錦を着て故鄕に歸るのではない。唯故鄕に歸つた

歸國說の有力なる資料

といふ事は眞實らしい。今竹人の「芭蕉翁全傳」に從つて其等の有力なる資料と見らるべきものを掲げてみよう

延寶四辰のとし故郷に歸るとて途中

山のすがた蠶か茶臼の覆ひかな

其六月伊賀高畑氏市隱亭にて

富士の風や扇にのせて江戸土產

山岸半殘か會

百里來たりほどは雲井の下涼み

桑名氏興行渡邊何某の宅にて

詠るや江戸には(も)まれな山の月

等それである。そして此の說をして更に有力ならしめるものには、「野ざらし紀行」にいふ「貞享甲子の秋八月江上の破屋をいづるほど風の聲そゞろ寒げなり……」として

秋十とせかへつて江戸をさす故郷

の句が出てゐる。これは故郷こそは伊賀であるけれども、江戸に薪付いて十年、今は江戸

こそ故鄕の如くに思はれるといふ述懷である。どいふのは水道工事辭職後、卽ち放浪的生活を續けてゐた爲めに其の間の月日は、江戶に住んでゐたといふ氣分をして非常に薄からしめたものであつたらう。それで一旦歸鄕して再び江戶へ出た頃から、始めて江戶に棲むといふ感じを强くしたものではなからうか。さう考へて來ると、此の句より延寶四年頃歸鄕したといふことを强調出來ることになる。併し考へように依つては、此の句の「十とせ」は芭蕉庵入庵より貞享元年迄を指したものであるか。さうすると芭蕉庵入庵の年代は餘りに當を得ないことになつてしまふ。又始めて江戶の地を踏んでから、貞享元年迄を指したものであるか、さうすると江戶へ出た年代が三十一二歲といふことになるので、これ又當を得ない考察になつてしまふ。依つて、一度江戶を離れた芭蕉が、新たなる考へを以て江戶へ出て來た頃を「秋十とせ」の中心と眺めて置き度いのである。

延寶四年と云へば、一旦歸鄕して、再び東上した位であるから、俳諧に相當の自信を持ち、俳諧を以て世を渡らんとさへ決心してゐたものであらうことを、容易に察することが出來る。延寶二年三年兩年に於て熱心な門弟の出來たところを見ると、此頃は或は一時的に俳諧を習ふ人々が、相當芭蕉の下に來たことであるかも知れない。今芭蕉庵春秋に從へば

一職を捨て深川といふ所に隱れ、俳諧をもて世の業となし申されしと、又の物がたりに聞ぬ。(此時延寶四年ニテ年三十四)云々」と。

右の小澤卜尺の言ふところを聞いても、三十四歳の芭蕉が俳諧に對する自信と抱負とを窺へるではないだらうか。延寶四年三十四歳は誤記であらう。或に依ると三十四歳の延寶五年であるのかも知れない。

### 延寶五年(三十四歳)

山口信章(後の素堂)及び伊藤信德と芭蕉との連句「江戸三百韻」が完成した。此の中一卷は延寶四年の冬興行されたものであるらしい。二卷三卷は、此の年に成つたものである。又芭蕉と信章との合作なる江戸兩吟「奉納貳百韻」一卷二卷が成巣してゐる。此頃の芭蕉は如何なる力量を發揮してゐるか、談林の影響多き芭蕉の片鱗を窺ふ參考として「江戸兩吟集」の其の一を錄してみることゝしよう。

江戸三百韻

江戸兩吟集

奉納貳百韻

此梅に牛も初音と鳴つべし　　桃青

ましてや蛙人間の作　　信章

春雨のかるうしやれたる世の中に　同
酢味噌まじりの野邊の下萠　靑
摺鉢を若紫のすりごろも　同
むかし働のおとこありけり　章
胝のひらけそめたる空の月　同
つまたてゝ行くあし引の山　靑
五寸ほど手の屆かざる歌の道　章
ひとかいあまりすみよしの松　靑
淡路島仕形ばなしの餘所に見て　章
とも呼ぶとりの笑ひ聲なる　靑
靑鷺のまた白鷺の權之亟　章
森の下風木葉六ぱう　靑
眞葛原ふまれてはふて迯にけり　章
むし鳴までにむごうなびかぬ　靑

戀の秋愛にたとへの有ぞよと　　章
吉祥天女もこれ程の月　　青
あつらへの瓔珞かゝる山かづら　　章
松の嵐の響く耳たぶ　　青
大黒の袋は花にほころびて　　章
霞にもろき天竺のきぬ　　圃
今朝の雪貧女一文が糊を解ク　　青
風進退を削る竹べら　　章
臍の緒を吉原がよひきれはてゝ　　青
かみなりの太鼓うらめしの中　　章
地にあらば石臼などゝちかひてし　　青
末の松山莖漬の水　　章
千賀の浦しほがま居て場の隅　　青
雪隱さびて見え渡るかな　　章

たまさかにことゝふ物はげたの音　青
　なを山ふかく入りし水風呂　章
よしやよしこぬか袋の濁る世に　青
　千里をかける馬士はあれども　章
西の月見ぬ六道の札の辻　青
　えんまの町〳〵引わたす霧　章
煩惱の本繩中づな末の露　青
　人足あれば山姥もあり　章
谷の戸をたゝき起して觸流し　青
　諸鳥の小頭うぐひすのこゑ　章
花をふんですゞめは千の歩行の衆　青
　上野下屋の竹のはるかぜ　章
鍔目貫朝の霜にくちはてゝ　青
　鎧は毛ぎレ蟲は音をいれ　章

ことあらばやせたれどあの華薄　青
もゝとせの餓鬼も人數の月　章
大無盡世尊を親に取たてゝ　青
公儀の掟はのがれ給はず　章
土も木も三間ばりに野づら石　青
此山ひとつ隱居料にと　同
富士の嶽いたゞく雪をそりこぼし　章
人穴ふかきはや桶の底　青
蝙蝠や三角の紙に散まよふ　章
山椒つぶや胡椒なるらん　青
小枕やころ〳〵ふしは引たふしは　章
臺所より下女のよびごゑ　青
通ひ路の二階はすこし遠けれど　章
かしこは揚屋高砂の松　青

とりなりを長柄の橋もつくる也　章
　能因法師若衆のとき　青
照つけて色の黒きや侘つらん　章
　わたもちのみいら眼前の月　青
飢饉年よはり果ぬる秋のくれ　章
　多くは傷寒荻の上風　青
一葉づゝ柳の髪やはげぬらん　章
　これも虚空にはひしげじ〳〵　青
判官の身はうき雲のさだめなき　章
　時雨ふり置むかし淨瑠璃　青
おもくれたらうさいかたばち山端に　章
　松ふく風や風呂屋ものなる　青
君爰にもみの二布の下紅葉　章
　契りし秋は產妻なりけり　青

月すごく草履いはなを中絶て　章
　河内の國へかよふ飛石　青
四疊半くづやの里も浦ちかく　章
　浪に蘆垣つかまつたり　青
時は花入江の雁の中歸り　章
　やはら一流松に藤まき　同
いでさらば魔法に春をとめて見よ　青
　七リン響く入相のかね　章
藥鍋三井の古寺汲あけて　青
　落させられし宮のうち疵　章
階の九ツ目より八ツ目より　青
　湯立の釜に置合せあり　章
旣に神にじりあがらせ給ひけり　青
　白髭殿は御年よられて　章

つく〴〵と向にたてる鏡山　青
わけ入ル部屋は小野の細みち　章
忍ぶ夜は狐の穴にまよふらん　青
油にあげしねづなきの聲　章
唐人も夕の月にうかれ出て　青
古文眞寶氣のつまる秋　章
酒の露たわけ起て白雲飛フ　青
天狗どふしや人の倒れや　章
ねよのよわき杉の大木大問屋　青
跡をひかへて糸荷より來る　章
秤にて日本の知慧や懸けぬらん　青
霰の玉をつらぬかれけり　章
花に破わりごの里は十團子　青
日坂こゆれば峯のさわらび　章

がその第一卷である。第二卷はその卷頭だけを擧げて見ると、

梅の風俳諧國にさかむなり　信章
こちとらづれも此時の春　桃青

である。尚江戸三百韻（延寶六年作）の卷頭のみを擧げて見れば、

物の名も蛸や古郷のいかのぼり　信徳
あふのく空は百餘里の春　桃青
嶺に雪かねのわらんぢ解そめて　信章

二卷は（延寶六年作）

あら何ともなきやきのふは過ぎてふぐと汁　桃青
寒さしざつて足の先迄　信章
居あひぬき霰の玉や亂すらん　信徳

三卷は（延寶六年作）

さぞな都淨瑠璃小哥は爰の花　信章
霞とゝもに道外人形　信徳

芭蕉と山口素堂及び伊東信徳

青いつら笑ふ山より春みえて　　桃　青

である。作句より眺めても二卷三卷は、延寶六年に完成したのであるかも知れない。右に表るゝ作者信徳は伊東信徳で高瀬梅盛の門人である。

當時伊東信徳は談林に屈從するを好しとせず、秘かに不平を抱いてゐた人である。後の山口素堂なる信章は唯俳諧のみを好んでゐた人ではなく、幼少より漢詩を專らに習得してゐたのである。それが偶ゝ俳諧に轉じ、談林の佶屈にして、俗臭粉々たるに嫌味を感じてゐたのであつた。心中には何か新しき俳諧を唱導しようとさへ考へてゐたものであらう。この二人は確かに芭蕉よりも先に、當時の俳風に飽足らぬ感情を抱いてゐたらしい。それが偶然壯年芭蕉の俳諧的野心と結合したまでのことである。この三人の共同制作は、盛なる談林と衰へる貞門に對する不平分子の結合に依つて拵へられたのではあるが、談林を厭ふて未だ談林を出でてゐない。一面より觀察すれば、それ程談林の勢力の偉大であつたことを物語るものでもある。ともあれ、この三人結合の革新的心情が、芭蕉の俳諧に大きな力を與へたものであることは云ふ迄もない。芭蕉も此頃より愈ゝ個性を現はし初めたのである。此の點よりして「江戸三百韻」「奉納二百韻」などは芭蕉を紀念すべき心境變化の連句といふ

べきではなからうか。

## 「桃青」説

俳人が改號するには、自分には大きな衝動があるからこそ、舊號を捨てゝ新號に就くが普通のやうであるが、有名な俳人ならば、改號のいはれ因緣も明かに世に傳へられるものであるけれども、有像無像の類の俳人が改號をしても、世は極めて冷淡である。芭蕉が桃青と改號した頃も、未だ有名な俳人の部類に屬さない時である。それだからこそ、正確な記錄を芭蕉自身も殘してゐないことになるではなからうか。とは云ひ、芭蕉自身俳諧に沒入する意志が、此頃漸く培養されたものではないだらうか。斯樣な意味から、桃青と改號された年代等を研究するのも大いに有益なことゝなるのである。

世の多くの芭蕉傳の謂ふところに從ふと、故鄕にての作なる「貝おほひ」が寛文十二年正月の作で、此時は自序に松尾氏宗房と書いてゐるのである。そして同年京都に季吟師を尋ねたる際

昨夕伊賀より宗房上京仕候て、桃青と改名いたし候由、其名かへの爲俳諧致興候樣申候間、則申入候、御覽可被下候

荻野安靜宛季吟の書簡は僞作か

素蓮の桃青說

名をかへて鶉ともなれ鼠どの

と季吟は荻野安靜氏に消息をしてゐる。これに依つて宗房が桃青と改號したのは、寬文十二年二十九歲の時であるといふ。

季吟の消息が眞實なものであるならば、何等疑ふ餘地はないわけである。併しこの季吟の手簡は十中の八九分迄僞作されたものであるといふことを云ひ得る。

誤謬も甚だしいことに、手紙を貰つてゐる筈の安靜は寬文九年に死んでゐるのである。(山崎氏の說)これを立證するものとしては、安靜の作なる「如意寶珠集」が寬文九年に成つたけれども、死去により引延し、門弟の似船が延寶二年にこれを上梓したといふことである。又常識的に考へて見ても、當時餘りにも有名な學者季吟が、田舍者の靑二才なる芭蕉の改號紀念に、俳諧を催すとはちと不思議ではあるまいか。學者安靜に「桃青にも相待被居候」とはちと大袈裟過ぎはせぬか。以前、如何に季吟を知つてゐるからと云つても、かくまで芭蕉を優待したとはどうしても解せない。資力智力の共に貧弱な二十九歲の靑年芭蕉であり、而かも秘かに故鄕を抜け出て來た芭蕉である。扨て右の消息の中に月日を入れてゐないのもちと變ではないだらうか。素蓮のいふところに從へば「芭蕉宗房ノ號ハ、寬文

年間伊賀在國中ヨリ京地遊學ノ頃古風ノ名（古風中ハ多實名ヲ以テ別ニ俳名ナシ）ニシテ東武來住ノ後ハ桃青ヲ以テ俳名トシ、號ヲ天々軒ト云。且桃青ハ終身更ズト雖、天和貞享ノ際正風ヲ開テヨリ、我人共ニ芭蕉ト稱シテ標號トス。是芭蕉ノ名ノ三變ニシテ、俳風モ亦三變ス。」

思ふに、延寶四年冬に與行せられたる江戸三百韻は桃青の名を以て現れてゐる。さうしてそれ迄は宗房の名をもつて出てゐるやうである。それ故に延寶三四年の頃に改號せられたものと見るのが適當な考察ではないだらうか。

桃青の改號は延寶三四年頃か

## 延寶六年（三十五歳）

俳諧に一歩々々と研鑽することを怠らぬ芭蕉は、此頃愈々自信を持つに至つたやうである。それは彼の發句なり連句なりが明かに證明してゐるからである。想ふに談林の長を營養として、新らしき俳諧の一方向を見出さうと可成力を盡してゐたやうである。而かも此年に於て華桃園栩々齋など〻號してゐるのを見ると、何か内心大いに感ずるところでもあつたではなからうか。門弟（後世有名にならざる）も可成殖えて來てゐるやうである。そこで自然指導に當る自分としては、何等かの根據を立て〻方向を示してやらなければなら

ない。それが爲めか漢詩の長所などを取入れて、以て自己の進む俳諧たらしめるやうな努力を拂つたであらうと思はれる節が作品より覗はれる。

延寶六年の發句

今延寶六年に作られたと云はれる發句に眼を轉ずると、

大比叡やしを引捨てし一かすみ

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下凉み

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

延寶六年の歸鄉說

のやうな句がある。これを一寸眺めると、芭蕉が旅をして作つたものゝやうである。延寶六年初めて江戸を離れて歸鄉したといふ說を强調する人は、こうした彼の作より推考して說を樹てたものであるかも知れない。成程これにも一理が無いわけではない。併しこれらの句に詠まれてゐる地名にのみ拘泥せず、一句といふところの作意に考へを及ぼして見るならば、全然變つた作句態度を想起する事が出來るのである。卽ち二三年前に見聞したる印象が、今始めて句と成るといふことの屢ゝあり得るといふことである。

此處に於て、私も作句より考へて延寶六年の歸鄉說に加擔したくなつたこともあつたが

延寶四年の歸鄕說

これは餘りにも句に捉はれた說であるといふことを考へた。矢張り竹二坊や竹人の延寶四年の歸鄕說が事實に近いやうである。

先に延寶五年のところに於て申述べたやうに、江戸三百韻中の二卷は延寶五年の春に完成されたものであらうと思ふ。それに從つて三卷は云ふ迄もなくこの年に完成されたものである。尙ほ秋には似春と四友と芭蕉と三人して、四友亭に於て連句が興行された。

須磨ぞ秋志賀奈良伏見でも是は　似春
ほの〴〵の浦さし添へてつき　四友
沖の石玉屋が袖の霧晴て　桃青

---

見渡せば詠ればみれば須磨の秋　桃青
桂の帆ばしら十分の月　四友
盃に文を飛する鴈鳴て　似春

又松島歌仙に

のまれけり都の大氣江戸の秋　春澄

詞のかはせ千金の月　似春
菊やどの家に久しき雁鳴て　桃青

青葉より紅葉散りけり旅煙管　似春
時を感じては眠る遠山　春澄
頬杖にかたぶく月の影消えて　桃青

鹽にしてもいざことつてん都鳥　桃青
只今のぼる波のあぢ鴨　春澄
川淀の杭や龍のつたふらむ　似春

又芭蕉・杉風の「兩吟百韵」に

色付や豆腐に落て薄紅葉　桃青
山をしぼりし榧の下露　杉風

手みづ桶雲の廣袖月もりて　同

此他二葉子・紀子・卜尺と芭蕉の四歌仙も完成したのである。

賣にや月問口千金の通り町　桃青

爰に數ならぬ看板の露　二葉子

新蕎麥や三島がくれに田鶴啼て　紀子

芦の葉こゆるたれ味噌の浪　卜尺

かくの如く目覺しき興行が行はれ、それが撰集も續々と上梓されてゐる。これ芭蕉が俳諧に對する熱と力の表れであることは勿論であるが、芭蕉の俳諧が朝日の如く新光明を目指して進む絶好の時期であると云へやう。

似春は小西似春にして後下總行德の社家となつた人である。信澄は青木信澄で京の人である。二葉子は神田貞宣蝶々子男である。

# 第四章　壯年時代の芭蕉（二）

（自延寶七年至天和二年<br>自三十六歲至三十九歲<br>自西暦一六七九年至一六八二年）

芭蕉と次郎兵衞の對面

**延寶七年（三十六歲）**

二月十五日のことである。芭蕉の乳母（後の壽貞尼）の子なる次郎兵衞が三人連で涅槃會のある東叡山に參詣した。不圖瞬ると今しも掃き淨められ石段を下りて、本堂の參詣を濟まして手には珠數を爪ぐりつつ麗姿颯爽と歸り來る五人連の圓頂緇衣があつた。次郎兵衞はどつと胸の高鳴りを覺えた。といふのはどうしても見覺えのある姿のお出家さまがゐたからである。彼は思はず識らず、連れの二人から離れてしまつてやゝ急ぎ足に其の出家の後を小刻みに追ふた。

やがて其の出家は、同僚に一寸と會釋して一人離れて橋町といふ所のある家へ這入るのであつた。と同時に次郎兵衞も夢中で其の家へ這入らうとした。此の時出家は追ひ來たる次郎兵衞を見とめて駭いた面持ちで

芭蕉・故郷出奔後の一切を語る

「ヤアそなたは次郎吉（次郎兵衛のこと）ではないか」と後ろを振り向いて云ふた。

次郎兵衛「ハア若旦那様で御座りますか」と云ふや、涙はとめどなくはふり落ちた。芭蕉もたゞ無言のまゝ暫し熱き涙を落すばかりであつた。やがて次郎兵衛は顏を上げて「皆んなお待ち申して居りますから、何卒御歸り下さいます樣に」としきりに申上げる。

芭蕉は徐ろに口を開らいて「いや〳〵、一度び主人に背を向けた以上は御咎は覺悟の前である。生も死も皆前世の因緣なのだ。一切を諦めて、切腹しようと報恩寺に入つてはみたが、法印しきりにとゞめられ「人間と生れてこのまゝ朽つるは口惜しいことである。何道へなりと精進せよ、早く大江戶へ行きなさるがよい」と云はれ、江戶根本寺の佛頂和尚への頼狀と共に餞別をさへ頂戴した。そして其の夜は京伏見の西岸寺の任口上人に逢ふたので、種々身上を申上げた所、この上人も亦佛頂和尚への添書をして下された。加之任口上人樣よりは、桃青といふ號まで賜り、十月十二日に江戶の根本寺に來たわけである。それからといふものは、專心佛頂和尚に就いて修行してゐる。師も殊の外わしを愛して下さる。わしは城主の武運長久を祈り、又祖先の供養に、そして兄半左衛門の安穩を祈つてゐる次第である。お前も知つて居る通り、暇があれば好きな俳諧を勉强してゐる。今日は師

次郎兵衛の母壽貞尼となる

佛頂和尚よりお許しがあつたので、岸本調和・一柳軒不卜其他の友人と涅槃會詣うでに出掛けたわけである。次郎吉や、わしはこうして心配なく暮しをしてきた次第だ。早く歸つてこの事を半左衛門殿に聞かせ下され、又、お前の兩親にも語り聞かせて安堵させて下され」としみ〴〵と語られたかと思ふと、兩頰には涙が傳ふてゐる。

次郎兵衛「御志有難う御座ります。あゝ思ひ出せば悲しう御座ります、我父親次郎兵衛は昨々年相果てゝしまひました、母は未だ存命では御座りますが、若旦那樣に御別れしてからは、只嘆き悲しむばかりで、何時しか髮を切り下として壽貞と改名しました。それからと云ふものは、急に老いて行くばかりで御座ります」と云ひ終るや、ワッと泣き出してしまつた。芭蕉も暫らく貰ひ泣きをして

「有爲轉亦反の世の中とは申せ、余りにも變り果てたることよ、何んといふ氣の毒なことであらう。あの次郎兵衛は生きてゐたら七十歳位であつたらうに、乳母の嘆き居ることは尤もである。我を愛で育てゝ吳れた乳母の恩、それを忘れてゐたわしは恩知らずであつたわい、勿體ないことよ」と云ひつゝ直ぐに言葉を次いで

「尼となりしはほんに殊勝のことであるわい」と項垂れた芭蕉は、次郎兵衛の改名を聞い

次郎兵衞故郷伊賀へ歸る

宗因江戸にあらはる

て書き記し、其夜は懺悔悲嘆のあまり一睡もせずに念佛を唱へた。翌日は兒半左衞門殿への消息をこまごまと認めて、次郎兵衞に渡し

「數年佛頂和尚に就て儒佛の教を學んでゐる。和學は季吟師に學んでゐる。其の中深川の杉風の世話に依つて、そちらの亭に移ることになるかも知れん、詳しくは飛脚便りに文通も致さうから、それ迄わしに逢つたことを人々には云ひ傳へぬやう呉々も頼む」と。

翌延寶八年二月二十日に、次郎兵衞は江戸を後ろに故郷へ發つたといふことである。以上は「次郎兵衞物語」に解說を下したものであつて、次郎兵衞物語を眞實のものとして取入れたのではないが、人間芭蕉の劇的光景を面白く浮き出してあるから、此處に載せることゝしたのである。

尚ほ佛頂和尚との關係などに就ては後章に詳しく說くことゝする。

丁度此の頃談林の祖宗因が江戸に來てゐたので、江戸の俳諧はいやが上に賑はつてゐたといふことである。或日のこと、宗因が弟子達と市村座へ芝居を見物に出掛けた。當時所謂俳諧に遊ぶやうな人は、藝に遊ぶといふ樣なところから、どんな遊びごとにも一般の人人より先を行つてゐたものである。謂はゞ通人に屬する樣な人が多いわけである。芭蕉も

其の類に漏れず、古池や雲などのみを眺めて生活してゐたのではあるまい。それを唯自然のみに歸依してゐた芭蕉と見るのは、餘りにも迂遠な觀察ではなからうか。これは當時の社會相からも、亦彼の作品からもよく窺はれるところではないだらうか。

## 宗因に會ふ

市村座へ宗因が弟子達と來た時に、芭蕉も旣に芝居を見に市村座へ這入つてゐたので、偶然にも芭蕉は宗因と逢ふたといふことである。此時始めて宗因に逢ふたのか、それとも二度目の面接であつたか、確かなことは解らない。

當時俳諧に對する心は、前年に比較して一段と熱を加へてゐる。外形は尙ほ談林の影響甚だしきものがあるけれども、其の內容に至りては漸次談林の趣向を離れ、やがての蕉風を成す微かなる匂ひを具へてゐるものと云へ得やう。春には、芭蕉と杉風が兩吟の百韻を興行したといふ（一葉集）が、卷中の句を推考する時、延寶六年の作と見るのが妥當であらう。

色付や豆腐に落て薄紅葉　　桃青
山をしぼりし榧の下露　　杉風

二月には芭蕉・杉風・仙風・龜・惣代・杉化・而已・執筆等八吟表八句が成つてゐる。

さゝげたり二月中旬初茄子　桃青
天下のおかげ我等まで春　杉風
雨霞古藏ひろくをさまりて　仙風
しろき鼠に雪ぞ舞ゆく　龜
雲間より赤い鳥のほの〴〵と　惣代
谷の戸口にかゝる看板　杉化
上々吉有明の茶吹あらし　而已
千里の羽も金箱の秋　執筆

又この冬には芭蕉・千春・信徳等の三吟歌仙が成つた。

忘れ草煎菜につまん年の暮　桃青
笊籬味噌こし岸傳ふ雪　千春
濱風の碁盤に餘る音冴て　信德

當時の關西俳壇

此時關西に於ては「都五百韻」成りて談林派は大氣焔を吐いてゐる　前年江戸に於ては、

貞門と談林の爭ひ

「江戸八百韻」が成つてゐるのであるから、世を擧げて談林の俳界と稱するの觀がある。されば貞德派を守る古派との論爭は、日々絶えることのない狀態である。中島隨流・上島鬼貫等が新派なる談林に對する論難は、其の尤も激しきものであらう。素堂が江戸八百韻に加はつてゐる關係から、芭蕉が談林派に傾いたものではなく、芭蕉は心中貞門よりも、談林により多くの共鳴を見出してゐたのである。これは芭蕉の自ら語つてゐるところを見ても證明される。慧眼の芭蕉がよく後日の蕉風を築いたのも、敢て怪しむには足らないものである。

兄半左衞門乳母壽貞と共に芭蕉の健在を喜ぶ

## 延寶八年（三十七歲）

三月、壽貞尼の子次郎兵衞は、芭蕉が江戸の根本寺に修行中なる旨を故鄕に傳へた。芭蕉の實家の悅びは云ふまでもないが、壽貞は乳母でもあつたせいか、病氣を忘れて雀躍りした。其後のこと、半左衞門は探丸侯より花見の宴に呼ばれた。何思ふとなく、探丸侯が蟬吟公在世の芭蕉のことなどに話を移され、「今は何處にや」と問はれたので、半左衞門は弟芭蕉が江戸に出家してゐる旨を申上げてしまつた。殿の喜び一方ならず、早速江戸へ人を遣して、探し出す樣にとの達しがあつた。そこで再び次郎兵衞が三月二十七日伊賀を出

立して江戸へと向つた。

四月六日、江戸へ入つた次郎兵衛は直ちに根本寺を訪ふた。ところが芭蕉は既に居らない。やがて深川の芭蕉庵を尋ねたら、小坊主（其角ではあるまい、其角は二十才位になつてゐる筈である。芭蕉は一寸した使ひの小僧を置いてゐたらしいが）の取次で探丸侯よりの御意を通じた。芭蕉は其處に居合せたる十餘人に手紙の趣を讀み聞かせたさうである。すると老人不卜が、病氣といふて歸國を辭退する樣にとの說を持出した。暫らく考へ込んでゐた芭蕉も、これに從つて返書を認めた。次郎兵衛は伊賀に歸つて、芭蕉の生活の有樣を僞らず語り傳へたので、探丸侯へも此の事が申傳へられたのである。次郎兵衛が芭蕉庵にて取次の小坊主より聞いた「弟子はもはや五六十人」云々の事まで探丸侯の耳に入つたので、殿は只管なる御滿足を覺えさせられたといふ。これよりといふものは半左衛門も裏向の御取遣が差支ない樣になつたといふことである。

門弟五六十人といふ

延寶二十歌仙

四月「延寶二十歌仙」別名「桃青二十歌仙」「門弟獨吟二十歌仙」「門人二十歌仙」（湖中）が完成した。これは延寶五年其角が十七才の頃より着手したとあるから、三年間かゝつたといふことになる。二十人とは、杉風・卜尺・卜宅・嵐蘭・嵐竹・嵐窓・螺舍（其角）・北

共角の田舍之句合

鯤・杉化・巖泉・巖翁・嵐亭治助・一山・絲系子・白豚・木鶴・揚水之・吟桃・仙松・岡松等である。之等の人々のうち、後世蕉門俳諧隆昌の爲めに大いに活躍した名も出でてはゐるが、此の二十歌仙のみにして名の消えてゐる人々も尠くはない。いづれにしても本尊なる芭蕉、卽ち桃靑の名の出でて居らぬのは不思議である。恐らく吟桃が桃靑の書誤まられたものではあるまいかと思はれる。吟桃を桃靑の假號であると說を成す學者もあるが、それには正しき根據のあるわけでなく、推量であるから甚だ怪しいものである。想ふに熱心な門弟等の歌仙に、芭蕉が假號を用ひるとは信じられない事である。又芭蕉の加はらぬ撰集であるとなす事は、甚だしく不似合な集となつてしまふ。何となれば、古來桃靑二十歌仙とさへ呼稱されてゐるのであるから。又見方に依つては蕉門樹立の第一聲とも見られるところのこの撰集に、桃靑の名を連ねないといふこと、それ自體が綾挺子なものになりはしないだらうか。追加一卷を桃靑の作とする事は、未だ硏究の餘地あるところである。

八月、芭蕉は共角が農夫と野人とに分けて二十五番五十句を作りたるものに判詞を下した。これ「田舍之句合」の完成である。この頃より芭蕉の進境は、一般と落着を見せてゐるものゝやうである。それは芭蕉の絕えざる努力勉學に依るものであつて、その爲めに門

弟等も俳諧に、一段と力を注ぐやうになつたものである。參考までに、嵐雪である嵐亭治助の序文を掲げ、又芭蕉の判詞を一つ掲げて見る事としたい。因に蝶子は其角である、其角は丁度此頃蝶子を改めて其角といふやうになつたのである。

「田舍の句合」の嵐雪の序

「桃翁、栩々齋にゐまして、爲に俳諧無盡經をとく、東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が氣色より初て、其體幽になどらか也。ねりまの山の花のもと、渭北の春の霄を思ひ、葛西の海の月の前、再江東の雲を見ると、蝶子此の語にはずんで、農夫と野人とを左右に別ち、詩の體五十句をつゞる。章のふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舍とは名付たる成べし。仍以是に翁の判を獲たり。判詞、周荘が腹中を呑で、希逸が辯も口にふるす。遠くきく、大江の千里は、百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なる事を知ル。しるといへば、我是をしるに似たり。しらずして爰に筆をとる、又是しらざるなり。」

延寶八歳次　庚申仲秋日　　嵐亭治助謹序

## 第十六番

左　勝　　農　夫

分限者に成たくば秋の夕昏をも捨よ

右　　野　人

秋の心法師は俗の寢覺かな

芭蕉云「先、左の句珍重。法師のねざめ俗にかへらん事、尤さもあべきや。雨句辯じがたきに仍て、大巓山金德寺の和尙にまみえて、問フ。答フ。假にも無常を觀ずることなかれ、一錢を得たらんときは、神のごとく如レ君せよと。仍て右の句閉ロス」

第十七番

左　　農　夫

砧の町妻吼る犬あはれなり

右　勝　　野　人

芋をうへて雨を聞風のやどり哉

芭蕉云「左の句、里の砧といはんはふるしとて砧の町と云。つま戀る鹿は不レ珍とて妻吼る犬と云しは、猶作の中に作有て、聊作過たるにや。又、芋の葉に雨を聞んは、誠に

冷して淋しき體、尤感心多し。これ孟叔異が雨の題にて、「檐聲和月落芭蕉」と作れる氣色に似たり。右勝たるべし。」

常盤屋句合

九月、芭蕉は杉風が青物諷詠二十五番五十句を作りたるものに判詞を下した。これ「常盤屋句合」の完成である。これには、芭蕉が乞はるゝまゝに跋文を書いてゐるので、その内容から、芭蕉の俳諧的進境の奈邊にあるかを窺ふことができる。先の「田舍之句合」と同じく、跋文及び一二の判詞を掲げて參考に資し度いと思ふ。

芭蕉の序文

一詩は漢より魏にいたるまで四百餘年、詞人才子文體三たびかはるといへり。和歌の風流代々にあらたまり、俳諧年々に變じ、月々に新也。今こゝに青物の種々を集め、二十五番の句合となして、予に判をこふ。誠に句々たをやかに、作新敷、見るに幽也、思ふに玄也。是を今の風體といはんか。且是に名付て、常盤屋といふは、時を祝し代をほめての名なるべし。倩、神田須田町のけしきをおもふに、千里の外の青草は、蹄鱗につけて、これをはこばせ、鳳の卵は糠にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の菜人參、緑も深く、唐のからしの紅なるも、今、此江戸にもてつどひ、鳳、たうきびの菜をならさず、雨、土生姜をうごかさねば、青物の作意を得て、かいわり菜の二葉、松茸の

千とせを祈り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長くつたはれらば、そらまめをあふぎて、今此時をこひざらめかも冬瓜。

于時延寶八庚申季秋曰　　華　桃　園」

華桃園は云ふ迄もなく桃青の別號である。

第十二番

左　勝

五月雨のよそに蕗のはながら蓮の池

右

天蓼の枝折老たる猫にはあらね共

芭蕉云「たゑまなき五月雨のそら、庭上忽池邊の思ひをなすに、彼遍昭が「何かは蕗を蓮とあざむく」とよめる心もをかし。又齊の管仲またたび山ンに道をうしなひ、老たる猫を放て道しるべしたるも珍しけれ共、只遍昭の詠に心ひかるゝ也けり」と。

以上に依つて考へて見ても、此年は芭蕉の目覺しき活躍を覗くことが出來る。門人は去年に比して激増してゐるのみならず、門人の熱心は去年よりも數倍である。これ皆師芭蕉

の俳諧に對する自信確立に依るものであらう。我國の古歌古連俳は云ふに及ばず、支那の名詩等より何物かを見出さんとして、只管に勉學をしてゐたことが、彼の全生活に蓄積されてゐる。何ものか新しき境地を拓かんとして焦慮してゐる芭蕉の姿が、眼前に髣髴として來るではないか。併し尚ほ此時代は、彼の勉強したるものが血となり肉となつて、蕉風の發展に役立つたといふよりは、未だ芭蕉が他の學問よりしきりに影響されてゐたものといふべきであらう。彼の跋文も嵐雪の序文も亦彼の判詞も、これを明かに物語るものである。

芭蕉の俳諧と儒教思想

　彼の判詞に宗教思想、即ち儒教思想が多分に加はつてゐる爲に、門弟等は完全に彼を崇拜するやうになつたものであらうと思ふ。此處が芭蕉獨特の俳諧であり、門弟を吸引し、且つ彼れ自身を敬慕せしめるやうになつた最大の原因である。あながち大衆が談林のをかしさに飽いて來てゐるわけではないが、新しき俳諧の分野であつて珍らしいといふ事と、それに宗教思想を多分に織込んだから、世の讃仰を博するに至つたものであらうと思ふ。儒

漢詩の利用

教の攝取と共に漢詩の利用は、確かに智者たる芭蕉にしてよく之を成し得たものである。此處に芭蕉の生きんとする道を歩む巧みさがある。三十七歳の芭蕉が、翁と尊稱せられる程斯樣に彼の生活行狀が落着いてゐるのは、如上の影響によるものではあるが、通人生活

をいち早く成算してしまつたといふ偉さにもよるのである。

延寶九年（九月二十五日改元）

**天和元年（三十八歳）**

芭蕉の微恙

初夏、芭蕉が病氣であるといふ知せが郷里伊賀に聞えたので、七月三日に次郎兵衛はその見舞の使ひとして江戸へ來た。然るに、芭蕉の病氣も大分快方に向いてゐた。そこで次郎兵衛は、安心して八月二十五日に伊賀へ歸つたのである。

芭蕉庵を營む

晩秋頃か、深川の元杉風の別墅に草庵を營む事となつた。これは親切なる幕府の御用商人鯉屋杉風が、荒廢せる一離家を芭蕉翁に呈上したのである。これが所謂芭蕉の入庵で、これに關しては說區々たるものがあり、簡單に片附けることが出來ないから、詳しくは、「芭蕉庵入庵」に讓ることゝする。

九月二十五日には、延寶九年が改つて天和元年となつた。次郎兵衛は又十二月初旬伊賀を出立して、十二日芭蕉庵に來てゐる。

次韻出づ

延寶八年に芭蕉初期の次韻の撰集が試みられ、翌九年七月下旬完成上梓された。通じて一二三卷であり、桃青・其角・才丸・揚水の四人より成る二百五十韻である。次韻とは伊

芭蕉の俳諧に影響したいろいろ

藤信徳の爲したる七百五十韻に次いで成したる爲めである。今それを表題とせるを記せば「晋伯倫傳酒徳頌樂天繼以酒功讃青醉之續信徳七百五十韻（二百五十句）挨拶を愛では仕たい花なれど」とある。

本集を以て蕉風の開眼でありその第一聲であると力説する人多く、去來なども「風雅の見及ぶ所次韻に改まり」と云ひ、越人は次韻以前は古く、次韻より新風と稱すべきであると云つてゐる。尚ほいづれの人々も次韻に絶大の讃辭を送つてゐるやうである。然るに私は、次韻を上梓した時芭蕉は、新風であることを全く意識してゐなかつたものであらうと思ふ。唯貞門の俳諧に飽きてゐたことは事實である、と云つて、宗因流に左袒してゐたものではない。貞門の涎を舐めることは、全く快しとしてはゐなかつたが、それと共に宗因の涎を喜んで舐め度い芭蕉ではなかつた。多少談林の俳風も鼻についてゐるので、目新らしく綾つたところを詠んで行き度い、と思ふ心が多分にあつたものではなからうか。この隙に乘じたのが儒學の思想であり、形式的な漢詩であつた。それ故に、非常に宗教味い内容を形成してゐる、と同時に不消化な漢詩熟語が外形に多くの影響を與へてゐる。併し極端に周圍の模倣を戒めるばかりでなく、排撃した爲めに、何か新しきものを求め歩かんと

する態度、及び仄かなる道を求め得てゐたのではあるまいかと推考されるのである。今左に各巻の初頭の句を示してみると、

鷺の足雉脛長く繼添て　桃青
　這句以荘子可見矣　共角
禪骨の力たはゝに成までに　才丸
　しばらく風の松におかしき　揚水

春澄にとへ稲負鳥といへるあり　共角
　ことし此秋京を寝覺て　才丸
月を速に坐烏帽子をかぶるなり　揚水
　笹に德利を折かたげしや　桃青

世に有て家立は秋の野中哉　才丸
　詠置月にかぶ萩を買　揚水
哀とも茄子は菊にうら枯れて　桃青

鮎さびすたり海鼠漸ク　　　　　　　　　其角

右に依つても知らるゝ樣に、先づ云へば所謂蕉風の俳諧の風趣がほの〴〵と見える程度で談林の俳風より全く離れてゐるといふことは云へ得ないであらう。

此頃、即ち次韻集成後、同じく桃青・其角・才丸・揚水四人が餘興として四吟百句を吐いてゐる。

　附贅一つ爰に置きけり曰ク露　　　　　揚水
　　無用の枝を立し犬蘭　　　　　　　桃青
　夜ル貞の朝咲花にあらそひて　　　　　其角
　　塵裡の四虫音を隱る也　　　　　　才丸

之を眺めても、詠む態度が又詠む主向が諧謔的見地を出でて得ないものがあるだらう。この催しを假りに例外としても、芭蕉を繞る三力作家が、普通す程の用意をもつて詠みなしたのであるから、此の當時の芭蕉の心境が、顯然と一道を開き得なかつたといふことを察するに難くない。後日次韻時代の芭蕉を無間矢鱈に讚賞してゐる門弟等の言葉は、著しく贔負のひき倒しの感を與へてゐる。

芭蕉は前年なる延寶八年「枯枝に烏のとまりたるやゝゝ（後にけりとなす）秋の暮」の句をものしてゐる。併し多くの說は貞享四年の作としてゐる。この延寶九年六月言水が撰したる書「東日記」に此の句が出てゐるから、矢張八年作に從ふべきか。此の句は人口に膾炙してゐるだけに問題も大きいから、發句を論ずるときに於て述べることゝしたい。

天和元年深川に移つたので、深川大工町の臨川寺（後の）とは小名木川を隔へたゞけの距離である。そこで芭蕉は屢ゝ佛頂和尙を訪ひ、參禪もしたといふことである。彼の俳諧が益ゝ禪味を帶びて來たのは勿論これが爲めであり、成程天和元年以後其色を見せてゐるやうである。

杉風の芭蕉庵のこと

### 天和二年（三十九歲）

深川の杉風の別墅（坐興庵後芭蕉庵といふ）に移つた芭蕉は、漸く落着いた生活に這入つたらしい。此の年の春は、草庵に一株の芭蕉を植ゑたといふことである。これが爲めに芭蕉庵といふ樣になつたと傳へられてもゐるが、よく考へると杉風は二つの庵を持つてゐた。一つは芭蕉庵であり一つは採茶庵である。芭蕉に與へた方は芭蕉庵であつたらしい。さうすると芭蕉が移り住まぬ以前に、芭蕉庵の名があつたといふ事を云ひ得るのである。

杉風が自著にも、芭蕉庵杉風とせるものあるを見ても明かなことである。芭蕉翁文集が芭蕉を移す詞にいふ「いづれの年にや栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にやかなひけむ、數株の莖を備へ、其葉茂りかさなりて、庭を狹め、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人呼で草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、處々に送る事年々になむなりぬ」は其の儘信頼出來ないものとなる。想ふに杉風が使用してゐた時の芭蕉庵は名ばかりで、若干の人々より他知らなかつたものであらう。それが芭蕉移りて後は遽に有名になつたといふわけである。それやこれやで、芭蕉が移りて芭蕉ありといふ說も生れたものであらうと察せられる。

芭蕉を植う

芭蕉庵に既に芭蕉が植ゑてあつたか否かは、別稿の「芭蕉入庵」に讓ることゝして、兎に角天和二年の春、門人李下が芭蕉を贈つて吳れたので

芭蕉植てまづにくむ荻の二葉かな

の句を芭蕉が作つたことは事實であるらしい。

度々江戶と鄕里伊賀とを往來してゐた次郎兵衞は、此年の春鄕里の母なる壽貞が病篤きとの報せを得たので、取るものも取り敢えずに、慌てゝ伊賀へ歸つた。時に四月十五日で

壽貞の死は眞實に非ず

あつた。壽貞は次郎兵衞の手厚い養生を得たが遂に七月十二日に他界してしまつた。次郎兵衞は種々と後片付けなどをして、十二月末日再び江戸へ出向いたと物語に云つてゐるがこれは本當の嘘である。といふのは壽貞尼の死去したのが芭蕉の歿年と同じである。それは元祿七年壽貞尼の死を悼んで猪兵衞に宛てた芭蕉の書簡によつても明かなことである。

此年の春であらうか、麋塒・千春・卜尺・曉雲・其角・芭蕉・素堂・似春・昨雲・言水後に嵐蘭・峽水等加はりて成せる俳諧書が完成した。これが世にいふ「武藏曲」である。

錦とる都にうらむ百つゝじ　麋塒
　壺花さくら二番山ぶき　千春
風の愛三線の記を和らげて　卜尺
　雨双六に雷を忘るゝ　曉雲
宵うつり盞の陣を退りける　其角
　せんじ所の茶に月を汲　芭蕉
霧輊く寒や温やの語ヲ盡ス　素堂
　梧桐の夕繻子を抱イて　似春

孤村遙に悲風夫を恨ムかと　昨雲

媒酒棋に咲を進ムル　言水

武藏曲は芭蕉が談林の長を攝取し、これに自己の俳境を加味して一新風を起さんとする眞只中の作である。それだけに縱橫無盡の手腕を發揮してはゐるが、最も動搖せる時代の作品と見なければならぬ。發句に於ても矢張りさういつたことは云へ得るわけである。門人は勿論のこと、芭蕉自身も、孰れが自分等の進むべき方向であるかを適確には認識し得なかつたであらう。

十月に揚水が芭蕉庵を訪ふた。其角選「虛栗」の初冬部に、「赴泊船堂途中感」として

波はくろし夕日や埋む水に舟　揚水

夕がらすみん虹の假橋筑波山　同

とある。依之觀之芭蕉庵を既に泊船堂とも稱してゐたといふことがわかる。此頃蕭條たる冬の自然にも影響されたであらうが、茅屋に一人ほつねんと寢起する寂しさに堪へ兼ねるところがあつたらしい。そこでしきりに行脚などを想ひ、且つは思慕渴仰してゐる西行・宗祇などに想ひを馳せることも屢〻であつたらうと思はれる。徒然なるまゝに芭蕉は、自

武藏曲

泊船堂

ら雨笠を作り、それに澁笠の銘を書いて笠作りの翁などと、自ら云つてゐた。その句は

世にふるも更に宗祇のやどりかな

である

十二月には草庵にて氷を買ふた。その時の句に

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

と詠んでゐる。其の後芭蕉と其角が俳諧を興行した。これ「虛栗」に出てゐる兩吟の半歌仙である。今その卷頭の句を記せば

酒債尋常往處有人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉　　其角

冬湖日暮て駕馬鯉　　芭蕉

である。

### 芭蕉庵燒失

十二月二十八日、江戸の大火にて憐れや芭蕉庵は燒失してしまつた。次に芭蕉遭難の模樣を記してみることにしよう。火勢忽ち芭蕉の身に迫つたので、彼は幸ひ近くにあつた川へ

飛込んだ。併し烟は勿論のこと、火の粉がどし／＼と川の面へ降つて來る。彼は目の前に、偶然にも流れて來た簑を命の綱と頼んで、それを打冠りつゝ火を拂つた。遂にはその簑にも火がついてしまつたのである。そこで彼は簑を投げ遣り、頭だけを水面に出してゐた。時は十二月の末のことでもあるので、水に浸つてゐる身體の寒さは、何とも譬へようがなかつたさうである。それでも火炎は用捨なく伸びて來て、今にも彼の顏を舐め燒かうとさへして來た。彼は最早や、命もこれ迄と觀念してゐたが、幸ひなる哉俄かに風向きが變つて燒死の難は救はれたのである。ところが今度は水中の寒さを感ずること激しく、恰も氷の地獄を彷徨ふ心持がしたといふ。やがて、火勢も幾らか落付いたと思ふ頃を見計つて、陸へ這上らうとしたが、薩張り足が利かない。よろよろとしてあせればあせる程足が利かない。川上からは、いろいろな物が數限りなく流れて來る。又溺死した人が、次から次へと流れ續いて來る。彼は此處に人間としての無常を觀じ、一宮南宮の社を遙拜するとゝもに、首に掛けて居た出山佛を念じ、只管に觀音經を唱へつゝ父母の尊靈に呼び縋つた。すると靈顯あらたかにも忽ちに、大きな櫃に似たものが、二三ごろごろと流れて來た。漸くこれに摑つて淺瀨の方へと流れて來た。あゝ何と不幸か、櫃の動搖のために、摑まへてゐた手が離れて

八百屋お七の火事か

火事を天和三年とする說

しまつた。この時ばかりは、彼も絶體絶命であることを觀念したといふ。けれども、割合に淺瀨であつたせいか、附近の人々に引揚げられたのである。以上記した內容は、次郎兵衞物語を骨子としたのであつて、甚だ信ずるに足らぬものかも知れぬ。內田魯庵氏も「芭蕉庵桃靑傳」に於て詩的形容であらうと云つて居られる。

斯く、大正十二年の關東大震災に於ける被服廠以上の苦難に逢ふた芭蕉は、實に運の强い人である。この火事は本鄕の大圓寺から發火した、所謂八百屋お七の火事だといふことであるが、果して本當か未だ確かではない。又火事を天和三年の冬である、といふ說を樹てる人が可成あるやうである。それは其角の、天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり笘をかつぎて煙のうちに生のびけん、是ぞ玉の緖のはかなき初め也、爰に猶如火宅の變を悟り」云々と記してある「枯尾花」に據つたものであらう。蝶夢・竹人又湖中が略傳に云つてゐるのも、右の說を信じて述べ立てたものと察せられる。

芭蕉庵燒失を天和三年とするのは、どうしても間違ひとしか思はれない。思ふに、其角の粗漏から二年を三年としたものではあるまいか、集でも傳でも內容が第一で、年月などは第二第三の問題であるから。案外寛大なところがあつたものとも思はれる。三年が間違

火事を天和二年とすべき理由

ひで二年であるといふのは、三年の九月に、芭蕉庵が再興されたと素堂が云つてゐるからである。又「續虛栗」には天和三年甲斐山中の吟として

山賤のおとがひ閉づるむぐら哉

の句を示してゐる。そして「芭蕉翁句鑑」には

ふたゝび芭蕉庵を造り營みて

霰聞くや此身はもとの古柏

の句を天和三年としてある。之を見ても、天和二年に火災に逢ふたのが事實ではあるまいか。罹災を三年冬とすると、翌貞享元年五月まで甲斐に避難し、再び江戸に歸るや、九月草庵が再建せられたといふことになる。さうして見ると、貞享元年秋八月「甲子紀行の行脚」に旅立つたといふことが嘘になつてしまふ。云ふ迄もなく、甲子紀行は貞享甲子秋八月と明記してあるだけに、貞享元年であることに間違ひはない。これに依つても、芭蕉庵燒失が天和二年でなければならぬといふことになる。

# 第五章　芭蕉の强年時代（一）

（自天和三年至貞享元年）
（自四十歳至四十一歳）
（自西暦一六八三年至一六八四年）

## 天和三年（四十歳）

上行寺へ避難す

芭蕉は正月、二本榎の上行寺といふ寺に避難してゐたといふことである。上行寺は今もあるが、火災に罹つたゝめに過去帳其他を失つてしまつたので、判然たることがわからない。其角の父東順及び其角の墓のあるところより考察すると、其角の菩提寺といふところより、其角の世話にて上行寺に厄介になることゝなつたのではあるまいかと思はれる。次郎兵衛は火事見舞に早速芭蕉庵へ來て見たが、ぽつ〳〵板圍ひの粗末な家は建つてもゐたが芭蕉庵らしいものは見當らない。そして醫者らしい人に尋ねて、二本榎の上行寺に引移つてゐるといふことを知つたといふ。

燒失した場所は神田・本鄕より下町の大半であつたらしいが、神社佛閣は云ふに及ばず其他屋敷も成る可く早く整へる樣にすゝめられたので、芭蕉庵も四十四五日で出來たとい

ふことである（甚だ疑はしい）併し芭蕉は其角・杉風・素堂・嵐雪・調和・清德等々知友門人の家を移り步いてゐたゝめ、滅多に歸庵することはなかつたといふ。

西山宗因の死

天和二年三月二十八日に、西山宗因が他界したので、宗因が門人多數は芭蕉の門に來たといふ。それ故深川は急に賑はしくなり、俳人の訪問は日に日に增えるばかりであつた。芭蕉は歸庵して見度い心持が充分あつたらしいが、庵を叩く人々の餘りにも頻繁であるのと、火災の折無理をしたゝめ大分身體も弱つてゐるので、未年歸郷かたがた旅に出る事、を門人に洩したといふ。これは總て木節兵衞物語に據つて記述したものである。

甲斐へ赴く

扨て芭蕉庵が燒けたので、寂しき心を如何ともする事が出來なくて甲州へ出かけたのか否かは知らぬが、芭蕉庵を失つた芭蕉が、甲斐に赴いたことは明かなる事實である。但し其の月日は不明である。芭蕉翁略傳の云ふところが正しく思はれるから、それを參考に記してみるならば

深川の草庵急火にかこまれ、始あやうかりしが、潮にひたり苫をかつぎて、煙の中にいきのび給ひけり　是ぞ玉の緒のはかなきはじめなり　愛に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して、其次の年佛頂和尚（江戸臨川寺住職）の叔六祖五平と云（甲斐の産にして

佛頂和尚に仕へ大悟したるもの）ものゝ情にて甲斐に至り、かの六祖が家に冬より翌年の夏まで遊ばれしとぞ。

芭蕉甲斐行の數說

自書に云、甲斐國郡内と云所に至る途中の苦吟

夏馬ほく〳〵我を繪に見るこゝろ哉（筆者云、この句「水の友」「泊船集」「一葉集」共に異る）

一説に甲州の郡内谷村と初鴈村とに、久敷足をとゞめられし事あり。初鴈村の等力山萬福寺と云ふ寺に、翁の書れしもの多くあり。又初鴈村に杉風が姉ありしといへば、深川の庵燒失の後、かの姉の許へ、杉風より添書など持れて行かれしなるべしと云。」

其角は「枯尾花」に「爰に猶如火宅の變を悟り無所住の心を發して其次の年夏の半に甲斐が根にくらして富士の雪のみつれなければ」と云つてゐる。又成美の「隨齋俳話」に據れば「深川の庵池魚の災にかゝりし後は、しばらく甲斐の國に掛錫して、六祖五平といふものゝ方をあるじとす。六祖は彼ものゝ俳名なり。五平かつて禪法をふかく信じて、佛頂和尚に參學す。彼文字だにしらず。故に人呼で六祖と名づけたり。芭蕉も亦彼の禪師の居士なれば、其因によりて宿られたりと見えたり」と云つてゐる。又麋塒の子のいふ所に從ふと、父が懇意だつたので、芭蕉も甲州郡内谷村へ度々參られた。時には一品をも連れて

馬ほく／＼……の句

參られたといふことである。

孰れも事實らしく聞えるので、急に是を採り他を捨てるといふことも出來ないやうであるが、私は湖中及び成美の說の一致せる六祖五平行きを信じたいと思ふ。杉風の姉の話は餘りによく調子が合つてゐるので、或ひは作りごとではあるまいか、未だ杉風の姉が甲州に嫁いでゐるといふことも聞かぬところである。芭蕉が五平の家に厄介になつてゐる間、非常な苦しみを嘗めたもの丶樣に、山崎氏や樋口氏は解釋せられてゐるが、卽ち後年火災に罹つた北枝に送られた消息に、我も甲斐の山里に引うつり、さま／＼苦勞いたし候へば……といふところよりかく推考せられたものであらうが、私はさうは信じない。知人の家であるから、精神的に左程の苦痛は無かつたこと丶思へる。唯自分の家でないだけに我儘が出來ず、而かも山里であるが爲めに、何かと不自由であつた位ではないだらうか。この邊の心持を察して、北枝を見舞つたものであらうと思はれる。

先に芭蕉翁略傳の引用文中揭げたる

夏馬ほく／＼我を繪に見るこ丶ろ哉

は後に「馬ほく／＼我をゑに見る夏野哉」となつたといふことであるが、これに關して種

翠園の句選年考には「或人家藏眞跡の書翰に、追而申入候昨日之御報に失念故又々申入候木曾路にてほ句の事此度は日數の間も無之故ほ句も二三句ならでは不致候其くせ不出來に候漸く淺間邊にて『馬ほく〳〵我を繪に見る夏野哉』此句斗かと存候其外は不埓千萬なる句にて御ざ候故不申入候追而富士山へ詣り候人にさそはれ候により愚翁も參可申と存候又々共刻可申入候取込早〻以上十二日柏水丈はせを」と。これは間違なく貞享二年の書翰にして、東京の茅野良太郎氏舊藏のものであることを、晋風氏は「新編芭蕉一代集」に述べて居られる。これを信ずれば、「此句泊船集に冬野哉とあやまれるゆへこゝにしるす」といふ「水の友」の註解も、亦一葉集の歌仙「夏馬の遲行我を繪に見る心かな」が後日訂正されたものであることを領けるであらう。併し內田魯庵氏はどんな理由からか、右の書翰を信ずるに足らずと否定して居られる。

天和二年十二月二十八日に燒庵したのであるから、翌三年正月に甲州へ赴いたと見るのが妥當であらう。魯庵氏は二年の冬と云はれるが、さう急に江戶を退いたとは思はれないいろいろと取込みもあるであらうし、門弟等との交渉もあつたであらうから、二三日の間に江戶を立つたとは見られない。甲州の六祖五平の家には約五ヶ月程厄介になつてゐたら

芭蕉甲斐滯在の期間

しい。

### 甲州より江戸へ歸る

芭蕉庵再興の寄附募集

五月に其角の懇ろな勸めに依つて江戸へ歸つたのである。其角は當時の模樣を「枯尾花」に云つてゐる「昔のあとに立歸りおはしければ人々うれしくて燒原の舊艸に庵をむすびばしも心とゞまる詠にもとて一かぶの芭蕉を植たり、雨中吟「(芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉)と侘られしに、堪閑の友しげくかよひてをのづから芭蕉翁とよぶことになん成ぬ」。

山口素堂は勸化文を作りて芭蕉庵再興の寄附募集に着手してゐる。左に其文を擧げてみる

芭蕉庵裂て芭蕉庵をもとむ、力を二三生にたのまんや、めぐみを數十生に待たんや、廣くもとむるは其おもひやすからんとなり、甲をこのまず、乙を恥ること勿れ、各志のあるこゝろに任すとしかいふ、之を清貧とせんや、將た狂貧とせんや、翁みづからいふ唯だ貧なりと、貧のまた貧、許子の貧、それすら一瓢一軒のもとめあり、雨をさゝへ風を防ぐそなへなくば、鳥にだも及ばず、誰か忍びざるの心なからむ、是れ草堂建立のより出る所也、天和三年九月潛(藕)波翳主之旨濡筆於敗荷之下、山口素堂

勸化簿にも人名と金子、或ひは物品の名を連ねてゐるが、「隨齋諧話」に眞蹟の遺つてゐる

るといふのは、其の一部分のものらしく、其角や杉風などの名は見えてゐない。勿ち芭蕉庵が復興する程、芭蕉は皆んなから慕はれ仰がれてゐたのである。これ彼の異色ある俳諧が門弟の心を捉へたことには相違ないが、其の半面には彼の豊かな性格が人々を敬仰させたものであらうと思はれる。

再興した芭蕉庵に入つた芭蕉の心持はどんなであつたらうか。それは芭蕉より他に知る人はないが、想ふに、自分の俳諧に大きな自信と自負を感じたであらう。卽ち芭蕉庵再興は、自分の俳諧に對する熱心と力との反映であることを、よく承知してゐたであらうから、かゝる實現をまのあたりにした時は、動かすべからざる自分の力を知つたわけである。芭蕉の俳諧に一大飛躍と落着とを認めるならば、芭蕉庵再興後ではあるまいかと私は思ふのである。これを如實に物語るものは、其角の撰せる虛栗集の出現である。これより先、嵐雪嵐蘭・一晶・其角・芭蕉の五人の歌仙が編まれてゐる。

花にうき世我酒しろく食黒し　　芭蕉
　眠ヲ盡ス陽炎の瘦　　一晶
鶴啼て青鷺夏を隣るらん　　嵐雪

童子礫を手折ル唐梅　　其角

月ヲ濁す汀の蓼ヲ芦刈て　　嵐蘭

この頃は談林調の流行地を蔽ふごとく、猫も杓子も談林々々で俳諧亂舞、格調を亂し、着眼の低下その止まるところを知らざる狀態である。これ正に亡びんとする前兆である。芭蕉は談林派の滅亡遠からざることを諒察してはゐなかつたであらう。何となれば不知不識でもあらうが、談林の形の影響が時々顏を出してゐる。併し内容には何處となく變つた道勿論自分で最良と信じてゐる道を、見つけ出すことの出來る樣な氣がしてゐたのではあるまいかと思はれる。此點芭蕉は安住もせず、樂觀もせず、只管に努力しなければならぬ、と明るい氣持で進んでゐた樣である。

「虚栗集」の跋文は實に新興の意氣にあふれてゐるものではなからうか、

栗とよぶ一書其味四ッあり。李杜が心酒を甞て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句見るに、遙にして聞に遠し。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顏、黄金鑄ニ小紫、上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也。下の品には、眉ごもり、親ぞひの娘、娶、姑のた

けき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其ノ如、震動虚實をわかたず。寶の鼎に句を練て、龍の泉に文字を治ふ。是必他のたからにあらず。汝が寶にして後の盗人ヲ待

天和三癸亥年仲夏日、芭蕉洞桃青鼓舞書

去來や素蓮が口を極めて賞讃してゐるやうに、「虚栗」は蕉風開發の基礎となつたかも知れない。在來の俳諧に宗教味や漢詩の要素を加味して、一風を示さんとしたる芭蕉の心中は確かに燃え立つてゐたものであらう。既に二年のところに於て、虚栗中の句を擧げて置いたやうに、虚栗集に入つた句の一部、或ひは全部が天和二年の冬に作られたものではあるまいか、それを本年五月其角が撰をして上梓したやうに見える。一葉集には又其角と李下の連句をも收めてある。左に虚栗中の秀吟を覗けば、

月は袖かうろぎ睡る膝のうへに　　其角

鵙の羽しばる夜深き也　　芭蕉

恥しらぬ僧を笑ふか草薄　　同

しぐれ山崎傘を舞　　其角

醉はらふ冷茶は秋のむかしにて　其角

こぬ夜の格子鵙を憐レム　李下

談林に化して談林を出でなかつたならば、芭蕉は平凡な俳人、唯克明な一作家として渡世しただけであつたらう。然るに談林に化して談林を出でた所以のものは何か、蕉風開眼の遠因と近因とを考究することは、非常に肝要なことである。天才であるが故に、と云つて筆を留めて置くことは、却つて芭蕉を傷けることになりはせぬか、私は今それらの原因ともなるべきものを列記して見度いと思ふ。

一、佛頂和尚に參禪したること
一、西行・宗祇の人と爲りの影響
一、漢詩の長所に影響されたること
一、貞門・談林の衰微と墮落
一、芭蕉庵の燒失並に芭蕉庵再興
一、杉風の深切なる行爲

一、門人の絶えざる熱と力
一、遊蕩の快心より自然観照の歡喜に移つたこと
一、名利を欲求する心の段々と薄いで來たこと
等を擧げることが出來よう。

勿論急激に一天地を開拓出來よう筈がない。右に摘出した様な事由が、何時とはなしに彼の心に影響したからであらうと思はれる。就中自然を觀照することに依つて、安住の天地を見出すことの出來るやうになつたのは、彼を「さび」の境地に入らしめる最大の原因ではなかつたらうか。翌年彼が長途の旅を思ひ立つたのも、一つは門人獲得もあらうが、自由に自然の懷に入つて遊びたいと思ふ心、そして思ふまゝに句を作り度いといふやうな、止むに止まれぬ心もあつたが爲めであらうと思ふ。それが不取敢蕉風の開眼であるとは、結果より論ずることであつて、芭蕉自身は全く意識をしてゐなかつたものに違ひない。

**貞享元年**（**四十一歳**）

天和四年は二月二十一日に改元して貞享元年となつた。此の年の六月頃までは諸々方々で俳諧の運座があつたので、芭蕉の身體は非常に多忙であつたと、次郎兵衛物語に記してゐ

る。或ひはさうかも知れない。併し俳諧は、談林より異つた或る方向へと動いてゐたやうではあるが、それかといふて秀れた作はものしてゐないやうである。殊によい發句と見らるゝものには

貞享元年の發句

春立つや新年ふるき米五升

（此の句は上座「似合しや」「とし立や」、中座を「新年ふるし」「新年ふくべ」等々まちまちであり、尚ほ作年も異說が多い。それは芭蕉庵入庵の年代不詳が原因してゐるものである）

藻にすだく白魚や取らば消えぬべき

奈良七重七堂伽藍八重櫻（貞享二年の作といふ說あり）

さみだれに寒いまゝなり旅すがた（作年未だ確かならず）

忘れずば佐夜の中山にて凉め

などであらうか。發句なども其の內容に於て、一段の進境を示したのは、八月所謂「野ざらし紀行」の旅に出でてから後である。

## 野晒紀行

千里、芭蕉を訪ふ

七月には、大和の千里が尾張の荷兮より使ひとして芭蕉を訪ふた。續いて近江の東藤・桐

葉よりも使ひが來た。京大阪へ、又加賀へと交通も頻繁になつて來るばかりである。それだけ、芭蕉の俳名を慕ふ人が多くなつて來たことは事實である。芭蕉は去年より旅へ出掛け度いと思つてゐたのである。その第一の原因は、暫らく訪れぬ故郷を訪ふにあつたらしい。遺憾にも、去年は身體の調子が惡き故に中止した樣な仕末である。そこで芭蕉は千里が尋ねて來たのを幸ひに、千里の案内にて旅立つことゝしたのである。其の時門弟の多くが、旅立つことを止まる樣にと勸めたのではあつたが、芭蕉にとつては俳諧の旅といふより、故郷に歸り度い心持の方が餘計だつたのである。

## 野ざらし紀行

此の旅は江戸へ來てから二度目の歸鄕である。世に「甲子吟行」「野晒紀行」「甲子紀行」「草枕」「芭蕉翁道之記」等と稱してゐるのはこの旅の紀行文である。その初めに

「千里に旅立て路粮を包まず、三更月下無何に入といひけんむかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を立いづる程、風の聲そゞろ寒げなり

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸をさす故鄕」

千里（或は知里、知利、ちり）は此道中芭蕉に心を盡してゐる、芭蕉庵を出立する時

深川や芭蕉を富士に預け行く　　ちり

と詠んでゐる。やがて箱根を越えて

霧時雨不二を見ぬ日ぞおもしろき

富士の邊りで、三才位の捨子のあるのを見て哀切の情堪へ難く

捨子の句

猿を聞人捨子に秋の風いかに

大井川を越えて遠江に至らんとする頃、暫らく馬上にありて

木槿の句

道ばたの木槿は馬に喰れけり

の名句を作つてゐる。この句は素堂もいふやうに、紀行中の逸品であるかも知れない。併し談林を破つて正風體に突入したる名吟であるとは、ちと大袈裟過ぎる褒め方である。この句は漢詩の一章を發句に巧みにうつしたものではあるまいか。軈て小夜の中山に到りては

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙り

伊勢に入りては、伊賀の國の人ではあるが、當時伊勢にゐた松葉屋風瀑を尋ねて十日程逗留した。外宮に參拜して

みそか月なし千歳の杉を抱く嵐

西行谷の麓に女の芋洗ふのを見て

　芋洗ふ西行ならば歌よまん

山田に俳人雷枝を訪ふたら、右の發句を聞いて

　宿まゐらせん西行ならば秋の暮　　雷枝

と詠んだ、そこで芭蕉は忽ちこれに答ふる挨拶として次の句を詠んだ。

　ばせをと答ふ風の破れ笠

茶屋女に句

其の日の歸途、とある茶店に立寄つたところ、蝶といふ女が、蝶の名に因んで一句を願ひ度いといふたので

　蘭の香や蝶の翅にたきものす

と白絹に書き付けて遣つた。

それから閑人盧牧の亭を訪ふて次の句を作つた。

　蔦植て竹四五本のあらしかな

盧牧は伊勢の人で、後年芭蕉の死を聞くや嘆き悲んで、四七日に追悼吟を粟津へ送つてゐる。

## 歸鄕

芭蕉の白髮

長月の始めに漸く故鄕に辿り着いた。六七年近くも歸鄕しなかつた芭蕉が、故鄕の變遷を今更らのやうに感じて「何事もむかしにかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命有てとのみいひて言葉もなきに、兄の守袋をほどきて母の白髮おがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりとしばらく泣て」

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

と詠んでゐる。此時伊賀に無名庵をむすんだ、後の再形庵とは卽ちこれであると潮中が云つてゐる。兄が弟芭蕉の白髮を見て老いたと感じた位であるから、兄半左衞門も相當老いて見えたであらう。年齡から考へるとさう老いる程でもないのであるが、或ひは芭蕉の誇張もあらうが、割合に早く老いる血統であつたのかも知れない。其角が「枯尾花」に「古鄕に卿しのばるゝ事ありて」と云つてゐるのは母の年忌である。これで「野ざらし紀行」の主たる目的が、母の法會にあるといふことを云ひ得るのである。世に蕉風喧傳の爲めの旅であらうといふが如き說は、全く附會の說たるに過ぎない。

甲子行脚の目的

兄の家に留まること數日、大和國葛下郡竹の内なる千里の鄕里に來て旅愁を養ふた。

綿弓や琵琶になぐさむ竹のおく

綿弓とは綿を打たゝいてほぐす弓弦様の器具である。何時か芭蕉の作にも「綿弓や窓に夕日の影さむき」の句があつたやうである。

二上山の當麻寺（禪林寺）に詣でて、牛をもかくすといふ庭の大松を見て

僧あさがほ幾死かへる法の松

吉野の喜藏院・南陽院などといふ妻帶寺に宿を乞ふて

砧打て我に聞せよ坊が妻

西行の舊跡とく〳〵の清水の昔に變らぬを愛でて

露とく〳〵試に浮世すゝがばや

山を登りて又坂を下りて、後醍醐天皇の御廟を拜して

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て近江に入り、今須山中を過るころ

義朝の心に似たり秋の風

不破の關にては

とく〳〵の清水を愛す

秋風や藪も畑も不破の關

大垣に來ては木因の家に厄介になつた。江戶を發つ時は秋のはじめであつたが、今や秋が暮れて冬至らんとしてゐる。永の旅路を顧ることやゝしばし

死もせぬ旅寢のはてよあきの暮

大垣にては船問屋の主人なる谷木因が芭蕉の門弟だつた關係からか、近藤如行や宮崎荊口等が入門した。十月、嗒山（宮崎荊口の子）は芭蕉に一句をおくつた、そこで芭蕉は直ぐにこれに挨拶をしてゐる。

師の櫻むかし拾ん木の葉かな　嗒山

すゝきに霜の髭四十一　芭蕉

芭蕉の生年明瞭になる

此處に於て貞享元年が四十一歲であるから、芭蕉の生年は正保元年であるといふことが云はれるわけである。

又木因も一句を寄せた。

能ほどに積りかはれよ簑の雪　木因

これに答へて芭蕉は

冬のつれとて凪も跡から

如行は芭蕉を招き泊めて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申す　　如行

芭蕉はこれに脇句をつけて

古人かやうの夜のこがらし

大垣に別れを惜んで桑名に至り、本當寺古益亭に宿を乞ふた。

冬牡丹千鳥か雪のほとゝぎす

地藏堂に詣でては

曙や白魚しろきこと一寸

の句を得た。

熱田の林桐葉を訪ふて

此海に草鞋も捨ん笠しぐれ

熱田神宮に詣でては、社頭の荒廢せるを嘆じて

しのぶさへ枯て餅かふ舍りかな

熱田神宮に詣づ

狂句木がらし…の句

名古屋に入つた芭蕉は衣も破れ、笠も破れてゐたといふことである。次の句は其の時の實懷であらう。

木がらしの身は竹齋に似たるかな

併しこの句は「狂句木からしの身は竹齋に似たる哉」と狂句の二字の餘計な方が原句らしくも思はれる。尾張五歌仙なる「冬の日」には「笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり、侘盡したるわび人、我さへあはれに覺えける。むかし狂歌の才士此國にたどりし事を、不圖思出で申侍る」として狂句云々の句が掲出されてある。芭蕉が狂句を好んでゐたといふ證據には「笈之小文」にも「百骸九竅の中に物あり、かりに名つけて風羅坊といふ、誠にうすものゝ風に破れやすからん事をいふにやあらん、狂句を好む事久し、終に生涯のはかりことゝなす」とさへ記されてある。斯く狂句を好んで居られたから、此の句も狂句として記されたものであらうと說を樹てられる方が多い。尚ほおもしろいことに、谷木因の家に傳はれる稿本「櫻下文集」には、「狂句」の二字が前書に移つてゐるといふことである。併し原句が「狂句木がらし」であつたことは翁の眞蹟なる甲子吟行や、風國・土芳其他多くの故人の記すところによつても實證せられる。左に參考として

成美の「隨齋諧話」の一說を擧げて見やう。

「狂句木がらしの身は竹齋に似たるかな　芭蕉

ある人の說に、狂句とおかれしは翁の謙辭なり。後に門弟の狂句の二字をとり捨て集などに出せしは面白き事なりといへり。案るに此說しかりとしがたし。まづ句を作るに、人に對するにもあらで、謙遜の詞をおくべき謂なし。是はその比の格調にして……此句も狂句の二字ありて尤風味あり。門人などの師の句を歿後みだりにあらため削らん事甚いはれなし。文字あまりたりとて、たま〳〵此句のみに付て臆說をなすは心得がたし。外にも是等の體裁あるをしらぬ故にや。但シ竹齋は尾張の名護屋にありて、後に江戶神田に住す。醫を業とし狂歌をよくす。世に誰人の作にや、竹齋ものがたり（烏丸光廣著たらん）といふ草紙あり」と。

尙ほ句選年考に於て積翠園は「後に狂句の文字を省き給ひしよし、此句を卷頭として五歌仙有り」と泊船集のいふところを主張して居られる。狂句の二字があつても、よく意味が取れるではないだらうか、卽ち狂句を弄ぶ自分は今木がらしに吹かれて、洒脫・貧相の態度がさながら狂歌人の竹齋のやうだといふのであらう。

## 冬の日集出づ

尾張五歌仙

冬の日

名古屋に這入つた時は十一月である。それ故に「狂句木がらし」の句も十一月中に出來たものであらう。多分十一月の末日になつたかも知れないが、此處に於て尾張五歌仙が興行せられ、所謂「冬の日」が集成されたのである。山崎氏の云ふところに據ると、正風の俳諧を此の地方に弘布せんとして密かに興行されたやうであるが、想ふにそれ程判つきりした意圖が働いてはゐないやうである。芭蕉が積極的な行動を採つたのではなく、どちらかといふと、これに參加した五人の熱心さに動かされて行つたものゝやうに察せられる。五人といふのは荷兮・野水・杜國・重五・正平等である。芭蕉を加へて六人のこの吟は「俳諧七部集」の一である「冬の日」であるので餘りにも有名である。收むるところは歌仙五卷と追加表六句である。此の集は蕉風の蕾が玲瓏と開かんとするの觀があり、「猿蓑」と共に彼の生涯を通じての傑作といふても過言ではあるまい。左に卷頭の一部を錄してみれば

狂句こからしの身は竹齋に似たる哉　　芭蕉

たそやとはしる笠の山茶花　　野水

有明の主水に酒屋つくらせて　　荷兮

かしらの露をふるふあかむま　　重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　　杜國

日のちり／＼に野に米を刈　　正平

故佐々醒雪氏は「連俳史論」に於て、この「冬の日」の第五卷の霜月の脇なる

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　　芭蕉

正風開眼の一紀元

が蕉風（正風）開眼の一紀元を開きたるものなりと激賞して居られる。連躬も亦「翁も此の冬の日に至りて、初めて正風への眞的を得られけるにや、まさに此脇あり」と云つてゐる。即ち芭蕉が「にほひ」を發見したのは此の句であるといふ事になつてゐる。

「にほひ」發見

冬の日集の世話役とでも申す人は、山本荷兮である。此の人は表面實に如才の無い人であるが、芭蕉在世の時に、師を賣りて己が浮世のたよりとし、芭蕉歿後も亦、師を賣り師を欺くことが甚しかつたといふことである（俳諧往來）一説に師を賣つたゝめに破門せられたと傳へてゐるが、それは本當であるかどうかわからない。いづれにしても口の先だけ

が上手な人で、腹の底は眞黒な人であるらしい。因にいふ、冬日集は貞享二年京都より上梓せられてゐる。

名護屋にては又

草枕犬もしぐるゝかよるの聲

の句を殘し、次に雪見にありきて

市人よこの笠賣らう雪の笠

の句を詠んでゐる。併し此の句は「芭蕉翁略傳」には

左山の抱月亭に遊び給ひて

市人にいでこれうらん雪の笠

とあり、支考の「笈日記」には

抱　月　亭

市人にいで是うらん笠の雪

とありて、抱月が「酒の店たゝく鞭の枯梅」と、次に其所に居合せたる杜國が「朝かほに先だつ母衣を引づりて」と詠んだといふ。

十二月九日（湖中は八日と云ふ、何れが正しきか判明しない）一井亭に於て俳諧を興行した。集に參ずる者、芭蕉・一井・越人・昌碧・荷兮・楚竹・東睡の七人である。

旅寢よし宿は師走の夕月夜　　芭蕉

十二月も段々押し迫る頃、再び熱田の桐葉亭を訪ふて俳諧を興行した。芭蕉を中心に桐葉・閑水・東藤の四人である。このころ芭蕉としては、他所の人々が嬉しく迎ふる正月を彷徨の旅に迎へねばならぬ心のうら淋しさもあつたであらうが、一方門弟の熱心さに力强さを感じて、愈〻自分等の俳諧を布かなければならぬといふ希望にも驅られてゐたことであらうと思ふ。

馬をさへながむる雪のあしたかな　　芭蕉

或時舟遊（雪見の舟遊か）を試みては、桐葉・東藤・工山等と四歌仙を編んでゐる。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

此の時の歌仙は熱田三歌仙の一をなすものである。翌二年三月二十七日桐葉亭にて興行したる俳諧卷二を加へて、熱田三歌仙とはいふのである。笈日記には「尾張國あつ田にまかりける此人〳〵師走の海みんとて、舟さし出て」と前書を置いて此の句を出してある。

## 杜國を訪ふ

十二月下旬であらうか、尾州の佳人である杜國の家を尋ねた。芭蕉は十一月「冬の日」興行後、俳人同士がいろいろ感情の行違ひから、氣拙くなつてゐることをよく承知してゐたので、杜國に温い心を寄せて、なにくれとなく語り合ふたのである。芭蕉は杜國の家に在りて、次のやうな一句を作つてゐる。

雪と雪今宵師走の名月か

杜國と別る

杜國に別れを告げてからは一路故郷伊賀へと向つたのである。杜國は惜別の情禁じ難く

此頃の氷踏分る名殘哉

の句を口ずさみ乍ら、師を送り歸つたといふ。

貞享元年暮る

故郷近くであらうか、「こゝに草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寢ながらに年の暮れければ」として

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

の名句を詠んでゐる。素蓮は「再舊里ニ歸テ越年」として此の句を載せてゐる。竹人の「芭蕉翁全傳」も亦此の句を擧げて「同じく二年（貞享二年のこと）丑の二月中旬迄故郷に遊

び、薪の此（薪の能のこと）奈良におもむき」と云つてゐる。再び故鄕に立寄つたとするならば、何か記錄もある筈であらうし、又作などもある筈ではないだらうかと思はれないでもない。而かも此の年に故鄕を訪ふてゐるのであるから、まさか再度訪ふこともあるまいに、と疑へば疑へぬでもない。よつて杜國と別れては、故鄕を訪はぬといふ說の出る所以である。それ故に此の句は、奈良に向ふ途中奈良の山家での作と見られるのである。併し私は故鄕を訪ふて、それから明年奈良に向つたものと解したく思ふ。先達て尋ね來た故鄕であるが故に、今度は左程の印象もなく、唯鄕里の人々と親しんだ位のところではないだらうか、暫らく伊賀の竹人說に從ふ私である。此の句は何と云つても旅人芭蕉の最大收穫であらう。芭蕉の僞はらざる心境と、それに應じた姿の完全に表れた作と見ざるを得ないのである。蕪村が三讃三嘆するのも無理がない。

此の旅が芭蕉に取つて如何に有利であつたか、今更數言を費す迄もないところである。一に芭蕉の詩心涵養ばかりでなく、彼が蕉風樹立に磐石を得たるの感がある。大垣・名護屋は云ふに及ばず、彼が行脚したる地方の俳人が、悉く蕉風に靡き參じたのである。就中後日蕉風の柱となりて、地方開發の爲めに力を致す熱心な人々を得たことは、社會と俳勢の

然らしむるものとは云へ、芭蕉の熱と力と相俟つて、幸運に乘じたからであらうと思ふ。第一回の大行脚であるだけに、芭蕉の生命を司つた重大な旅であつたことを知るのである。若し芭蕉にこの「野ざらし紀行」を持たなかつたならば、又「野ざらし紀行」が幾年か後に行はれたものとすると、彼の作品は遙かに低下し、又今日程の名聲は到底贏ち得なかつたであらう。想ひをこゝに致す時、われわれは「野ざらし紀行」なり「冬の日」を再吟味しなければならない。私は彼の藝術を論考する時があるであらう。

貞享二年の歳旦

# 第六章　芭蕉の强年時代（二）

（四十二歳　貞享二年　西暦一六八五年）

故郷に二月中旬頃迄居た芭蕉は、故郷近くの山家に歳旦を迎ひて

誰が聟ぞ歯朶に餅負ふ丑の年

の句を詠んでゐる。蝶夢も素蓮も亦竹人も、故郷近くの山であると云つてゐるが、湖中や惟艸は單に山を越えてと云つてゐるのであるから、奈良へ出づる山らしくも考へられる。併し再度の歸郷が事實らしく見られる以上（同郷人の說を尤も有力として）今これに從ふことゝする。

同じき頃、伊賀にての作らしく思はれるのに次の句がある。

子日しに都へ行かむ友もがな

南都に向ふ途中、或人の許にて屛風の繪を見ては

旅がらす古巣は梅になりにけり

の句を吐き、奈良近くなりて

春なれや名も無き山の朝霞

奈良に來る

奈良に來て

奈良七重七堂伽藍八重櫻

の發句を得たといふことであるが（芭蕉翁略傳）、發句集は貞享元年の作とある。尚ほ野ざらし紀行中に此の句のないところを見ると、今年の作とすることも六ヶ敷いやうである。

芭蕉は故郷に二月過ぎ迄居て、二月の十日頃奈良に辿り着いたのではあるまいか。十二日には東大寺二月堂の行法を拜したといふことである。その時の句が

水とりや氷の僧の沓の音（芭蕉翁發句集には中七文字「こもりの僧」とあり）

である。それより業平朝臣の舊宅の地であるといふ在原寺に出でて

うぐひすを魂に眠るか嬌柳

京に三井秋風を訪ふ

の句を作つたやうである（湖中と惟艸の兩芭蕉翁略傳に依る）。こゝから京都に上つて、富豪三井秋風の鳴瀧の山家を訪ねたのである。芭蕉は此處で

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

秋風の人と爲り

去來、秋風の別墅を買ふ

千那と芭蕉

と作つた。秋風は富商ではあつたが、非常に風雅の道を愛してゐたので、雅人の來訪を殊更に歡迎してゐたやうである。芭蕉とて、さうした事をよく承知してゐたのであるから、風雅談を交へてみたく思ふてゐたところへ、彼より迎ひられたので訪ねたまでのことである。それにも拘らず、右の句は富者にへつらふた句である、と芭蕉の人格を攻撃することが甚しかつた。その爲めに、此の後芭蕉は再び秋風を訪ねなかつたといふことである、以上は去來抄のいふところである。秋風と鳴瀧の亭に就いて些か申述べて見よう。「鳴瀧に土地を見立、又地を壹ヶ所買とり、日ならずして作事に取掛り、番匠五十人かけ、四十日許に、又秋風庵をぞ鳴瀧にしつらひける。さしも金銀をちりばめし隱亭を、愛妾一人におぼれて、惜げもなくちり芥と引拂ひ、また大金をもて鳴瀧に引移りけり。其住捨し庵を、去來聞つけ纔なる金子もて買取て、去來が別業とはなりたりけり」と凡兆が云つてゐる位、豪壯華美な亭らしい。而かも、富に委せて色に溺れてゐたる秋風を訪ひ、發句を詠んだのであるから、芭蕉が媚び諂ふて居たもの丶如く思はれたのも一理ないわけでもない。

鳴瀧を辭して六條の旅舍に在る時、堅田本福寺の住職千那が尋ね來て、翁より蕉風の眞髓を聽くや忽ち入門したといふ。不角の千那遠忌文に曰「洛下六條の旅舍に會して、正風の

奥義を丁寧に尋正し、即時に向上を悟して、既往の俳諧みな佞言なる事を知り、忽蕉師の門に入て寢食を忘、これを鍛磨し、終に其精神に入り得たり。されば古翁生涯の門人數千、師は其一老なりき。坂西に千那、東關に其角といひては、頭をあぐるものなし」と。

三月八九日頃であらうか、伏見に至り、西岸寺三世の住僧任口上人を訪ふた。此時の句が

我衣伏見の桃のしづくせよ

である。大津に赴く山路にては、素堂が激賞したる

山路來て何やらゆかし菫草

の名句を詠んだ。大津にては尙白・靑亜が蕉門に入つた。近江の湖水を眺望しては

唐崎の松は花より朧にて

を作られたといふが、此の句は尙白亭にて得られたものであるらしい。千那が此の句に

山はさくらをしぼる春雨

と脇をつけてゐる。唐崎の句は、作者芭蕉も自信してゐた句である。それは五月十二日江戶より千那に宛てた手紙も讀んでも窺はれる。

山路來て……の句

唐崎の……の句

貴墨辱拜見御無事之由珍重奉存候其元滯留之内得閑語候而珍希申候
一愚其元に而之句
辛崎の松は花より朧にて
と御覺可被下候
山路來て何やらゆかしすみれ草
其外五三句も候へども重而書付可申候（以下略）とある。
近江を歩いてゐる時に
大日枝やしを引捨し一かすみ
を作つてゐる。水口驛にては、二十年相逢はざる故郷の知人服部土芳に逢ふたので、嬉しさ云はん方なく、夜すがら旅寢を語り明したといふ。その時の句は

服部土芳に逢ふ

命ふたつ中に活けたる櫻かな
である。當時、土芳は播磨に居たのであるが、芭蕉の跡を慕つて、京へ上つて來たといふことである。翌日は柳軒といふ醫師に招かれたので、右の句を挨拶にしたかといふ（竹人芭蕉傳）。

三月二十七日には熱田の桐葉亭にて俳諧が興行された。芭蕉と桐葉・叩端の歌仙で、熱田三歌仙の一を成すものである　左に巻頭の句を擧げて見れば

何とはなしに何やら床し菫艸　芭蕉
編笠しきて蛙聽居る　叩端
田螺わる賤の童のあたゝかに　桐葉
（以下略）

である。「山路來て何やら床し菫艸」の上五が最初「何とはなしに」であつたものを、後に「山路來て」に改められたものである（赤双紙）。三月末日、再び桐葉亭にて俳諧の興行があつた。此時は人數は殖えて、芭蕉・桐葉・叩端・閑水・東藤・工山・桂楫等であつた。これによつて熱田三歌仙の三巻は完成されたのである。

熱田三歌仙の完成

つく〲と榎の花の袖にちる　桐葉
獨り茶をつむ藪の一家　芭蕉
日影山雉子の雛をおはへ來て　叩端
清水をすくふ馬柄杓に月　閑水

面白き野邊に鮓賣ル艸の上　東藤

宿のみやげに撫子を堀る　工山

（以下略）

鳴海と宮の間にある笠寺に詣でた。此の御寺は轉輪山龍福寺といふ觀音の靈場で、笠を召したる御姿の木像を安置してある。それ故に笠寺といふさうである。此の邊で一句を作られたらしい。

笠寺やもらぬ窟も春の雨

四月の或日、伊豆の國、蝨が小島の雲水僧が芭蕉の名を聞いて、草の枕の道づれにもと桐葉亭に留まつてゐた芭蕉を尋ねて來た。

いざともに穗麥くらはん草枕

が此の時に出來た句である。

圓覺寺住僧の遷化を聞く

四月五日、芭蕉の後を慕ひ來た蝨が小島の雲水僧が「鎌倉圓覺寺の大顚和尚（百六十三世の住僧にして俳名を幻呼と稱す）が正月三日に遷化された」といふことを語つたので、芭蕉は驚きと悲しさに打たれて

江戸の其角へ便りす

梅戀て卯の花拜む涙かな

の句と共に手紙を附けて江戸の其角（其角は十六歳の時隨身して詩を學び、易傳を授けてもらつたといふ）に便りをした。

今其の手紙を寫せば

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に趣き、尾張熱田に足を休る間、ある人我に告て、圓覺寺大顚和尙ことし睦月のはしめ、月まだほのくらきほど梅のにほひに和して遷化したまふよし、こまやかにきこえ侍る。旅といひ、無常といひ、かなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ、先一輪投机右而已。

梅戀て卯花拜ムなみだかな　はせを

四月五日

其角雅生

である。それから幾何も經たぬ間に美濃の如行が來訪したので、芭蕉・如行・桐葉・叩端閑水・東藤・工山・桂楫の八名が歌仙を編んだ。此の卷は貞享四年說と貞享五年說がある。貞享四年の作でないことは明かにわかるが、貞享五年（一葉集）でないとは明言出來ない。

後杜國に別るゝ一句

白芥子に羽もぐ蝶のかた見かな

を作つて贈り、再び桐葉がもとにあつて、今や東に旅立たんとする時別れの吟

牡丹蕊深く分出る蜂の名殘かな　　芭蕉

と詠んだところ、主桐葉一入侘しがりて、

うきは藜の葉を摘し跡のひとり哉　　桐葉

の句を返してゐる。それから鳴海の知足は、芭蕉の歸路を待ちうけて我亭に請じた。其の時

夏草よ吾妻路まどへ五三日　　知足

の句を作つてゐる。やがて芭蕉・知足に桐葉・叩端・業言・自笑・如風・安信・重辰の九人は俳諧を興行した（千鳥掛集）

杜若我に發句の思ひあり　　芭蕉

知足亭に立寄つて俳諧興行のあつたことは、勿論紀行中にないのであるから、貞享四年とする説が尤も多い。併し東海道を夏東に下るといふ事が前後にないから、これを以て正確に貞享二年の夏知足を訪ふたとしなければならぬといふ素蓮の說に私も同感である。

歸庵

尾州より甲州に赴き、とある山中にて

行駒の麥になぐさむやどりかな

と吟じ、卯月末頃、杉山杉風の草庵に歸つて來て、

夏衣いまだ虱を取つくさず

と詠んで、此の旅も終つたことになる。此の九ヶ月間の大旅行は屢々云つたやうに、蕉風樹立普及の爲めに如何に効果を奏したか、改めて云ふ必要はないことである。熱心なる門弟の陸續として增加したること、幷に熱と力と異色ある俳諧を多く世に遺したことは、前述の紀行を讀んでも明かに了解出來るところである。

旅の收穫

芭蕉は此の旅行に於て完全に師長たるの地位を獲得したと共に、師長たるの態度を到る處に示してゐる。最早俳諧を好む芭蕉ではなく、俳諧人卽ち芭蕉であつた。その爲めに俳諧を學ぶ人は老若を問はず、又土地の遠近を問はずに馳せ參じてゐる。如何なる職業の人人に對しても、それ相應の落着いた態度を保ちつゝ接してゐる。又貧富に對しても何ら心を變へて居らない。これ芭蕉の全身が俳諧となつてゐるからこそ、さうした態度が表れたまでのことである。例へば僧侶が全我的に芭蕉を慕ひ、わざ／＼後を追ふて敎へを乞ふたと

いふ如きは、皆芭蕉と俳諧とが一致して渾然一人格を成してゐるからである。芭蕉の名は獨り行脚地のみならず、意外の場所へ響き渡つて行くのである。

### 江戸へ歸る

主なき芭蕉庵

芭蕉が旅を果して江戸へ歸つて來た時、蕉門の人々の悦びは我々の想像以上であらう。主なき芭蕉庵には誰も住んでゐなかつたか、恐らくは次郎兵衞でも留守居をしてゐたのではあるまいか。壽貞尼なども折々留守をしてゐたものらしく想像される。物語に依ると次郎兵衞も野ざらしの旅に時々はお供をしてゐた樣子であり、貞享四年の鹿島行脚には芭蕉庵の留守をする樣になどと依賴されてゐる。併し死んでもゐない筈の母壽貞の三回忌を修する爲めに、故鄕伊賀へ歸つたなどと次郎兵衞の云つてる所を見ると、愈〻理解が出來なくなつてしまふ。

歸庵後の芭蕉

歸庵後の芭蕉は、誰しもが考へるやうに門弟の來訪に暇が無かつたであらう。そして別段變つた事もなく、共に俳諧發句を語りもし、又作りもしてゐたのであらう。

此年六月二日、小石川關口の淸風亭にて俳諧が興行された。淸風の「凉しさの凝碎くるか水車」を立句として行はれたので、俗に「凉しさの卷」と云はれてゐる。淸風・芭蕉・嵐

雪・其角・才丸・コ齋・素堂の七吟百韻である。

涼しさの凝くだくるか水車　清風
　青鷺草を見こす朝月　芭蕉
松風のはかた箱崎露けくて　嵐雪
　酒店の秋を障子明るき　其角
社日來にけり尋常の煤はくや　才丸
　舞蝶仰ぐ我にしたしく　コ齋
みちの記も今は其まゝに霞こめ　素堂
　（以下略）

これは果して此年の作なるや否や、非常に疑問とせられてゐるが、今は一葉集に從つて置く。

夏のこと、「伊勢の風瀑を送り給ひ」として

　わすれずば佐夜の中山にてすゞめ

といふ句がある。句選には貞享元年と云つてあるが、いろいろの記錄より又此の句より推

して二年の作らしいのである。

「芭蕉翁繪詞傳」には「秋も半ばの夜、ことに晴れ渡りしにや」として

名月や池をめぐりて夜もすがら

の句を掲げてあるが、これは發句集の四年說に從ひたいと思ふ。確かなる記錄もないだけに、强ひて言張ることは出來ないが。

其角芭蕉庵を訪ふ

九月十五日の朝、其角が深川の八幡宮に參詣かたがた芭蕉庵を訪ふて、「松原のすき間を見する時雨哉」の夢想の吟ありしことを語つたといふ。このごろの芭蕉は、只管支那の哲學的思想や宗敎的思想の深遠な境地に遊び、又西行の歌境に遊び、總てに足るを觀じて悠々と自適してゐたかの樣にも見うけられる。この時分の作句であらう

西行の歌の心をふまへて

雲折々人を休むる月見かな

生活態度

生活は申す迄もなく、何等惠まれるところはなかつたやうである。食物でも衣類でも、無くなれば知人に依賴して、貰ふことを恥かしいものとも思はないやうになつてゐたではあるまいか、否さうせざるを得なかつたものではあるまいか、どうしても此頃を考へて見る

心に從つて行ふ

とそんな樣に思はれてならない。併し古學・學者などの影響に據るものとは云へ、此時代に於て名利やら生活やらに齷齪としない心境を得て、安住出來るやうになつた芭蕉に、私は同情するといふよりか、斯かる超脫の三昧境に對して非常に力强い嬉しさと奥行しさとを感ずるのである。

物に動じないてふ絶對不動の心境を得た、此處に於て芭蕉は、どんな些細なことでも心から爲し得たであらう、物を貰ふにも心から貰ふたであらうし、金子を貰ふにも心から貰ふたであらう。その代り、自分の學問やら風流を賣るといふやうな、低劣野卑なことは爲し得なかつたであらう。唯敎を乞ふものがあれば、喜んで心から敎へ、句を乞ふものがあれば、喜んで心から書いて遣るといふ樣な、融通無礙なる自然法爾の自由境に安住してゐたであらう。此間例の次郎兵衞や壽貞尼などが、蔭になつて如何に芭蕉に心を盡してゐたか、想像しても尚ほ餘りあるやうである。

冬日、芭蕉庵が修復されたともいふ、芭蕉庵が四回修營されたのであるが、天和三年、貞享元年、元祿五年のみ判明してゐて、あと一度の修營が不明である。それが此年であると句集より推考してゐるのが素道である。その句は「霰きくや此身はもとの古柏」である

併し此の句は天和三年の句とも云はれたりしてゐるので、果して此年であるかどうかは非常に疑問である。而かも此年に何故修復しなければならなかつたか、そのことすら不明に屬するものである。天和三年ならば、再度の造營であることは論を差挾むまでもない。

芭蕉が兎角芭蕉庵に居て、獨り靜かに酒を酌みては月を愛し雪を愛してゐたといふことは、「本朝文鑑」に閑居の箴を作りてゐたといふことに據つても、推察せられるところであ

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪

がこの頃の句であるといふ。これは貞享三年とも云はれるが、私は湖中の說に據つて此處に擧げたのである。

新年近き年の暮には、世の人々の明るさ嬉しさに引きかへて、芭蕉の如き騷人は餘りにも惠まれないものであつたらう。物に離れてゐる人は兎角忘れられるものである。

乞ふてくらひ貰うて食ひさすがに年の暮れければ

めでたき人の數にも入らん老の春

これが僞らぬ芭蕉の心持であつたらう。もう此頃の芭蕉は、發句を作る爲めにわざとらしい內容を編み出したり、或ひは叙法にわざとらしい裝飾を用ひたりしてゐない。句そのもの

は心の日記であり、生活體驗の記錄であるといふてもいゝのである。それによつて此の句を考へて見る時、四十二歳の芭蕉の心境が髣髴としてわれわれの胸に浮び來るではないか。乞ふて食ひ貰うて食ふのであるから、一見乞食の樣にも聞えるが、決して所謂乞食ではなく、唯單に自ら働いて金子を求めず、自ら稼いで物を獲らないといふだけのことである。畢竟するところ、時には謝禮を貰ひ、時には門弟の厚志をうけ、足らざる時には賴むといふ程度のものであつたらうと思ふ。併しこうした事を卑しいことゝも思はず、それかといつて平氣でゐたといふわけのものではなく、どちらかといふと、多分に氣兼ねをしてゐたところが芭蕉の芭蕉たる所以であり、この性行が取りも直さず他人より敬慕された所以である。積翠は右の句を貞享三年と云ひ、眞蹟集は四年の作といふ。

自ら乞食と稱す

**貞享三年**（**四十三歳**）

歳旦の吟

深川芭蕉庵に靜かな正月を迎へて吟ずらく

伊勢が賣家にも來たり千代の春（作年不詳）

幾霜に心ばせをの松かざり

古今集の伊勢の歌「飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせに替り行くものにぞありける」を偲んで

春を迎へた感想を述べ、幾年經つても自分は心ばかりの松飾をして、春を迎へるものであると述べてゐる。

正月、俳諧が興行された。之に參加せる者、其角・文鱗・枳風・コ齋・芳重・杉風・仙化・李下・擧白・朱弦・蚊足・知利・芭蕉の十三人四十八句であつたが、後揚水・不十・似春・峽水の四名加はりて四韻を完成した。これが所謂有名な初懐紙で、或ひは之を「春の曉集」「鶴百韻」「鶴の步」などともいふ。前の「冬の日」よりは一段の圓熟を示し、正に蕉風の光道を明にしたるの感がある。卑俗に墮することなく、可笑しさ面白さに傾かず、尙ほ頭だけを以て文字を弄するといつた態度は更に見られない。對象を自然・人事、殊に自然の深遠を辿つてよく人事と調和せしめてゐるあたり、老巧の作家が選拔されて編まれたる傑作といふべきである。時に高雅、時に華美、時に豪放、時に奇趣、等々實に心憎きまでに自由に詠み收めてある。其角の立句を見ては流石に三嘆せざる得ないであらう。

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉　　其角

みきりに高き去年の桐の實　　文鱗

雪村が柳見にゆく棹さして　　枳風

酒の幌に入逢の月　コ齋

秋の山手束の弓の鳥買ん　芳重

炭がまこねて冬のこしらへ　杉風

里／＼の麥ほのかなるむら緑　仙化

我のる駒に雨おほひせよ　李下

朝まだき三島を拜む道なれば　擧白

念佛に狂ふ僧いづくより　朱弦

淺ましく連歌の興をさますらん　蚊足

かたきよせ來るむら松の聲　千里

有明の梨打烏帽子着たりける　芭蕉

其他である。此時、集中に六ケ敷きものあるが爲めに、師に註釋を下されん事を請ふた。依つて芭蕉は痔疾を抑へつゝも、集の半ばまで註釋を下したといふのであるが、眞僞の程は明かでない。その二三を參考に摘記して見る。

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角

元朝の日のはなやかにさし出て、長閑に幽玄なるけしきを、鶴のあゆみにかけて、いひつらね侍る。祝言々外にあらはる。流石にと云天に葉感多し。

雪村が柳見にゆく棹さして　　枳風

第三の體、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少しかはりめあり。柳見に行くとあればいまだ景に不對なり。雪村は畵の名筆也。柳を書べき時節は、其柳を見て書かんと、みづから舟に棹さして出たる狂者の體珍重なり。桐の立木詠やう奇特に侍る。附様大切也。

炭がまこねて冬のこしらへ　　杉風

前句山家の體に見なして付侍る。獵師は鳥をかり、山賊は炭竈を拵て冬を待つ體、別條なき句といへども、炭がまの句作、終に人のせぬ所を見付けたる新しき句也。

なかなかの名評である、内容・形態に亘り、其詳細を論じて餘すところがない。いづれにしても蕉門より名作家や名批評家の出たことは、蕉門發展の爲めに好都合である。

この年の三月二十日、芭蕉・清風・擧白・曾良・コ齋・其角等集りて六吟十八句が成つてゐる。後嵐雪が加つて七吟歌仙が編まれたのである。この時の句は即興といふことであるが、

花咲て七日鶴見る麓哉　　芭蕉

懼て蛙のわたる細橋　清風
足踏木を春また氷る筏して　卜白
　米一升をはかる闢の戸　曾良
夕月を隣はねたる草枕　コ齋
　枝みぐるしき桐の葉を刈　其角
（以下略）

に見るやうに左程勝れてゐるとは思はれないが、人が揃ふてゐるだけによく揃ふてゐるものと云へよう。

**「古池や」の句**

古池や蛙飛込む水の音

有名な此の句が三月に出來上つた、此の句が貞享三年に非ずして二年であり、又それ以前の作であるといふ異說が樹つてゐるけれども、此の句が貞享三年作であることは湖中・素蓮・蝶夢などの研究家の相一致するところである。二年の三月中は、未だ行脚中であるが爲めに此の作の出來よう筈がない。

絶世の名句たる所以

「古池や」の句に對しては、何人も嘆美渇仰せざるものがない。俳人は此の句が無かつたならば、發句は既に滅びてゐると迄極言してゐる。或ひは此の句は發句に非ずして禪であるといふ。故に禪に這入らなければ、此の句の眞髓に到達することが出來ないといふてゐる。古池の句と禪とを結合して考へるやうになつたのは、蕉翁自身が坐禪したこと及び小築庵が「古池眞傳」を上梓したる影響に依るものであるらしい。芭蕉の臨終に際して去來・丈草・乙州・支考等が辭世の句を乞ふたところ「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、吾生涯の句は、古池や蛙飛び込む水の音に一風を興せしより初めて辭世なり」と云つたといふことであるが、これ實に吾人の肺腑を衝く蕉翁の眞骨頭を如實に表現する言葉として、端的に肯定を迫る言葉であり、蕉風の神髓としてもそれ程重要性を帶びてゐる句であることが頷けるわけである。嘯山は「芭蕉一度起つて四五十年、作者多しといへども其體一手に出づるが如し、翁一度江左に龍擧して初めて自然の隱を闢き終に俳道をして美を詩歌に競はしむ」と云つて褒めてゐる。後世の俳家の此の句に對する感想は、悉く絶世の名句とのみいふてゐるだけのことであるから、一々摘記するの煩を避けることゝしやう。

如何なる還境に置かれて此の名句が生れたものであるか、これを覗いて作句態度の參考に資したいと思ふ。

竹人の説

竹人の芭蕉翁全傳には「江戸本町六間堀鯉屋藤右衛門類やしき所、其世にあれはて、藻草に埋みたる時の偶感とかや。唐の吳融廢宅を賦せし律詩の一聯に、放魚池涸蛙爭聚の句あり。殊に火後のありさま却有隣人爲鎖門といひ、咸陽一火便成原と作れるおもひ合すべし」と。

支考の説

又支考の「葛の松原」には「芭蕉庵の叟一日嗒焉としてうれふ、曰く、風雅の世に行はれたる、例へば片雲の風に臨める如し、一面は皂狗となり、一面は白衣となつて共にとゞまるところを知らず、必ず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉給へば雨靜にして鳩の聲ふかく、風和らかに吹て花の落る音おそし、彌生も名殘おしき北にやありけん、蛙の水に答る音しば／＼ならねば、言外の風情此筋にうかびて、蛙飛こむ水の音といへる七五は得たまへりけり、晉子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかうむらしめんかと侍るに、唯古池とはさだまりぬ、しばらく是を論ずるに、山吹といふ五文字は風にしてはなやかなれども、古池といふ五文字は質素にして實也、實は古今の貫道なればならじされど花實のふたつは其時にのぞめる物ならで」と云ひ、尙ほ「十論」にて天和年間に作

られたものと云つてゐるが、俳人の粗漏より年月を誤つたものであらう。積翠は此の時の芭蕉の心情は西行上人の影響ありたるが爲めに、この樣な句を生んだものであるといふてゐる。各〻聽くべき說ではある。

春の終り頃迄、暫らく病氣の爲めに芭蕉庵に籠つてゐたやうに思はれる。時に氣分が快ければ、庵を出でゝ句を詠むといふ日を送つてゐたのではあるまいか。

鶯や茶袋かゝる庵の垣

頰へば餅こそ喰はね桃の花

暮遲き四谷過ぎけり紙草履

山ざくら瓦ふくものまづ二つ

觀音の甍見やりつ花の雲

などはこの春に作られたものであらう。

**本間自準に醫術を學ぶ**

四月十二日、茨城潮來の醫師本間道悅（俳名は自準にして、續虛栗集に句もある）に醫術を學ぶ誓判を爲してゐる。芭蕉は此の前後に幾度となく本間家を訪ふてゐる樣子である。

何故に醫術を學べるか

單に醫を學ぶといふ一途の心より出でたものではなからうと思ふ。俳友であるが爲だといふ事は尤も大きな原因ではないだらうか。それでは何の爲めに醫術を學ばうとしたか、此の時の芭蕉は、單に生計の爲めにのみ學んだのではあるまいと思はれる。卽ち弱い自分を自分で衞る樣に、醫を覺えて置く必要からであらうと推測される　併しこれ以前に醫術を學び度い心があり、且つ學んだものとすると、單に弱身豫防の爲めとのみ解釋する事は出來なくなる。萬が一にも生計に窮する場合の不安から、醫業を覺えようとしたとも考へられないことはないが、仁術としての醫業を學んで置き、折につけ窮民濟度に資せんとする志からであつたかも知れぬ。成美の「隨齋諧話」には芭蕉と本間家との並々ならぬ關係であるを說いてゐるし、尙ほ誓詞を揭げてある。卽ち

相傳醫術啓迪院一流秘書秘語那豈漏他乎、若於違背者、大小神祇、別而生緣氏神、可蒙御罰者也、仍而起請文如件

貞享三年丙寅四月十二日

物部道意（花押）

松尾桃靑（同）

本間道悅樣

物部道意といふ人はどんな人であるか、何故此處に桃青と書いてゐるか、何故斯くも醫業の秘傳などを學んでゐるのか、考へてみれば考へる程益々摩訶不可思議が增すだけである。

素堂と和漢の俳諧興行

六月に芭蕉と素堂と二人して和漢の俳諧を興行した。この俳諧は元祿五年八月八日に完成してゐる。芭蕉は和文、素堂は漢文を以て行つてゐるなど尤も奇であり、盡きない趣味を持つてゐる。其の一二を見れば、

破風口に日影や弱る夕すゞみ　　芭蕉

焚茶蠅避烟　　素堂

合歡醒馬上　　同

かさなる小田の水落す也　　芭蕉

春の日集

八月、「春の日集」（波留濃日）が尾陽に於て上梓された。これは昨年春尾張地方にて編みたる歌仙三卷と、芭蕉・越人・杜國・荷兮・野水・如行等の最近の句などを集めて一本とされたものである。これには芭蕉の「古池や」の句なども入つてゐる。例へば「春」に於て

のがれたる人のもとにゆくとて

みかへれば白壁いやし夕かすみ　越　人

古池や蛙とびこむ水のおと　芭　蕉

傘張の睡り胡蝶のやどり哉　重　五

山や花垣根垣根の酒はやし　龜　洞

花にうつもれて夢より直に死ん哉　越　人

春　野　吟

足あとに櫻を曲る菴ふたつ　杜　國

麓寺かくれぬものは櫻かな　李　風

榎木まで櫻の遲き詠哉　荷　兮

のやうな蕉門雜集である。

夏・秋に於ては芭蕉も刮目に値ひする力作を得てゐる。それは彼の境地が愈〻圓熟して來てゐる結果に他ならない。

猪もともに吹かるゝ野分かな

白髪ぬく枕の下やきり〴〵す

川風やよい茶よい酒よい月夜

いく秋のせまりて罌粟にかくれけり

など佳吟として推賞しなければならぬ句である。物にこだはらぬ彼である、それ故に直ちに對象に自分の心が結びついて其處に花を咲かせてゐるのである。

### 深川八貧

此頃芭蕉庵を再興した（前にも觸れたかと思ふ）といはれるが、確かなことはわからない。芭蕉は例に依つて無一文、艸庵には道具らしい道具も無ければ、食べ物らしい食べ物も備へて無いらしい。雪の降れる日、偶〻門弟八人集つたので、俳諧談に扨ては俳諧をしようかなどとの話も出たであらうか、そんなところより一つは芭蕉庵に物を集めようといふ意も含まれてゐたであらうし、一つは腹拵へをする爲めでもあつたらうし、又一つには風流をそのまゝ行ふといふ趣もあつたことであらう。そこで集つた八人は各〻俳諧を地で行つたわけである。これが深川八貧である。

米買ひに雪の袋や投頭巾　　芭蕉

深川八貧は事實か

薪買　雪の夜はとりわき佐野のまき買はん　依水

酒買　酒やよき雪ふみたてし門の前　苔翠

炭買　炭一升雪にかざすや山折敷　泥芹

茶買　雪にかふはやしことせよちやん俗　夕菊

豆麩買　手にすゑし豆麩を照らす雪の月　友五

さしこもるむぐらの友か冬菜買　芭蕉

さりとては寒きものなり枯薄　杉風

さばけても愚とつく我も年暮れぬ　曾良

この「深川八貧」は曾良の反古の中より姪の周德が集めたるものである。それ故に芭蕉の「さしこもる——」杉風の「さりとては」が此の時の句であるかどうか疑問である。曾良の句に至つては愈ゝあやしく、周德が勝手に附け加へて一興たらしめたものであるかも知れない。事實八人であるかないかに拘らず、又其の時の句であるかないかに拘らず、雪に興ずる儘、袋頭巾をして草庵を出でたる有樣などが髣髴として眼前に浮んで來る。これによつて芭蕉を中心とした人々の生活の一片を遺憾なく洞察玩味することは、我々に取つて

非常に懷しいものである。當時芭蕉が陶淵明の詩に影響されてゐたといふことは、爭ふ可らざる事實である。此の句が彼の詩「―取頭上葛布漉酒畢還復著之」の境地を逐ふて作られたものであらうかと、積翠園の云つて居られるところは成程と點頭ける。それにしても芭蕉が單なる作家としての模倣でなく、實際の生活行動まで行つてゐるところは、凡人の容易に成し得ないところであらねばならぬ。こうして見ると、芭蕉の作は、作のための作でなく、人間卽作品であると共に、作品卽人間であつたといふことを云ひ得るのである。これは私が芭蕉を過褒する言葉ではなくて、當時の芭蕉の性格が然らしめたものであらう。總ての事柄に於ても、遊戲的氣持より離れて、愈〻自分のものとなつた場合には、恒にさうした傾向があるものではなからうか。

曾良は芭蕉庵近くに棲んでゐて朝夕訪ふてゐたらしい。或時は炊事の手傳ひをなし、茶を煮る夜などは來りて軒をたゝくことがあつたといふ。芭蕉も並々ならぬ曾良の溫情を常に感謝してゐたやうである。或る雪の降る夜曾良に訪はれて、

君火たけよき物見せん雪丸け

と詠んでゐる。

又或時は鎌倉に行くといふ友を見送りて、

霜を踏んでびつこひく迄おくりけり

と詠んでゐる。宛ら親に對するやうな、或ひは子に對するやうな心からなる溫情を傾注してゐる。年に似合はず老人に見られたのは、虛弱なせいもあり、生來の體質に依るのかも知れないが、忍苦の生活にふき晒されて、疲れ切つた身體と精神が原因するところであらうとも思はれる。併し乍ら聖の如くに敬仰され、常に僧籍の人々からも慕はれたといふのは、彼れの人物が此時分餘程宗敎的に修養鍛練されてゐたからである。右に擧げた發句などを讀んでも、その一つの行動・行爲にさへ全心的な芭蕉を見出し得るのである。

被ふすま蒲團や寒き夜やすごき

と詠んで李下の妻の他界を追悼してゐる心持、これ芭蕉の心の底から吐いた同情の言葉でなくて何であらう。尙ほ此の冬の見るべき句としては

ひつぢ田に霜の花見る朝かな

硯好む奈良の法師が炬燵かな

一疋のはね馬もなし川千鳥

嵐雪芭蕉に紙衣を贈る

年の市線香買ひに出でばやな

月雪とのさばりけらし年の暮

などがある。孰れも平明にしてよく心の屆いた句である。

年の暮、服部嵐雪の妻が紙衣を縫ふて芭蕉に贈つた。その時の芭蕉の悦びは譬へやうもなかつたであらう。貞享元年、旅に出てからといふものは、芭蕉の紙衣も嵐にもまれ、雨に晒らされて隨分と破れてゐるのである。これを見た嵐雪の心遣りによつて、紙衣を贈られたものであることは云ふ迄もない。新しい紙衣を着て、正月を迎ひた芭蕉の嬉しさうな姿と其の心持は誰しも想像するに難くはないであらう。正月早々詠んだのが次に述べる發句である。

歳旦の吟

よく見れば薺花咲くの句

# 第七章　芭蕉の強年時代（三）

（四十四歳　貞享四年　西暦一六八七年）

**貞享四年**（**四十四歳**）

正月歳旦深川芭蕉庵に於て

誰やらが姿に似たり今朝の春

の句を詠んでゐる。これ即ち年の暮に雪中庵嵐雪が小袖を贈つて呉れたので、正月早々着た時の嬉し心の叫びである。旅に荒れ果てた今迄の着物とは全く違つた、美しい新しい小袖であつたから、これを身に纏ふた芭蕉は、嘸ぞ異様な感に打たれたことであらう。

此頃芭蕉は暫らく草庵に暮らしてゐた様である。門弟も相當殖えてゐるので、應接にも可成せはしかつたと思はれる。二月頃の作であらうか

よく見れば薺花咲く垣根かな

といふ名句を詠んでゐる、この句を「古郷の籬は野らと廣く荒れて摘人なしに薺花咲く」

其のころの句

といふ先人の和歌を模倣して作られたものではなからうかといふ人もあるけれども、一概にさうは云へない。私は發句に於て全體的にこれだけよく纏めたといふよりも、こうした微妙な自然熱愛に傾いた芭蕉の心境を堪らなく賞讃したいのである。「物好きのよきが上手にて物好きのあしきが下手也、利休は茶の道の物好が上手にて、末代其形をあらため難く、私の物數寄にては茶具に用ひられぬ也。芭蕉は俳諧の物好が上手にて名人也、今に其形より句となり私の道ばかりは俳具滿てず。是を學びて句の物好是がよしと定るもの上手とす。南郭先生の句に靜見細艸結實と云ふあり。芭蕉の、よく見れば薺花咲くの句と同意也、物好き同じき也。其心の合所を以て思ふべし。物好き是がよしと思ふ場が、名人の一致する所也」と俳扁鵲に云つてゐるのも大方肯定出來るではなからうか。現在寫生俳句を遵奉するホトヽギス一派及び其の枝流の俳人達が、此句をして天下の「絶品」と讃辭を浴せかけてゐるのも無理からぬ事である。先づ先づ寫實俳句としては、其の高處に屬すべきものであらう。この句に前後して梅・桃の句などが詠まれてゐる。

梅折て椿に迷ふたもとかな

忘るなよ藪の中なる梅の花

里の子等梅折りのこせ牛の鞭

古寺の桃に米ふむ男かな

舟あしも休む時あり濱の桃

或時老いた賤人の働いてゐるのを見ては、自分の境涯に見較べて同情と自恥の念に驅られて

蠣よりは海苔をば老の賣りもせで

と、即ち俳諧なぞをしてぶら／＼と世を送つてゐる自分の境涯に思ひ當るところがあり、世の人のやうに自分も何か賣つて働かなければならない。併し自分は蠣賣りをするよりは海苔賣りをしたいところである。だがそれさへも爲さずにものうく老いこんでゐるのだから、本當に濟まないわけである。と心情を吐露してゐるのである。然し反面芭蕉にも自己の蕉風を確立擁護する爲め、他流派に應じなければならぬ心に惱まされてゐたらしい。

物皆自得

花を吸ふ虻なくらひそ友雀

と、道學者めいたことを云つて自らを慰めなければならなかつたものかと思ふと、何となく

鐘は上野か
淺草かの句

さもしい心持も感ぜられる。とはいふもの丶、一派の師匠としては又止むを得ない次第であらうけれど。此の句は貞享三年の作とも云はれるが、或ひは此の年の作であるかも知れない。私は愛す、芭蕉の淡泊なる心境を。見よ

起きよ起きよ我友にせん寢る胡蝶

と旅を憧憬し、自然を禮讃してゐる。延ては生涯のものを胡蝶に見立て丶、我友にしようと呼びかけてゐるのではないだらうか。

三月の空長閑に打ち霜みたる夕暮れであらうか（芭蕉翁略傳には、病めることありて）

花の雲鐘は上野か淺草か

の秀吟があつた。此の句は最初「花曇鐘は上野か淺草か」であつたものを、後日訂正されたといふが、それが本當であらう。

不日孤屋が草庵を訪ふて來たので、二人は俳興に遊んで作句してゐる。

ながき日も囀たらぬ雲雀かな　　芭蕉

原中や物にもつかず啼く雲雀　　同

鳴〱も風に流る丶雲雀かな　　孤屋

## 去來江戸へ來る

其角の母死す

藤堂新七郎殿芭蕉の名聲を聞かる

三月下旬頃であらうか、京の向井去來が江戸に出て來た。そこで去來を中心に芭蕉・其角・嵐雪の四吟歌仙が興行された。去來は五月十三日其角亡母の五七日に追善の吟をものしてゐるのであるから、五月末に江戸を去つたことであらう。

四月八日に其角の母が五十四歳を以て他界された。その五七日なる五月十三日には、芭蕉・嵐雪等が主になつて追善の俳諧が行はれてゐる。芭蕉「卯の花も母なき宿ぞすさまじき」其の他同門俳人の悼句が詠まれたのである。

多分五月二十九日頃であらうか、磐城の内藤露沾公が藤堂新七郎殿に江戸にてお逢ひになつたといふことである。その時の話に芭蕉のことが出て、世にも珍らしい芭蕉といふ風雅の者は貴國の者でしたか、といふことである。藤堂殿は自分の國から斯くも傑出した人物を、世に出した事を非常に喜ばれたといふ。それからずつと後であらう、芭蕉に面會したく、御屋敷より人を遣はして深川の芭蕉庵に使されたといふことであるが、その頃は生憎芭蕉が鹿島へ行脚してゐて留守であつた、といふことを次郎兵衛が物語つてゐる。これは一面有りさうなことでもあり、又作りごとのやうにも思はれる。

嵐雪に訪はる

岱水亭に遊びては「雨をり〳〵思ふことなき早苗かな」の句を作り、持病（痔疾）に病んで草庵に起居しつゝ「髪はえて容顔蒼し五月雨」の句を作り。此頃「露沾公に申侍る」として「五月雨に鳰の浮巣を見に行かむ」と詠んでゐる。

初秋納涼の夕、突然嵐雪が草庵を訪ひ來て芭蕉に畫讃を請ふたので、早速

あさがほは下手の書くさへあはれなり

と句を染めてゐる。又或時は他人より米を貰ふて

世の中は稲刈頃か草の庵

と詠んでゐる。無邪氣と云へば無邪氣、同情の心持が滿ちて此の句をあらしめたものではなからうか。

### 其角に月見を誘はる

八月十五日、月明に其角が訪ひ來て月見を共にせんことを乞ふた。やがて舟を三俣に出して、九ッを聞くまで月を賞してゐたといふことである。此時は芭蕉も其角も句が出來なかつたらしい。唯吼雲が「名月は汐を流るゝ小舟かな」の句を得たゞけである。後芭蕉は草庵の池邊を歩きながら

名月や池をめぐりて夜もすがら

の句を得た。勿論此の時の月見の舟遊は、小さな草庵の池ではない。それ故芭蕉の句は、月見を終へて歸庵してからの作と見るのが穩當であらう。

## 鹿島の月見へゆく

かくて名月に心奪はれたる芭蕉は、如何ともすることが出來ず、遂に近くに棲める河合曾良と隣庵の僧宗波を誘ふて、月見の旅に出掛けることゝなつた。この紀行は芭蕉自筆のまゝ採茶庵に傳つたもので、世にいふ「鹿島紀行」である。今此の時の心境を文中から窺ふて見るに

「洛の貞室須磨の浦の月見にゆきて

松かげや月は三五夜中納言

と云けん狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋かしまの山の月見んと思ひ立ことあり。伴ふ人ふたり、浪客の士獨り、獨は水雲の僧、僧はからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋をえりに打かけ……」とある如く、月を見る風雅の目的以外の目的は無かつたのである。先づ門先の小名木川より舟に乘り、行德に上つて八幡を經、かまかいの原から筑波の山を望

み、利根川邊りの布佐に着いて漁家に休息した。それから夜舟をさし下して鹿島の麓なる根本寺に着いた。舟中、晝よりの雨で遂に月を眺めることが出來なかつたといふ。根本寺には畏敬せる佛頂和尚が居るのである。「今は世をのがれて此處におはしけると云を聞きて、尋ね入て臥ぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心をうるに似たり。曉の空いさゝかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人々起出ぬ。月の光、雨の音、只あはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はるばると月見に來たるかひなきこそ、本意なきわざなれ。かの何がしの女すら時鳥の歌えよまで歸りわづらひしも、我がためにはよき荷擔の人ならんかし」

月はやし梢は雨を持ながら　　桃青

寺にねてまことがほなる月見かな　　同

雨にねて竹おきかへる月見かな　　ソラ

月さびし堂の軒端の雨しづく　　宗波

佛頂和尚も亦詠んでゐる

をりをりにかはらぬ空の月かげも

ちゞのながめは雲のまに／＼

神前に詣でては

此松の實ばえせし世や神の秋　桃青

田家を逍遥しては

かりかけし田面の鶴や里の秋　同

賤の子や稲すりかけて月をみる　同

芋の葉や月まつ里の燒ばたけ　同

二十五日、湖來の醫師本間道意なる自準亭に到り、郊原を辿りて

萩原や一夜はやどせ山の犬　同

此紀行に於て曾良・宗波もそれ〴〵句を作つてゐるが、此處には省略する。芭蕉は此の紀行文を仲秋末五日に書き上げてゐる。

本間自準亭に立寄る

芭蕉の此の行の目的は全くの月見にして、佛頂和尚と離間する爲めではない。又本間氏に醫術を學ぶことに關して旅を試みたのではない。佛頂和尚を訪ふたのも、亦本間氏を訪ふたのも、旅の途すがら知る人を尋ねたといふに過ぎないのである。

伊賀へ歸鄕せんと決心す

九月、秋風の吹く草庵に獨居して寂しき心の遣り場なく、只管に蓑虫のあはれなる鳴聲を聞いて友欲しく

蓑虫の音を聞きに來よ草の庵

の句を得た。或書には、「草のとぼそに住みわびて秋風の悲しげなる夕ぐれ友どちの方へつかはしける」と前書を附けてゐるが、此の句は嵐雪に贈つたものである。後日此の句を服部土芳に示したところ、土芳は有難く此の句を推し頂いて、自分の庵を蓑虫庵と改號したのである。後章の「伊賀五庵」に詳しく述べておいた。此の句を貰つた嵐雪は、いち早く芭蕉庵に來りて蓑虫の聲を聞いた。此の時嵐雪は

何もなし稻打くはでいなごかな

と詠んだ。

伊賀城の藤堂新七郎殿が江戸より御歸國なされて、盛に芭蕉を褒められた內藤露沾公の話を芭蕉の實兄半左衞門に物語られ、一日も早く歸國する樣に、懇ろにお話があつたらしい。これは勿論殿が自國より傑物を出したといふ嬉しさからである。兄半左衞門は此の話を聞くや、早速飛脚を江戸へ駈せて此の由を告げた。こうしたことに動かされもしたであ

芭蕉送別の俳諧興行

らうし、又一つは歸郷かたがた風月に遊んで、思ふ儘に自然と親しんで見たい心から、愈〻故郷伊賀へ旅せんことを決心したのである　先づ豫定として江戸出立を十月下旬としたのであるが、師芭蕉が行脚せらるゝことを聞くや、諸々方々にて送別の俳諧を興行しようといふことになつた。いふ迄もなく此時分の芭蕉の俳名は、都下及び各地にも轟々たるものがあつたのである。殊に多少なりとも蕉門を理解する人にあつては、悉く芭蕉を敬仰する態度を示してゐたのである。

九月下旬頃か、赤坂の磐城々主内藤家の遊薗堂に於ては、芭蕉舊里に赴くを惜しんで盛大なる餞別俳諧が興行されしが、露沾（磐城城主内藤侯の嫡）芭蕉・沾蓬・其角・沾荷の六吟十九句、後沾德加はりて七吟歌仙が編まれた。此時露沾の送別の句は

時は秋よし野をこめし旅のつと

であつた。

十月初旬、同じく餞別俳諧が濁子・芭蕉・嵐雪・其角の門人に依りて興行せられた。卷頭の一句を示せば

江戸ざくら心かよはんいく時雨　濁子

同じく松江・芭蕉・曾良・依々・芹泥・水萍・風泉・夕菊・苔翠・執筆の十人によりて餞別の俳諧が興行された。

しろがねに蛤をめせ霜夜のかね　　松　江

同じく擧白・芭蕉・其角・溪石・コ齋・卜千・嵐雪等に依りても餞別俳諧が興行された。擧白は芭蕉旅に出でゝ留守になる芭蕉庵を、見守つて吳れる樣に依賴された人である。

時雨〳〵に鑑かり置ん草の庵　　擧　白

同月十一日には其角の家に於て俳莚を開かれ、集る者芭蕉・由之・其角・枳風・文鱗・仙化・魚兒・觀水・全峯・嵐雪・執筆の十吟二十一句成つた。

旅人と我名呼ばれむ初時雨　　芭　蕉

また山茶花を宿〳〵にして　　由　之

鶺鴒の心ほど世のたのしきに　　其　角

等々。餞別の詩歌發句は思はぬ人々よりどし〳〵と贈られ、草庵に美酒佳肴を携へ來りて行末を祝ふ人もあり、名殘を惜まるゝこと故ある人の首途にも似たものであると、芭蕉自身が滿悅の筆で記してゐる。惜別の詩歌發句を見るに漢詩九人、和歌三人、發句三十五人で

ある。素堂は

芭蕉老人有レ故赴ニ郷國一、老人常謂ニ他郷即吾郷一、今猶莫レ作ニ戯斯語一、吾何不レ信ニ斯語一乎。

因綴ニ卑語三絶一以投ニ頭陀一、

君去ニ蕉庵一莫レ止レ郷　故人多處即成レ郷
風喰露宿豈勞レ意　胸次素無何有郷
弱笠瘦筇寄ニ一身一　離レ筵回レ首惱ニ吟身一
河邊楊柳無レ由レ折　早動ニ翠條一迎ニ老身一

和歌では安適、又發句では

くさまくら寢ざめ／＼の積りてや
伊勢まで遠く雪に迫らむ

啼千鳥不士を見かへれ汐見坂　杉風

霜がれを君が首途や花の雪　其角

翁の故郷に歸給ふを送りたてまつる

我ちから裳しぼらん雪の道　嵐蘭

などが其二三例である。言々句々師を思ふ熱涙の結晶でなくして何であらう。斯く迄もうるはしき心と心の結ぼれにある師弟の關係を眺めることは、第三者なる我々でさへも涙ぐましさと滿足とに堪へないものがある。

芭蕉脫俗精神の淵源

四十四歲の芭蕉始めて俗寰を超越し、塵世の臭味を脫却し得たと云へるであらう。名利を追ひ求めず、心の向くまゝに從うて圓融無礙の心境を把握することの出來たといふのは、單に俳諧の熱愛からのみではない。西行や宗祇の處世道にも影響されたであらうし、又莊子の思想や淵明其他多くの漢詩和歌よりの影響もあつたであらう。近くは佛頂和尙の指導に由る「廓然無聖」を理想とする禪の生活化の影響が、如何に偉大深刻に芭蕉に働きかけたかは、今更私の筆を俟つまでもない。趣味に遊び藝に遊んで、後ち作品を得るといふ人間對

芭蕉その人と句

作品の間に張られたる凡骨的なる庸劣不徹底の膜は、此頃迄に漸く脫落してしまつてゐるやうである。卽ち芭蕉の如何なる行爲動作にも俳三昧の精神が無意識の間に橫溢してゐて、其處に彼の作品が滾々として隨處に噴泉を成して生まれ出てゐるといふ有樣である。芭蕉は此度の紀行に於て、遺憾なく自分の心情を吐露してしまつてゐる。それが若し單に句日記の類であつたならば、蕉風には遂に迷路を作つて門人に正路を示す事が出來ず、延ては

蕉風の奧義書

後代の蕉風研究にも一大支障を來して、遂に明かに其の眞髓を考察することを得しめなかつたかも知れない。此點に深く觸れて考ふれば、次に掲げる一文は實に蕉風の「六韜三略」として重要な意義を帯びて來ることになる。

「百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。ある時は倦て放擲せん事をおもひ、ある時はすゝんで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかふてこれが爲に身安からず。しばらく身を立む事をねがへども、これが爲にさへられ、暫ク學て愚を曉ン事を思へども、是が爲に破られ、つゐに無能無藝にして、只一筋に繫る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通するものは一なり、しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ處月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は、夷狄にひとし。心花にあらざる時は、鳥獸に類ス。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり」

これは寛永六年乙州が上梓した「笈之小文」の一節である。

## 吉野紀行

冬十月二十五日愈〻草庵を後にして旅に發つたのである。歩いたところは東海道より尾張に出で〻故郷伊賀に着き、それより吉野・岐阜・尾張・木曾等を經て江戸に歸つてゐるが、勿論こうした遊歷の地を決めて歩いたのでないことは事實である。今日でこそ俳句行脚と云へば、彼我の都合上旅程を定めて出かけるが、往時は行き當りばつたり、氣分に任せて遊歷したのが普通であらう。又詩歌發句の旅行なぞはさうするのが自然であり、眞に俳道の醍醐味でもある。

箱根の険を越えて東海道を歩きながら

一尾根はしぐる〻雲か不二の雪

の句を詠んだ。

十一月七日（黑田源次氏芭蕉翁傳に十一月十一日とあるのは次郎兵衞物語故遽かに信じられない）、東海道の一驛なる尾州鳴海にて歌仙がまかれた。此處に集ふ者、芭蕉を中心に安信・自笑・知足・業言・如風・重辰の七人である。知足亭に蕉翁が止錫されたといふことは「千鳥掛集」の序に素堂の記してゐるところを見てもわかる。「鳴海の何がし知足亭

に、亡友芭蕉の翁やどりける頃、翁おもへらく、此所は名古屋あつたにちかく、桑名大垣へも亦遠からず、千鳥掛に行通ひて、殘生を送らんと、星崎の千鳥の吟も、此折のことになん」とある。併し酒造家なる知足の日記に依れば「七日晴天、安信にて俳諧有、桃靑老參會」とある。思ふに芭蕉は知足亭に厄介になつたのであるが、俳諧は安信宅にて興行されたものであらう。左に千鳥掛の卷頭を抄出すれば

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
船調ふる甕のの埋火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自笑
遊ぶ小猫の春に逢つゝ　知足
鶯の聲夜を待月のほのか也　寞言
岡のこなたの野邊靑き風　如風
一里の雲母ながるゝ川上に　重辰

後年惟然坊も師芭蕉翁の親しめる此の星崎を訪ひ、知足亭に泊つたのである。

如風知足亭に芭蕉を訪ふ

其後知足亭に如風が芭蕉を訪ふて、此處に俳諧が興行された。集る者前と同じく七人で

七吟歌仙が成つたのである。

めづらしや落葉のころの翁草　　如風
　衛士の薪と手折冬梅　　芭蕉
御車のしばらくとまる雪かきて　　安信
　錢を袂にうつす夕月　　重辰
矢申の聲ほそながき荻の風　　自笑
　かしこの薄爰の篠庭　　知足

此間芭蕉は巽言亭に於て、飛鳥井雅章公の遺墨に接し一句をものしてゐる。卯辰紀行には「飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひけるを、みづからかゝせ給ひてたまはりけるよしをかたるに」と云つてある此の時の句が

　京まではまだなかぞらや雪の雲

であるが、此の句は巽言亭に於て芭蕉・巽言・知足・如風・安信・自笑・重辰等七人にて俳諧の興行された折の芭蕉の立句である」今千鳥掛より抄出すれば

京まではまだなかそらや雪の雲　　芭蕉
　千鳥しばらく此海の月　　業言
小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　　知足
　酒氣さむればうらなしの風　　如風
引捨し琵琶の嚢を打はらひ　　安信
　僕はおくれて牛いそぐ也　　自笑
ふたつみつ反哺の鴉鳴きつるゝ　　重辰

鍛冶出雲守氏雲亭にては

　おもしろし雪にやならん冬の雨

と吟じた

### 再び杜國を訪ふ

程なく芭蕉は、三河國の保美といふところに流配されてゐる可憐なる杜國を訪ひたくなつたので、越人に消息をやり、鳴海より十五里後戻りをして越人と共に吉田の宿に泊つた。その時の句が

寒けれど二人ねる夜ぞたのもしき

である。吉田に行く途中、或茶店にて

松葉焚て手拭あぶる寒さかな

保美村に行く途中、いとも寒き海風に身を晒しながら

冬の日や馬上に氷るかげぼうし

の一句を詠んでゐる。やがて流人杜國を訪ねあてるや、しばらくは交す言葉もなく熱き涙の對面を續けたであらう。越人と共に何くれとなく慰藉して、遂に俳諧をさへ試みたのである。何といふ溫き情であらう。

麥はえて(或ハ蒔て)よき隱家やはたけむら　芭蕉

冬をさかりに椿咲くなり　越人

晝の空蚤かむ犬の寢返りて　野仁

野仁は杜國の異名である。或書に「一時に更名して野人と號す」ともある。杜國の美保村にて、次の句も出來たのである。

されぱこそ荒たきまゝの霜の庵

美保村より一里許り離れて、伊勢と海續きの伊良古崎には杜國の草庵もあるので、杜國同伴して伊良古崎に出掛けたといふ。この洲崎でいらこしろと謂はれてゐる碁石なんどを拾つて戯れたらしい。

「鷹ひとつ」の句

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎

鷹は杜國を指して云つたものであらうとの説が有力である。卽ち其角の「花摘集」に「いらこの杜國……翁にもむつましくて、鷹ひとつ見つけて嬉しとまで尋ね逢れける昔を思ひあはれむ」とあるが、それにしても繫ち過ぎた見方と思はれるといふ人がある。併し元祿四年杜國の死に逢ふて「夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき」の句があつたといふことであり、又支考の「葛の松原」に「杜國はこゝろざしのおのこなるよし、阿叟も忘日おぼえ申れし」とあるところを見ると、矢張鷹は杜國を指してゐることになる。伊良古崎の近くの骨山といふところが鷹の打處であり、鷹のはじめて渡るところであると紀行にも云つてあるのであるから、芭蕉としてはいらこ鷹などと歌にも詠まれてゐるので更に趣深く感じ、杜國とこの名所の鷹を結びつけたのであらうと思ふ。

知足亭に於ける俳諧

伊良古崎を辭して再び知足の家に足を運んだ。此間の消息は千鳥掛上卷に「芭蕉翁もと

見し人を訪ひ、三河國に越え、序おもしろければ、伊良古崎見んと、白浪よする渚をつたひ、からうじて歸り給ひし旅の哀れを聞きて」とある。此の時芭蕉・越人・知足等三人の俳諧が次に示すものである。

燒飯や伊良古の雪のくづれけん　知足
砂さむかりし我あしの跡　芭蕉
松をぬく力に君が子日して　越人
いつか烏帽子の脫ける春風　知足
眠るやら馬のあるかぬ暖さ　芭蕉
曇りをかくす朧夜の月　越人

後知足亭に荷兮・野水が芭蕉を訪ひ來りて俳諧を興行した。地方の勢力ある俳人が師芭蕉の行脚を聞いて馳せ參ずるのは、當然と云へば當然でもあるが、芭蕉の勢力が既に此地に輝かしきものであつたことを物語るものであると云へやう。

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮
旅寢の霜を見するあかゞり　芭蕉

今朝の月替る小荷駄に鞭當て　知足

里の踊に野菊折ける　野水

同じき頃知足亭にて芭蕉・知足・越人の三人が六句を成してゐる。

置炭や更に旅ともおもはれず　越人

雪をもてなす夜すがらの松　知足

海士の子が鯨を告ぐる貝吹て　芭蕉

（以下略）

鍛治出羽守氏雲即ち自笑亭にて三吟があつた。

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉

氷をたゝく田井の大鷺　自笑

船繋ぐ岸の三股萩かれて　知足

知足は前にも云つた樣に鳴海の大酒屋であつて、千鳥掛に「蝸廬（知足の別號）の高樓」とある位堂々たる家屋を構へた資産家であつたらしい。一家及び親戚の人々迄俳諧を好んでゐたといふことである。母（永參）、妻（つね）、子（蝶羽）も亦蝶羽の妻も俳人であ

つた。尚ほ且つ安信・重辰も骨肉であらう（天地庵いふ）と云はれてゐる。

十一月二十四日、熱田神宮に詣で、御修覆の成就したるを拜して、

磨直す鏡も淸し雪の花

の句があつたのであるが、此の句を立句として桐葉と歌仙をまいたことは（雪の花）に出てゐる。

磨直す鏡も淸し雪の花　　芭蕉
石しく庭のさむきあかつき　　桐葉
（以下略）

その頃師芭蕉の桐葉亭に在ることを聞いて美濃の如行が馳せ參じた。芭蕉・桐葉・如行の三人は直ぐに俳諧を行ふた。

旅人と我見はやさん笠の雪　　如行
さかづき寒し諷ひさふらへ　　芭蕉
有明の鉢の木賊を苅そめて　　桐葉
（以下略）

やがて多度の權現を通り過ぎた頃であらうか

宮人よ我名をちらせ落葉川

の句を作つてゐる。

### 桐葉に笈を與ふ

此處に面白い話がある。それは黑塗りで金泥の繪を畫いてある玉楠笥樣の芭蕉愛用の手箱を、桐葉に與へてゐることである。如何に芭蕉が桐葉を愛してゐたか、その一端がこれによつても充分窺はれる筈である　此前の旅に於ても桐葉亭に泊り、色々と厄介にはなつたのであるが、それだからといふて返禮の心より與へたのではあるまい。若し返禮の意味より與へたものであるとすれば、もつと幾つも各人に與へなければならぬこととなる。桐葉の心と芭蕉の心が、師弟愛といふ點に於て甚だしく結ばれてゐたといふことは勿論であるが、芭蕉が桐葉の俳諧的力量にも可成信ずるものゝあつたことは事實であらう。蟬羽選の笈銘序に、熱田の桐葉がかたに往しが、また難波の春に赴かんとて、いかに思ひしや、自負し置物を殘し、猶行先の霜とも消なん後のながめにもせよといひ置て出行しが、終に其浦風にさそはれ、世をみじかき芦の下浪とはなりぬ。此卷もと翁の句より與りしなれば、せめて

其俤に此笈の見まくほしく、桐葉の花も葉のゆかりなれば、かくおもふよしをいひやりて乞けれど、芭蕉の露の形見いかに〳〵侍らんや、我もし一葉の秋にあはゞ、それまた我が名殘にも見せんなどいひしが、去年の五月雨に秋をもまたぬ花とちりて、あはれ添つて送りおこせたり。いかに世は露の玉手箱ふたりの記念となりて、あが許に所持しにけり」とある。

蓬左の人々に迎ひられて暫らく休息してゐると、間もなく尾張、美濃大垣・岐阜の風流人――聽處・如行・野水・越人・荷兮等會合したので歌仙がまかれた。

箱根越す人もあるらし今朝の雪　芭蕉
舟に燒火を入る、松の葉　聽處
五六丁布網干せる家見えて　如行
拐むれつゝ葭の中行　野水
明るまで戾らぬ月の酒機嫌　越人
嶺〳〵を揚る盃の夜　荷兮

（以下略）

名護屋の俳諧興行

又名護屋に滞在中、昌碧・龜洞・荷兮・野水・聽雪・越人・舟泉等と俳諧を興行した。

ためつけて雪見にまかる紙衣哉　　芭蕉
　凍ゐる土に拾はれぬ塵　　昌碧
松風に眠る日向のすくなくて　　龜洞
　鶴白鳥のおりておもしろ　　荷兮
水淺く舟押ほどの秋のくれ　　野水
　もう山の端に月の一尋　　聽雪
きぬ〳〵や烏帽子置所わすれけり　　越人
　眉ほそむるも恥るうかれ女　　舟泉

（以下略）

尙ほ此地にて左見・怒風・野人・支考・故江と俳諧興行があつた。

いざさらば雪見に轉ぶ處まで　　芭蕉
　硯の水の氷る朝起　　左見
同じ茶の焙じたらぬは氣香もなし　　怒風

三十餘年もとの貌なり　野人

あの山のあかりは月の御出やら　支考

かや釣るせはもやめて此頃　故江

芭蕉と桐葉との師弟關係が一入親密であるといふことは前に詳しく觸れて置いた。見よ桐葉は師芭蕉が美濃に赴くに情緒纏綿たる次の一句を贈つてゐるのではないか。

檜笠雪を命のやどりかな　桐葉

話が又前に戻つて名護屋にて、如行・夕道・荷兮・野水・芭蕉・執筆等如行の立句にて表六句が成つてゐる。

霰かと聞ほどうれし笠舍　如行

夜の更るまで竹冴る聲　夕道

船あてゝ櫂もきらるゝ磯際に　荷兮

汐のはやきをこゆる洲走魚　野水

海鳴て山より曇る暮の月　芭蕉

鐘つく秋の階子ほく〳〵　執筆

同じく名護屋の騷人防川亭を訪ふて俳諧を談じ、恐らくは幾人かによりて俳諧が興行されたらしい。

香を探る梅に家見る軒端かな（或ひは家を藏とあり）

は此時の作句らしい。この後落梧が芭蕉を訪ふたので、芭蕉・荷兮・越人・蕉笠・舟泉・野水等七吟三十一句を纏めてゐる。

十二月九日、一井亭に於て俳諧が興行された。集まる者芭蕉・一井・越人・昌碧・荷兮・楚竹・東睡の七人である。

旅寢よし宿は師走の夕月夜　芭蕉
　庭さへせばくつもる薄雪　一井
どや〳〵と筧をあふる稿焚て　越人
　紙漉を見に御幸ある頃　昌碧
琴持のむしろの上を傳ひ行　荷兮
　障子明れば消るともし火　楚竹
起もせで聞しる匂ひおそろしき　東睡

落馬して落馬の句あり

十日、名護屋を出て故郷に歸らんとして

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

の句を吟じ、美濃より十里の川舟に乘りて、むかしも桑名より喰てとよめる日永の里に、馬をかりて杖つき坂を登つたところ、荷鞍が打かへつたので馬より落ちたといふことである。

歩行ならば杖突坂を落馬かな

右の句は物憂さの餘り詠んだので、遂に無季の句になつてしまつたといふことである。後のこと、この句に脇を附ける樣幾人かの門弟に云つた所、土芳が「角のとがらぬ牛もあるもの」と詠んだので、宜しと云つて其の儘付けられたといふことである。

## 故鄕を訪ふ

年の暮、故鄕伊賀へ着いた。此の時の芭蕉の心境はどんなであつたらうか。恐らく我々の想像以上のものであつたらう。今や名聲天下に高き芭蕉であるだけに、表面は色にこそ出さぬであらうが、路傍の小石や草花までが彼の足先に接吻して呉れる樣な思ひで、さぞや意氣揚々と故鄕の土を踏んだことであらう。さあれ又忽ち自分の名聲などをば打忘れて沮然として童心に立ち返つたことでもあらう。それ故、父母が健在でゐて呉れたならばとし

きりに思はれてならなかつたであらう。昔懷しき故山の風物と血緣の情より迸り出づる熱い涙が化して、次の一句を産ましめた。

舊里や臍の緒に泣としの暮

父母なきを歎く

千鳥掛上卷と芭蕉翁文集には「代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもほえ侍るよし我今ははしめの老も四とせ過て何事につけても昔のなつかしきまゝにはらからのあまたよはひかたふきて侍るも見捨かたくて初冬の空のうちしくるゝ比より雪を重ね霜を經て師走の末伊陽の山中に至る猶父母のいまそかりせはと慈愛のむかしも悲しくおもふ事のみあまたありて」とあつて此の句を掲げてゐる。これに依つて愈〻芭蕉のこの時の心境を明かに推察することが出來るであらう。

芭蕉は皆んなからもてなされるまゝ、又嬉し心一杯に好きな酒を愛したことであらう。それで元日も寢忘れてしまつたわけである。

### 「續虛栗」出づ

此年の十一月には其角が選集したる「續虛栗」が上梓された。集に入れる人は芭蕉・嵐雪・杉風・野水・杜國・荷兮・去來・素堂・尚白・破笠・露沾・千春等々數十名に及んで

ゐる。去來・曾良・破笠などは蕉門に入つて間もなくの人であるらしい。次の素堂の序文に見る如く

「風月の吟たえずして、しかもゝとの趣向にあらず、たれかいふ、風とるべく影ひらふべくば道に入べしと、此詞いたり過て心わきがたし、ある時人來りて今やうの狂句をかたり出しに、風雲の物のかたちあるがごとく、水月の又のかげをなすにゝたり、あるは上代めきてやすく、すなほなるもあれど、たゞにけしきをのみいひなして情なきをや。古人いへる事あり、景の中に情をふくむと、から歌にていはゞ、穿花蛺蝶深々見、點水蜻蜓款款飛、これこてふとかげろふは所を得たれども、老杜は他の國にありてやすからぬ心と也、まことに景の中に情を含むものかな、やまとうたかくぞ有べき」云々と。

蕉風愈〻內容の深さに這入ることを自覺し、且つ作品がぼつぼつと內容的深遠の境を示し出したのである。言葉の面白さ、文字の魅力、調子の魅惑等より完全に抜け出したる作品を得る樣になつたことは、今更の如く述べる必要があるまい。蓋し「續虚栗」は蕉風の喧傳に與つて効果のあつたものではなくて、蕉風の蕉風たる優れた俳諧を世に示すことに、力あつたものであると云へるだらう。左に三四句を參考に擧げて見よう。

「續虚栗」の句

花くもり鐘は上野か淺草か　芭蕉
蓑虫の音を聽きに來よ草の庵　同
誰やらが姿に似たり今朝の春　同
梅が香や乞食の家も覗かるゝ　其角
元日や家にゆづりの太刀帶かん　去來
不產女の雛かしつくぞ哀なる　嵐雪
妻にもと幾人おもふ花見かな　破笠

### 「四季之句合」出づ

此年には「續の原」一名「四季之句合」が上梓されたのである。本書は春夏秋冬より成り、春は山口素堂・夏は岸本調和（石見に生れ荻野安靜に學んだ人である）、秋は北村季吟の子北村湖春、冬は芭蕉が判者となつてゐる。そしてこれが選者は江戸の岡村不卜と談林の奇才と稱せられた椎本才丸と其角である。曾て上梓された「田舍の句合」「常盤屋之句合」と同じやうに選せられたる同門の發句に勝負を附け、且つそれの批評を試みたものである。今これを一とわたり讀んで見ると、曾ての批評とは數段の相違を示してゐる。內容

及び叙法上の評が纎細に、且つ正確になつて來てゐることは爭はれない事實である。これ芭蕉の藝術觀が可成深くなつて來てゐると共に落着いて來てゐるから、他よりの影響が非常に尠くなつたものであるといふことが云へる。兎角日記などには、何時の間にか其人の性格が現れ出でるものであると同樣に、句評などにも實際僞らぬ才能が現れてゐるものである。左に二三を抄出して見れば成程と思はれるであらうと思ふ。

二番　霜

左勝

親と子の霜夜をかこふ野馬哉　溪石

右

霜深し扇をかざすよるのふね　勇招

「ものいはぬよものけたものすらさへもあはれなるかなや親と子をおもふ」とよみ給ひしこのうたに便して野馬の子をいとふさませつ也右の句さもあるへきなから左の句秀逸なれはまけ侍らんかし

七番　鴫

左　勝

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し　嵐雪

右

鴨くはて菜を干枯す鹽屋かな　魚兒

すゞかもの聲ふり立る秀句かぎりなし一句安らかにして嚴寒のけしき盡たりかの妹かりの歌を吟すれは六月廿四日の日も寒しと書けんさることにや右の句も鹽を飼ものゝきぬ着ぬためしもあはれに侍れとも鈴かもの鈴の聲句調高しとやいはん

十二番　煤　拂

左

何方に行てあそばん煤はらひ　杉　白

右　勝

煤とりて寺はめてたき佛かな　不　卜

すゝはきの日の遊ひ處を侘たるも優にして艶也右は寺の煤掃と思ひよりたる先珍

重にや兩句滑稽のまことをうしなはす感心わきかたく侍れともめてたき佛哉とい
ひし句のいきほひ猶まさりて聞え侍れは爲勝

右は十二番迄のうちの二三を摘錄したものである。文藝理論などといふ八釜敷い問題からの評ではなく、全く印象批評ではあるが、それでゐて蕉風の的より外れてはゐないやうである。勿論評者が芭蕉であるから、蕉風に當て嵌つてゐるのが當然でもあらうが、却々いふところが巧みである。そして作者にも其他の人にも成程と思はせるところがある。嫌に氣取らない芭蕉自身の俳諧的考察が出てゐるので、そぞろに人をして其の中に引入れるのではあるまいかと思ふ。

貞享四年の要約

今年を要約して云へば、芭蕉は俳諧に捉はれず俳諧をしたといふことである。飜つて俳界より觀れば、蕉風に大磐石を築いたといふことを云ひ得るのである。蕉風を世に廣めるが爲めに、自らその方に努力することなくして、秀でたる門人が多く輩出したので、自然蕉風に關する名著が世に送られたものである。旅することが、自分をして偉大ならしめるといふことを意識しないで旅を追ふた芭蕉、此處に芭蕉が必然的に自己を偉大ならしめ、且つ蕉風の幽寂性と豪宕性を齎らさずには居らなかつた契機が潜んで居るではなからうかと

思ふ。

多くの研究者が、當時芭蕉は旅をしたから名句を吐けたのであり、又蕉風の根を張ることが出來たのであると、さも芭蕉が自己と蕉風宣揚に旅を試みたものであるかの如く思惟してゐる。それは結果より推考したる芭蕉及び蕉風の一展望であつて、間違ひではないが忠實な觀察ではない様に思はれる。私は旅そのものよりも、旅をさせる芭蕉の藝術的衝動こそ、芭蕉の作品の粗大且つ幽深も亦、蕉風の枯淡とさびの境地も得られたものであらうと思ふが、その源泉に觸れてみなければ芭蕉と快談出來ないやうな氣がする。これは私の夢であるかも知れないが、旅に憑れた芭蕉の心を想ふてゐると、やがて芭蕉が聲を出して話かけて呉れるやうに思はれるのである。

この年卽ち貞享四年大晦日に宴を張つて痛飮したる伊賀の無名庵、それから蓑虫庵、瓢竹庵、東麓庵・西麓庵の伊賀五庵については芭蕉雜考に於て說明を加へたいと思ふ。

# 第八章　芭蕉の强年時代（四）

（四十五歲
貞享五年（元祿元年）
西曆一六八八年）

**貞享元年（元祿元年）四十五歲**

大晦日の夜を惜しんで、舊友と共に酒飲み更かしてしまつた芭蕉は遂に元朝を寢て暮らしてしまつた。思へば芭蕉も風流人芭蕉であり、自由人芭蕉である。

　二日にもぬかりはせじな花の春

は此の時の作である。上野の藩士なる小川風麥の家に遊びては

　春立てまだ九日の野山かな

　あこくその心はしらず梅の花

の句を得てゐる。あこくそは阿古久曾で紀貫之の幼名である。貫之の「人はいさ心もしらず故鄕は花ぞ昔の香に匂ひける」の心持を知らぬかのやうに、故鄕の梅の花が咲き誇つてゐるといふところを詠んだものであらう。

山里は萬歳おそし梅の花

手鼻かむ音さへ梅のさかり哉

なども此の頃の作であらうと思ふ。同郷の卓袋の家の月待に招かれて

月待や梅かたげゆく小山伏

の句を作つた。伊賀の山家に石炭を堀るといふのを見て一ときわ珍らしく思ふことのありてか、蓑虫庵にて

香に匂へ石炭(うに)堀る岡の梅の花

の句を詠んだのである。上野の醫者、猿雖、湖中の「芭蕉翁略傳」に門人猿雖俗名意專に對し給ひて「もろ／＼の心柳にまかすべし」とあるのは間違ひで「猿山子の誹勇を示す」と前書を置いた涼菟の句であること（水鶴刈）が潁原退藏氏に依つて訂正されてゐる。

かれ芝やまだ陽炎の一二寸

は此時分の作である。一月の末日であらうか、宗七・宗無の二友人を誘ふて、新大佛寺の舊跡を訪ふて

伊賀の新大佛寺を訪ふ

丈六に陽炎高し石の上

の吟あつたことは紀行にも出てゐるので、萬人の知る處ではあるが、尙ほ詳しく當時の模樣については「伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり、此所は奈良の都東大寺の聖俊乘上人の舊跡なり、ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとりふたりさそひ物して彼の地に至るに、仁王門鐘樓のあとは枯たる草の底にかくれて、松のいはゝ事問む石居ばかり菫のみしてといひけんもかゝる氣色に似たらむ。猶分入りて蓮花臺獅子の座なんどは末苔の跡を殘せり、御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽苔に埋れてわづかに見えさせ給ふに、御首斗はいまだつゝがもなく、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり、誠にこゝらの人の力をつひやし、上人の貴願いたづらになり侍ることもかなしく、涙も落て語もなく、むなしき石臺にぬかづきて」と史邦がいふてゐる。

二月、伊勢山田に來て參宮せんとするや、先づ宮司に梅の在所を尋ねたところ、子良館に只一本のみあるといふことを聞いたので、痛く心を打たれ

御子良子の一本ゆかし梅の花

と詠んだ。御子良子は太神宮の神饌を奉仕する少女のことである。芭蕉は淸淨無垢なる御子良子を梅一本の美しく咲いてゐるのに見立てゝ詠んだものであらう。二月十七日（泊船

集卷二）神路山を出る程に西行の涙　何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」を慕ひて

何の木の花とはしらず匂ひかな

裸にはまだきさらぎのあらしかな

の句があつた。此の句を立句として山田では益光・又玄・雲庵（金蘭集に平庵とあり）勝延・清里等と六吟十二句、後杜國なる野人が出席して二十句が成つてゐる。

何の木の花ともしらず匂ひ哉　　芭蕉
こゑに朝日を含むうぐひす　　益光
春深き柴の橋もり雪掃て　　又玄
二葉のすみれ御幸まちけり　　雲庵
有明の草紙を絹に引つゝみ　　勝延
寝覺はながき夜のあぶら火　　清里

十五日、外宮の館といふ處に於て次の句を得た。

神垣やおもひもかけず涅槃像

其後、菩提山神照寺にては「山寺の悲しさつげよ野老ほり」、網代民部弘氏の男胡來が許に到りては「梅の木に猶やどり木やうめの花」、二葉軒を訪ふては「藪椿門は葎のわか葉かな」の句を詠みなしてゐる。此頃龍太夫と號する神職の人なる龍尙舍に逢ふて

物の名をまづ問ふ蘆の若葉かな

の句を作つてゐる。

松坂に於ける俳諧

二月下旬、松坂を訪ふた芭蕉を中心に、乙孝・一有・杜國・應宇・葛森等に依りて俳諧が興行された。左に一葉集より卷頭を抄出すれば

紙ぎぬのぬるとも折ん雨の花　芭蕉
澄てまづ汲水のなまぬる　乙孝
酒うりが船さす棹に蝶飛て　一有
板屋〳〵のまじる山もと　杜國
夕暮の月まで傘を干て置　應宇
馬に西瓜を付てゆくなり　葛森

（以下略）

一有は本名を園西惟中といひ、醫を本業とし、傍ら俳諧・書などを好んだ人で、かの有名な園女の夫である。山崎藤吉氏が「芭蕉庵桃青」後の「俳人芭蕉」等に於て「暖簾のおくものゆかし北の梅」の句を本年即ち貞享五年園女亭を訪ふて作つたものであると云つて居られるが、これは元祿三年園女亭を訪ふた時の作であつて明かに此年の作ではないのである。

## 故郷へ歸る

三月、芭蕉は又故郷伊賀へ立戻つた。或日上野菅社のほとりなる藥師寺に於て初會があつたので、

初櫻折しもけふはよき日なり

の句を作つた。それから、舊城主蟬吟公の弟にして現在城主である藤堂探丸侯が、自分の別墅に芭蕉を招いて花見の宴を張られた。これは蟬吟公を偲んで、若き日の宗房を慰め度き心ばせより催されたものであらうと思ふ。併し單に曾ての芭蕉が忠節であつたから、それに酬ゆる宴とのみ解することは如何であらうかと思ふ。私はこの行動を唯一の證據として、芭蕉の故鄉脱出を主君蟬吟公の死に原因するものであると極力主張する人々の説を覆

探丸侯に招かる

「さまざま」の句

へしたひと思ふ一人である。芭蕉が主君蟬吟公に奉仕してゐた時代は、一と昔も二た昔も以前に屬するものである。殺人なり或ひは大陰謀ならいざ知らず、假りにたかが情事位の一事件ならば、既に忘れられてゆくのが當然であると云へやう。然るを名聲日に日に高まりつゝある芭蕉である。自分の國より勝れた人士を世に送つたことが既に城主の大いなる悦びでなければならぬ。かてゝ加へて他國の城主や高位の人から、芭蕉に就いて讃辭をうけた探丸侯にして見れば、更に悅びを感ぜざるを得ないであらう。これは探丸侯も風雅を解せらるゝ人である。

昔主と幾年かを過ごした櫻がそのまゝに花を見せてゐるので、芭蕉も次から次へと色々の事が思ひ出されて、盡きるところが無かつたであらう。探丸侯は初對面である。それ故二人はいひ出す言葉もなく、落淚數刻に及んだといふのも、或は眞實らしくも思はれる。

さまざまの事おもひ出すさくらかな　　芭蕉

春の日はやく筆にくれゆく　　探丸

探丸侯も斯く脇句されてゐる。其後瓢竹庵宗無亭（大須賀屋次郎右（左）衞門）に數日遊んで俳諧もあつたといふことである。

吉野の花見に旅立つ

花を宿にはしめ終りや廿日程

杜國も其時「長閑さに何もおもはぬ朝ねかな」といふ句があつたといふ（竹人芭蕉傳）。さうすると杜國も伊賀に居ることになるが、杜國は吉野の行脚に伊勢にて待うけたのであらう（笈の小文）から、このところ非常にあやしくなる。思ふに杜國の「長閑さに」は伊勢にての作であり、且つ芭蕉の「花を宿に」の句も伊勢にての作であつて、故鄕にて作られたものではなからうと思ふ。

三月十九日、愈〻吉野の花見に旅立たんとして

此ほどを花に禮いふわかれかな

古沓や花の旅出のひろひばき

の句があつた。杜國同伴出立については紀行にも「かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、倶に旅ねのあはれをも見、且はわが爲に童子と成りて道のたよりにもならんと、みづから萬菊丸と名を云、まことにわらべらしき名のさまいと興あり。いでや門出のたはふれ事せんと、笠のうちに落書す」として

乾坤無住同行二人

「草臥れて」の句

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠　　芭　蕉

よし野にて我も見せうぞ檜木笠　　萬　菊　丸

の句を笠に記したといふ。無邪氣か洒落か、これが本當の芭蕉の心現れてその姿をあらしめたものであるのかも知れない。

道中草臥れないやうにと、旅の荷は成る可く輕くしたらしいが、夜の寒さ凌ぎの紙衣・合羽・硯・筆・紙・藥・晝笥などを物に包んで背負つたゝめに却々疲勞して道計取らず、丹波市に入りて宿に着いた頃は隨分と草臥れたらしい。

草臥れて宿かる頃や藤の花

この一句よく芭蕉の心中を物語つてゐると共に、可憐な美麗な花を熱愛する芭蕉の心情、そして芭蕉に見出された藤の花の姿と色とが、活き活きとして讀者に迫つて來る。平尾村にては萬菊丸の歩き疲れた姿を見てか、又は自分を謠曲の作中にあるものゝ如く感じてか

花のかげ謠に似たる旅寢かな

と吟じ、初瀨の觀音の靈場に來りては

春の夜や籠人ゆかし堂の隅　　芭　蕉

足駄はく僧も見えたり花の雨　萬菊丸

葛城山の麓を過ぎては

猶見たし花にあけゆく神の顏

泊船集巻之二には「やまとの國を行脚して、葛城山のふもとを過ぐるによもの花さかりにて、峯々はかすみ渡りたる明ぼのゝけしき、いとゞ艶なるに、彼の神のみかたちあしゝと人の口さがなく、世にいひ傳へ侍れば」とある。昔葛城明神の一言主といふ神が顏の醜き爲め夜間出でて峰に橋を架け、晝は姿を見せなかつたと云ひ傳ひられてゐる。そこで此句は、葛城の山櫻が美しく咲いてゐる今日、而かも明け方の色に映えて更に美しい花の葛城であるのだから、醜顏と云はれてゐる葛城明神の顏がどんな相好であらうか、是非見たいものであるといふところを詠んだものであらう。

それから三輪の多武峰より龍門へ越える道すがらなる臍峠にて

雲雀よりうへに休らふ峠かな

龍門嶽の下なる瀧にては

龍門の花や上戸の土産にせん

山吹と瀧の句

酒飲にかたらんかゝる瀧の花

西河の大瀧、高所より落水する瀧ではないが、急流にて岩間を漲り落つる瀧であるといふ大瀧を見て

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧のおと

吉野の櫻花の美しさに醉ふて三日間滯在、曉の櫻・黄昏の櫻・有明の月の浮び出でたる時の櫻などに接し、或時は攝章公の眺めに奪はれ、或時は西行の枝折に迷ひ、或時は貞室の「これは〳〵とばかり花の吉野山」を口ずさみ、遂に吐く句もなくて茫然と櫻花を打眺めたといふことである。次の句は此時分の作であらうか、

花ざかり山は日頃の朝ぼらけ

しばらくは花の上なる月夜かな

併し後の句の如きは句選年考の積翠園も未知何年也と冒頭にいふてゐる。

さくら狩奇特や日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげや散さくら

「明星や」の句

の三句は吉野に向ふ途中の吟詠であらう。

蜻蛉が瀧・布留の瀧などを一見後し、吉野の花に三日逗留して更に吟詠がなかつたと嘆息して、西行上人の舊跡なる苔清水にて次の句を作つてゐる。

春雨の木下につたふ雫かな

凍解て筆に汲ほす清水かな

**其角に消息す**

思ひ出したやうに芭蕉は去來と其角に消息を書き送つてゐる。といふのは、去來が曾て詠んだ

おとゝひはあの山越えつ花ざかり　去來

の句に思ひ當るところがあつたからである。芭蕉は今更の樣に此の句を感じ口吟み乍ら、自分の句を作れなかつたといふことである。そして其角が詠んだ

明星や櫻さだめぬ山かつら　其角

の句、始めは左程の句とも思はずにゐたが、今吉野の櫻を目のあたりにして成程と感じ、羨望に堪へなかつたといふ事を書き添へて、其角が許へ文を送つてゐる。明けても暮れても

高野山に登り舊懐にひたる

俳諧俳諧の芭蕉ならでは成し得ない行動であらう。此の「明星や」の句には却々面白い話が纏ふてゐる。次にそれを記して見よう。誰も知る樣に、大酒家なる其角が身の上を非常に案じて、芭蕉は飮酒一枚起請を寫し「朝顔に我は飯くふ男かな」の句を書き送り、以て禁酒をすゝめたのであつた。然る處吉野の櫻を眺めて其角の「明星や」の句に考へさせられ成程其角は酒を飮んでこそこのやうな名吟も吐けたわけであると痛く感じ、其後は其角に酒を飮むやうに申したといふのである。童心に滿ち滿ちた芭蕉、流石は詩人である。

吉野より紀州高野山の靈場に登つた。勿論杜國(萬菊丸)同伴である。春の櫻花は寂寞の霞の空に匂ひ、猿や鳥の鳴く聲にも腸を絞るやうにしみ〴〵と感じさせられたといふことである。御廟を拜し、骨堂近くに佇んでは、唯感慨無量のものがあつたであらう。昔日蟬吟公の遺骨(或は遺髮ともいふ)を抱いて供養したところである。ありし日のことどもが夢のやうに展開して止まなかつたであらう。士朗が隨筆には「此所は多くの人のかたみの集れる所にして、我先祖の鬢髮をはじめ、親しきなつかしき限りの白骨も此内にこそ思ひこめつれと、袂もせきあへず、そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて」とある。二人の感銘は次の句をなしてゐる。

父母のしきりに戀し雉子の聲　芭蕉

ちる花にたぶさはづかし奧の院　萬菊丸

それから和歌浦に出たところ、春深くして將に去らんとする頃であつたのか

行春に和歌の浦にて追つきたり

の句が出來た。

四月一日、衣更の日に

ひとつ脫てうしろにおひぬ更衣

歩き乍ら「おゝぬくい」と云つて被てゐた着物の一枚を脫がれたものではなく、今日は四月一日である、更衣の日であると識つて始めて此の行動があつたのであるらしい。さうすると、些かわざとらしい行爲の句とも見られぬでもない。思ふに宿屋か、若しくは茶屋にて更衣があつたのであるかも知れない。萬菊丸も「よし野出て布子賣りたし（をし）衣がへ」と詠んでゐる。行脚門出の句と同傾向の句にして、孰れもよく旅の詩人の心境を現はしてゐる。

再び奈良に着く

四月八日、再び大和の奈良に着いた。紀行「灌佛の日は奈良にて爰かしこに詣侍るに鹿

杜國に別れしといふ

の子を産を見て此日においてをかしければ」―

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

と。それより招提寺へ。鑑眞和尚が來朝の時、船中にて七十餘度の難をしのがせられ、爲めに御目に鹽風が入つて遂に御盲目にならせられたといふ尊像を拜し奉りて

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

此處にて、花見の行を共にし、親に仕へる如くによく苦勞を厭はなかつた杜國と別れを惜しんだ句

鹿の角先一節のわかれかな

**宇古に頭陀箱を與ふ**

併し右の句は原田宇古と別れた時の作であらうとの說もある。私も杜國とは未だ別れてゐないと思ふ。大阪・須磨・明石・京迄行動を共にしてゐるやうであるから。芭蕉は郡山城の重臣原田宇古を杜國と共に尋ねてゐるやうである。宇古は師を思ふこと厚く、元祿の頃には蕉門俳諧の別當とまで稱せられた人で、廻文の句が多いといふことである。宇古の邸に宿つた芭蕉・杜國は主人宇古と共に歌仙をまいたさうである（俳談奇人談）。以上のや

うな様子からして「鹿の角」の句は杜國との別離とも、或ひは宇古との別離の句とも考へられるのである。「笈之小文」には「舊友に奈良にてわかる」としてあるだけである。

宇古と別れを惜んだ芭蕉は、宇古に頭陀箱を與へて大阪へ向つた。某俳人のもとにて

　杜若かたるも旅のひとつかな

の句があつた。やがて須磨に來た芭蕉は、卯月半ばの朧夜に、時鳥の聲なども聞いたといふ。

　月はあれど留守のやうなり須磨の夏

　海士の顔先見らるゝやけしの花

古戰場を偲ぶまゝ須磨の鐵拐が峰に登つた。紀行「てつかひか峯にのぼらんとする導きする子のくるしかりてとかくいひまきらはすをさま〳〵にすかして麓の茶店にて物くらはすべきなど云てわりなき躰に見えたりかれは十六と云けん里の童子よりは四ッはかりもおとうとなるべきを數百丈の先達として羊腸險岨の岩根をはひのぼればすべり落ぬべき事あまた度なりけるをつゝじ根笹とり付息をきらし汗をひたして漸雲門に入るにそ心もとなき導師の力なりけらし」と、旅に憑かれてゐる芭蕉の一面の心情を面白く浮出してある。

ほとゝきす消行方や嶋ひとつ
須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

きすごといふ魚を網して眞砂の上にほしちらしけるを烏の飛來りてつかみ去るをにくみて弓をもておどすぞ海士のわざとも見えずもし古戰場の名殘をとゞめてかゝる事をなすにやといとゞ罪深く獨昔の戀しきまゝに

須磨の海士の矢先に啼や時鳥

今は四月の末、初夏であるが、若し秋であるならば一段の眺めであらうにと惜しみ、呼べば應へん淡路島を賞し、やがて平家の滅亡に想ひを致し「二位のあま君皇子を抱奉り女院の御裳に御足もたれ船やかたにまろび入らせ玉ふ御有さま内侍局女嬬曹子のたくひさま〴〵の御調度もてあつかひ琵琶なんとしとねふとんにくるみて船中に投入供御はこぼれてうろくつの餌となり櫛笥はみたれてあまの捨草となりつゝ千歳のかなしび此浦にとゝまり素波の音にさへ愁多く侍るぞや」と嘆き悲んでゐる。

蛸壺やはかなき夢を夏の月

或時は須磨と明石を蝸牛の這ひわたるに洒落れて

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

これで世にいふ吉野紀行は終りを告げてゐることになる。

須磨明石から山城へ出た。此處には彼の山崎宗鑑の舊跡があるので、芭蕉はこれを訪ねてしばらく騷人の生涯に思ひを致したことであらう。宗鑑と云へば、近衞殿が宇治を逍遙された時、殿「宗鑑の姿を見ればかきつばた」と云はれたので、宗鑑早速「のまんとすれば夏の澤水」と返しの句を詠んだといふことである。芭蕉もさうした風雅のことゞもを思ひ浮べて、

有難き姿拜まんかきつばた

と詠んでゐる。それから川舟に乘つて大津へ着いたのが四月二十二日であつたといふ。未だ萬菊丸も旅を共にしてゐる。此處に於て顧みるに、故郷伊賀を出てから三十四日間、そのうち雨に十四日逢ふてゐるといふことである。行程を見るに百三十里、そのうち船に乘ること十三里、駕籠に乘ること四十里、あとの七十七里は歩いたことになる。これらは伊賀の惣七宛の芭蕉及び萬菊丸の消息に記されてある。尙ほ其消息には「瀧の數七つ、古塚十三峠六つ、坂七つ、山峯六つ、此の外橋の數、川の數、名もしらぬ山は書付にもらし候」と書き

送つてある。旅で見た名勝其他の知せを書き送つたものである。

此より先芭蕉は京に在りて故郷の猿雖へ宛て長々と返事を書き送つたといふことを竹人の芭蕉傳に載せてある。それに據ると、四月二十三日京へ入つたといふことである。そして明かに萬菊丸と共に旅をしてゐるのである。津の國大江の岸（その頃の八間屋久左あたりとか）に宿りて萬菊丸・一笑と三人して二十四句の歌仙をまいてゐるのである。

杜若語るも旅のひとつかな　愚句

山路の花の殘る笠の香　一笑

朝月夜紙干板に明初て　萬菊

とある。思ふに二十三日山城より京に這入つたといふ手紙があるのであるから、二十二日大津に着いたといふことは甚だ疑はしいものになる。それは日を計算して推定したまでのことであり、又往時にありても多少の日違ひはあつたことであらうと思ふ。

大津に滯在中、瀨田の螢見に出かけた頃は、早や五月となつてゐたであらう。

此ほたる田毎の月にくらべ見ん

と螢を賞して飽かなかつたが、五月雨の湖水は水漫々として僅かに名橋だけを浮び出して

ゐたことであらう。それも亦一風情である。此時の句は

五月雨にかくれぬものや瀨田の橋

である。此橋に就て「雜談集」に「この橋の名、大かたの名所にかよひて、矢矧の橋とも申すべきにや、長橋の天にかゝる、勢田一橋に限るべからず」とある。

## 惟然芭蕉に會ふ

六月六日、大津を出でて美濃に入つたところ、大垣の芭蕉の宿舍に關の素牛が來訪した。素牛とは惟然のことである。惟然は美濃關の人であり、始めは大金持であつたが、段々貧になり、遂に好んで貧になつたといふことである。句は左程上手といふ程ではなかつたが熱心な點に於ては他の門人に讓らない。惟然が足に任せて東へ西へ南へ北へと旅をして歩いたゝめに、蕉門も惟然の爲めに擴まつたやうなわけである。性明朗、飄逸な法師で、非常に芭蕉からも可愛がられた人である。或時鬼貫の家を尋ねて「秋晴れたあら鬼貫の夕べやな」と洒落れたところ、鬼貫すかさず「惟然（以前）おじやつた時はまだ夏」と詠んで戲れたといふこともある。惟然に就いては鈴木重雅氏の「俳人惟然の研究」がある。

宜白亭に宿る

六月八日、大垣より岐阜に參り、僧秋芳軒宜白の家に宿を取つてゐる。宜白亭には以前

にも厄介になつてゐるやうである。此處を中心として、此の地には初秋まで二ヶ月許り滯在したかと思はれる。

やどりせん藜の杖になる日まで

の句などがそれを物語つてゐる。又岐阜山に登りては

城あとや古井の清水先問はん

の句が作られた。或る日長良川に臨みたる賀島落梧邸に招かれて、心ゆくばかりに水郷の夏を賞し、風俗文選にある名文「十八樓記」を書かれたのである。參考に記して見よう。

「美濃の國長柄川に臨みて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右に重なりて近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらに隱れて、岸にそふ民家は竹のかこみの緑も深し。瀑布所々に引はえて、右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく、漁村軒をならべて、綱をひき釣をたるゝおのがさま〴〵も、たゞ此樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝ篝火の影もやゝ近く、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八のながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちに思ひためたり。もし此樓に名をいはむとな

らば、十八樓ともいはまほしきなり。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し」

落梧の案内にて鵜飼を眺めた芭蕉は如何に珍らしく面白かつたことか。鵜飼一人が十二羽の鵜繩を操つてゐるところを不思議さうに眺めて、鵜飼にこのことを尋ねたら斯々と教へられたので、成程萬事に此の心があるのかとつくづく感心したといふことである。

面白うてやがてかなしき鵜舟かな

またゝぐひながらの川の年魚なます

などは其の頃の句であらう。

六月の中旬頃か、「千子が身まかけるを聞てみのゝ國より去來がもとへ申つかはし侍ける」、（猿蓑集卷之二）として

なき人の小袖も今や土用干

の句がある。千子は去來の妹である。去來抄「予が妹の身まかりける頃、美濃國より贈り給ふ句也」とある。誰が知らして呉れたであらうか。師と門弟との連絡が行届いてゐるといふのは、師を思ふ弟子の心が厚いからである。又それに對して何時如何なる場合にあり

ても芭蕉は親のやうな溫かい心を向けてゐる。
或日秋芳軒宜白に請じられて稻葉山の松の下に凉を求め、今日まで旅の愁をなぐさめ、

山かげや身を養はん瓜ばたけ

と詠み、不日水棲の主人賀島落梧が愛兒を失つたことを聞くや痛く悲しんで

もろき人にたとへん花も夏野哉

と追悼の句を詠んでゐる。次郎兵衞日記には六月十三日岐阜に着、十五日に鵜飼見物、落梧夫婦が一子を失ひたるを嘆き悲しみて發句あり、二十三日に落梧亭にて水棲記を書いたとあるが、それは恐らく間違であらうと思ふ。落梧が愛兒を失ふ前に水棲に招待されたのが本當らしく思はれる。
七月、美濃を後にして尾張の鳴海に出で、知足亭に旅裝を解いた。師芭蕉の來尾を聞いて集まる者、重辰、如風、安信、自笑等、此處に六人にて歌仙が成つたのである。

はつ秋や海も青田の一みどり　　芭蕉
乘行く馬の口とむる月　　重辰
藁庇霧ほのぐらく茶を酌みて　　知足

やせたる藪の竹まばら也　如風
蛤のからふみわくる高砂子　安信
笠ふりあげて船まねぐ聲　自笑
（以下略）

これを見るに此前知足亭にて興行された俳諧よりは數等秀でてゐる。これ鳴海俳人の熟達にもよるであらうが、蕉風の圓熟でなければならぬ。又師芭蕉の指導至れることは今更申述べる迄もない。間もなく知足の弟なる金右衛門邸の新築祝賀の俳諧があつた。弟安信と知足と芭蕉との三人である。

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
蒜にみゆる野菊刈萱　知足
投渡す岨の編橋霧こめて　安信
風呂焼きに行く月の明ぼの　芭蕉
杉垣のあなたにすごき鳩の聲　知足
はつ霜下りて紙子拥つく　安信

何といふ美しい催しであらう。初秋（七月十一日）の寂照院に遊びて

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべかな

田中の法蔵寺に詣でて

苅跡や早稲かた〳〵の鴫の聲

大曾根の成就院にて

何事の見立にも似ず三日の月

二十日、竹葉軒長虹の家に於て歌仙がまかれた。芭蕉・長虹・荷兮・一井・越人・胡及鼠彈の七人である。

粟稗にとぼしくもあらず草の菴　芭蕉

藪の中より見ゆる青柿　長虹

秋の雨歩行鵜に出る暮かけて　荷兮

月なき岨をまがる山あい　一井

ひだるしと人の中ばひだるさよ　越人

藁もちよりて屋根葺きにけり　胡及

木の葉ちる榎の末も神無月　　鼠彈

（以下略）

八月、名古屋大和町醬油問屋の岡田野水（蕉門の古老と云はれたる人）が上京するといふので、芭蕉は彼れに餞の一句をものしてゐる

見送りの後や寂し秋の昏

**木曾の月見へ向ふ**

時は八月である、芭蕉は急に姥捨山の月を見たくなつたので、更科へ旅立たんとしたこれを聞いた名護屋の俳人は、皆んな別れを惜しんで餞別の句を贈つた。一井・野水・舟泉鼠彈・荷兮等々。芭蕉も亦親しき名護屋の人々と別れるに際して

おくられつ送りつ果は木曾の秋

の句を詠んでゐる。

同行はと見ると、芭蕉と越人、それに荷兮の奴僕と三人である。この紀行は芭蕉の眞筆を寫したる「更科紀行」である。先づその文の始めを窺へば



さらしなの里姨捨山の月見んことしきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて供に風雲の情

を狂すもの又ひとり越人と云、木曾路は山深く道さかしく旅寢の力も心もとなしと荷兮子が奴僕をして送らす、おの〳〵こゝろざし盡すといへども驛旅の事心えぬさまにてともにおぼつかなく物事のしどろに跡さきなるもなか〳〵におかしきことのみ多し……」

とあるやうに秋風に誘はれるまゝ、何の目當てもなく旅立つたのである。芭蕉の心を占めてゐたものは、殆んど造化の妙に遊ばんとするものだけである。芭蕉を送り出だ人々が三盃をかたむけたので、芭蕉は

朝顏は酒もり知らぬ盛りかな

と詠んだ。

紀行の文を讀めば詳しく判ることであるが、途中六十歳位の坊さんに逢ふた。この僧は只むつとして何の愛想もなく、澤山の荷物を背負ふてハア〳〵と息を切らして歩いてゐるので、芭蕉等は可憐想になつてか、荷物を馬の上に乘せてやり、其荷物の上に芭蕉も乘つて行つた。行き行く程に四十八曲、九折等嶮しい山路つゞきで、實際生きた心地もしない程だつたのであるが、荷兮の奴僕は平氣で、而かも嶮路をゆく馬上に眠ることが度々である。その爲め幾度落馬しようとしたかしれない。見てゐる方がはら〳〵すると芭蕉が云つ

姨捨山へ向ふ途中僧に逢ふ

月と酒を愛す

てゐる。

やがて一行は宿舍に身を横へたので、芭蕉は途中の印象などを句にしようと矢立を取り出して、燈火の下で思案に耽つた。ところが道連の僧は、何か物思ひに打沈んでゐるのではあるまいかと思つて、芭蕉の側に寄り、昔諸で歩いた土地の話や阿彌陀佛の尊さや、其他自分で面白かつたと思ふ事柄を次から次へと語り續けて異れる。これには流石の芭蕉も閉口してしまつたらしい。折しも壁の破れたところより月影が射して來たので、此時とばかり話を轉向させたところが、月のあるじに酒を振舞ふといふことになつて、愈々芭蕉も愉快になる。又此時の盃が普通の盃とは違つて一と廻り大きく、それに美しい蒔繪をしてあるといふのだから、芭蕉が喜ぶまいことか、大變である。風雅を愛する芭蕉に月がある、酒を愛する芭蕉に珍らしい盃がある。滿足したる芭蕉の心からは、次の句が生れたのである。

あの中に蒔繪書たし宿の月

途中の景色を思ひ出づるまゝに

棧やいのちをからむ蔦かつら

かけはしや先おもひ出づ駒むかへ

越人にも句があつた。

霧はれて棧は目もふさがれず　　越　人

姨捨山の感想は小文庫の穐之部に詳しいからそれを參考に掲げる。

更科姨捨月之辨

あるひはしらゝ吹上ときくにうちさそはれて、ことし姨捨の月みむとしきりなりければ八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出でゝ暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷まじう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只哀れふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむも、理りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへにか、老いたる人をすてたらむとおもふに、いとゞ涙落ちそひければ

俤や姨ひとり泣月の友

八月十六日、八幡村より稲荷山・丹波島を經て善光寺に來た。

月影や四門四宗も只ひとつ

の句があつた。この夜

いざよひもまた更科の郡かな

歸路淺間に出でんとして

身にしみて大根からし秋の風

淺間を通りては

吹飛す石は淺間の野分かな

名護屋に滯在中は勿論のこと、この更科の月見の行脚に就いては、芭蕉も荷兮に一方ならぬ厄介になつてゐる。さうした好意を身に感じてゐたゝめか、木曾の橡の實を一つ荷兮に贈つた。

木曾の橡うき世の人のみやげかな

が此時の句である。「木曾からわざ〳〵贈り屆けられた橡の實を手にした時の荷兮の喜びは想像に餘りある。荷兮は年の暮まで失はず飾りにしようと云つてゐるばかりか、「年の暮橡の實一つころ〳〵と」と發句まで作つてゐる。

**深川の芭蕉庵に歸る**

八月の末か九月の初めであらう、越人と共に深川の芭蕉庵に歸つた。旅中善光寺から何

處を通つて淺間へ出、淺間から何處を歩いて江戸へ歸つたか薩張りわからない。越人と共に歸庵したことは事實である。江戸の俳人と共に俳諧をなして、越人は十月に尾張へ歸つたのである。

江戸蕉門一同の喜びは云ふまでもない。芭蕉は賀詞を述べに來る門弟の應接に遑も無かつたであらう。素堂は次の賀詞を贈つてゐる。

むかし行脚の比、いつか花に茶の羽織見むと吟じて、待うけ侍りし、其羽織身にしたがひて、五十三驛再び往來す。さらぬ野山をもわけ盡して風にたゝへ、日にさらせしに、離婁の明もいろをわかつによしなく、龍田姫も染かへすことかたかるべし。是猶ふるさとの錦にもなりぬるかと、おかしくもあはれにも侍る。誰かいふ素堂素ならず、眼くろし。矣の羽織とはよくぞ名付ける。其詞にすがりて又申す。

茶の羽折思へばぬしに秋もなし　　山素

芭蕉と越人は旅の詩興却々消え遣らず、二人して歌仙を卷いた。

鴈がねも靜に聞ばからびずや　　越人

酒しゐならふこの比の月　　芭蕉

（以下略）

苔翠が家に於ては、越人・苔翠・芭蕉・友古・夕菊・泥芹・依々の七人が俳諧を興行した。

東武苔翠にて

月出は行燈消サン座敷かな　越人
　朝夕かゝる柴墻のひよん　苔翠
このきみと名をいふ竹の露落て　芭蕉
　まづかたかなのいろは習ひに　友五
南から聲に雨もつ郭公　夕菊
　よもぎをのぞく山の草刈　泥芹
打くだく燧のかげの淋しくて　依々

（以下略、俳諧桂厝尾巻）

尙ほ右に杉風加はりて八吟歌仙が成つた。十ヶ月師の留守なりし江戸の蕉門の俳諧が如何に動いてゐるかを眺めることゝして、次にそれが巻頭を抄出して見よう。

しら菊に高き鷄頭おそろしや　杉風
泥かぶりたる稲を干家根　越人
月何日海なき國に旅ねして　芭蕉
笠に玉子をぬすむなりけり　苦翠
ほつきりと折れてをかしき雪の竹　友五
はかま着ながら箒たばぬる　夕菊
御内にて念佛申と名をいはれ　依々
笊捨て行濱の海苔賣　泥芹
（以下略、一葉集）

九月十三日、晴夜の月を眺めて更科の月に思ひを馳せることしばらく

木曾の疲もまだ直らぬに後の月

九月九日は素堂亭にて重陽の宴を張られ、素堂の菊花の宴に招かれて酒を馳走になり

いざよひのいづれか朝にのこる菊

の句があつた。

素堂亭菊花の宴

十月、芭蕉・夕菊・苔翠・友五・素堂・路通・曾良等七人が相寄りて大通庵道圓の追善俳諧が興行された。して見ると路通は此度の行脚中琵琶湖近くにて救はれたものであらうか。勿論歌や句の素養もあつたであらうが、此處に一かどの俳人らしく句を詠んでゐる。路通の句が出て來たのはこれが始めであらう。

其かたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉
　千鳥來て啼よし垣の池　夕菊
簔作りみの作りさす雨止て　苔翠
　風のしきりにならす物の音　友五
內洞のくぼかなるより洩る月　素堂
　油單をかける蔦の紅葉々　路通
包めどもやがて冷たる物くひて　曾良
　　　（以下略、一葉集）

尙ほ續々と俳諧が興行されてゐる。此處では餘りに煩はしいから避けることゝする。

留守の間にあれたる神の落葉哉

芭蕉の俳諧はその生活と一如である

雪ちるや穂屋の薄のかり殘し

冬籠りまた寄り添はむ此はしら

生きながら一つに氷る海鼠かな

こうした句は冬季草庵に獨居して詠まれたものであらう。これによつて芭蕉の生活の一面が推察せられるではなからうか。今更繰返す迄もなく、芭蕉は此頃は尙更のこと、感情に於ても、亦生活行動に於てもありのまゝを詠んでゐる。俳諧を作ることゝ生活とを別個なものとしてゐない。この點作句から芭蕉の生活や性格を窺うことが極めて容易なわけである。芭蕉が何故全生活を俳諧と共にし、其處に何等の按配も加へずに濟んだか、それは俳諧が生活の道具である、といふ意識を無にして行けたからであらうと思はれるのである。年齡もさることと乍ら、此處まで徹底出來た芭蕉は安心して天命を樂しんでゆくことが出來たわけである。宗教思想や私淑せる先人の生涯などより、多大の影響をうけたことは見逃せない事實であるが、又一方獨身であつた爲めに、生活に拘束を感じなかつたといふことも忘れてはならない。妻子の愛情を知らぬ芭蕉は、人の子人の親の情を知らぬかの如く感ぜられるかも知れないが、それが却つて、弟子への愛情に傾いて行つたのではなからうかと思はれ

る。さうしたことは此の稿に於てもいろいろなところに於て見出されるであらうと思ふ。

十二月の初め頃か、越人（更科の月見を共にして江戸芭蕉庵に着、十月に尾張へ歸る）と二人して杜國を訪ふた去年の寒い雪夜を思ひ出して

二人見し雪はことしも降りけるか

と詠んで越人へ消息と共に送つてゐる。これは即ち、或日雪景に對して「寒けれど二人寢る夜ぞたのもしき」の句を思ひ浮べた時の感想であらう。

年の暮偶〻盗人に見舞はれたが、至つて平然たるもの、身に一物の蓄もなき芭蕉であつたので、見當違ひの所へ這入つたものだと、呆れ返つて去つたといふことである。後、このことを想うて詠んだのが次の句である。

盗人に遭うた夜もあり年の暮

世捨人の氣樂さも思ひがけないところにあるものである。

朝夜さを誰松島ぞ片心

此の句を、今年の暮松島行脚を思ひ立ちて詠まれたものであるとなす人が多い。多くの句集も、亦此句を元祿元年の作としてゐるやうである。併し乍ら此の句は松島へ來てからの句

と見なければならない。即ち誰か待つてゐる人もあるであらうと、片心にかけて來ては見たもの丶、誰も待つてゐる人もない。して見ると風流な心に騙されたものであらうかといふのが、此の句の內容ではなからうか。

扨て不審に思はれるのは、今年即ち貞享五年五月二十日、吉野行脚の後近江の幻住庵より琵琶湖を眺望し、それから彥根の藩臣森川許六の迎ひによつて彥根に行かれたのである、と次郎兵衞が詳細に物語つてゐる。併しこれは年月の思ひ違ひに依るものか、些か出鱈目に屬するものと見なければならぬ。若し此時に芭蕉が許六と交涉あつたものとすれば、何かの記錄に現れて來るのが當然であらうし、又許六も加はつて俳諧もあるべき筈のものである。それが全く無く、芭蕉自身も何等許六に觸れてゐない。先づ一般には許六は元祿五年に蕉門に入つたと云ひ傳へられてある。俳諧は元祿四年冬芭蕉・丈草・許六等に依つて爲されたのが最初の樣に思はれる。

# 第九章　芭蕉の强年時代（五）

（四十六歳　元祿二年　西暦一六八九年）

歳旦の句

## 元祿二年（四十六歳　其一）

元祿二年の新年は深川の草庵にて迎へたのである。深川にて春を迎へ給ふといふことを記した書もあり、又元祿元年の冬の種々より推考しても明かなことである。本庄三十間堀にて春を迎へられたといふ異説は「江戸惣鹿の子」の誤傳であらうと思ふ。左に掲げる句が深川迎春の所感である。

叡慮にてにぎはふ民や庭竈

かの有名な奥羽行脚は三月二十七日の出發であるが、勿論この計畫は正月中よりあつたことである。それやこれやで「二月中頃より芭蕉庵は賣すて、杉風がうらざしきに移り給ひ、日々餞別の會のみにて」といふ如く、旅が六百餘里といふ大旅行であるだけに、門人達との別れの俳諧は寧日なく打續いたことであらうと思ふ。

## 「曠野」出づ

これより先、三月の初め頃か、名護屋の荷兮が「曠野」(阿羅野、荒野) 八卷と員外、卽ち九卷を撰して上梓した。これは昨年冬より着手したもので、今春漸く整理されたといふわけである。此集は實に規模が大きい。といふのは純蕉門といふことでなしに、宗鑑・守武・幽齋・貞室・信德・季吟等々、純蕉風の撰集でなく、蕉風樹立に影響を與へたかと思はるゝ先輩知友の句まで收錄され、尙ほ蕉風に一脈通ずるものゝあるやうな句は、人の如何を問はず採錄されたものではないかとさへ思はれる。此點唯蕉門を中心として、大宗匠より幼童まで、俳諧に遊べる人々の大合同撰集であるかに見えぬでもない。此處に目的を置いて撰集されたものであるとすれば、それでいゝのであるが、蕉風の蕉風たるところを見出し得ないのは、些か心淋しく思はれる。唯取るべきところは、芳野紀行中諸所を吟行し、俳諧を興行したものゝ多くを收めてあることゝ、次の芭蕉の序にも見える樣に、幽玄の味を持てる句の稍〻多く收められたといふ位であらうと思ふ。芭蕉の序文は

「曠野」の芭蕉の序

尾陽蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのといふ、何故に此名有事をしらず、予はるかにおもひやるに、ひとゝせ此鄕に旅寐せしおり〳〵の言捨、あつめて冬の日と

## 奥羽行脚

奥羽行脚出發

交通不便な當時に在りて、芭蕉の奥羽行脚は大行脚であつて、普通人の容易に企劃し得ぬところである。單に自分の俳諧を天下に廣めたい、未だ見ぬ國の風光に接して見たい位の希望では試みられぬところである。確かに芭蕉は放浪人であり詩人である。こうなると旅に憑かれるばかりで、身の危險などを通り越してゐる。家には妻子もあるわけでないから、その點は氣樂である。いや旅が好きであり、獨りでぶら／＼と歩き度い性格を持つてゐた彼であるからこそ、妻を持つことをば欲しなかつたのではあるまいかと思はれる。此の邊蕪村や一茶などとは、大いに違つた人生を歩み得たのである。

正月の末方から奥州出立の用意に取りかゝつてゐるが、芭蕉を巡る人々は、病身故寒國行は決して宜しくないと中止することを促してゐるが、それさへ聽かうとはしない。「翁陸奥の歌枕見ん事を思ひ立侍りて、日比住けるはせを庵の庵を破り捨、しばらく採茶庵に移り侍る程、猶其節餘寒にと白川の便に告げこす人もありければ、多病心もとなしと彌生末つ方まで引とゞめて」と杉風が云つてゐる。曾良を連れて愈々出發したのは、三月二十七日であるといふのが普通らしいが、桃隣の舞都遲登利（五）は三月十七日と記してある

（勝峰氏俳書大系）

此の大行脚は日光・那須・白河・二本松・信夫の福島・宮城の仙臺・松島・平泉の中尊寺それから山を越して秋田・山形・新潟・富山・石川・岐阜・伊勢へと九月六日迄、凡そ百六十四日程を費してゐる。芭蕉の旅裝は、云ふ迄もなく僧の身支度であるが、同行の曾良も墨染に身を更へてゐる。紀行に「曾良は河合氏にして惣五郎といへり、芭蕉の下葉に軒をならべて予が薪水の勞をたすく、此たび松島象潟のながめともにせんことを悦び、且は羇旅の難をいたはらんと、旅立曉髪を剃て墨染にさまをかへ、惣五をあらためて宗悟とす」と云つてゐるのである。

行脚發心の心境

何故芭蕉は斯くも遠大な行脚を試みたのか、其處には何等深い六ヶ敷い問題も横はつてゐるのではあるまい。ひたぶるに止むに止まれぬ心のまゝに從つたものであらう。此處に何等の邪心なき彼の眞の姿があるわけである。この眞の姿こそ俳諧に徹した、藝術に徹した芭蕉の偉大さを表してゐるものである。試みに僞りなき彼の人生觀に觸れて見やう。

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人也、舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は日〻旅にして旅を栖とす、古人も多く旅に死せるあり、予もいづ

れの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、もゝ引の破れをつゞり、笠の緒付かえて三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に讓り杉風が別墅に移るに、（以下略）

これによりて、芭蕉の心中が手に取る樣に諒解出來るのである。斯くも澄み切つた心を以て、自然を熱愛出來た人がどれだけあるだらうか。「自然」の友が芭蕉か、芭蕉の友が「自然」か、徒然にして風流に遊ぶ心境とは自ら趣を異にしてゐる。何時ぞや「おくの細道」紀行は後人の僞作にして、芭蕉の筆を採れるものではない、といふ樣な話を聞いたことがある。併しそれこそ荒唐無稽な推量であつて、聽くに價する話ではない。奇を好んで異を樹てる人の盲論である、此の紀行文は芭蕉が書き溜めたものを、江戸淺草自性院の住職なる素龍に清書して貰ひ、芭蕉歿後上梓されたものである。

芭蕉庵を人手に讓り渡して旅に出かけるところなど、ひたむきに旅を追ふ彼の純情が表れてゐる。たゞこれだけを見ても、生きて再び歸れないかも知れないといふ決心はあつた

のであらうと思ふ。雛を商ふ人に讓り渡したものか、

草の戸も住み替る代ぞひなの家

二十七日の朝、舟にて千住に到り、澤山の人々に見送られて、

行春や鳥啼き魚の目は泪

前途三千里の思ひが胸に塞りて、別離の涙が盡きなかつたであらう。其の夜は草加に宿を取つて身を横へた。誰しもさうであらうが、芭蕉も只身一つで行脚を續けたかつたのに、夜の寒さを防ぐ爲めの紙子・浴衣・雨具・筆墨、それから餞別に貰つた物など思ひがけない荷物が殖えたので、煩はしい次第だと洩らしてゐる。

野州室の八島に詣でゝ

糸遊に結びつきたるけぶりかな

三十日、日光山の麓鉢石町の佛五左衛門といふものゝ家に一夜の宿を乞ふた。芭蕉は乞食や順禮の如き人を助けるといふ、宿の主の正直一方な心に痛く感じた。四月一日には日光に（昔の二荒山）詣でた。

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞がかゝつて未だ雪があつた。

剃り捨て黒髪山に衣更　　曾良

芭蕉が此の句を賞讃したのは、曾良が髮を剃捨てゝ墨染の衣を纏ふたことに原因してゐるのであらう。

二十丁程山を登りて裏見の瀧に出で

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒羽へと足をすゝめ野越にかゝり

秣おふ人をしをりの夏野かな

途中草刈男に馬を借りて野を越えた。二人の子供が馬の跡を従ふて來た。一人は小姫で名を「かさね」といふとか

かさねとは八重撫子の名成べし　　曾良

黒羽の館代淨坊寺圖書（翠桃のこと）を訪れし所、大いに悦びいろいろともてなして與れた。芭蕉・曾良・翠桃を始め翅輪・桃里・桃雪等によつて俳諧が興行された。

秣負ふ人を枝折の夏野哉　　芭蕉

青き覆盆子をこぼす椎の葉　翠桃

村雨に市の假屋を吹とりて　曾良

（以下略、武津致東利）

翠桃の案内にて犬追物の跡を見、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳を問ひ、又那須與一で有名な八幡宮へも詣でた。

湯をむすぶ誓もおなじ石清水

むすぶよりはや歯にひゞく清水哉

それから修驗光明寺にまねかれて行者堂を拜した。

夏山に足駄を拜む首途哉

佛頂和尚の跡を問ふ

雲岸寺には佛頂和尚の山居の跡があつて「たてよこの五尺に足らぬ草の庵、結ぶもくやし雨無かりせば」と岩石に松の炭で書きつけてあるといふことを聞いてゐたので、其處へ出掛けた。

木啄も庵はやぶらず夏木立

留守に來て棚さがしする藤の花

後者の句は此の時の句であるかどうか疑問である。紀行にも此の句は出てゐないのである。若し逢ふ爲めに佛頂和尚の庵を訪ね、そして生憎留守で逢はれなかつたならば、紀行にも此の事に觸れるのが當然の樣に思はれる。樋口功氏は、此の時は不在であつたのであらうと云つて居られるから、此の句を此の處に揭げることゝした。

館代より殺生石へ馬で送られた。翠桃の好意に依るものであらう。馬方が芭蕉に短冊を欲しいと乞ふてゐる。

野を横に馬牽きむけよほとゝぎす

青楓こと高久の角左衛門の家に泊つて

落來るや高久の宿のほとゝぎす

殺生石を見る

紀行にも「殺生石は溫泉の出る山かげにあり、石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す」とある如く、芭蕉は異樣な感じを抱きつゝ打眺め

石の香や夏草赤く露暑し

蘆野にて西行が淸水流るゝと詠んだ遊行柳（道の邊に淸水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立とまりつれ）が田の畔に殘つてゐるといふのを見て

田一枚植て立去る柳かな

白河の關に辿り着いて、漸く旅心が定つたと云つてゐる。曾良も句をものしてゐる。

西か東か先づ早苗にも風の音　　芭　蕉

卯の花をかざしに關の晴着哉　　曾　良

須賀川へ來ては相樂等躬（伊右衞門）を訪ねて四五日厄介になつた。等躬は驛長で、江戸の未得門の俳人であつたが、後蕉門に入つた人である。等躬亭に旅裝を解いた芭蕉は等躬から「白川の關いかに越えつるや」と問はれたが、長途行脚の苦しみに心身疲れ、且風景に魂奪はれてはかゝしく思ひを巡らすことが出來ず

風流のはじめやおくの田植歌

と詠んだ。

四月二十二日、乍單齋卽ち等躬亭に於て芭蕉の「風流」の句を立起として俳諧があつた。

風流のはじめやおくの田植歌　　芭　蕉

覆盆子を折て我まうけ草　　等　躬

水せきて晝寢の石や直すらん　　曾　良

可伸庵の歌仙

二十三日は可伸庵に遊び、寺へ歸り、八幡へ參詣した。二十四・五・六日は可伸庵にて歌仙が卷かれた。可伸は僧侶にして栗齋とも號してゐた。

（以下略、奧の細道拾遺）

かくれ家や目立たぬ花を軒の栗　芭蕉
まれに螢のとまる露草　栗齋
きり崩す山の井の名は有ふれて　等躬
畔傳ひする石の棚はし　曾良
把ねたる眞柴に月の暮かゝり　等雲
秋しり朝の矮屋はなれず　須竿
梓弓矢の羽の露をかわかせて　素蘭

（以下略、伊達衣）

は此の時の俳諧である。二十七日には須賀川より十町餘離れてゐるせり澤瀧へ行つた。須賀川の人々に別れて、安積の山を眺め、やがて二本松から黒塚の岩屋を見て福島に出た。翌日しのぶもぢ摺の石を尋ね

飯塚温泉の夜の苦しみ

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

月の輪の渡を越えて瀬上に出で、飯塚の里鯖野に佐藤庄司の舊跡を尋ね、醫王寺に入りて義經の太刀や辨慶の笈を見た。

笈も太刀も五月にかざれ帋幟

これは五月一日の吟詠である。其の夜は飯塚温泉に泊つたが、烈しき雷鳴にて雨に攻められ又蚤蚊に攻められて眠ることが出來ず、遂に持病が起きて一夜中苦しんだ。翌朝、これではならぬと氣を持ち直し、馬に乘りて桑折に出で伊達の大木戸を越し、鐙摺・白石城を過りて五月雨の笠島を望み

笠島はいづこさ月のぬかり道

二日は岩沼に泊つた。翁行脚の日記を寫せるものといふ「靑蔭集」には、二日に飯塚に泊り、三日に白石に泊るとしてある。恐らくは靑蔭集の方が間違ひであらう。

岩沼に武隈の松を眺め、江戸を發つ時に擧白が「たけくまの松見せ申せ遲櫻」と餞別して吳れた句を今更に思ひ出し、江戸を發つ時は櫻の時分であつたが、今日は五月の二日であるから三月からは三月越しになる。そこで次の如き句を作つたのであらう。

櫻より松は二木を三月越シ

古來武隈の松は歌所として有名であるだけに「武隈の松は二木を都人いかにと問はゞ見きと答へん」などの歌さへある。この歌より影響されるところもあつたであらう。紀行に「先能因法師おもひ出づ」とあるのは、能因法師の歌「たけくまの松はこのたびあともなし千年を經てや我は來ぬらん」のことであらう。

五月五日か、名取川を渡つて仙臺に入つたのである。當時仙臺には同名異人なる俳諧師芭蕉がゐて勢力を張つてゐたさうである。そこで旅人芭蕉の存在は甚だ影薄く、耳を傾けて歡迎して吳れる者も至つて尠なかつたさうである。このことは筆者が曾て仙臺・岩手を旅した折に土地の俳人より聞かせられたもので、眞僞の程は判らない。城下町で人も多いのに、事實芭蕉が歡迎されなかつたことは不思議でもあり、又一面芭蕉の爲めに惜しいことである。或ひは大淀三千風が勢力を張り過ぎてゐた爲めに、さうした異說さへ樹つたのであるかも知れない。唯知人となつた畫工加右衞門の好意に依つて四五日厄介になり、其間近傍の名所を案內して貰ひ、あまつさへ名所圖案內といふやうなもの（松島・鹽釜）を畫いて貰ひ、又草鞋を餞別に貰つたりなどしてゐる。

松島の風光を嘆賞す

あやめ艸足に結ばん草鞋の緒

の句は此の時に出來たものらしい。加右衛門の呉れた畫を賴りに、十符の菅を見、市川村の多賀城に壺の碑を見、野田の玉川沖の石を尋ね、末の松山を過ぎて鹽釜に着いた頃は、入相の鐘が鳴つてゐたといふ。此の夜は此處に泊つて、盲法師が語る淨瑠璃をしみじみと聞いた。明くれば鹽竈明神に詣でゝ、藤原忠衡が寄進したといふ寶燈の立派なるに感じ、舟にて松島へ渡つた。

關西・關東の名勝の自然美を滿喫した芭蕉ではあつたが、北國の景勝に接したのは今始めてゞある。夷住むと云はれた北の國に、斯くも勝れた名所があるとは夢にだも思はなかつたであらう。風光明媚の魅力を如何とも致すことが出來ず、暫らくは只陶然として快哉を叫ぶのみであつたゞらう、松島の印象が如何に芭蕉の詩嚢に深遠なる衝動を與へたか、紀行中斷然光つた名文をもつてしてゐるのを見ても明かなことである。再讀三讀、飽くことなき名文を左に假借することゝしやう。

松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ず、東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたゝふ、島〳〵の數を盡して、欹つものは天を指、ふすものは波に匍匐、ある

は二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ右につらなる、負るあり、抱るあり、兒孫愛するが如し、松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるが如し、其氣色窅然として、美人の顔を粧ふ、ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや、造化の天工いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さむ、

此處で芭蕉に「島々や千々にくだきて夏の海」「松島や水を衣裳に夏の月」の句があつたといふ人もあるが、それはどうも信じられない。紀行に一句も記してゐないところを見ると感激の餘り一句も無かつたのが本當であらう。曾良には次の句があつた。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良



五月十一日瑞岩寺に詣で、十二日には平泉へと志して進んだが、途中道に迷つて石卷へ出てしまつた。此處で黄金花咲くと云はれた金華山を遙かに眺め、日暮方宿を探したけれども、泊めてくれるところがない。漸く貧しい家ではあつたが、身を休めることの出來た時は、どんなにか嬉しかつたであらう。それから袖の渡、尾斑の牧・眞野の萱原を經て、戸伊摩（豐間）に一泊、十四日に到頭陸中平泉に着いた。

往時東北の都と云はれた平泉、榮耀榮華を盡した藤原秀衡の跡は、今日と同じく野になり

田になつてゐたのである。唯金鷄山のみが其の形を保つてゐる。中尊寺を拜觀し、衣川を眺め、金鷄山を仰ぎ、義經の舊跡なる高館に上つた芭蕉は「さても義臣すぐりて此城に籠り、功名一時の草むらとなる、國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と慨嘆久しうしたのであつた。夏であるにも拘らず、城春にして草青む云々とは、一寸そぐはぬ感じがするが、それは杜甫の詩の名文を直借したからであらう。

此處で芭蕉と曾良は次の句を詠んだ。

夏草や兵どもが夢のあと　　芭蕉

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　　曾良

有名な經堂・光堂の開帳に接した芭蕉は、そゞろに往昔の豪華に思ひを致して

經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す、七寶散うせて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽て、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面あらたにかこみて甍を覆て風雨をしのぐ、暫時千歲の記念とはなれり、

五月雨の降のこしてや光堂

と感歎した。やがて岩手の里に出でて泊り、小黑崎・美豆の小島・鳴子溫泉・尿前の關を

清風亭の俳諧

經て封人の家に宿を求め、其後三日間風雨に揉まれたといふが、山中に逗留しての吟に

　　蚤虱馬の尿する枕もと

贅澤を好む芭蕉ではないが、隨分と身に應へたから、この作が生れたであらうことはいふまでもない。徹底した旅僧であるならば、こんなことは何とも思はぬであらうが、この作を作つてゐるところを見ると、芭蕉も未だ徹底してゐるとは云へないであらうが、此の名吟は流石に風流人芭蕉である。この山中から山を越す嶮路が甚だ危險であるといつて、宿の主人が心配の餘りに若者を賴んで呉れた。鳥も鳴かず、晝尙ほ暗き山であるにも拘らず、無事に越えて尾花澤へ出た。これは全く元氣ある若者の道案內に依るのであつた。

　尾花澤にては親交ある鈴木清風氏を訪ふた。清風氏は宗因門の俳人にして、俳諧的地位は芭蕉の上に立つてゐたかも知れないが、志の卑からぬ人だつたので、芭蕉をよく勞はつて呉れた。此處で芭蕉を中心に清風・曾良・素英と、又これに風流など加はりて俳諧が興行された。清風も爾後蕉風門に入つたのである。

　　すゞしさを我やどにしてねまる也　　芭蕉
　　つねのかやりに草の葉も燒　　清風

鹿子立をのへのし水田にかけて　曾良
ゆふづきまろし二の丸の跡　素英
楢紅葉人かげみえぬ笙のおと　清風
鵙のつれ來るいろ〳〵の鳥　風流
(以下略、繫橋)

おきふしの麻にあらはす小家かな　清風
狗ほえかゝるゆふだちの簔　芭蕉
ゆく翅いく度罠のにくからん　素英
石ふみかへす飛こえの月　曾良
(以下略、同)

尙ほ此の地に滯在して作つた句は

這出よかひやが下のひきの聲
まゆはきを俤にして紅粉の花

尾花澤の人々から、慈覺大師の開基なる立石寺といふ山寺へ詣でる樣すゝめられたので

七里程を引返して詣でた。

　　閑さや岩にしみ入蟬の聲

といふ不朽の作が此の時生れたのである。今日山寺の石段下に此の句碑が立つてゐる。
　新庄の風流亭を訪ねては、芭蕉・曾良・風流に土地の俳人孤松・柳風を加へて歌仙が巻かれた。

風流亭の歌仙

　　お尋の我宿せばし破蚊帳　　風流
　　　はじめてかをる風の薫物　　芭蕉
　　菊作鍬に芭を折そへて　　孤松
　　　霧立かくす虹の本末　　曾良
　　そゞろなる月に二千里隔たり　　柳風
　　　馬市くれて駒むかへせむ　　執筆
　　　　　　　　　　　　（以下略、奥細道拾遺）

　尚ほ、もう一回行はれたる俳諧は芭蕉・曾良・風流の三人にして、

　　水のおく氷室尋る柳かな　　芭蕉

晝顔かゝる橋のふせ芝　風流

風わたる的の翦矢に鳩啼て　曾良

(雪丸げ)

である。そして最上川をのぼらんとして、大石田の高野平右衞門(俳號一榮)の宅に日和を待つ間俳諧が興行された。これは有名な「五月雨を集めて早し最上川」なる芭蕉の句を立句として行はれたのである。

さみだれを集めて涼しもがみ川　芭蕉

岸に螢をつなぐ舟杭　一榮

瓜ばたけいざよふ空に影まちて　曾良

星をむかひに桑の細道　川水

「泊船集」には早しとあり、「伊達衣」と「翁眞蹟集」には涼しとあり、尙ほ紀行にも「早し」とある。紀行に「左右山覆ひ茂みの中に舟を下す」と云ひ「水みなぎりて舟はやし」と云つてあるところを見ると、此の時の詩興の中心點は涼しではなくて早しであるし、其の方が原句ではないだらうか。此の地は非常に俳諧が盛んである割合に、新派舊派の別を知つ

南谷の別院の歌仙

てゐるものが少なかつたので、或ひは憐み、或ひは純情を愛して蕉風を敷いたやうである。此のところを「こゝに古き俳諧の種こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一巻を殘しぬ、此たびの風流こゝに至れり」と紀行に記してゐる。純粹無垢な俳道の童貞人等に、自分の俳風を布くことの嬉しさは、想像するに餘りあるものがある。右の句は大石田の俳諧で詠まれてゐる樣に、最上川を舟で下らぬ前の作であることはいふ迄もない。尚ほ

　風の香も南にちかしもがみ川　　芭蕉
　　小家の軒を洗ふ白雨　　柳風
　物もなく麓は霧に埋れて　　木端

の俳諧のあつたのもこの近くであらう。

六月三日、羽黑山に圖司左吉といふ人を尋ね、南谷の別院に泊つた。翌四日芭蕉・曾良・圖司呂丸（露丸とも稱し宿屋の主人であつた）釣雪・殊妙・梨水・圓入・會覺等によりて歌仙を卷いた。

有がたや雪をめぐらす風の音　　芭蕉

の句を立句としての俳諧である。又右の出羽三山の名吟が出來たのである。

（羽黒山）涼しさやほの三か月の羽黑山

（月　山）雲の峰幾つ崩れて月の山

（湯殿山）語られぬ湯殿に濡らす袂かな

此間、五日には權現に詣で、八日には月山に登つたのである。會覺の別れの句

忘るなよ虹に蟬啼山の雪　　會覺

に對して

杉のしげみをかへり三日月　　芭蕉

（以下略、繼尾集）

の脇句を付けた。尙ほ右の出羽三山の順禮句は、會覺阿闍梨の需に應じて短册に染筆した句である。此の時曾良にも次の句があつた。

湯殿山錢ふむ道の泪かな　　曾良

羽黑を下りて城下町鶴ヶ岡の藩士長山重行亭に落着き、芭蕉・曾良と主人重行、それに

道案内をして隨行した呂丸の四人して俳諧が興行された。

めづらしや山を出羽の初茄子　芭蕉
　蟬に車の音添ふる井戸　重行
絹機の暮いそがしう梭打て　曾良
　閏彌生のすゑの三日月　呂丸
（以下略、はつ茄子）

### 令道亭の俳諧

鶴ヶ岡から川舟に乗つて最上川を下り、六月十五日酒田に着いた。紀行には「淵庵不玉と云醫師の許を宿とす」とし、芭蕉翁略傳には「令道（俗名寺島彦介）が許に到給ふ」とある。恐らくは寺島令道を先に訪ひ、次いで不玉を訪ふたのであらう。十五日寺島令道亭にての俳諧は

涼しさや海へ入たる最上川　芭蕉
　月をゆりなす浪の浮海松　令道
黑鴨の飛ゆく庵の窓明て　不玉
　ふもとは雨にならむ雲ぎれ　定連

皮とちの折敷作て市を待　曾良
影にまかする宵の油火　任曉
不機嫌のこゝろに重き戀衣　扇風

芭蕉の立句「涼しさや」は後「暑き日を海に入れたり最上川」と改められたものらしい。醫師淵庵不玉こと伊藤元順の家に泊り、袖の浦の納涼を勸めらるゝまゝ、舟中にて俳諧が催された。併し舟中のこと故、滿軸には至らなかつたといふ。俳諧袖の浦は後日詠足して成れるものであらう。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉
海松かる磯にたゝむ帆むしろ　不玉
月出は關屋をからん酒持て　曾良
（以下略、繼尾集）

酒田から山を越え磯を傳ふて象潟へ出た。象潟は昔よりの歌所、西行が「松島や雄島の磯も何ならずたゞ象潟の秋の夜の月」と讃嘆した所だけに、芭蕉も恐らくは西行の歌に引かれて象潟へと足を運んだのであらう。

雨に煙つて鳥海山はかくれてゐる。併し雨後の晴色が如何に美しいことかと想像しつゝ、暫し雨の上るのを待つてゐるあたりは、流石俳人芭蕉である。翌天よく晴れて、華かなる朝日をまのあたりにしては、じつとして居られなかつたであらう。早速舟を浮べて、能因島・西行法師紀念の櫻、神功后宮の御墓ある干滿珠寺、それから南方に鳥海山を仰いで飽かぬ景色を讃へてゐる。芭蕉は此の景を西行と同じく松島と比較して「松島は笑ふがごとく、象潟は恨むがごとし、さびしさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり」と云つてゐる。それでこそ次の合歡の花の樣な、女性的感傷的な句を作つてゐるのも成程と思はれる。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

小鯛さす柳すゞしや海士が軒

夕ばれやさくらに涼む浪の花

丁度此の頃は御祭りであつたものか、曾良は祭禮の句を詠んでゐる。

象潟や料理何くふ神祭　曾良

紀行には、みのゝ國の商人低耳といふ者の句「蜑の家や戸板を敷て夕すゞみ」を錄してある。この人は商用で此の地へ來てゐたものか、それとも此の近くへ來てゐたものを、芭蕉を聞いて象潟で一緒になつたものか、深いことは判らない。いづれにしても芭蕉を知つてゐた人であらうと思はれる。象潟の夏の景を恣にした彼等は、再び酒田へ引返した。

# 第十章　芭蕉の强年時代（六）（四十六歳　元祿二年　西暦一六八九年）

聽心寺の俳諧

## 元祿二年（四十六歳）（續）

酒田より旅足を北陸道に向け、鼠の關を越えて越後の地に這入り、越中の市振の關に着いた。此間酷著に又豪雨に逢ふて苦勞すること九日、出雲崎に泊りては

荒海や佐渡に横たふ天の川

旅に憑かれ乾坤を棲家とする芭蕉が、遙か怒濤逆卷く夏の夜の日本海を隔てること十八里なる佐渡が島を眺め、大宇宙創造の神秘を囁く銀河燦爛、星光に通ふ旅情如何ともすなこと能はず、發して此の十七字を成したものであらう。新潟に於ては「海に降る雨や戀しき浮身宿」の句があつた。七月六日、直江津に來て聽心寺の僧眠鷗（芭蕉が付けたる名なりといふ）を訪ふて、芭蕉・曾良・眠鷗・左栗・此竹・布嚢・石雪・義年等にて八吟歌仙が卷かさたのである。

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉
露をのせたる桐の一葉　左栗
朝霧に食たくけぶり立わけて　曾良
海士の小舟をはせ上る磯　眠鷗
鴉啼むかうに山を見せにけり　此竹
松の木間よりつゞく供槍　布嚢
夕あらし庭吹はらふ石の塵　石雪
（以下略、一葉集）

右の寺を訪ふに、芭蕉は添書を示して一夜の宿を乞ふた。寺僧は芭蕉と曾良を見て、乞食坊主の風態なるが故にすげなく門前拂をした。芭蕉は佛壇に向つて恭しく默禮し、暫し旅の疲勞を醫やしつゝ、やがて去らんとしたる時、或僧が芭蕉等を俳人であることを知つて、句を所望した。そこで芭蕉は望まるゝまゝ句を記したが、曾良は大いに憤慨したといふ。芭蕉は曾良を戒めて、行脚の目的やら佛の尊さなどを光風霽月の氣持でしみじみと說いたといふことである。勿論宿を借さなかつたゝめに軒端に夜を明したといふことであるが、

秘聞集・芭蕉後傳）これは全くの逸話に過ぎないものであらう。若しこれが眞實ならば、寺（聽心寺）で俳諧などの興行される筈があるまいし、又芭蕉も紀行に於て何か觸れるところもあるであらう。恐らくは別の寺であるかも知れない。これを事實らしく傳へ、事實らしく信じるのはちと早計過ぎることである。先づ逸話として眺むべきある。

凍雲亭の俳諧

高田に來ては、醫師細川春庵（凍雲）亭を訪ふて俳諧をした。

藥園にいづれの花を草枕　　芭　蕉
萩のすだれを揚かける月　　凍　雲（亭）
爐けふりの夕を秋のいぶせくて　　更　也
馬のりぬけし高藪の下　　曾　良
（雪丸げ）

市振の關に泊る

南へ南へと足を進めて、親しらず子しらずの嶮路を越へ、市振の關に出て泊つた。芭蕉と曾良の泊つた隣部屋には、伊勢參宮へゆく新潟の遊女二人と、それを見送つて來た男とが泊つて、しきりに世の運命の拙きことをかこち合つてゐる。翌朝見送りの男は此處より別れるといふので、遊女二人は覺束なき旅を悲しんで、芭蕉に大慈の惠みを垂れさせ給へ

と頼み込んだ。芭蕉は「不便のことには侍れども、われ〳〵は處々にてとゞまる方おほし只人のゆくにまかせてゆくべし、神明の加護必つゝがなかるべし」と云ひ含めて別れたが流石は人一倍涙もろかつた芭蕉だけに、哀れさが暫らく止まなかつたといふ。

一家に遊女もねたり萩と月

は此の時の句である。此の句を此の句の因つて作られたる背景と動機とを見ないで、芭蕉の性行を疑ひ、徒に瑞摩憶測して淫亂な芭蕉ででもあるかの如く想像する人のあるのは、實に笑止の至りである。

それより四十八ヶ瀨といふ數多の川を渡り、那古の浦より加賀へ入つたのである。

わせの香や分け入右は有磯海

は途中那古の浦の吟であらう。卯の花山、倶利伽羅ヶ谷を通るときの吟に

くりからや三たび起ても落し水

があり、

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

などの句を得て、七月十五日の盂蘭盆に金澤へ入つた。此の時去年他界した蕉門の重鎭小

小杉一笑を追善す

杉一笑の一週忌を、一笑の兄によつて催されたので、芭蕉はこれが追善に加はり

の句を詠んで、早世した一笑を追憶哀惜して止まなかつた。小春亭に遊ぶや、山海の珍味

を並べられたので、風流の本意に背くと云つて戒めた。その爲めに翌日の夜の會合には只

煎茶だけであつたといふ。

塚も動け我泣く聲は秋の風

しら露のさびしき味をわするゝな

は眞心こめた饗宴に、大いに滿足したから詠んだものであることは勿論、一方奢侈を戒め

質朴恬淡裡に潜む俳道の奥秘を暗示した句であらう。尙ほ翁を一夜とゞめての俳諧に

寢るまでの名殘なりけり秋の蜩　小春

あたら月夜の庇さしきる　芭蕉

初嵐山ある方のはげしくて　曾良

江ぶちのりこす水のさゝ魚　北枝

（一葉集）

卯辰山の柳陰軒句空亭に遊んでは

散柳あるじも我も鐘をきく

の句があつた。又少幻庵（松玄庵）にては、芭蕉・一泉・左任・ノ松・竹意・語子・雲口・乙州・如柳・北枝・曾良・流志・浪生等と俳諧を興行した。

殘暑暫手ごとに料理れ瓜茄子　芭蕉
みじかさまだき秋の日の影　一泉
月よりもゆく野の末に馬次で　左任
（以下略、一葉集）

芭蕉の立句が「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」とあるのもある。それから小松に至りて、芭蕉・皷蟾・北枝・斧卜・塵生・志格・夕市・致益・観生・曾良により又俳諧があつた。

しほらしき名や小松吹萩芒　芭蕉
露を見知て顔うつす月　皷蟾
踊る音さびしき秋の數ならむ　北枝
（以下略、一葉集）

七月二十六日、観生亭に於ては芭蕉・観水・曾良・北枝の四人によつて歌仙が巻かれた。

ぬれてゆく人もをかしや雨の萩　芭蕉
芒おくれにすゝきふく家　觀生
月見とて漁にも出す畚あげて　曾良
干ぬかたびらをまちかぬる也　北枝
（以下略、一葉集）

北枝と太田神社へ參詣

立花北枝は芭蕉と共に小松に行き、太田神社へ參詣した。此處で齋藤實盛の甲冑のきれを拜見、そゞろに當時を追憶して

むざんやな甲の下のきり〲す

の句があつた。後この句を立句として名吟歌仙が卷かれたのである。

あなむざんやな冑の下のきり〲す　芭蕉
ちからも枯し霜の秋草　亭子
渡し守綱よる丘の月かげに　鼓蟾
（以下略、一葉集）

萬子が芭蕉を慕ふ

芭蕉が金澤を去る時、金澤の藩士なる生駒萬子が、時が遲れて送別に間に合はなかつた

山中温泉に於ける歌仙

曾良病氣に罹る

のを非常に殘念に思ひ、松任まで馬に乘つて追駈け、白衣一つと三兩を餞別のしるしとして贈らうとしたのであつたが、大金は風雅の道に必要がないといつて、どうしても受取らなかつたといふことは、資本主義の現代人を愧死せしめる逸話である。

やがて芭蕉は曾良・北枝と山中温泉に來て、

山中や菊は手をらぬ温泉の匂ひ

の句を詠み、三人して歌仙を卷いた。

馬かりて燕おひゆく別かな　北枝

花野みだるゝ山のまがりめ　曾良

月よしと角力に袴踏ぬぎて　芭蕉

（以下略。一葉集）

白根が嶽を跡に見なし、那谷の觀音を拜して詠んだ句に次のがある。

石山の石より白し秋の風

突然曾良は腹痛を起したので、此の先の行脚を芭蕉と共にする事が出來なくなつた。といふのは、遠からぬ伊勢長島に知己があるので、一つは安神したせいもあらう。長島には

曾良の叔父なる僧が住んでゐたとも云はれるし、又曾て長島城に仕へたことがあつたからだとも云はれてゐる。孰れにしても、長島へ立寄れば靜養も出來るといふ安神が手傳つた爲めに、一層旅の疲勞も加はつて、身體が餘計良くなかつたものであらうと思はれる。

行き〳〵てたふれ伏すとも萩の原　　曾良

は此の時の曾良の血を吐く樣な胸中を吐露した句である。

三月二十七日江戸を立去りてより秋風の吹く今日まで、旅の樂しみ苦しみを共に分つて來た曾良と別れる芭蕉の心は、謂はば最愛の我子と別れてゆく悲しみ以上のものであつたらう。殊に芭蕉の如く旅を我棲家としてゐる人にあつては、旅中曾良と別れなければならぬといふ時の心情は、到底我々の筆舌を以て表し得ぬものである。「行もの丶悲しひ、殘るもの丶うらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし」とは芭蕉の心底より洩れた斷腸の言葉である。芭蕉は悲しみの情遣瀨なく

今日よりや書き付け消さん笠の露

と詠んで別れを惜しんだ。芭蕉の紀行を讀み來りて、今此の句に接する時、誰か涙なしに芭蕉の心に觸れ得るものがあるだらうか

曾良と別れて大聖寺の城下なる全昌寺に泊つた。曾良も前夜は此の寺にて

終宵秋風きくやうらの山　　曾良

を詠んだのであつた。この句を思ふにつけ「一夜の隔て千里に同じ」と芭蕉が血涙の感懐を吐露したのも尤もである。芭蕉は寺中の柳の散り行くのを打眺めて

庭掃て出るや寺に散柳

と詠んだ。それから越前の境吉崎の入江を舟に棹して、汐越の松を尋ね、丸岡の天龍寺に這入つた。こゝで「門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひ哉」の句があつたと、湖中の芭蕉翁略傳に記してあるのは間違ひである。此の句は貞享年間（五年？）伊勢國守榮院にて詠まれた句である。

愈ゝ松岡の茶店で、北枝は別れて金澤へ引返すことになる。次のは別離を詠んだ俳諧である。

もの書いて扇引さく別れかな　　芭蕉

笑ふて霧にきほひ出ばや　　北枝

となくく申し侍る（卯辰集）

芭蕉ひとり全昌寺に宿る

北枝と別る

福井に等栽を訪ふ

丸岡より五十丁程山へ入りて永平寺に參詣し、これより三里先の福井に到り、等栽といふ十年前の知己を尋ね、こゝに二日厄介になつた。

名月の見所問ん旅寢せん

それから二人して敦賀の名月を見に出かけた。比那が崎からあさむつの橋を渡つて、玉江の蘆の穗の風情を愛して句を詠んだ。

あさむつや月見の旅の明はなれ

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先

鶯の關・湯尾峠を越えて燧が城を過ぐる頃、初雁の鳴く八月十四日の陽も暮れようとしてゐた。此の夜敦賀にて芭蕉と等栽の二人は、皎々たる月を眺めることが出來た。

月に名をつゝみかねてやいもの神

義仲の寢覺の山か月悲し

前者は湯尾峠、後者は燧が城を詠んだ句である。仲哀天皇の御廟なる氣比明神に詣でては

月清し遊行の持てる砂のうへ

十五日は昨秋の天候と打變つて雨が降つた。

名月や北國日和定なき

尙ほ敦賀の湊にての句に

月のみか雨に角力もなかりけり

月いづこ鐘はしづめる海の底

がある。一寸讀んでみたところでは、兩句とも何を云つてゐるのか解らないかも知れない。前句は、八月十五日此の濱に毎年神事の角力などを催されるのであるが、生憎雨だつたので雨上りの月は出でても角力が無かつたといふところであるらしい。後句は一葉集に「仲秋の夜つるがに泊りぬ、あるじの物がたりに、此の海に鐘の沈みて侍るを、國の守のあまを入て尋させ給へど、龍頭、下ざまに落て、引揚べきたよりもなしと聞て」の前書があつて初めて了解される句である。

十六日、晴空の種の濱に舟遊して佳景に魂を奪はれ、或る法華寺に酒を暖めて夕暮を賞した。

小萩ちるますほの小貝小盃

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

路通の同行

大垣如行亭の俳諧

波の間や小貝にまじる萩の塵

此の日の面白かつた事どもは隨行の等栽に書いて貰つて、紀念として寺へ殘した。

師芭蕉の此の地に在ることを知つて、路通は此處へ迎ひに來た。やがて芭蕉は路通を伴ふて美濃の國へ這入つた。途中馬の背を借りて大垣の如行の家へ着いた時には、伊勢の長島に靜養してゐた曾良が來た。そして尾張の越人は馬を飛ばせて來た。この時は九月三日であつた。芭蕉の泊つた如行亭には右の人々の他、前川荊口父子・斜嶺それから親しき人々が日夜訪ひ來て、蘇生の人に逢ふが如くに喜んだ。そして俳諧が興行された。

九月三日落着の夜

野あらしに鳩吹立る行脚哉　不知
山にわかるゝ日を萩の露　荊口
初月や先西窓をはづすらん　翁
波の音すく人もありけり　如行
木を挽て枕のたねとこゝろざし　左柳
酒のさかなに出す干瓜　殘香

おのづから隣の松をながむらむ　斜嶺
過なきあやにしづむものゝふ　恕風
（以下略、一葉集）

又

はやく咲九日も近し宿の菊　芭蕉
心うきたつ宵月の露　左柳
新畠去年の鶉の鳴出して　路通
雲うす〳〵と山の重り　文鳥
酒飲のくせに障子を明たがり　越人
なをおかしくも文をくるはす　如行
足のうらなでゝ眠をすゝめけり　荊口
年をわすれて衾かぶりぬ　此筋
二人目の妻にこゝろや解ぬらん　木因
けづり鰹に精進落たり　残香

とかくして灸する座をのがれ出　　曾良
書物のうちの虫はらひ捨　　斜嶺
（以下略、桃の白實）

これを見ても多くの俳人が熱心に、且つ親しさを以て歌仙を卷いてゐることがわかる。蕉風の地盤の愈〻堅固であり、隆盛であることは一目瞭然である。鬼才の師芭蕉を迎ふる大垣俳人の悦びは無限である、と同時に熱心に蕉風の泉を掘る大垣俳人をまのあたりにした芭蕉の悦びも亦無限である。

籠り居て木實草の實拾はゞや

は如行亭にての作である。

### 谷木因を訪ふ

隱れ家や月と菊とに田三反

は木因亭にての作である。木因は谷九兵衛が本名で、大垣の船積問屋の主人であり、芭蕉が大和行脚の折蕉門に入つた人である。

其まゝに月もたのまじ伊吹山

は斜嶺亭にての吟である。此の地に滯在すること僅かに三日、九月十六日には木曾川を舟

で下つて伊勢へと向つた。

おなじ此舟にて送るとて

秋のくれ行先々の笘屋哉　　木因

荻に寝ようか萩にねようか　　芭蕉

（笈日記）

は美濃を去る時の俳諧である。三月二十七日奥羽北陸の旅に出でゝより、九月三日大垣の如行亭に身を休めるまで、凡六ヶ月間の行脚はこれで終りを告げたことになる。

奥羽行脚終る

竹戸に紙衾を與ふ、其他

芭蕉が如行の家に寛いだ時、如行の門人なる鍛冶竹戸が、旅に疲れた芭蕉に按摩をしてやつた。芭蕉は其の懇ろなる心をいたく感じ、最上で貰つて今日迄肌身離さずに着て來た紙衾を與へたといふ。其處に居合せた曾良は、自分が記念に貰ひ度いものをと心の中で羨んだやうである。理屈なしに心とゝもにその行動を採るあたり、矢張芭蕉の性格が表れてゐる。普通だつたら身の邪魔にならぬ限り、着古すところであらうし、又與へるならば永い道中を子の如くに仕へて來た曾良に遣るべきであるかも知れない。

翁行脚のふるき衾をあたへらる、記あり略之

首出してはつ雪見ばや此衾　（みの）竹戸

題竹戸之衾

疊めは我手のあとぞ紙衾　曾良

此の二句を讀めば、竹戸は如何に喜び、曾良は如何に羨望したか、容易に窺はれるではないか。此の時であらうか、曾良は尙ほ「くやしさよ竹戸に取られたる紙衾」の句があつたとも云はれてゐる。

大垣に滯留すること三日、旅の疲勞も去らぬ九月六日には、伊勢に赴かうとして木曾川を下つた。

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

内宮は事治より、外宮の遷宮を拜して

尊とさに皆押しあひぬ御遷宮

宇治山田を出て、中村を過ぐるころ

秋の風伊勢の墓原猶凄し

「初時雨猿も小蓑を」の句

又玄の家を訪ふて

月さびよ明智が妻のはなしせん

この句には前書として　伊勢國又玄が宅にとめられ侍る頃其妻男の心にひとしく物事まめやかに見えければ旅の心をやすんじ侍りぬ彼日向守が妻髪を切て席をまうけられし心ばせ今更申出てゝ（元祿四年の勸進帳にありといふ）これによつて此の句も成程と諒解される。

九月八日、路通・蘭夕・白之・殘夜・芭蕉・曾良・木因等によつて興行された俳諧が伊賀上野某亭にてのもので、翌日伊勢神宮へ向つたといふ（芭蕉林）ことになつてゐる。一説には伊勢より長尾峠を越えて伊賀に歸り、それから奈良へ向つたといふことになつてゐる。九月八日に俳諧が行はれたことは事實らしく思はれるが、芭蕉林のいふ伊賀上野に於て云々は、決して信憑に足るべきものと稱されまい。十月初旬、伊賀の長尾峠を越えて奈良へ赴く途中の吟に

初時雨猿も小蓑を欲しげなり

の名句がある。猿に小蓑を着せて俳諧の神を入れ給ふとまで其角が激賞した句である。これをもとゝして「猿蓑」集が編まれたやうな次第であるから、當時此の句が如何に蕉風門

に鳴り響いたものか、推察するに尚ほ餘りある、此の句が伊賀山中にて詠まれたものであることは論を俟つまでもない。故に伊賀を通つたのは、伊勢の遷宮を拜して後のことであると見なければならない。奥之細道の最終を讀んでも左樣に思はれるのである。

初雪に兎の皮の髭作れ

いざ子供走りありかむ玉あられ

金屏の松の古びや冬ごもり

などの句は此の間に作られたものであるかも知れない。奈良にては大佛の造營を喜びて

初雪やいつ大佛の柱立

併し此の句は「雪悲しいつ大佛の瓦葺」であつて(三年正月十七日萬菊丸宛消息)、雪の大佛を悲しげに眺めた時の述懷と見るのが至當ではあるまいか。京都へ向ふ途中

いかめしき音や霰の檜笠

落柿舍に去來を訪ふ

十二月の半過ぎ嵯峨の落柿舍に去來を訪ふた。去來は元肥前の醫官であつたが、後年世を避けて嵯峨に庵を結び、蕉門の關西の重鎭をなしてゐたのである。芭蕉が落柿舍に來た時は丁度空也忌で、十一月十三日より四十八日間鉢たゝきの修行の行はれてゐる最中である

芭蕉は未だ一度も鉢叩を見たことがないので、是非見度いものと夜から曉方まで待つてゐた。此の時の句が

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき

である。芭蕉は鉢叩と聞いて、かの風流人長嘯卽ち木下若狹守勝俊が作れる擧白集を思ひ出し「鉢たゝき曉方の一聲は冬の夜さへも鳴く郭公」を慕ふて此の句を詠んだのである。此の句は、鉢叩の言葉を用ひ、且つ趣を人々に知らせて吳れたのは長嘯其人の御蔭である、だから先づ何はおいても、長嘯の墓を叩きつゝめぐらねばなるまい、といふところを詠んであるのだらう。

落柿舍を辭して膳所へ來た芭蕉は、草庵で年を送り新年を迎へたのである。これは萬菊丸への手紙に據つて明かである。

霰せよ網代の氷魚煮て出さん

何をこの師走の市に行くからす

の二句は膳所にて作られたものである。

## 芭蕉と旅の藝術

芭蕉の旅は生命である

この元祿二年は殆んど旅に費されてゐる。何故旅を追ひ求めたか、蕉風を各地に布く爲めに出掛けたといふ人の論は、全く自分勝手な考察であつて、芭蕉の場合には全然當らないのである。先づ芭蕉の作品と心境とに思ひを及ぼすならば、さうした輕率な論は出來ない筈である。現代の先生や宗匠流に考察するからこそ、不當な論を構へることになるのである。芭蕉は草庵にゐて發句を作り、或ひは俳諧を催しても、或ひは親しき門弟と語り合ふても、滿たされないものがあつたのである。勿論物慾・情慾・名利等にては滿たされやう筈がない。何故に滿たされないか、それは恐らく芭蕉自身も解く事が出來ないであらう。私は此の氣持を察する事が出來ても、筆に表すことが出來ない。このどことなく滿たされない心を滿たして吳れるものが旅だつたのである、それだから命を忘れても旅へ出たのである。何の目的も認められない。心に隨つて行動すること、それが芭蕉の人生となつたのであらう。此處に始めて芭蕉は生甲斐を見出してゐるものと云へやう。若し旅が心を滿して吳れなかつたならば、發狂するか死ぬかしたに違ひない。所謂旅は、殊に當時に在つては平坦な生活ではない。それ故、或時は未だ曾て味はぬ悲しさも辛さも到來した。併し紀行や書簡がよく表明してゐる樣に、旅に出てゐる芭蕉は、何といふ氣安で其の日を迎へ、其

の日を送つてゐることよ。

月を見たくて仕様がない、風を聞きたくて仕様がない、草を見たくて仕様がない、山や川を眺めたくて仕様がない――こんな氣持が芭蕉に充滿してゐたのではあるまいかと思ふ藝術家と云つても、此處に違つた存在を示してゐる樣に思はれてならない。芭蕉の全句を通讀すれば明瞭にわかることであるが、芭蕉には藝術の理想といふやうなものが全く無かつたのではあるまいか、例へば一ヶ年の作品を見ても、藝術の方向としては確かに整調したものではない。其の日其の日を基調とした藝術生活者である。だから發句の形式なり理想といふやうなことには頓着なしに、嬉しいと思へば嬉しいと詠み、悲しいと思へば悲しいと詠み捨てゝゐる。これで充分滿足が出來て、明日の日を迎へることが出來たのである。此處に芭蕉の本質が明かにされるわけである。私は今發句を主として斯く考究したのであつて、俳諧に就いて述べてゐるのではない。俳諧は形式に傾くところから、發句に於ける考察とは些か趣きを異にしたものがある。

今年中の發句を靜觀すれば殊にさうであるが、不思議といふ位內容に於ける同一方向を持たない。云ひ換れば、內容に型といふやうなものを見せてゐないのである。かたちに拘

泥されるところが無いといふ此の傾向は、實に素晴らしい長所であり、詩人としての本領を完全に發揮したものと云へる。何が原因してさうさせたかといふに、これは全く旅の御蔭である。芭蕉は旅をしたからこそ、固定した内容の發句を詠んでゐないのである。恒に新鮮又新鮮、對象物と自己とが結びついたところに發句を詠みつゞけたものであるらしい此の點芭蕉は藝術の理想境を持たぬ俳人だといふのである。

若し旅を爲なかつたら、名吟を得られなかつたかどうか、これは未知の問題にして速斷を許されるものではない。けれども、旅を爲たから名吟を數多く得たといふことは事實である。併し前言に於ても觸れたやうに、芭蕉に取つては、旅に依つて名吟を求めようなどとは夢にだも思はないところであらう。

芭蕉の旅と名吟とを結び付けて考へることは、結果を主にしての推察であつて、芭蕉の心中を無視したものになりはせぬかと思ふ。加之、名吟を得んが爲めに旅を求めたのであらうと論ずる人のあるを聞く。如何に失言であるかは改めていふまでもない。假りに良き句を欲して旅を試みたものであるとするならば、もつと技巧を加へたであらうし、又他所行の句を詠んだに違ひあるまい。唯最後に一言を費したいのは旅の功德に就てゞあるが、

始終芭蕉に影響を與へてゐた周圍の俳風に染まる機會を、極めて少からしめたものは旅の御蔭である。それでこそ始終新らしき詩藻を以て門弟を指導し得たのである。

芭蕉は此の旅行に於て、紀行文の絶品と稱せらるゝ一大詩文章なる「奥の細道」を遺した。又旅行の結果は足跡を止めたると同時に、正風に歸依する俳人を産み、且つ正風の勢力をいやが上に高からしめた。詳細は旅の道順に於て述べたつもりである。金澤・大垣・名古屋・京都地方の蕉門俳人が、愈〻深き俳諧の薫陶を受けたことはさることながら、江戸蕉門俳人への好影響も亦大なるものがある。許六は師芭蕉が江戸へ歸へられてから諸門人に正風を說かれたといひ、去來は師芭蕉が奥羽行脚の後不易流行を說かれたといひ、丈草も元祿二年の冬卽ち奥羽行脚後不易流行の敎を說かれたと云つてゐる。貞門・談林の俳諧に飽き足らなつかた芭蕉が、旅に依つて自然の偉大さに觸れ、而して其處に何ものかを感じ、今迄の俳諧・發句に非常なる變化を來したことは事實である。旅で得た俳諧上の新しき發見を、懇ろに門人に說いたことは事實であらう。併し伊賀山中にての作なる「初時雨猿も小蓑を欲しげなり」を恐るべき幻術也。と其角が云つてゐるのはちと大袈裟過ぎるかと思はれる。

不易の句と云ひ、流行の句といひ、一々理論を明確にして教ふるところがあつたかどうかは疑問であるにせよ、門人が口を揃へていふてゐるところを見ると、兎に角さうしたことを說かれたに違ひない。師芭蕉の俳諧・發句が、此度の奥羽行脚を一轉機として益々掘り下げられたことは、大いに賀すべきことである。これと共に、又蕉門全體の向上は見逃すことの出來ない好傾向である。この影響は翌三年の「ひさご」や四年の「猿蓑」等によく現れてゐるのである。

# 第十一章　老年時代の芭蕉（一）

（四十七歳 元祿三年 西暦一六九〇年）

## 元祿三年（四十七歳）

元祿三年の新年を膳所に迎へて

誰人か菰着ています花の春

の吟があつた。此の句は泊船集・其袋集にいふ「京近き所に年をとりて」と前書ありて、「こもを着て誰人います花の春」が正しいやうである。（二月二十二日珍碩宛書簡）此の句は橋のたもとの乞食を見て詠まれたものであると素堂が云つてゐるが、果してさうであるかどうか。普通ならば着飾つて年を迎ふるものを、これは又珍らしいことに菰を着けた人がゐると、其の風流に痛く心を惹かれて詠まれたものではあるまいか。

それから伊勢へ出でて春の神路山に詣で、二見の圖を拜して

うたがふな潮の花も浦の春

の句があつた。路草亭に遊んでは「紙衣の濡る共折らん雨の花」の句を詠んだといふことである（芭蕉翁略傳）。此の頃宇治山田に住んでゐた岡西惟中の妻なる渡會園女の家に泊つて次の句を詠んでゐる。

　暖簾のおくものゆかし北の梅

園女も「時雨てや花迄のこる檜笠」の句を詠んでゐる。因に園女は元祿二年の冬に蕉門に入つてゐるのである。

### 故郷を訪ふ、其他

二月の初め頃郷里伊賀へ歸つたやうである。「――正二月の間頃伊賀へ御越待存候――」云々の萬菊丸へ宛てた書簡に據つても、二月の始めは既に伊賀へ入つてゐるらしい。尙ほ二月六日には作木・百歲・村皷・式之・梅額・一桐・槐市・呉雪等と歌仙を卷いてゐる。

　黄鳥の笠落したる椿かな　　翁
　　古井の蛙草に入聲　　作木
　陽炎の消ざま見たる夕影に　　百歲
　　指さす方に月ひづむ也　　村皷

（以下略、一葉集）

花垣の庄にて

一里はみな花守の子孫かや

**花垣の因れ**

の發句があつた。猿蓑には「伊賀の國花垣の庄はそのかみ奈良の八重櫻の領に附けられけると言ひ傳へ侍れば」と前書がある。句選年考にはこの謂れを記してゐる。これを參考に載せて見れば、「上東門院（一條帝の后）南都の櫻を掖庭に移し植給はんと有りしに、與福寺の僧徒、この櫻は我寺の靈木也、縱令尊命に背くとも叶ふまじと忿りければ、感ぜさせ給ひて、伊賀の國余野の庄を寄附せられ、毎年花の時は垣を廻ぐらし、宿直させて守れ、他に移す事なかれ、剪る事なかれ、と有りしより、余野の庄を花垣と呼ぶ」と或書に出てゐるさうである。この說明によつて右の句は容易に意を酌むことが出來る。

**風麥亭の俳諧**

三月二十七日には上野の風麥亭にて風麥・良品・土芳・雷洞・半殘・三薗等により俳諧があつた。

木のもとに汁も鱠もさくらかな　翁

明日來る人はくやしがる春　風麥

蝶蜂を愛するほどのなさけにて　良品

水のにほひをわづらひにける　土芳

（以下略、蓑虫庵小集）

尙ほ芭蕉・半殘・土芳・良品の四人にて俳諧もあつた。

午ノ年伊賀の山中

種芋や花のさかりに賣ありく　翁

こたつふさげば風かはる也　半殘

酒好のかしらも結ず春暮て　土芳

ぬぎかへがたき革の衣手　良品

（以下略、已が光）

伊賀の木白亭に遊びては

畠うつ音やあらしの櫻あさ

の句があり、藤堂斎木亭に遊びては

土手の松花や木深き殿造り

の句があり、それから近江に出でて濱田珍碩の家を訪ふた。珍碩は醫を業とし蕉門

洒落堂記をものす

俳諧の重鎮をなす人にして「ひさご」や「深川集」などは此の人の著はせるものである。芭蕉は此の亭に遊びて洒落堂記をものした。洒落堂とは珍碩の別號である。左に芭蕉文集より載せて見よう。

洒落堂記

山は靜にして性をやしなひ、水はうごひて情を慰む、靜動二の間にして住家を得るものあり、濱田氏珍夕といへり、目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて、濁りをすまし塵をあらふが故に洒落堂といふ、門に戒幡を懸て、分別の門内に入る事をゆるさずと書けり、かの宗鑑が客にをしゆるざれ歌に一葉くはへておかし、且それ簡にして方丈なるもの二間、休紹二子の佗をつぎて、しかもそののりをみず、木を植、石をならべてかりのたはぶれとなす、抑おものゝ浦は勢多唐崎を左右の袖のごとくし、湖を抱て三上山にむかふ、湖は琵琶のかたちに似たれば、松のひゞき波をしらぶ、日枝の山比良の高根をなゝめに見て、音羽石山を肩のあたりになん置り、長等の花を髮にかざして、鏡山は月をよそふ、淡粧濃抹の日ゝにかはれるが如し、心匠の風雲もまたこれにならふべし、

四方より花吹入れて鳰のうみ

美濃國の賀島氏宅にて「十八樓の記」を書いたと同じ様に、天然の美を賞するとゝもに主人珍碩氏の風雅をこよなくも愛して、此の記をものしたものである。又芭蕉・珍碩・曲水の三人して歌仙を巻いた。（「ひさご」にていふ）

木のもとに汁も膾も櫻かな　翁

西日長閑に能天氣なり　珍碩

旅人のしらみかき行春暮て　曲水

（以下略、一葉集）

曲水は所謂菅沼曲翠にして、近江膳所本多家の臣である。年明けてより或ひは訪ひ、或ひは俳諧を催した座中の人々は、大抵新しい門人であつたが、其の熱心さは又格別である。これ芭蕉の名が愈々揚がり、又相當な年齢にも達してゐたからであらうと思はれる。昨年四十六歳にして白髪であつたことは、彼の紙衾記「――二千里の外の月をやどし、蓬荏の敷ねの下には、霜にむしろのきり〴〵すを聞て書はたゝみて、背中におひ、三百余里の險難をわたり、終に頭をしろくしてみのゝ國大垣の府に至る――」を窺いても明かである。

此の稿の終りに於て云ふ珍碩撰になる「ひさご」の成るや、湖水に臨みて惜春」と前書

して

行春をあふみの人とをしみける

の句があつた。「猿蓑」巻四にも　望湖水惜春」と前書を出してあるのであるから、蓼太が幻住庵にての作とする說は見當違ひである。此の句は、昨年奥羽の旅へ立つ時に、江戸の親しき人々と行春を惜しんだのであつたが、今年は近江の人々と春の別れを惜しむのであるといふ意。今近江の人々と行春を惜しむにあたり、江戸の人々が思ひ出されてならないと門人を想ふ芭蕉の溫い心のあふれた作である。

幻住庵の由來

幻住庵

四月に琵琶湖の南石山奥の國分山の幻住庵に入つた。此の庵は弟子曲水（曲翠）の叔父探山居士が已が棲家として建てたものである。併し探山老人は他界して既に八年、修理もせず、荒廢して狐狸の棲家となつてゐたものを、芭蕉が暫らくの棲家にしたいといふ希望によつて修理されたものである。二月十八日に曲水に宛てた消息文に依つても分明される様に、修理に着手したのは二月の初め頃かとも思はれる。曲水は勿論のこと、正秀も隨分と骨を折つたものらしい。

幻住庵上葺被仰付候由珍重存候うき世のさた世のさた少々違ひは此山の事と折々のねごめ難忘候露命にかゝり候はゞふたゝび薄雪の曙をと被存候

修理進渉中であるにも拘らず、入庵する日の早からんことを如何にも待ち侘びてゐる。幻住庵とは實に芭蕉によく合ふた名前である。然しこの名を芭蕉が選したものでなくて、探山が名付けたものであるとはおもしろい。芭蕉は此の名に非常に心惹かれたに違ひないと思ふが、芭蕉が此の庵に棲むべく運命づけられてゐたのであるとすると、何の不思議もないことである。漂泊の芭蕉もとより此の庵に長く棲まうとは思つてゐない。何時破れるかわからぬ蜘蛛の網が、暫らく無風に置かれるならばと思ふ位で、氣の移り變りで何處へ何時出てゆくか、自分乍ら知らぬことは萬々承知の上に、此の庵を假の宿としたのである。

幻住庵をえらびし理由

何故芭蕉は斯くも不便な國分山の幻住庵を欲したか、幽邃な四圍の雰圍氣を堪らなく欲して、しばしなりとも心を遊ばしめようと思つたであらう。併しそれよりも大きな理由は凡兆が云ふ法華經書寫ではなかつたらうか。凡兆の記に

――師翁しばらくして云、我數年法華經書寫の宿願あれども、數年たゞ漂泊に心うかれ、其志とげず、此場所は世外の閑境ならざれば心靜ならず、心靜ならざれば我願望不

幻住庵の眺望

圓滿、かくの事を成就せんには、曲翠の叔父の幻住老人の住すてられし國分山の草盧にはしかじ」云々

一師翁もはや知命にちかし、老衰日々に見へ給へば、此後は料椒の杖を隠し置、もはや深川と粟津とに暫く御互に頭陀を預り、老身を保養なさしめ參らせんと思ふ心あり、殊に多年法華經書寫の願ひ在し候へど、今以て其事も遂げ給はず、幸ひ膳所領の國分山に菅沼曲翠が叔父の隠れたる幻住庵の跡あり、佳景は唐土の五湖にもをさをさおとらず、此所にしばらく笈をとゞめ、例の次郎兵衛を侍者とし、薪水の勞をたすけ參らす、心しづかに數年願望の書寫をすゝめ申し」

とある。近き村の童を見れば菓子なんどを遣りて小石を貰ひ、かくて一石一字の法華經を寫して地下に埋めた。今日はそれを記念して經塚の碑が立つてゐる。

幻住庵記には幻住庵の場所や自分が幻住庵に入るまでの心境をよく述べてある。そして幻住庵の眺望の絶佳なることに筆を盡してある。例へば

山は未申にそばたち人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し、日枝の山比良の高根より辛崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有、笠とりにかよ

幻住庵に於ける心境

ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛かふ夕闇の空に水鷄の扣音、美景物として足ずと云事なし、中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武藏野の古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ、さゝほが嶽　千丈が峰、袴腰といふ山有、黑津の里はいとくろう茂りて、網代守ルにぞと詠みけん萬葉集の姿なりけり、(幻住庵記の一節)

或時は清水を汲みて自ら炊ぐこともあつた。高良山の一如僧正に囑して、幻住庵の三字の扁額を草庵の記念とした。枕上の柱には木曾の檜笠・越の菅蓑を掛けてあるだけで、本當の山の旅寢といふ氣樂な生活である。晝は稀に訪ひ來る人を心待ち、或ひは社守と清談し、或ひは里人と農談をして心を悦ばしめ、夜になれば月を友とする。芭蕉自らも、世を厭ふた人らしく思はれると述懷してゐる。而して過ぎ來し方を想ふて

或時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入んとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞してしばらく生涯のはかりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此一すぢにつながる、樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦たり、賢愚文質のひとしからざるもいづれか幻のすみかならずやと、おもひ捨てゝふしぬ、

**まづ頼む椎の木もあり夏木立**

右は正直な芭蕉の懺悔である。最初は役人となつて功名を揚げようとし、次に僧にならうとし、遂に風流文事に身を托して、樂天や老杜の苦しみを嘗めて行くのであると語つてゐる。此處に人間芭蕉の面目が歴然と現れてゐるのである。初めから芭蕉は俳諧師を志したものでもなく、且つ斯道の天才でもなかつたのである。

用水にまつはる傳説

凡兆の記に據れば、四月二日幻住庵の切組が出來たので、去來・丈草・曲翠・乙州・正秀・昌房・尙白・探芝・楚江・誐々・泥足・激口・格睡・牝玄其他聞き傳へて我も〳〵と集り寄つた。無住の國分山に忽ち大勢の人々が引きも切らずに押し寄せるので、國分寺村の人々は何事か起つたのであらうと驚いた。これを聞いた芭蕉は、村人を騷がし或ひは妨げとなることを恐れて、所用ある人と雖案内なしで此山に登つてならぬ、と張紙をしたといふことである。庵は芭蕉が記に於ても察せられるやうに、用水に乏しいことが一番の不便であつたらしい。併し後日とく〳〵と清水が湧いたので、薪水の苦が消え失せたといふ。これには神秘な傳説が附纏ふてゐる。

三井寺の定光坊阿闍梨實永法師が幻住庵を訪ふた時、芭蕉はこの山に水の乏しい事を語つて歎じた。定光坊は龍樹の大論に、地に各處水あらずといふ事なしと、爰を以てうがつ

處水あらずと云事なし、和漢そのためしになからず、是萬物を潤ふが故也、人は萬物の靈也とその理を說きて、八幡宮に修法すること三日、庵の後ろの巖の窪みたるところを獨鈷もて跌起された。初めは霧の樣な水が一筋に立昇つたと見えたが、其のあとから主の樣な水が酒栓より迸るかの如くに湧出でたといふのである。これがとく〳〵の淸水が持つ傳說であるけれど、其の信疑には此處で預からない。

秋の坊、庵を訪ふ

金澤の隱僧秋の坊（寂玄）が訪ねて來て、幻住庵に二泊したといふことである（芭蕉翁略傳）。

我が宿は蚊のちひさきを馳走かな

と詠み、秋の坊の歸るを麓まで見送りて

やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲

と詠んだ。此句人上渡世天道地變にもかゝれる名句ならんと、世擧つて云ひ侍りぬ、なまじひに註しても花實を損ふたぐひなるべし（兀峯が桃實集にいふ）。

幻住庵の俳諧

夏秋の交、凡兆・去來・史邦・野水・正秀。如行等々幻住庵を訪ふて俳諧を興行したことは、猿蓑集に表れてゐる。左に庵を尋ねた人々の名を錄して、幻住庵を髣髴たらしめる

資としたい。

時鳥脊中見てやる麓かな　曲水
くつさめの跡しづか也夏の山　野水
鷄もはら〳〵時か水鷄なく　去來
海山に五月雨そふや一くらみ　凡兆
軒ちかき岩梨をるな猿のあし　千那
細脛のやすめ處や夏のやま　珍碩

贈紙帳

おもふ事紙帳にかけと贈りけり　野徑
いつたきて蕗の葉にもるおぶくぞも　望東
螢飛疊の上もこけの露　乙州
夕顏や蓕の中の花うつぎ　怒誰
たど〳〵し峯に下駄はく五月闇　探志
五羽六羽庵とりまはすかんこ鳥　元志

木つゝきにわたして明る水鷄哉　泥土
笠あふつ柱すゞしや風の色　史邦
月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀
しづかさは栗の葉沈む淸水哉　柳陰
凉しさやともに米かむ椎が本　如行
訪に留守なり
椎の木をたゞへて啼やせみの聲　朴水
目の下や手洗ふほどに海凉し　市隱
文に云こす
膳所米や早苗のたけに夕凉　半殘
麥の粉を土産す
一袋これや鳥羽田のことし麥　之道
書　音
一夏入る山さばかりや旅寢ずき　魯町

夕立や檜木の臭の一しきり　及肩

登猿腰掛

秋風や田の上山のくぼみより　尙白

贈　蓑

しら露もまたあらみのゝゆくへ哉　北枝

木履ぬく傍に生けり蓼の花　木節

包紙に書

縫にてす薬袋や萩の露　扇

稻の花これを佛の土産哉　智月

石山や行かで果せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて鳴やむきりぎりす　昌房

里は今夕めしどきのあつさ哉　何處

啼やいとゞ鹽にほこりのたまる迄　越人

越人と同じく訪合て

幻住庵の生活

蓮の實の供に飛入庵かな　等哉

明年彌生尋舊庵

春雨やあらしも果ず戸のひづみ　嵐蘭

同　夏

涼しさや此庵をさへ住捨し　曾良

以上は凡兆が日記を猿蓑の最後に加へたものである。か丶る多數の門人は、庵に芭蕉を訪ねて俳諧の敎へを乞ひ、又は珍らしい食物などを持參したりしてゐる。そして女手なき師の不便を見ては薪水の勞を取つたらしい。師に盡す門人の心としてさもあることかと肯ぜられる。每日の事であるから、全く次郎兵衛一人では容易でなかつたであらうと思はれる、「削りかけの返事」には支考が薪水の勞を助けたことを記してゐる、「幻住庵の山居の間も薪水の勞は我師（支考）一人なり」又幻住庵の夕べを尋ねてと前書して「水汲みに跡や先やのほたるかな」と乙州が何をものしてゐるところを見ると、大いに師芭蕉に盡してゐるやうである。勿論他の俳人と雖、何等かの方法を以て庵の芭蕉に少しでも滿足の行く樣にと心を配つたものに違ひあるまい。

## 鬼貫幻住庵を訪ふ

その頃（江戸へ行く序での九月二十一日）伊丹派の御大なる上島鬼貫が幻住庵に芭蕉を訪ひ、「先づたのむ椎の木もあり夏木立」の句を見せられて大いに驚き、叩頭して蕉風の奥深き俳境を三嘆したといふことである。尙ほ芭蕉との附句に於ても、遂に芭蕉の相手にはなれなかつたといふことが傳へられてある。後鬼貫は無名庵にも一再ならず訪ふてゐる。

これより先瀬田の上林三入亭に遊んで螢見をしたる時

ほたる見や船頭醉ておぼつかな

の句があつた。同行の凡兆は「闇の夜や子供泣出す螢舟」を詠んでゐる。大津の奇香（或ひは箕香）の家にては

旋花のみじか夜眠る晝間かな

幻住庵に籠りて詠まれたる句は、前にも掲げたが尙ほ數多くある。左に掲げたる句もその時分の作と見られる。

夕にも朝にもつかず瓜のはな

花と實と一度に瓜のさかりかな

獺のまつり見て來よ瀨田の奥

夏山や紙すく里は飯時分（不詳）

日の道や葵傾くさ月あめ

旅癖や寢冷煩ふ秋の山

**幻住庵を去りし理由**

最後の句は、幻住庵を去る一寸前の作と見られる。何故早くも幻住庵を去つたか、これは前にも言ひ及んでゐる樣に、芭蕉の放浪性の然らしめるところであることはいふまでもない。半歳ならずして飽いたといふのは餘りに失言である。其處には種々の原因がある。一つは不便の地であること、もう一つは病身故秋の冷氣に堪へ難く、やがて到來する冬を案じて下山を急いだものゝやうである。密かに察するに、暫らく踏まぬ江戸の地、其處には自分を待つてゐる其角・杉風其他多くの門人がゐる――その人々の顏を早く見たいと思ふ心も充分手傳つてゐやせぬか。

幻住庵を立去つた芭蕉は、粟津の義仲寺なる無名庵（秋草庵又は鳥落庵ともいふ）に移つたのである、幻住庵を立去る理由を述べてある七月十七日牧童宛の消息は、這般の事情をよく傳へてゐるから左に記す。

無名庵に移る

隱士秋の坊閑居御吊珍敷得芳意大慶仕候先以御細翰忝御無異之旨珍重不過之候去年頃日はさかりと其元罷在候一とせの變化夢のごとくにて一入御なつかしく被存候大火之跡いまだ萬〻御心も靜なるまじく候されども頃日は乙州參候て又／＼會なども少〻御座候由愈御はげみ可被成候世間ともにふるび候により少〻愚案工夫有之候而心を盡し申候其段粗乙州も心得申候間御はなし可被成候拙者儀山庵秋至候ては雲霧痛候而病氣にさはり候故追付出庵いたし名月過にはいづ方へなりとも風にまかせ可申と存候乍去去年遠路につかれ候間下血など度〻はしり迷惑致候而遠境羈旅不叶候間東之方ちかくへそろ／＼とたどり可申かとも存候無常迅速の暇も御座候はゞ又〻重而得御意候事も可有御座候隨分御無事に御勤可被成候諸善諸惡生涯の事のみ何事も／＼御樂可被成候少氣むづかしく候て早〻及貴報候　七月十七日牧童樣（著者云、袖書省略）　はせを

牧童は金澤の立花北枝の實兄にして刀劍研を業とし、北枝と共に蕉門中の傑物である。八月に既に幻住庵から無名庵に移つたことは、右の書簡によりても推察せらるゝところである。

草の戸をしれや穗蓼に唐がらし

は無名庵に籠りて、時折戸をたゝく人々へ對する感想である。平田明照寺の李由と去來二人が來訪、李由は蒟蒻を去來は柿を持參して來たので

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

の句があつた。果して無名庵を訪ふたものか、それとも幻住庵を訪ふたものか判然としない。

八月十四日の待宵は楚江亭に遊び、十五日の良夜は無名庵に宴を張つた。

米くるゝ友を今宵の月の客

三井寺の門たゝかばやけふの月

名月や海にむかへば七小町

は此の時の吟詠であらう。乙州・正秀・洒堂・丈草・支考・木節・智月・惟然等集りて酒茶に風流を盡したといふことであるが「和漢文藻」。奥羽の旅に出てゐる路通もこれに加つてゐるといふあたり、右にいふことには信を措けないものがある。十六夜は湖上に舟を浮べて堅田・打出の濱に遊んだ。

既望賦

十六夜や海老煎る程の宵の闇

鎖明て月さし入れよ浮御堂

芭蕉の「既望賦」は此時の光景をよく寫し得てゐる「望月の殘興なほやまず、今宵は二三子にいさめられて、船を堅田の浦にはす、其日もたそがれの程ならん、なにがし成秀といふ人の後に漕れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと船の中より聲々によばる（中略）月は待つほどもなくさし出て、湖上はなやかに照渡れり、乗てきゝぬ、仲秋望の日は月の浮見堂にさし向ふを鏡山といふなるよし、今宵なほ其あたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水莖は左右にわかれて、その間に十二峰の影をひたす」（以下略）

病鴈の夜さむに落て旅ね哉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉

右二句は堅田あたりを彷徨したる折の作である。

蝶も來て酢を吸ふ菊のすあへ哉

は醫師木既の兄の許に誘はれて、饗應された時の句であるといふ。

九月九日、智月尼の子なる乙州が一樽を携へて來たので、月見に打興じた。

乙州、蕉翁訪ふ

草の戸や日暮てくれし菊の酒

雲竹の自像畫に贊す

此の時乙州は

　蜘手にのする水桶の月

と附句をした。「洛の桑門雲竹（北向八郎衞門と稱し書家なり）自らの像にやあらむあなたの方に顏ふりむけたる法師を畫きてこれに讚せよと申されければ君は六十年あまり余は既に五十にちかしともに夢中にして夢の形をあらはす是にくはふるに寢言をもつてす」として

　こちらむけ我もさびしき秋の暮

とある。自畫像に贊を依賴されたる時の句としては、絕讚の他はない。人としての芭蕉が十二分に滲み出てゐる。句選年考にては此の句を元祿四年のものとしてあるが、しばらくは湖中の芭蕉傳に從ふことゝする。五十にちかし云々よりして四十七歲よりも四十八歲がより適切であるといふ說は、年齡より考究した一方的な解釋にして元より當らないものである。

冬京都に赴く途中、大津を過ぎるころ

　三尺の山も嵐の木の葉哉

「世を捨し身にも少しは心にかゝる事のなきにしもあらぬを三尺の山にも嵐吹ば木の葉の落つるよとの作也」」(師走嚢)と。京にては上御靈社の別當景桃丸の許に於て俳諧を興行した。會合する者、芭蕉・示石・凡兆・去來・景桃丸・乙州・史邦・玄哉・好春等である。

半日は神を友にや としし忘　芭蕉
雪に土民の供物納る　示石
水光る芦のふけはら鶴啼て　凡兆
闇の夜わたる表榾の聲　去來
ならずにものいふ月の都人　景桃
(以下略、物の親)

穩やかにして盡きぬ興趣を漂はせてゐる。思ふに凡兆は幻住庵時代頃より芭蕉に接近し、夏頃より俳諧にも卓越した力量をほのめかしてゐるやうである。冬寒きころ、漂泊の己れを觀じてか、次の句があつた。

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

此の句は「一日曲水を訪ひ、役にも立たぬ事ども言ひあがりて、心細くなり行きしに、膳

所の文とて持て來れり、とく〳〵披き見るに、いね〳〵と人に言はれても尙ほ食ひあらす旅のやどり、どこやら寒き居心を侘びて「住みつかぬ旅の心や置火燵」まだ埋火の消えやらず、臘月の末京都を退出で、乙州が新宅に春を待ちて……と（勸進帳）にある樣に、旅から旅へ、恰も置火燵の處を更へるにも似てゐるといふのであらう。火燵とあるが爲めに「住みつかぬ」を「一炭攻がぬ」であるといふ說には、識見ある故人も之を排してゐる樣に、全く取るに足らぬ說である。

はつ雪や聖小僧の笈の色

霜の後撫子さける火桶哉

かくれけり師走の海のかいつぶり

筑紫の方にまかりし頃頭陀に入れし五器一具難波津の旅亭に捨てしを破らず、七とせの後湖上の栗津まで迄りければ是をさへ過ぎし方を思ひ出してあはれなりしまゝに、翁に此事物語りて侍れば（路通が詞書）

これや世の煤にそまらぬ古合子

などは此の頃の作であるらしく思はれる。尙ほ

からざけも空也の瘦も寒の内

は空也の像の、魚を持ちたる體に畫きたるものを見ての吟ではあるまいかと思ふ。

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘

これは十二月末つ方、京を出でゝ乙州の家に來てからの作である。正月五日、曲水に宛てた書簡にも「……まだ埋火の消えやらず臘月末京都を退き乙州が宅に春を待ちて「人に家をかはせて我は年忘れ」……」とある。

此の夏より年の暮れまでの俳諧（それ以前の俳諧は揭出、尙ほ夏より冬の俳諧のうち一二は示したものもある）は數多く行はれてゐる。併し何時何處の亭に於て行はれたものであるかは、却々調査に困難である。今便宜上一葉集其の他よりそれらを抄出して見る。

ひるがほのみじか夜眠る晝間哉　翁

せめて凉しき蔦の靑壁　奇香

初月の影長桒にたゝかひて　尙白

石にいとゞの聲ひゞく也　自咲

（以下略）

市中は物の匂ひや夏の月　凡兆
著し〳〵と門〳〵の聲　翁
二番草取も果さず穗に出て　去來
灰うちたゝくうるめ一枚　凡兆

（以下略）

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆
油かすりて宵寢する秋　翁
新だゝみ敷ならしたる月影に　野水
ならべてうれし十のさかづき　去來

（以下略）

秋立て干瓜からき雨氣かな　及肩
敷居ふまえて戸をはづす月　珍碩
早稻藁をすぐり仕舞ば用もなし　之道

人はしりよる辻の放下師　　昌房

（以下略）

月見する坐に美しき顔もなし　　翁

庭の柿の葉みのむしになれ　　尙白

（以下略）

白髮ぬく枕の下やきり〴〵す　　翁

入日をすぐに西窓の月　　之道

あま鹽の鰯かぞふる秋の來て　　珍碩

かり揃へたるかしらこの柴　　翁

（以下略）

安〳〵と出ていざよふ月の雲　　翁

舟をならべて置わたす露　　成秀

ひらめきて咲も揃ぬ萩の葉に　　路通

鍋こそげたる音のせはしき　　丈草

とろ／＼とねぶれは置る鶯の醉　惟然
　城とり廻す夕立のかげ　猪睡
　　　　　　　　　　（以下略）

鳶の羽も刷（かひつくろ）ひぬ初しぐれ　去來
　一吹風の木葉しづまる　翁
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
　狸を怖す篠はりの弓　史邦
　　　　　　　　　　（以下略）

ひき起す霜の薄や朝の門　丈草
　柿の落葉をさがす焚付　支考
月にまつ狸の糞をしるしにて　翁
　いそやまかげに鳩の啼こゑ　史邦
寝てなほす旅の勞の秋の雨　去來
　かみまきそへてかろき笠の緒　野童

（以下略）

さびしさの底ぬけて降霙哉　丈草

ちら〳〵光る糠の埋火　去來

鯨ひく沖に一濱家あけて　翁

苗栽初る砂留の松　鼠彈

（以下略）

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草　珍碩

うたれて蝶の目を覺しぬる　翁

蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通

花までは時雨て殘れひの木笠　園女

宿なき蝶をとむる若草　翁

月代や膝に手を置宵のやど　翁

萩しらけたるひじり行燈　正秀

椑柿や鞠のかゞりの見ゆる家　珍碩
秋めく風に疊ほす門　之道
有明に湯入仲間の荷を付て　翁
赤人も今一しほの酒機嫌　珍碩
土器くさき公家の振舞　翁

蓋し凡兆加りたる俳諧が常に上乘であることは、今更言を用ひぬところであるが、「市中は」及び「灰汁桶……」の歌仙は蕉門を代表する「猿蓑集」中の随一として永久に讃へられるところの名吟である。

### 「ひさご」出づ

俳諧集「ひさご」（比左古・飛左古とも瓢とも書く）は此年の六月、大津の酒落堂こと濱田珍碩が選し篇纂したものである。集中芭蕉・珍碩・曲水・路通・乙州・荷兮・越人・正秀・牧童・北枝等の連句五卷を載せてある。集中の人を見ても判る様に、近江近在の人々

「ひさご」の特色

の連句集であることはいふまでもない。こゝに此の集の意義も認められるわけである。されば吾々は、此の集に依つて江州の蕉風の勢力を直ちに窺ひ得るのである。しかのみならず、芭蕉が加つてゐる丈けに江州の蕉門といふ偏頗なものでなく、蕉風の實勢力を凝結したるものとも見てよいのである。これは選者兼編者なる珍碩が、蕉門中傑出した俳諧の名人であるからして、實に巧みなる撰をしてゐるのである。さればこそ七部集の一にも入れられてゐる次第であらう。

ひさごは先の曠野よりは數段の進境を示してゐるが、次の撰集なる猿蓑よりは稍〻劣れるものと見られやう。それは蕉門俳諧の發達に於て致し方もあるまい。曠野とは全く面目を一新した撰集であることは、一に奥羽行脚により一境地を拓いたが爲めの影響に依るものであらう。强いて言へば、蕉風のうまさが自ら發輝されたものと見られやう。芭蕉の俳諧が、今將に熟さんとする時の香りや響といふやうなものを、此の集より探り得ることが出來るのである、付方には殊更らしい構ひがなくなり、移りには自然の巧みさが加つて來たのである。内容は極めて僅かであるが、斯樣な特色を有つた撰集として一讀しなければならぬ。此の集に於ては芭蕉を翁と尊稱してゐる。これ芭蕉の俳名赫々として、凡そ俳諧を爲すもの

の知らざるなきといふ有様、珍碩が好んで「翁」の文字を用ひたものでなく、世の趨勢に從つて呼んだものであらうと思ふ。芭蕉が曾て師として敎を乞ふた北村季吟と其子、幷に伊藤坦庵の如き學者ですら、此の頃は芭蕉を翁と呼んだといふことである。芭蕉の偉名披ては蕉風の陣容、如何に天下に囂々たるものであつたか、この一話を以てしても容易に知ることが出來る。芭蕉は翁と呼ぶことを嚴かに戒めて、今後は決して翁と書いてはならぬとさへ云つてゐる。これを讀んで、圓滿にして謙讓な芭蕉の人格を慕はぬ人はないであらう。

越人の「ひさご」の序

越智越人が穩かなる感想を「ひさご」の序に書いてゐる。

江南の珍碩我にひさごをおくれりこれは是水漿をもり酒をたしなむ器にもあらず或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべにも異なり吾また後の惠子にして用ゆる事をしらずつら〳〵そのほとりに睡りあやまりて此うちに陷る醒てみるに日月陽秋きらゝかにして雪のあけぼの闇の郭公もかけたることとなくなを知人ども見えきたりて皆風雅の藻思をいへりしらず是はいづれのところにして乾坤の外なる事を出てその事を云て毎日此内にをどり入

元祿三、六月　越智越人

蕉門に此の人ありと思はるゝ程芭蕉に似て、奧床しい限りである。ひさご中代表的な連句と

稱せらるゝ「花見」より一部分を抄錄して此の稿を終る。

木のもとに汁も鱠も櫻かな　翁
西日のどかによき天氣なり　珍碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘(ヒキハダ)　翁
月待て假の內裏の司召　珍碩
籾臼つくる杣がはやわざ　曲水
鞍置る三歲駒に秋の來て　翁
名はさま〴〵に降替る雨　珍碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　曲水
中にもせいの高き山伏　翁

（以下略）

# 第十二章　老年時代の芭蕉（二）

（四十八歳　元祿四年　西暦一六九一年）

## 元祿四年（四十八歳）

元祿四年の歳旦は湖頭の無名庵に居て迎へた。次の句は年頭の所感である。

　大津繪の筆のはじめは何佛

路通の撰にも記してある樣に、正月三日口を閉ぢ、四日に題すとして此の句が出てゐる。實は元日か二日か又は三日に作れるものを、四日の試筆に書かれたものか。普通大津繪には十三佛を畫かれるさうであるから、これに想を致して詠まれたものであるかも知れない。尙ほ思へば、近くの義仲寺の佛に心を致しての作であるかも知れない。宛名は今以て不明であるが、正月三日の芭蕉の眞蹟なる書簡によると、散々持病に苦しみつゞけ、一日として氣分の勝れた日が無いやうである。これは元々弱い身體であるところへ、烈しき寒氣の爲めに耐へられなくなつたものらしい。春になれば東上したいと云つてゐるのは、旅程もあつた

年頭の句

かも知れないが、一つは氣の置けない人々の多い江戸、割合に暖かさうに思はれる江戸を慕ふ心からでもあらう。

一月か若しくは二月か、路通・殘香・此筋・千川等と歌仙を卷いた。

水仙は見る間を春にえたりけり　路通

窓のほそめにひらく歳旦　殘香

わが猫に野良猫通ふ啼佗て　翁

ほしわすれたるきぬ張の月　此筋

（以下略、一葉集）

## 乙州の餞別俳諧

春暖かくなつて來る頃、大津の藪屋乙州が江戸へ旅をするので、芭蕉・乙州・珍碩・素男・智月・凡兆・去來等によりて俳諧が興行された。

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

何と心厚い餞別の句であらう。これから江戸へ向ふ東海道の道々には、梅の花も美しく咲いてゐるであらうし、若菜も萠えて長閑な春先の景を樂しませて呉れるであらう、乙州よ、

何はともあれ、駿河の鞠子の宿に入つたら、名物のとろゝ汁を腹一杯に食べるがよい。あのとろゝ汁は素敵もなく美味い。あゝわしも行つて食べたいものだよ——と、長い長い道中であるにも拘らず、それを美しい旅として美んでゐる。芭蕉の本心、一つは旅を愛する心、一つは弟子を愛する心の結晶して生れた句である。此の時の歌仙は、右の芭蕉の句を立句として

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとき祝ふて下されにけり　素男
（以下略、猿蓑）

京に赴かん道すがら田家に遊びて、
麥めしにやつるゝ戀か猫の妻
こまかなる雨や二葉の茄子種

大津の醫師江左尙白と共に難波に下るとき、

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

この頃「春の夜は櫻に明けてしまひけり」の句があつたといふ（發句集）。放膽な句にしてよく美しき春の夜を詠み得てゐる。

京都へ出でゝは先づ相國寺を尋ねて

鶯に感ある竹のはやし哉（註、此の句惟然の句とも云はれてゐる）

上醍醐にては

留守といふ小僧なぶらん山ざくら（不詳）

嵐山にては

花の山二町のぼれば大悲閣（不詳）

四月には京に來てゐて、知人に誘はれるまゝ四條の芝居見物などをしてゐる。そして俳諧よりも、見物して遊んでゐる方が面白いなどと云つてゐるやうである。五月の十日には、去來の屋敷から窓守宛に手紙などを書いてゐる。

東花坊支考が陸奥地方へ東行するのを餞別して

此こゝろ推せよ花に五器一具

と、名利を離れて俳諧の眞に遊べと誡めてゐる。即ち五器一具は佛家の器であつて、この一具の五器を身につけて僧の如くに、すべての難儀を意に介することなく、行脚しなければならぬといふ、弟子思ひの心を以て詠まれた句である。「闇の夜や巣をまどはして啼千鳥」は此の時分の作であるか。千鳥は冬であるが、水鳥の巣は夏のものであると云つてゐるのが蓼太である。因に泊船集には夏、陸奥千鳥には冬として入れてある。

　京にても京なつかしやほとゝぎす

以前は京都に棲んだこともあり（季吟の家に或ひは其他の人の家などに）又屢ゝ京を訪れてもゐるのであるから、殊更珍らしいといふやうなことは無い筈であるが、思ひがけぬ時鳥の聲を聞いて、一入京を懷しく思ふたといふのである。見慣れたところでも聞き慣れたものでも、或一つの異つたものが來ると、全く印象を新しくするものである。これもさうした類の句である。季夏廿日小春雅丈宛の芭蕉の書簡にも此の句が入つてゐる。「……殘生いまだ漂泊止ず湖水のあたりに夏をいとひ候猶うら風に身をまかすべきやと秋立つ頃をまちかけ候且兩御句珍重中にもせり賣の十錢（註、十錢をえて芹賣の戻りけり、小春）生涯かろきほど我世間に似たれば感慨不少候口質他にこえ候ていよ／＼風情可被懸御心候愚句、京

にても京なつかしやほとゝぎす、暑氣にいたみ候而及早筆候」云々とある。芭蕉自身も此の句は自分の心境を打出してあるらしく見えて、大分自慢の句の樣でもある。京都は大きな町であるのに、之に反して蕉風門の俳人は非常に少い樣である。俳諧に充たされぬ心のあるにも拘らず、時鳥が啼いたので、平凡な京都が懷しくてならぬと云つてゐる純心さが奥床しい。

## 「猿蓑」出づ

元祿四年五月、去來・凡兆が芭蕉の命を受けて精撰したる蕉門の一大撰集である。撰者が京の重鎭否蕉門の名人である去來と、才氣卓越遙かに古老を凌ぐ鬼才凡兆とであつたが爲めに、撰ぶ所實に用意周到、蕉門粒撰りの發句と連句を收めたるの觀あることは、今更私の言を用ひる迄もない。勿論此の撰集の企ては四年に始つたものではなく、昨三年より着手されてゐたものである。撰者の責任重大なるを感じて、一句も弛がせにしなかつたとは去來もいふてゐる。

猿蓑が蕉門俳書中最高峰に聳えてゐることは、古今を問はず芭蕉研究者の齊しく叫ぶところにして、又繰返して私の叫ぶ必要もあるまいと思ふ。實際數十數百の讃辭を並べるよ

江戸より鳥羽の文臺を取寄す

りは猿蓑一冊、若しくは猿蓑の一端を讀めば、何人も容易に之を察知することが出來るのである。何故斯くも名撰集と唱へられるか、それは先に述べたやうに撰者の宜しきと、熟慮精密なる態度を以て之に當つたからでもある。而してもう一つの原因は、芭蕉の俳境をして一段深遠ならしめたる奧羽行脚の發句を網羅されたからでもあらうと思はれる。

芭蕉は猿蓑が完成された時に如何に喜んだか、此の氣持は一派の師が、同門の俊秀と共に苦心として一大撰集を上梓した時の悦びであつて、此の氣持を理解出來ぬ人は、容易に芭蕉の心持に近づき得ないであらうと思ふ。傳ふるところに據れば、此の撰集成りて無名庵に於て吟講する時、細川玄旨法印から傳つて來てゐたところの鳥羽の文臺、當時江戸に置いてあつたものを、わざ／＼江戸から取寄せたといふことである。芭蕉歿後去來より兒半左衞門に宛てた書簡に

「此文臺の事は御聞及びも候はん季吟老人より亡師へ御讓りの風雅傳來の雅物に御座候根本玄旨法印より紹巴に御傳へ成され貞德季吟亡師と傳はり候斯の如き重器に候へば亡師一代尋常の俳席には御用ひも御座なく深川の重器と承り候までに候しかるに先年猿蓑集撰成就仕り吟聲の砌深川より御取寄せに相成其儘に義仲寺にさし置かれ候……」

私は未だ寡聞にして鳥羽の文臺に就ては、貞德・季吟等に於ても、亦芭蕉自身がこれに就いて言ふてゐることも聞かない。これが若し本當だとすると、芭蕉にしては一代の華かなる事業としたであらうし、且つ此の文臺を用ひて披講に臨む嚴肅さは、藝術と云はんよりは宗教的雰圍氣をさへ想像せしめるものであつて、往時を追憶する吾々は、唯々異様の感に打たれるのである。

芭蕉自身が斯かる態度を持して猿蓑に對し、高門口を揃へて絕讃するも宜べなる哉。確かに蕉門の最上の結實である。其角の序文又這般の消息を詳しく報ずるものであらう。

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起すべき時なれや、幻術の第一としてその句に魂の入ざれはゆめにゆめみるに似たるへし、久しく世にとゞまり長く人にうつりて不變の變をしらしむ、五德はいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり、彼西行上人の骨にて人を作りたてゝ聲はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける、人には成て侍れども五の聲のわかれざるは反魂の法のをろそかに侍にや、さればたましゐの入たらばアイウエヲよくひゞきていかならん吟聲も出ぬべし、只誹諧に魂の入たらんにこそとて我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひけれ

ばたちまち斷腸のおもひを叫びけん、あだに懼るべき幻術なり、これを元として此の集をつくりたて猿みのとは名付申されける、是が序もその心をとり魂を合せて去來凡兆のほしげなるにまかせて書、

これに據ると、元祿二年冬の頃より此の猿蓑の撰集を企てられたものであるかも知れない。孰れにしても短日月の間に撰集されたものではない。集中收むるところは、卷之一、發句（冬）九十四句、卷之二、發句（夏）九十四句、卷之三、發句（秋）七十七句、卷之四、發句（春）百十八句、卷之五、去來・芭蕉・凡兆・史邦の連句、凡兆・芭蕉・去來の連句凡兆・芭蕉・野水・去來の連句、芭蕉・乙州・珍碩・素男・智月・凡兆・去來・正秀・半殘・土芳・園風・猿雖・嵐蘭・史邦・羽紅（凡兆の妻）の連句、卷之六、芭蕉の「幻住菴記」他「題芭蕉翁國分山幻住菴記之後」なる漢文漢詩、及び凡兆日記等である。或ひは煩瑣に亘るかも知れないが、參考として其れ等の一部分を抄錄する。

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

時雨きや並びかねたる魦ぶね　千那
幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　丈艸
鑓持の猶振たつるしぐれ哉　正秀
廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦
舟人にぬかれて乘し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良
しぐるゝや黑木つむ屋の窓あかり　凡兆
馬かりて竹田の里や行しぐれ　乙州
だまされし星の光や小夜時雨　羽紅
新田に稗殼煙るしぐれ哉　昌房
いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　去來
初霜に行や北斗の星の前　百歲
一いろも動くものなき霜夜かな　野水

（以下略）

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏がすみ曇り行衛や時鳥　木節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

時鳥けふに限りて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野ゝ門ン構　凡兆

ひる迄はさのみいそがす時鳥　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす瀧よりかみのわたりかな　丈艸

心なき代官殿やほとゝぎす　去來

戀死なば我塚でなけほとゝぎす　奥刕

松島一見の時千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良
うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉
旅館庭せばく庭草を見ず
若楓茶いろになるも一さかり　曲水
四月八日詣慈母墓
花水にうつしかへたる茂り哉　其角
（以下略）

秋

秋風や蓮をちかくに花ひとつ　不知讀人
此句東武よりきこゆもし素堂か
かつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風
芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通
人に似て猿も手を組秋の風　珍碩
加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曾良

蘆原や鷺の寢ぬ秋を夜の風　江戸 山川

あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆

はつ露や猪の臥芝の起あがり　去來

大比叡やはらふ野菜の露しげし　野童

三葉ちりて跡は枯木や桐の苗　凡兆

文月や六月も常の夜には似ず　芭蕉

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影　同

七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀少年 杜若

みやこにも住まじりけり相撲取　去來

朝がほは鶴眠る間のさかり哉　風麥

（以下略）

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上﨟の山莊にまし〳〵けるに候し奉りて

梅が香や山路獵入ル犬のまね　去來

梅が香や分入里は牛の角　勾空

庭興

梅が香や砂利しき流す谷の奥　加賀 士芳

はつ蝶や骨なき身にも梅の花　半殘

梅が香や酒のかよひの新しき　膳所 蟬鼠

うめの木や花一筋を蕗のたう　共角

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もとゆかし梅の花　芭蕉

瘦藪や作りたふれの軒の梅　千那

灰捨て白うめうかむ垣根哉　凡兆

日當りの梅咲ころや屑牛房　膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

武江におもむく旅亭の殘夢

寢ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙州

辛未のとし彌生のはじめつかたよしのの山に日くれて梅のにほひしきりなりければ舊友嵐窓が見ぬかたの花や匂ひを案内者といふ句を日頃はふるき事のやうにおもひ侍れども折にふれて感動身にしみわたり涙もおとすばかりなればその夜のゆめに正しく見えて悦るけしき有亡人いまだ風雅を忘れざるにや

夢さつて又一匂ひ宵の梅　嵐蘭

百八のかねて迷ひや闇のむめ　其角

（以下略）

以上は各巻の最初の十五句づつを載錄したに過ぎないけれども、これを以て大體を推考することが出來ると思ふ。集中佳吟は非常に多いが、特に目を惹くものは芭蕉の句と凡兆の句である。芭蕉には主觀的の深さを持つた句が多く、故に芭蕉其人を隨所に躍如たらしめてゐる。凡兆には客觀的の透明さを持つた句が多く、一讀々者をして佳景の人たらしめる。丕

體としてこれを眺める時、殆んど桔屈晦澁の跡を去り、都てが素直に詠まれてゐることに一驚を喫するであらう。實に溫雅平明の調を以てしてゐるところは、老成と云はうか蕉門發句・俳諧の圓熟であらう。大部分といふものが在來の發句に影響されてゐないことは、本集の特色とすべきである。それは先づ以て內容的に蕉門俳諧の革新が達成されたから、其處に安住するを得、深沈靜寂の境地を巨象の如く歩むことが出來たのである。從つて自ら詠法も一種獨特な洗練を示すに至つたものである。この樣に有意義な撰集の上梓ならば、世を擧げて歡迎するところであるが、蕉門に於てもこれが絶頂となつてしまつたらしい。それは云ふ迄もなく、師芭蕉の年齡が許さないから止むを得ないものとしなければならぬ。

連句に於ては、前に揭出したるものもあるが、猿蓑としての說明上、再び揭ぐることを諒とせられたい。

鳶の羽も刷(カイツクロイ)ぬはつしぐれ　去來
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉
　人にもくれず名物の梨　來
かきなぐる墨繪をかしく秋暮て　邦
　はきごゝろよきめりやすの足袋　兆
（以下略）

市中は物の匂ひや夏の月　凡兆
　あつし／＼と門／＼の聲　芭蕉
二番草取も果さず穂に出て　去來
　灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
　たゞどびようしに長き脇指　來
（以下略）

灰汁桶の雫やみけりきり／＼す　凡兆
　あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉

新疊敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十の盃　去來
千代經べき物を樣〳〵子日して　蕉
鶯の聲にたびら雪降る　兆
乘出して肱に餘る春の駒　來
摩耶か高根に雲のかゝれる　水
(以下略)

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
笠あたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持ころなれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
(以下略)

以上はその一部分に過ぎないものであるが、自然の妙趣人事の妙味を盡して餘りある。付

句の巧みさ、讀者をして不知不識の間にその俳諧の妙諦にに引き込んでしまふ程の手際さである。一句々々も亦拵へられた言葉でなく、自然に自由に口から流れ出でた所謂咳唾玉を成したもの丶樣に思はれる。何といふ豊かさであらう。人生のすべてを經驗した芭蕉の心の花の咲いた言葉々々であればこそと思ひばそれ迄であるが、それにしても門人等も流石に上手なものである。併しそれには恒に芭蕉の配慮があつたものであらうと思はれる。感情ばかりで行けない連句に、絶えず一頭地を拔いてゐる芭蕉は、身に觸れるものすべてを活かして行けたからではなかつたらうか。禪を學んでも、詩を讀んでも、歌を讀んでも、名家の文集を讀んでも總てを自分のものとする事が出來たので、他の人々は却々芭蕉まで追ひ着く事が出來ない筈である。此處に芭蕉は純粹の詩人にして、又詩人以外の才能を有つてゐたと觀ることが出來るのである。これに依つて芭蕉は如何なる階級の俳人をも指導し得たのである。又芭蕉が俳人及び俳人以外の如何なる階級の人からも、敬仰されるといふ一因が此處に在ると云へやう。筆のき動で大分見當違ひの方面へ進んでしまひ、又話も前後してしまつた感がある。

## 芭蕉落柿舍を訪ふ

臨川寺に詣づ

無名庵に棲み飽いた芭蕉はふら〳〵と旅に出掛けてゐる。四月十八日には去來の別墅なる嵯峨の落柿舍に入つた。ともに來た凡兆は夕方に京都へ歸つてしまつた。芭蕉は閑居にして心を樂しませて呉れる落柿舍を非常に氣に入つたので、暫らくの間此處に居ようと決めた。別墅として食物も衣具も總て調ふてゐたから、暫しの間棲むには何の不自由もなかつたのである。これ去來が何等の不自由なきやう、必要なものは皆京都より運んで置いたからである。却々手の入つた贅澤な別墅であつたらしいが、或ひは建物の一部分や壁なども廢れてゐた樣である。傳ふるところに據れば、秋風の隱宅だつたものを、去來の父が買ふて嵯峨に移したものだといふことである。此處に芭蕉は四月十八日から翌五月四日まで居た。この滯在十七八日間の日記が「嵯峨日記」である。

落柿舍には、机・硯・文庫・白氏文集・本朝一人一首・世繼物語・源氏物語・土佐日記・松葉集そして唐の蒔繪の書いてある五重の器に種々の菓子を盛つてあり、名酒一壺と盃が具へてあつたといふ。これによつて去來の趣向も察せられるが、芭蕉は大いに滿足してゐたやうである。記に曰「我貧賤をわすれて清閑をたのしむ」と。

四月十九日は臨川寺へ詣でた。昭君村の柳、巫女廟の花の昔を思ひ出して

凡兆夫妻落柿舍を訪ふ

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪のしげりや風の筋

の句を詠んだ。前句は、かの榮耀榮華を擅にした小督の局も、今は此の藪の中の土と化してゐる。このすく〱と伸びてゐる竹の子、これが小督の局の姿ではないだらうか。と人の世のはかなさにひどく心を打たれて詠んだ句であらうと思ふ。日記にも「松の尾林の中に小督やしきといふあり。すべて上下の嵯峨に三所あり。いづれかたしかならん、かの仲國が駒とめたる處とて、駒どめの橋と云、此あたりに侍れば、しばらくこれによるべきにや、墓は三軒屋の隣藪の中にあり、しるしに櫻を植たり、かしこくも錦繡羅綾の上に起ふして、終に藪中の塵芥となれり」とある。

日暮方落柿舍に歸つた所、京都より凡兆が來てゐた。そして去來は京都へ出て行つた。

四月二十日には凡兆の妻羽紅が、北嵯峨の祭を見に出て來た。此の日芭蕉は凡兆夫婦と靜かに初夏の日に親しみ、落柿舍の風致に浸つた。竹林の前にある柚の木の花が芳しく香つたので

柚の花やむかししのばん料理の間

又此の夜の作に

　ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

此の日羽紅にも「またや來ん苺赤らめ嵯峨の山」の句があつた。午過ぎか去來兄の使が來て美味しい菓子と調菜を持つて來た。此の夜は小さい部屋乍ら、芭蕉・去來・凡兆夫妻それに使の者と五人して寐た。此の時の樣子を詳かに日記に錄してある。

去來兄の方より、菓子調菜の物など送らる、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに上下五人擧り臥たれば、夜もいねがたうて夜半過るよりをの〳〵起出で、二晝の菓子盃など取出て、曉ちかきまで話明ス。去年の夏凡兆が宅に臥たるに、二疊の蚊屋に四國の人伏たり、おもふ事よつにして夢も又四種、と書捨たる事共など云出してわらひぬ。

何といふ溫かい生活であらう。生活に何等の屈托もなく、宛ら聖者相寄る生活の樣である心と心との融け合つた生活、そこに淸らかな自然が牡鷄の雛をおふ如く包圍してゐるだけである。去年凡兆の家で二疊の蚊屋に故鄕を異にした四人が、各〻異つた夢を結ぶなどと書いたことに思ひを致して話し合ふ、吾々は唯一日なりともかうした氣分に浸つて見たいも

芭蕉獨居して閑寂にひたる

のである。翌四月二十一日、去來は落柿舍に止まり、凡兆夫婦は京都へ歸つた。雨が降つてゐるので何處へも出掛けられぬし、昨夜の寢不足もあるので、芭蕉は終日寢てゐた。夕方去來は京都へ歸つた。夜に入つて芭蕉は、幻住庵に於て書捨てた反故の清書などをしたといふ。

四月二十二日は雨が降り、それに獨居の淋しきまゝに無聊書などをした、

喪に居るものは悲しみをあるじとし、酒を飲むものはたのしみを主とし、愁に住するものは愁をあるじとし、徒然に住するものはつれ〲を主とす。淋しさなくばうからまし　筆者註、訪ふ人もおもひたえたる山中に淋しさなくばなほうからましノ歌）と、西上人のよみ侍るはさびしさを主なるべし、又よめる、

　山里にこはまた誰をよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを

獨すむほどおもしろきはなし、長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば主は半日の閑をうしなふと、素堂此言葉を常にあはれむ、予も又

　うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とはある寺に獨居していひし句なり、

味ひ味ふべき言葉である。斯樣な芭蕉の隨感隨想こそは、彼の人生の深さを語るものであ

江戸の便り届く

り、且つ此の境地を持つてゐたればこそ、彼獨自の蕉風を拓き得たのである。この境地はいふまでなく、芭蕉の書き示してゐるやうに西行上人の閑寂境を追ふて、始めて芭蕉自身の閑寂境に辿り着いたのである。これは今に始つたことではない、終始一貫――三十餘歳にして閑寂境に入らんとして今日をなしてゐるのである。其間意識して閑寂境を追ひ求めて來たのではなく、止むに止まれぬ心より此の境に這入つて來てゐるのである。これが芭蕉の人生であつたのだ故に花鳥風月悉く閑寂境に反映して、芭蕉の作となつてゐるのである。主義を主義として一貫することは、努力によつて成し得られるものであるが、無意識の間に一つの道を貫いて行くことは、其の人をして沒我的に深遠の境涯に入らしめなくては、容易に成し得られるものではない。千里獨往、最後まで閑寂境を追ふて行つた芭蕉の偉さには、何人も比し得ることが出來ない。華麗・妖艶な作があるとすれば、それは多く芭蕉の青年時代の作である。はなやかさ、或ひはなまめかしさの含まれた後年の作には、何處かに必ず寂しさが潛んでゐるやうである。

同じ二十二日、春江戸へ出向いた乙州が歸つて來たといつて、朋友門人からこと付かつた書簡を澤山屆けて呉れた。その中で曲水の書狀には、深川の芭蕉庵の舊跡を尋ねて、隣

の宗波に逢ひ、そして「むかし誰小鍋あらひしすみれ草」の句を得たと記してあつた。尙ほ嵐雪からも二句屆いた。芭蕉はどんなに喜んだことか、江戸の人々に再會した思ひがしたであらう。十一月江戸へ歸つたのも、江戸の誰彼に逢ひ度いとしきりに心が動いたからで、此の時の氣持なぞも可成心深く影響してゐるのではあるまいかと思ふ。

四月二十三日は次の句を詠んでゐる。

手を打てば木魂に明る夏の月

夏の夜や木魂に明る下駄の音

笋やをさなき時の繪のすさみ

麥の穗や涙にそめて啼雲雀

一日〳〵麥あからみてなくひばり

能なしの眠たし我を行々子

四月二十四日、膳所の昌房、大津の尙白より書簡が着た。去來も來、凡兆も尋ねて來た凡兆は夕方京都へ歸つて行つた。此の日は堅田本福寺を訪ふた。

四月二十五日は史邦・丈草等が尋ねて來て、或ひは俳諧を談じ、或ひは感想などを詠ん

杜國に寄する芭蕉の愛情

だ。又江戸から歸つた乙州が尋ねて來て、盡きせぬ江戸の話に花を咲かせた。

同二十六日は丈草・芭蕉・去來・乙州にて俳諧が興行された。

芽出しより二葉にしげる柿の實　丈草
はたけの塵にかゝる卯の花　芭蕉
蝸牛たのもしげなき角ふりて　去來
人のくむうち釣瓶まつなり　丈草
有明に三度飛脚の行やらん　乙州

一葉集には「人のくむうち釣瓶まつなり」が凡兆作としてある。翌二十七日は誰も訪れて來るものがなく、閑を得て獨り寂しんでゐたといふ。

### 杜國を夢見る、其他

四月二十八日、元祿三年に他界した薄命の俳人杜國のことを夢みて啼泣した。日記に「夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る、心氣相まじはる時は夢をなす、陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢みる、飛鳥髮をふくむ時は飛鳥をゆめみ、帶を敷寢する時は蛇を夢みるといへり、――我に志深く伊陽舊里までしたひ來りて夜々床を同じく起ふし、行脚

落柿舍に飽く

の勞をたすけて百日がほど影のごとく伴ふ、片時もはなれず、或時はたはふれ、或時は悲しみ、其志わが心裏に染てわするゝことなければなるべし、覺てまた袂をしぼる」とあるこの通り吉野行脚に於ては、師芭蕉を親の如くに思つて仕へた杜國である。其中芭蕉が彼の流配地なる三河の保美まで尋ねては慰めた程である。妻も無ければ子を持たぬ芭蕉が、子を愛する情は知らなからうけれども、子に對する愛情以上に愛してゐたから、夢を見たのである。弟子を思ふ溫情の篤きこと、如何に言辭を弄しても、芭蕉の心情を說き盡すことは能きない。或人は妻を持たぬ芭蕉故、杜國と同性愛に陷つたのであると云つた。此の言や全く聽くに堪へない卑言である。

四月三十日・五月一日に江州の李由が來訪、尙白と千那から消息があつた。二日には、吉野から熊野へ御參りするといつて曾良が尋ねて來たので、江戸の話をして悦んだ。そして二人で大井川に舟を浮べて嵐山の景を賞した。三日は一日中雨が降つてゐたので、江戸の話を聽いて夜を明かした。四日は晝寢をしてゐたが、明日この落柿舍を去らうと決めて名殘を惜しみ

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

落柿舍を出づ

大津に遊ぶ

の句を作つた。この句を珍碩の洒落堂の額破を詠んだものであると傳へられもするが、それは確かに誤傳である。

五月五日の節句に、落柿舍に居ることを淋しく思つて出たのではあるまいかと考へられる。湖頭なる無名庵に赴かんとして、四條河原の納涼に打交り

川風や薄かき着たる夕すゞみ

「四條河原すゞみとて、夕月夜の頃より有明過ぐる頃まで、川中に床をならべて夜すがら酒のみ物くひ遊ぶ。女は帶の結びめいかめしく、男は羽織長う着なして、法師老人ともに交はり、桶屋鍛冶屋の弟子こまでいとま得顏にうたひ罵るさすがに都のけしきなるべし」（己が光）とある。これをもつて當時の光景を偲ぶことが出來る。

大津に到り、本間主馬（丹野）の亭に招かれて、其の家名を稱へ

ひら〳〵とあぐる扇や雲のみね

蓮の香に目を通はすや面の鼻

の二句があつた。尙ほ連衆八人にて俳諧もあつた。同じく大津の湖仙の家に招かれて

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

「はつ秋やたゝみながらの蚊屋の宿」「稲妻にさとらぬ人のたふとさよ」は翌年出でたる集（西の雲・己が光）より推して此の頃の作ではあるまいかと思はれる。「ものいへば唇さむし秋の風」を此の年の作であるとする人があるが、それは何に據られたものか、作年不詳の句である。

正秀亭の歌仙

探志・正秀・昌房・盤子・芭蕉・及肩・楚江等によりて行はれたる歌仙

御明の消て夜寒や蟄むし　探志
　月さしかゝる庭のこね土　正秀
旅の空國は菜をまく頃ならん　昌房
　手拭帶のしめぢからなき　盤子
廣敷の草履を人に直させて　翁
　又こがしたる魚の燒やう　及肩

（以下略、芭蕉翁諸書集）

及び芭蕉・路通・史邦・丈草・去來・野童・正秀の七吟歌仙

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　芭蕉

下樋の上に葡萄かさなる　　路通
酒しぼる雫ながらに月暮て　　史邦
扇四五本書なぐりけり　　丈草
呉竹に置なをしたる涼牀　　去來
蓮の卷葉のとけかゝる比　　野童
笈摺もまた新しくかけつれて　　正秀
遊行の輿ををがむ尊さ　　芭蕉
（以下略「星會集」）

は此の時分の作である。右は膳所の正秀亭にての俳諧であり、初會に招かれたる時の吟に

月代や膝に手をおく宵の宿

の句があつた。右歌仙の立句なる「牛部屋に蚊の聲弱し秋の風」は後日訂正されて「牛部屋に蚊の聲闇き殘暑哉」となつたのである。

堅田の森瀨（柳瀨といふもあり）可休亭に於て

祖父と親その子の庭や柿みかん

石山寺に詣づ

石山寺に詣でて

　橋桁のしのぶは月の名殘かな

八月は閏があつたので、此の句は閏八月十八日石山寺參詣の折であるらしい。橋桁といふのであるから、瀨田の橋を詠まれたものであらう。尚ほ此の頃

　名月は二つ過ぎても瀨田の月

の句があつたといふ。此の時の吟行には珍碩・[illegible]子・[illegible]等が同道し、且つ各々句を詠んでゐる。

　膳所の曲水（曲翠ともいふ）の家に遊びては

　　乳麪の下焚立る夜寒かな

支考がこの句を、大和の三輪の旅寢の折作られたものであるといふのは好ましからぬ說である。

京都と蕉風

　芭蕉は京洛の地に飽いて東武行を欲したのか、江州・濃州・尾州には蕉門の俳人も澤山居るが、京都には少なかつた。矢張京都は貞門が風靡してゐて、容易に其の地盤が動からとはしなかつたのである。芭蕉翁が「我家の俳諧は京の土地にあはず」と申されたと支考

が云つてゐるが、果して本當であるか。何といつても京より江戸が盛んであり、江戸には錚々たる高弟其角が芭蕉を待ちあぐんでゐる。

### 江戸へ歸らんとす、其他

冬十月、江戸へ赴かんことを決心し、先づ彦根在の平田（一名月の澤）の明照寺の僧李由の許に到りて、羇旅の心を澄まし

たふとかる泪や染て散紅葉

百年のけしきを庭の落葉かな

前者は盡せぬ別れを惜しんでの句、此の時李由の附句は「一夜しづまる張笠の霜」であつた。後者は、明照寺が此の地に移されて百年經たといふことを詠んだ句である。李由は風雅に志篤く、芭蕉の身を人一倍案じてゐた人である。後彦根近くの田家に宿りて

稻こきの姥もめでたし菊の花

の句があつた。此の江戸行には支考と桃隣を伴つてゐる。

美濃の垂井に住む矩外の宿を訪ふて寒さをかこち

作り木の庭をいさめるしぐれかな

それから同じく美濃なる耕雲の別墅に遊びては

　木がらしに匂ひや付し歸り花

大垣に出でゝは千川を尋ねて憩ふた。其の折の句に

　折々の伊吹を見てや冬籠

十月二十日頃であらう、熱田の梅人亭に泊りては次の一句があつた。

　水仙や白き障子のともうつり

之を立句としての俳諧には、芭蕉・梅人・支考・湘水・辨三・桃林・馬啼・野圃・利雨・越人。桐葉の諸氏が出席してゐる。昔馴染みの人に逢ひたことは、芭蕉にとつて大きな喜びであつたらうと思ふ。

　水仙やしろき障子のとも移り　芭蕉
　　炭の火ばかり冬のもてなし　梅人
　宵の月舟を淺みに引あげて　支考
　　又はら／＼とこほろぎの啼　湘水

（以下略）

又其の頃斜嶺亭に於ても俳諧が擧行された。集まる者芭蕉・斜嶺を中心に、如行・荊口・文鳥・此筋・左柳・恕風・殘香・千川の十名であつた。

もらぬほどけふは時雨よ草の屋根　斜嶺
火を打聲に冬の黃鳥　如行
一年の仕事は麥におさまりて　芭蕉
かき結舟をさし廻す也　荊口
打連て弓射に出る有明に　文鳥
山雀籠をさげる小坊主　此筋

（以下略、一葉集）

太田白雪を訪ふ

名古屋の月空庵露川が入門したのは此の時分である（湖中の書による）。それから三河國設樂郡新城の太田白雪を尋ねた。白雪には風雅の子二人があつたので、芭蕉はこの二人の子に桃先・桃後の俳號を與へた。桃先には「しのぎかね夜着をかけたる炬燵かな」桃後には「節季候のはりあひぬかす明家哉」の句がある。芭蕉は此處白雪亭に於いて次の句を詠んでゐる。

白雪亭の歌仙

其匂ひ桃より白し水仙花

此の句を立句として、芭蕉・白雪・桃隣・芦鳫・支考・以之・眉東・淡水・桃先・桃後・桃鯉・雪丸等により俳諧が行はれてゐる。

其にほひ桃より白し水仙花　芭蕉
土屋藁家のならぶ薄雪　白雪
朝から背ならす鳥の來て　桃隣
はやふ野分の吹てとる也　芦鳫
洗濯のいとまをもらふ宵の月　支考
野郎のわたすきり／＼す籠　以之
（以下略、茶のさうし）

やがて同所の家士脊沼權右衛門の家を訪ふた。

京に倦て此木がらしや冬住居

同じ頃鳳來寺に参籠して

木がらしに岩吹とがる杉間かな

夜着ひとついのり出して旅ね哉

此の頃持病が出でゝ大分苦しんだやうである。それは冬の事故いやに寒い時雨に見舞はれたせいではあるまいかと思ふ。次の句は豫定もしてゐない家へ宿を乞ふた時の吟ではないだらうか。「名をなのらする」と、即ち宿帳へ名前などを書かせられたものであらう。島田近くにての作であらうが、傳記にいふ塚本如舟亭にての作では無いやうに思はれる。

宿かして名をなのらする時雨かな

泊船集に據ると「馬方はしらじ時雨の大井川」の句が島田なる塚本氏宅にて詠まれたものとしてあるが、確かではない。此の句は十月二十二日附洞水宛の書簡の中にも入つてゐる。

**江戸へ着く**

冬十一月の五日漸く江戸へ着いた。勿論支考と桃隣が隨行してゐる。

都出て神も旅寢の日數かな

これは江戸へ着くや、元祿二年春奥羽行脚に旅立たれてから、今日まで逢はないでゐた江戸の俳人に應接遑なく、悦びのうちに感想ありて詠まれたものであらうと思ふ。「長月の末つ方都を出で神無月三十日に近き頃沼津の驛に至る宿の主の望に任せて風流もだしがたく

「枯尾花」の句

筆を走らす」とあるは如何か。「むつ千鳥」「句選」「己が光」「一葉集」「翁略傳」孰れも江戸へ歸りての作とある。

三秋を經て草庵に歸れば舊友門人日々にむらがり來りていかにと問へば答へ侍る

兎もかくもならでや雪の枯尾花

芭蕉が三秋の感慨實に此の一句に盡きてゐるといふてよいであらう。此の句は元祿六年の作ではないかといふ說もあるが、暫らくは此年の作として置かう。其角が書きたる「枯尾花」は此の句を取つて名付けられたものであらう。仙化の父の追善には左の句を詠んでゐる。

袖の色よごれて寒しこいねずみ

芭蕉庵は明五年、元の芭蕉庵近くに再興せられたのであるが、それまで、即ち十一月江戸へ着いてからは一體何處に居たのであるか、橘町に假住ひをしたと見るのが穩當である栖去之辨にも「こゝかしこうかれありきて橘町といふところに冬ごもりして睦月きさらぎになりぬ」とある。元祿四年四十八歲も右にいふ橘町に於て年を迎つたのである。

私の擧げた發句は主として句選年考や芭蕉翁略傳に從つた。作年代の不明な句は成る可く揭げないことにした。今年に芭蕉が參加して詠まれた連句の幾分かは、其の都度參考に擧

げて置いた。尙ほ今年の作と見らるゝものに

衣裝して梅改むる匂ひかな　曾良
　蝶めづらしき入口の松　前川
掃よせて消る雪をやかこふ覧　路通
　石の窪みに墨を摺けり　はせを
（以下略、眞向翁）

蠅ならぶはや初秋の日數かな　野童
　葛もうら吹かたびらの皺　芭蕉
小燈をさはらぬ萩にかけ捨て　路通
　釣して來たる魚の腸　史邦
一通りみぞれにくもる朝月に　丈草
　只そろ〳〵と背中打する　路通
（以下略、一葉集）

うるはしき稻の穗なみの朝日かな　路通

雁もはなれず溜池の水　昌房

白壁の内より砧打そめて　芭蕉

蠟燭の火をもらふ夕月　正秀

（以下略、菊の露）

鈴馬の拍子に乘て口をとる　桃先

世繼をいのれる九世の觀音　桃後

佗人に明てほどこす小袖櫃　芭蕉

あられはらめく谷の笹原　支考

（以下略、一葉集）

潮水より光り出しけり比良の雪　芭蕉

浪にまぶれていさゝとる人　丈草

哥よめと友がこしたる文ときて　許六

おくそこもなくて冬木の梢かな　露川

小春に首のうごくみの虫　芭蕉

木がらしに手を當て見ん一重壁　　規外
四日五日の時雨霜月　　芭蕉
胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　　芭蕉
たねはさびしき茄子一もと　　如行

などがある。

# 第十三章　晩年の芭蕉（一）

（四十九歳　元祿五年　西暦一六九二年）



## 元祿五年（四十九歳）

江戸へ來た芭蕉が暫らく橘町に假住ひをしてゐたことは、四年の終りに於て述べたところである。重複の嫌ひはあるが、彼の「栖去辨」を掲げて、心情を窺ひ且つは生活狀態を考察して見たいと思ふ。

こゝかしこうかれありきて橘町といふところに冬ごもりして睦月きさらぎになりぬ、風雅もよしや是までにして口をとぢむとすれば風情胸中をさそひて物のうちらめくや風雅の魔心なるべし、家を放下して栖を去り腰にたゞ百錢をたくはへて柱杖一鉢に命を結ぶ、なし得たり風情終に菰をかぶらむとは、

四十九歳の芭蕉、俳諧に心を碎き、相當多くの門弟を有してゐる芭蕉ではあつたが、當時の學者或ひは軟文學者等と比較すれば、實際惠まれぬ生活に置かれてあつたに違ひない。勿

論精神生活に於ては完全に滿されてゐたから、此道に只管精進が出來たわけなのである。物質的に滿たされない、といつて滿たされないにしてもその程度がある。今日の生活から見ると滿たされ過ぎてゐたといつてもよいであらう。今の人々が、殆んど誰もが、芭蕉は貧困と鬪ひつゝ、而かもそれに超然として生涯を終つた人であるといふ。それは芭蕉の日記、紀行、句、書簡などの表面を觀察して、其の生活狀態などの詳細に亘つて打眺めようとしないからである。

芭蕉は一般から比べると決して贅澤といふ程ではなかつたかも知れないが、彼の趣味が凝つてゐるだけに身廻品物など、それから衣類笠などは相當手の入つた、所謂金のかゝつたものを用ひてゐるのである。獨身であるから、一文なしでも平氣で暮してゐたのではあるまいかと考へられるかも知れないが、否々芭蕉は例の次郎兵衞•壽貞それに使ひ歩きをさせてゐた中童などを生活させてゐたのである。或ひは身寄者で貧しい者へは物や金なども送つてゐたわけである、殊に故郷伊賀へは、相當大金などを送ることがあつたではなからうかと思はれる(曲水宛借金の書簡)。こうして見ると少しばかりの生活費を以ては賄ふことの出來ない生活である。世の人々から芭蕉々々と注目されないうちは、文字通りの貧乏生

活もしたに違ひない。併し元祿以降の芭蕉は、今日考へ程貧なる芭蕉、惠まれてゐない芭蕉ではない。旅で路通を拾ひ、草臥れて直ぐに馬を借る程の餘裕のあつた彼である。

歳旦の吟として次の句があつたといはれてゐるが、糸切歯（石橋述）に翌六年の吟と（許六も）云はれるので判然とはわからない。支考は此の句を無季の句といふてゐるが、名勝以外に無季の句を作らぬ芭蕉である。これはいふまでもなく、申の年を詠まれたものである、思へば芭蕉も申年生れである。

年々や猿に着せたる猿の面

次に掲ぐる書簡を見ても明かに新年の句であることがわかる「昨日は御はや／＼と御慶ニ御出被下候儀ニつれ御さ候てせた意風方へ同道ニて參り候故不懸御目殘念に存候さて／＼歳旦之句御たづね置候御書中拜見申候如此ニ候「年々や猿に着せたる猿の面」、おかしき句ニて御座候又々永日懸御目萬々可承候以上、五日、松風丈、はせを」

支考が脇を付けて俳諧があつた。

鶯や餅に糞する緣の先　翁

日は眞すぐに晝のあたゝか　支考

藪入は只やぶ入と見せかけて　　同
なぐさみながら箒持也　　翁
村がらす月夜〳〵に啼て居る　　同
かぜも吹ぬに笹の葉の露　　考

（以下略、百囀）

芭蕉翁繪詞傳に掲げてある「數へ來ぬ屋敷々々の梅柳」は草庵にての作である。

「桃とさくら」の句

次に芭蕉翁略傳に元祿五年の作として出してある句に

草庵に桃櫻有門人に其角嵐雪あり

兩の手に桃とさくらや草の餅

がある。他に記すところを見ると、元祿六年或ひは七年の作ともなる。先づ疑問の句とすべきであらう。此の句を立句に嵐雪・其角と三吟歌仙

兩の手に桃とさくらや艸の餅　　芭蕉翁
翁に馴し蝶鳥の兒　　嵐雪
野屋敷の火繩もゆるすかげろふに　　其角

山のあなたの鐘聞ゆ也　翁

（以下略、未來記）

があつたといふことであるが、蓼太の「俳諧未來記」の集に收められたるものにして蓼太の僞作なるや否やが問題である。「猫の戀やむ時閨の朧月」はこの頃の作であるかも知れない。此の春の作としてよく掲げられる「おとろへや齒に喰ひあてし海苔の砂」は前年なる元祿四年の撰集にも出でてゐるのであるから、遲くとも四年か、若しくはそれ以前の作であることは間違ひない。孤石が奥羽の旅に行くのを送りて

むく起に隣の花のにほひかな

或る雨上りの明方、時鳥の初音の爽かなるを、五尺のあやめ草に水をかけられるが如しといはるゝに感を致し、ひたぶるに時鳥の美音を讃へて

時鳥啼くや五尺のあやめ草

の句があつた。四月九日、昨年死去せる岡村不卜の一周忌にあたり、不卜の門人琴風が一周忌追善俳諧を興行したので、次の一句をものした

不卜追善の句

ほとゝぎす啼く音や古き硯箱

又この時分の作に

鎌倉を生て出けんはつ松魚

句の裏の意として世の無常をも含められたものか、即ち鎌倉を意勢よく出でて江戸へ來る人の果敢くなる、といふやうなことも考慮のもとにしてあるのかも知れない。

子供等よ晝顔咲きぬ瓜むかん

も此の夏の吟と思はれる(發句集)。陶淵明の歸去來辭の中の文に魅せられ、且つ其の趣向を美望することやゝ久しく

窓なりに晝寢の臺やたかむしろ

と詠み、「水無月や鯛はあれども鹽鯨」も此の頃か、「葛の松原」に、淸少納言も水無月の鹽鯨は知ないであらうと云つてあるところはおもしろい。

## 芭蕉庵新築さる

元祿二年奥羽行脚に出掛ける時草庵を讓つてしまつた芭蕉の心は、單純といふでなく、眞實である。此の心情は惜まうとして惜めるものではない。益〻愛したくなるばかりである草庵なき芭蕉は再び芭蕉庵を欲したであらうし、又門弟達も默つてはゐなかつた。五月中

句には舊芭蕉庵近くに草庵が建てられたのである。此處に芭蕉庵の芭蕉を移し植えたので又此處が芭蕉庵になつたわけである。新築された芭蕉庵の樣子は「移芭蕉辭」に詳しいからそれを參考に記してみる。

……一とせみちのくの行脚思ひ立て芭蕉庵すでに破れむとすればかれは籬の隣に地を替へてあたり近き人々に霜の覆ひ風の圍ひなどかへすぐ＼賴み置てはかなき筆のすさびにも書き殘し……今月五日の半花たちばなのにほひもさすがに遠からざれば人々の契りも昔にかはらず猶此あたり得立ちさらで舊き庵も稍近う三間の茅屋つきぐ＼しう杉の柱いと淸げに削りなし竹の枝折戶安らかに葭垣厚くしわたして南にむかひ池にのぞみて水樓となす、……名月のよそほひにとて先づ芭蕉を移す、……僧懷素はこれに筆をはしらしめ張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり、予其二つをとらず唯此陰にあそびて風雨に破れやすきを愛す、

草庵の趣向には杉風・枳風・曾良・岱水等が心を粉にしたものゝやうに傳へられてゐる。富士を眺めるにも、月を眺めるにも絶好の地であるらしい。自分の棲家を建てゝ、貰ふにしても、種々な注文を出して氣に入る樣に造つて貰ふといふのが、何時も芭蕉の願ひである。

贅澤と云へば是以上の贅澤は無いわけであるが、趣味と云へばそれまでのことである。

ばせを葉を柱にかけん庵の月

は新草庵にて作られた句であらう。

一緒に江戸へ出て來た桃隣は芭蕉庵にゐたが、支考は草庵再興の頃（或は前か）奥羽行脚の長途へ出掛けて行つた。新庵を祝ふて俳諧の興行せらるゝや、集る者凉葉・青山・曾良・濁子・嵐蘭・岱水・曲水・嵐雪・如誰の九人、主人芭蕉を加へて十人である。

新庵を祝ふ俳諧興行

風流のまことを鳴やほとゝぎす　凉葉

旅のわらぢに卯の花の雪　芭蕉

砂川にひたす双釜の傾きて　青山

門違へする醫者の麁相さ　曾良

月の夜を見知らぬ犬も靜也　濁子

白き西瓜も今は凉しき　嵐蘭

庫裏姥の手を束たる盃の中　岱水

ぬるみ一ッとのぞむ六尺　曲翠

三ッ目より人もしたしむ契りにて　嵐雪

心もある熟假名に名を書　涼葉

（以下略、鄙懷紙）

蕉門の圓き圓熟、風流の極致なる風流のまことを喜び祝ふたのであらう。此の頃とて俳諧と云へば、矢張貞門の俳諧が斷然世を壓してゐたのではあつたが、貞門の勢力は日々に消え薄れ、唯其形骸を死守するに過ぎなかつたやうである。而かも貞門の重鎭等さへも蕉門の俳諧に影響され、自然蕉門に近くなりつゝあつた狀態である。されば實勢力は蕉門を措いて比するものがないといつても過言ではあるまい。

**許六蕉門に入る、其他**

江州彦根侯の重臣なる森川許六が正式に蕉門に弟子入りをしたのは此の時分である。彼の記すところに據ると、八月九日桃隣を仲媒に深川芭蕉庵を訪ふて蕉門に入つたと云つてゐる。山口素堂の母の七十七の賀祝に招かれて

七株の萩の手もとや星の秋

の句があつた。此の時は嵐蘭・沾德・曾良・杉風・其角等も祝句があつた（素堂追善集なる

閉關說を作る

通天橋）。

此の頃であらうか、「閉關說」を作りて以て自らの戒めとした。宗教的に深く入りて人間的嗅味を超越した副產物である、と見ることは些か大袈裟過ぎて當らないではないかと思ふ。併しこれを作るにしても、取り立てゝいふべき目的も、或ひは手段もありはしなかつたと思ふ。世俗的なことを聞くこと、見ることに飽いたでもあらうし、又利害關係・情慾などに心を苦しめてゐること、そのことが世の普通のことゝは云ひ乍ら、さうした執着を或ひは悲しみ、或ひは唾ひ度くも思ふ心が時折湧き出でたであらうと思ふ。貧に苦しみ、富を得ることに心を用ひてゐるうちに人生を終る、こう考へて來ると實に儚い人生である。斯樣に思考して來ると、總てのことが億劫である。最早自分は追つ付け五十の齡である、さあ〳〵閑を得て、老いを樂しんでゆくことにしようと決めて「閉關說」が出來たのではあるまいかと思ふ。

突き詰めれば芭蕉の人生觀の致すところだといふことになつてしまふが、こうした人生考察が出來る迄には、禪や俳諧が大きな影響を與へてゐるには違ひないとはいふものゝ、日常生活に於て、絕えず支配される世間といふものを考慮に入れないでは、芭蕉の人生を

正しく檢討出來ないではないかと思ふ。次に彼の作れる「閉關說」の部分々々を拔抄し、而して後に芭蕉の心底に觸れてみたいと思ふ。

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、あはれなるかた〳〵もおほかるべし、……老の身の行末をむさぶり米錢の中に魂をくるしめて物の情をわきまへざる…… 人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘年也。…… 五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したる、寢覺の分別何事をか貪る、おろかなる者は思ふ事多し、煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝るゝもの也、…… 唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならむこそ老の樂とはいふべけれ、

と感想を述べて

人來れば無用の辨あり、出でゝは他の家業を妨ぐるも憂し、孫敬が戶を閉て、杜五郞が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頑夫、自書みづから禁戒となす

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

と記してゐる。これを一言にして云へば、無用の自己を世に恥ぢると共に自らを慰むるの言葉ではなからうか。俳諧などをして渡世する自分、世の中には無用である。世の中には毒にも藥にもならぬ自分であることはよく承知してゐる。殊によると世間には邪魔であるかも知れないとさへ感じてゐる。といふのは、世間の人々は朝早く起きて働き、夜は早く休む。然るに自分はこれと反對に朝起は好かぬし、夜は遲くまで起きてゐたいのである。一面世間に對しては濟まないことゝは思ふが、又一面には自分と合はない世の人々とを五月蠅く感ずる。併しながら熟々考へると、世には自分以上罪を作る人の多いことよ、又一生つまらぬことに身心を勞する人のいかに多いことよ、どうしてあんなにもさとり切れないものであらうか、と自らを慰めてゐるものゝ樣である。それで結局は他人へ邪魔をせず、又自らも邪魔せらるゝことなく閑を樂しんで行かうと洩らしてゐるのである。

右閉關の說は勿論俗界から超然とした芭蕉の心でも無ければ、詩人芭蕉の心懷でもない四十九歲の今日迄世の苦勞を嘗めて來た人間芭蕉にして、始めて云ひ得るところのものである。この閉關の說通り堅く門を鎖して籠居することしばらく、爲めに折角芭蕉庵を訪ふた人々にして芭蕉に面接することを得ず、空しく立歸つたといふことさへある。

俳諧深川集成る

深川の夜遊びに、芭蕉・酒堂・嵐蘭・岱水等が四吟歌仙を編んだのは九月であつた。

青くても有べき物を唐がらし　　芭蕉
　提ておもたき秋の新鍬　　酒堂
暮の月槻のこつぱかたよせて　　嵐蘭
　坊主がしらの先に立るゝ　　岱水
（以下略、深川集）

酒堂卽ち濱田珍碩は九月に大阪から江戸へ出て來て、翌元祿六年二月迄江戸に在住してゐたのである。「俳諧深川」の序に「壬申九月に江戸へくだり、芭蕉庵に越年して、ことしきさらぎのはしめ洛にのぼりて、ふろしきをとく、酒堂」と記してゐる。俳諧深川は此の期間中の俳諧を集めて一書としたものである。俳諧深川は範圍も狹く、收容せる俳諧も僅かなところから、兎角重視されない傾があるが、蕉風の隆盛圓熟其の頂上にある時分の作であるだけに、或ひは七部集以上の價値をさへ持つ内容であることは、今更私のいふ迄もなく既に故人の說くところである。

同じく九月草庵の留守に杉風・酒堂・曾良・石菊・桃隣・宗波等の開莚せる俳諧

冴そむる鐘ぞ十夜の場の月　　杉風
　しのび返しにこのだい／＼　　酒堂
馬取の卸脊乘行霜ふみて　　曾良
　朝のいとまの提たばこうる　　石菊
（以下略、同）

次いで許六亭にては酒堂・許六・芭蕉・嵐蘭の四人で興行された。

　二日とまりし宗鑑が客、煎茶一斗米五升、
　下戸は亭主の仕合なるべし

洗足に客と名の付寒さ哉　　酒堂
　綿館双ぶ冬むきの里　　許六
鶺鴒階子の鎰を傳ひ來て　　芭蕉
　春は共まゝなゝくさも立ツ　　嵐蘭
（以下略、同）

それから支梁亭の口切に招かれては

淺草に嵐竹を訪ふ

口切に堺の庭ぞなつかしき　　芭蕉

を立句に支梁・嵐蘭・利合・酒堂・潜水・桐奚・也竹等によりて八吟の歌仙があつた。此處で句解とは煩はしいかも知れないが、些か難解であるかに思はれるから、連句を略して解を試みることゝする。口切は歳事にも詳說あるが如く、壺に封じ置きたる新茶を初冬頃出して茶會に用ふるをいふのである。說叢に「堺は利休の産土といひ其師紹鷗出楽の地なり其「海少し庭に泉の木の間哉」といへる宗祇の發句を利休感有りて茶庭もとより此心なりと堺の露地は其趣にて作られたり」云々と。

九月廿日過、芭蕉は酒堂を作つて淺草に居る嵐竹を訪ひ、此處にて酒堂・嵐竹・芭蕉・北鯤・嵐蘭等十句を吟じた。併し深川集には「興のたえん事をおしみて洛の舊友をもよほし、そのあとをつぐ」と前置して、膳所・京都・大阪の連中が作を加へてゐる。

倘ほ「草庵懐故人」と題する濁子・芭蕉・千川・凉葉・此筋の五吟歌仙がある

名月や篠吹雨のはれを待　　濁子
客に枕のたらぬ虫の音　　芭蕉
秋を經て庭にさだまる石の色　　千川

まだなまなれの酒のこゝろみ　　凉葉

（以下略、一葉集）

は此の秋の作であらう。芭蕉・岱水・史邦・半落・嵐蘭の五吟歌仙

初茸やまだ日數經ぬ秋の露　　芭蕉

青き薄ににごる谷川　　岱水

野分より居むらの替地定りて　　史邦

さし込月に藍瓶のふた　　半落

（以下略、猿舞師）

も此の頃の作と思はれる。

三日月の地はおぼろなり蕎麥畑

夕月や門へさし來る汐かしら

は「三日月日記」の山口素堂の序文によつても今年の作と思はれる。

秋に添うて行かばや末は小松川

九月盡の日武州葛飾の女木澤へ舟を下し、女木澤の桐蹊と俳諧を興行された時の作であら

う。

十月三日許六亭にて俳諧の興行があつた。其の時の作が

けふばかり人も年寄れ初時雨

であつて、其の眞意は、若い人は初時雨の淋しき味はひを解さない、それで今日許りは若い人に年を取らせて此の味を得させたいものであると、これは多分壯年なる許六へ對してい句であらうといふことである。此の時此の句を立句として許六・洒堂・岱水・嵐蘭とゝもに五吟の歌仙があつた。

けふばかり人も年よれ初時雨　　はせを
野は仕付たる麥のあら土　　許六
油實を賣む小粒の吟味して　　洒堂
汁の煮たつ秋の風はな　　岱水
（以下略、韵塞）

篗日記に此の歌仙を十月三日の夜彥根の許六亭にて卷かれたものゝやうに記してゐるが、それは確かに間違ひであらう。芭蕉は旅へ出てゐない筈であるし、洒堂は翌年二月迄江戸に

新大橋の初雪を詠む

出てゐたのであるし、嵐蘭・岱水等も江戸に居たのである。許六は八月九日深川の芭蕉庵を問ふて弟子入りをしてゐるのである。之等を綜合して見ると、許六がゐた井伊侯邸の旅舍に行はれたものと見るのが至當である。

冬、深川の新大橋が半ば掛かゝりたる頃初雪のありて

初雪やかけかゝりたる橋の上

因に新大橋は翌六年に完成したといふ。翌年成就したる折に詠まれた句に「有難やいたゞいて踏む橋の霜」がある。

荊口・洒堂・芭蕉・此筋・左柳・大舟・千川等の七吟歌仙

木がらしにうめる間遲き入湯哉　荊口
毛をひく鴨をのするまな板　洒堂
掛乞の中脇差にはかま着て　芭蕉
處〳〵は木履はくみち　此筋
(以下略、一葉集)

幷に兀峰・芭蕉・洒堂、それへ里東、其角の加はりたる歌仙

水鳥よ汝は誰をおそるゝぞ　兀峰

白頭さらに芦静也　芭蕉

（以下略、同）

は此の時分のものであらうと思ふ。

押し迫つた十二月二十日には、芭蕉・彫棠・其角・桃隣・銀杏等集りて即興の俳諧をなしてゐる。

打よりて花入探れんめつばき　芭蕉

降こむまゝのはつ雪の宿　彫棠

口にたゝぬつまり肴を引かへて　其角

羽織のよさに行を繕ふ　黄山

（以下略、句兄弟）

芭蕉の立句を春とすると次が初雪で季戻の嫌ひあるかに見えるが、冬の探梅の句であることは栗津ヶ原に見えてゐるといふ。

## 素堂亭の忘年會

素堂亭忘年會の句

山口素堂亭の年忘の會に參じて詠める

節季候を雀の笑ふ出立かな

は兎角前年なる四年の作と見られる方が多いが、これは深川集を一考すれば五年の忘年會の作であることが頷かれるではなからうと思ふ。珍碩（洒堂）が江戸へ出て來たのが五年の九月である。そして珍碩が深川集を編み板行したのは、翌元祿六年如月である。さうしてみると、珍碩は四年の暮に全く江戸に居らぬのである。江戸に居らぬ珍碩が素堂亭の忘年會に出席し得やう筈がない、此の時席を同じうした人は素堂・芭蕉の他に嵐蘭・曾良・洒堂であつた。左に銘々の句を掲げて昔日の興趣を偲んで見度い。

忘年書懷　素堂亭

節季候

節季候を雀のわらふ出立かな　　芭蕉

餅春

餅つきやあがりかねたる鷄の泊屋　　嵐蘭

衣配

文箱の先模樣見る衣くばり　　曾良

佛　名

佛名や饅頭は香の薄けむぶり　　酒堂

歳　暮

腹中の反古見分はけん年のくれ　　素堂

餘　興

としわすれ盃に桃の花書ゝ　　酒堂
　膝にのせたる琵琶のこがらし　　素堂
宵の月よく寢る客に宿かして　　芭蕉

氣の合ふた騷人、酒興俳興の儘に夜を更かして、且つ笑ひ且つ語つたことであらう。同席の各ゝ、恐らくは王侯貴族以上の傲れる人生に味到するところがあつたに違ひない。

尚ほ今年中の附合として擧げて見るならば、次のやうなものである。

湖風・芭蕉・沽蓬・利牛・桃隣・曾良等の

水音や小鮎のいさむ二股瀬　　湖風

柳もすさる岸のかゝり株　芭蕉
見知たる乙きり草のもえ出て　沾蓬
刀の柄にくゝる狀箱　利牛
（以下略、一葉集）

史邦・沾圃・芭蕉・魯可・里圃・乙州等の

朝がほや夜は明きりし空の色　史邦
おのれ〳〵と蚯蚓啼止　沾圃
升落しまたぬに月は出にけり　芭蕉
廊下口までゆるす板の間　魯可
（以下略、一葉集）

史邦・芭蕉・岱水の三吟歌仙なる

帷子は日々にすさまじ鵙の聲　史邦
籾一升を稲のこき賃　芭蕉
蓼の穗に醬油の[illegible]をかき分て　岱水

夜市に人のたかる夕月　　史邦

（以下略、一葉集）

深川の芭蕉庵に於て、千川・芭蕉・此筋・左柳・洒堂・海動・岱水・嵐蘭等によりて興行された俳諧

月代をいそぐやう也むら時雨　　千川

小松のかしら揃ふ冬山　　芭蕉

牡鹿飛嶽の透間の草かれて　　此筋

水眞白に海に出る川　　左柳

（以下略、一葉集）

尙ほ此他に、素堂・露沾・芭蕉の連句、許六・芭蕉・嵐蘭の連句、洒堂・素堂・芭蕉の連句、其角・渓石・芭蕉・普船・盤子・史邦・去來・丈草等の連句等々があるけれど、此處には煩はしいから省略する。

今年は蕉門關係の俳書として、俳諧の入門案内を詳述した支考の「葛の原」が上梓され車庸の「己が光」、嵐蘭の「罌粟合」等が出てゐる。罌粟合は蕉門の高傑嵐蘭が十三番句合

せに判詞を加へたるものにして其角の跋文がある。

　二月十六日に金澤の一笑へ宛てた書簡に「うぐひすや餅に糞する椽の先」の句を記してあるから、元祿五年のことゝ思はれるが、一笑に水雞笛・時鳥笛をねだつてゐる。「然ば御約束の水雞笛、贈給忝珍重存候、此さとの人々聞馴ず、女子共も集り、我を褻者の樣に申をかしく候、行脚先國所により、一向音をしらぬ人御座候、吹て聞せ可申と悦び居候、鹿笛も木曾より貰ひ候、時鳥笛も御座候はゞほしきものに候、水雞笛作る人は作るべくと存候……」誠に邪氣無い芭蕉の心の一面が遺憾なく現れてゐるではないか。變人と云へば變人、物好きと云へば物好きであるかも知れないが、わざわざ水雞笛・時鳥笛が欲しく長文の書簡を送つてゐるのである。何事に對しても曇らぬ心の芭蕉、どんな相手でも芭蕉を憎むことは出來なかつたであらう。私は西行を詳しく知らないが、さうした芭蕉の心境に觸れる度に、元祿の西行のやうな氣がしてならないのである。

　水雞笛と云へば、竹二坊の「芭蕉翁正傳」にそれが繪と說明がある。（芭蕉雜考に揭出）

# 第十四章　晚年の芭蕉（二）

（五十　歳
元禄　六年
西暦一六九三年）

## 元祿六年（五十歳）

元祿六年の正月を深川の芭蕉庵に於て迎へた。正月中、江戸に出てゐる彥根の森川許六が旅舍を訪ふて親しく俳諧を語つた。許六は若年ではあつたが、其の熱心さは驚くべきもので、支考と共に蕉門の覇氣ある傑士である。許六の人と爲りは後述の「許六離別詞」に芭蕉が記してゐるのを見ればよくわかる。

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

は己が光集にある句にして、芭蕉翁繪詞傳には此年の句としてゐる。これは鏡の裏に鑄彫られたる梅の花を見て、世の人々の知らぬ春を味つたといふ興趣ではあるまいかと思ふ。風狂の芭蕉だけに、こうした趣味を多分に持つてゐたことゝ思はれる。なほ考へてみると鏡の裏の梅を兎角人々が見て呉れない樣に、自分を見て呉れないと境涯を含めた句である

酒堂京へ帰る

のかもしれない。

昨年の九月江戸へ出て來て芭蕉庵に住し、芭蕉と共に俳諧に專心してゐた酒堂が、京都へ歸ることになつたのは二月である。起居をともにしてゐた二人であつたのだから、別離の名殘が惜しまれてならなかつたであらう。其の時の句が

湖水の磯をはひ出たる田にし一匹、蘆間の蟹のはさみをおそれよ、牛にも馬にもふまるゝことなかれ

難波津や田螺の蓋も冬ごもり

僧專吟を送る

「牛の子に踏まるな庭のかたつむり角あればとて身をば賴みそ」に通ふ心を含めてある。

三月の始め頃、親友なる僧專吟が旅に出るのを別れ惜みては一文を稿してゐる。左に「送僧專吟辭」を窺へば

――此僧常に風雅をこのみ、市を避て年々斗藪行脚の身となる、ことし又伊勢熊野に詣んとす、身は雲外の鶴にひとしく――予葎の交りをなすこと久し、今此わかれに臨てともに岸上に立て、はこね山はるかに見やる、かのしらぬ雲のたわめる所こそ旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ、君かならず首をめぐらして見よ、我又岸上に立んといひて袂

をわかちぬ、

鶴の毛の黒き衣や花の雲

これより先、胃腸を痛めてゐた芭蕉は、漸く梅花の頃になつて好きな蒟蒻を喰べて見たくなつたらしい。否喰べて見ても何ともなくなつたのであらうか、身を案じて呉れる去來へ送つた句と覺ぼしきものに

蒟蒻のさしみもすこし梅のはな

がある。芭蕉の性質より見ても、淡泊な食物を好いたことは爭へられないことではない。支考の「削かけの返事」に「——大切の事なれば寺開て、祖翁と先師へ佗事のためにこんにやくの白あへでもして靈供をそなへ給ひなば、未來の披香のはさみはのがれぬべし」と云つて居り、「蒟蒻に今日は賣かつわか菜哉」の作もあり、其他許六も蒟蒻を好かれたことを書いてゐる。右の句を發句集にある「去來のもとへなき人の事など云遣すとて」といふ前書を考へて見ると、去來の亡妹の追福を營んで精進料理をしたといふ意であるか。

はつむまに狐のそりし頭哉

發句集に依ると六年の句である。「二月吉日とて是橘が剃髮入醫門を賀す」とあるところよ

露沽侯の邸に召さる

り見れば、其角の奴僕是橋が發心して醫門に入ることを祝つたのであつて、二月の初午である爲めに狐の文字を用ひ、狐にだまされての剃髪ではあるまいかなどゝ、多少の洒落が入つてゐるではないだらうか。

磐城平の城主である露沽侯（東都の館虎御門瀧の上溜池の近くに住まれたる）に召されて

西行の菴もあらん花の庭

の句があつた。風流を好かれる露沽侯の心を賞したる句である。風流な殿様のあることは芭蕉などにとつては甚だ結構なことであらうが、世が世であるだけに、風流を弄ぶ殿様などに碌な人はなかつたわけである。所謂力が足りない人だから、文弱に流れるといふことになる。殿様を下評するのではないが、事實勢力のある城主にして、一入文事を好かれたといふことの稀であることはいふまでもない。

正風體の最初を示す句と稱せられる「傘に押し分け見たる柳かな」を立句として、濁子・涼葉・野坡・利牛・宗波・曾良・岱水と八吟の歌仙があつた。

からかさにおしわけ見たる柳かな　　芭蕉

わか草青む塀の築さし　濁子
朧月いまだ火燵にすくみ居て　涼葉
使のものに禮いふてやる　野坡
(以下略、一葉集)

野坡は三井の番頭、或る越後屋呉服店の番頭又は両替屋の番頭をしてゐたと傳へられてゐる。細みのある俳諧を得意とし、蕉門中光りある作者であつた。

五人扶持取てしだるゝ柳かな　野坡
日和〳〵に雪解の音　芭蕉
猿曳の月をちからに山こえて　同
そこらをかける雉子の勢ひ　野坡
(以下略、一葉集)

など、なかなか妙手である。續猿蓑巻之上に出てゐる芭蕉・沾圃・馬莧・里圃の四吟歌仙

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる聲　沾圃

初荷とる馬士もこのみの羽織着て　　馬莧
内はどさつく晩の振舞　　里圃
（以下略、續猿蓑）

は此の頃の作と見てよいであらう。

四月大垣の城主（戸田釆女正氏定）が日光の御名代を勤めらるゝに扈従する岩田某に寄せられたる句「篠の露はかまにかけし茂りかな」を立句として、千川・凉葉・左柳・青山・此筋・遊糸・大舟等によりて行はれたる附合

篠の露はかまにかけし茂りかな　　芭蕉
牡丹の花を拜む廣場　　千川
みじか夜も月はいそがぬ形して　　凉葉
（以下略）

は一葉集も翌七年の部へ入れてあるが、日光御代參が六年なるにより六年の作である。

**江戸を去る許六を惜しむ**

五月六日頃、許六が遽かに彥根へ旅立たんことを傳へたところ、芭蕉の驚きは一方でな

芭蕉のみたる許六

かつた。早速芭蕉は草庵に居る次郎兵衛を使ひに出して詞書を向けたのである。此の時其詞（此處に略す）と共に贈られた句が

椎の花の心にも似よ木曾の旅

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

である。許六は「兩句一句に決定すべきよし申されけれども、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る」と云つてゐる。

今柴門辭と呼稱せられてゐる許六離別詞から、芭蕉が見たる許六の人と爲りを一瞥することにしよう。

――其器畫を好ム、風雅を愛す、予こゝろみにとふ事あり、畫は何の爲好や、風雅の爲好といへり、風雅は何爲愛すや、畫の爲愛といへり、其まなぶ事二にして用をなす事一なり、まことや、君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして用一なる事可感にや、畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす、

去年の秋尋ねて來た許六と、この五月別れてゆくのを惜しんで、終日清談したと芭蕉がいつてゐる。芭蕉が文中に云つてゐる樣に、許六は畫の名人である。そこで芭蕉は畫を許六に學

んだのである。俳諧を教ふる大芭蕉であり乍ら、一藝勝るゝ弟子を其の道の師として學ぶ芭蕉の心持、普通の人の容易に眞似の出來ぬところであらう。猶許六の畫境益〻圓熟達成する樣衷心より希願してゐるのである。

――後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍しとかや、さればこのことばを力として、其細き一筋をたどりてうしなふる事なかれ、猶古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり――

と。芭蕉が畫を學ぶことに熱心であつたに相違あるまいが、芭蕉も許六を、此の人ならばと思つて蕉門の俳諧を眞劍に教へ込んだのであらうと思ふ。

溜池近くに居を構へて居られた磐城城主内藤侯なる露沾侯に申侍るとして「五月雨に鳰の浮巣を見に行かん」の句あり（發句集）、又「一聲の江に横たふや郭公」「時鳥聲よこたふや水の上」の句があつたらしい。

七月七日の七夕には風雅を樂しまんとして、杉風と共に遍昭小町の歌に據りて句を詠んでゐる。左に泊船集卷之四にある前書と共の時の句を擧げて見る。

小町・遍昭の歌想をしのぶ

弔初秋七日雨星

元祿六文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふき折るけしき、二星も屋形をうしなふべし、今宵猶たゞに過さんも殘りおし一燈かゝげ添へる折りふし、遍昭小町が歌を吟ずる人あり、是によつて此の二首を探りて、雨星の心をなぐさめむとす、

小町が歌

高水に星も旅寝や岩の上　　芭蕉

遍昭が歌

七夕にかさねばうとし絹合羽　　杉風

右はいふまでもなく小野小町の歌「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我に貸さなん」遍昭のこの返し歌「世をそむく苔の衣はたゞひとへ貸さねばうとしいざふたりねん」の內意に興を覺えて作られたものである。

夏かけて名月あつきすゞみ哉　　芭蕉

名月や俗も拱く橋の上　　岩翁

よそに聞く月見の夜弓静なり　　　遠　水

（以下略）

蕣や是も又我友ならず

老の名のありともしらで四十雀

は此の頃の作で、後の句は「三十にして立ち四十にして惑はず」を含め、許六へ送りたる句ではあるまいか。

深川の末、五本松といふ所に棹さして、小名木川の上流に住んでゐる葛飾の素堂を思ふての句

川上とこの川しもや月の友

の句があつた。月明を折角尋ねて來た其角が芭蕉に逢ひなかつたのも無理はない。

十六夜はわづかに闇のはじめ哉　　　芭　蕉

鵜舟のあかをかゆるさび鮎　　　濁　子

近道に鷄頭畠をふみつけて　　　岱　水

（以下略）

の連句があつた。芭蕉の句が「十六夜はとり分闇のはじめ哉」とあるのは間違へて傳へられたものださうである。

### 嵐蘭の死を悼む

八月二十七日に蕉門の重鎮松倉嵐蘭が逝去した。何處の俳席にも芭蕉とゝもに無くてはならぬ程重要な俳人であり、芭蕉も一入彼の才能を頼んでゐたのであらう。芭蕉の落膽が一方でなかつたことは、芭蕉が「嵐蘭誄」を作つてゐるのを見ても明かなことである。

秋風に折て悲しき桑の杖

堪へ難い哀悼の情より生れた句である。「嵐蘭誄」の一節に

松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間に遊ばしむ、予とちなむる十とせ餘り九とせにや、――日々風雪に坐して今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳く、其歸るさより心地なやましうして終に息たえぬ、――

嵐蘭は七十の老母と七歳の子を殘して死んだのである。二年前子供が五歳の時、芭蕉庵に子供を伴れて來て俳名を乞ふたので、芭蕉は蘭戎と付けて遣つた。親族と別れゆくに等し

東順傳書かる

いと云つて悲しみ泣いた芭蕉であるから、其の親交は略想像が出來る。嵐蘭は板倉侯の臣であつたが、三年前に官を辭して只管俳諧に身を遊ばせてゐたのである。

みしやその七日は墓の三日の月

は初七日に墓參りをしての句であらう。

秋の始より病床に臥したる其角の父東順は、老齡にして今日明日の命となつて來た、といふことを其角より知らして來た。東順の德を讃へた書いた「東順傳」は東順の死の直後のものと思はれる。其の傳の處々を拾へば「老人東順は榎氏にしてその祖父江州堅田の農士竹氏と稱す、榎氏といふものは晋子が母かたによるものならし、――花鳥の情露を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで神みだれず、終にさらしなの句をかたみとして大乘妙典のうてなに隱る、――市店を山居にかへて、樂むところ筆をはなたず机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ車にこぼるゝが如し、湖上に生れて東野に終りをとる、是必大隱朝市の人なるべし」とありて

入月の跡は机の四隅哉

とある。

影待や菊の香のする豆腐串

菊の花咲くや石屋の石の間

前の句は傘水亭に遊べる時の作、後の句は八丁堀の一光景を詠まれたものである。

琴箱や古物棚の脊戸の菊

琴が無くても琴の箱はゆかしいものであるやうに、古物店とは云ひ作ら、脊戸の菊はゆかしいものであるといふところを詠まれたものとか、芭蕉翁略傳は此の句を元祿六年の作としてある。今これに從ふこととする。次に「菟絲が趙南の心をいへる山家集の題にならふ（註すてやらで命をおふる人はみなちゝのこがねをもてあそぶなり）とありて、一露もこぼさぬ菊の氷かな」の句を詠まれたのは此の時分であらうか。

素堂亭に菊を詠む

## 素堂亭に重陽の宴を張る

小名木のほとりなる素堂の亭（菊が多かつたといふ）に、十月九日即ち重陽後宴を張つて句を詠む者芭蕉・其角・桃隣・沾圃・曾良・馬莧・素堂の七人、其の時の狀況を續猿蓑より見れば、

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事はその頃は花いまだめぐみもやらず菊花ひらく

時則重陽といへるこゝろによりかつは展重陽のためしなきにしもあらねばなほ秋菊を詠して人々をすゝめられける事となりぬ

菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉

袖の色や起あがりたる菊の露　其角

菊の氣味ふかき境や藪の中　桃隣

八専の雨やあつまる菊の露　沾圃

何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良

菊畠客も圓座をにじりけり　馬莧

柴桑の隱士無絃の琴を翫しをおもふに菊も輪の大ならん事をむさぼり造化もうばうに及ばじ今その菊をまなびておのづからなるを愛すといへども家に菊有て琴なしかけたるにあらずやとて人見竹洞老人素琴を送られしより是を夕にし是を朝にしてあるは聲なきに聽きあるは風にしらべあはせて自ほこりぬ

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友　素堂

この素堂亭の會合の夜か或ひは翌日かは判明しないが、十月九日の日附を以て許六へ宛

金屏の……の句

てた書簡がある。「(前文略)(老の名の有るとも知らで四十雀)中將の尼の歌の餘情に候素堂の菊園に遊びて(菊の香や庭にきれたる沓の底)野坡といふ者岡崎に(金屏の松の古さや冬ごもり)尚廣く御他見被成まじく候追而俳諧など可掛御目候得共當冬は相手に可爲もの無御座候へば俳諧も成るまじく候(後文略)」これに據つて見ると

　　金屏る松もふるさよ冬籠

は六年の十月九日前の作であると云へるのである。此の句は翌七年夏梓行された「炭俵」の序に入つてゐる。素龍(淺草自性院の住僧)の序文を見れば「此集を撰める孤屋・野坡・利牛らは常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて——二三子庵に侍て、火桶にけし炭をおこす、庵主是に口をほどけ、宋人の手龜ずといへる業是ならん、としのゝ折箸に燒のさゝやかなるを、竪におき横になほしつゝ、金屏の松の古さよ冬ごもりと吝よりまろび出づる聲のみたりが耳に入——」とある。孤屋も利牛も越後屋(呉服店名)の番頭にして、序にも云つてある樣に暇があると草庵を尋ねて俳諧を學んでゐた。三人は右の師の句を聞いて、魂の据りたる句であるのに感じ入つてしまつたといふことである。

眞跡と稱せられる書簡に從ふと、この「冬ごもり」の句が十月九日前に作られたことにな

つて、同日の素堂亭菊見の宴などと共に考へて見る時、聊か時節に不審と思はるゝ點がないでもない。

十月二十日の夜、芭蕉庵に來る者、例によつて野坡・孤屋・利牛の三人、此處に於て師芭蕉を加へて四人は、卽興に四吟歌仙を卷いた。

振賣の雁あはれなりえびす講　　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　　野坡
番匠が椴の小節を引かねて　　孤屋
片はげ山に月を見るかな　　利牛
(以下略、炭俵)

此の頃の作と思はれる

鞍壺に小坊主乘るや大根引

右の發句は炭俵冬之部に「大根引といふ事を」と前書を入れて出してある。この句が出てより、大根引といふ季題が冬のものとして一般に用ひられるやうになつたといふ、なか〳〵曰く附きの句である。大根と云へば、この年芭蕉と玄虎・舟竹の三吟歌仙の立句なる

芭蕉の句に

武士の大根にがきはなしかな

がある。一葉集には「玄虎子旅館にて菜根を喫して終日丈夫に談話す」と記してある。

芭蕉・沾圃・馬莧等三人にて催したる俳諧に

いさみ立鷹引居るあられ哉　芭蕉

ながれのなりに枯る水草　沾圃

宿はづれ明店おほく戸をさして　馬莧

（以下略、一葉集）

又芭蕉・岱水・杉風等の俳諧に

生ながらひとつに氷る生海鼠かな　芭蕉

解けば匂ふ寒菊の菰　岱水

（以下略、一葉集）

十一月には

芹燒やすそわの田井の初氷

の吟があり、この句を立句として濁子・凉葉が脇をつけて三吟歌仙を卷いた。この句は「芹の文字がある爲めに春の部に屬すべきものと云はれ、又は「はつ氷」の文字によつて冬の部とすべきが正當であるといふ樣に、可成論難される句である。併し芹と云へば正月の七草を聯想されるやうに、冬と取扱ふが妥當ではあるまいかと思ふ。句意は、燒いた芹を器に入れて眺めると、水に初氷の張つたやうに淸冽爽澄の感じがするといふ位のところであらう。「すそ輪の田井」とは萬葉其他の歌にも詠まれたる常陸の名所であるといふ。詳細は句解の折に讓る。

此の時の連句は

芹燒や裾輪の田井の初氷　　芭蕉
　こぞりて寒し玉子うむ雞　　濁子
織おろす絹を筵にひろ取て　　凉葉
（以下略、一葉集）

　菅沼曲翠の旅館を訪ふて　（湖中の說）
埋火や壁には客の影法師

一葉集も同じく湖中の編するものなるが故に、發句之部には曲翠旅館と書いて此の句を出してゐる。芭蕉翁發句集にも「曲翠旅館にて」とある、然るに句選年考に據れば、杉風家の翁眞蹟には「素堂が妹の身まかりける時」といふ前書があるといふことである。

續猿蓑や泊船集には只「埋火」とあるのみにして、曲翠や素堂云々には觸れてゐない。思へばどちらの前書考證行き屆かない現在の私にはどちらがどうといふことは云へない。曲翠の江戸の假寓を尋ねたと見てもよいのである。曲翠は膳所の人であるが、曲翠旅館と云へば、にも合ふ句である。曲翠は傍輩なる曾我權太夫が寵を得て、專橫の振舞に出でたるを心よからずに思ひ、遂に權太夫を殺害し、曲翠自身も切腹した。子はこの爲めに自盡を仰付かり、妻また尼となりて世を送つてゐる。最後は實に悲慘な人であつたが、芭蕉との親交は恐らくは親族交り以上であつたかに察せられる。芭蕉は曲翠に隨分無理なことを依賴するが、曲翠は一本氣の人であつたゞけによく盡してゐる樣である。或る時は芭蕉が大金を都合して貰ひ度い、若し手もとが不如意なれば、公金を一時融通して與れるやうにとまで云つてゐるのである。これをもつてしても、芭蕉が如何に心を許してゐた仲であつたかといふことが窺はれる。

芭蕉と野坡の連句

寒菊や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉
さげてうり行はした大根　野坡
（以下略、一葉集）

杉風・芭蕉・岱水・依々・曾良・野坡等によりて行はれた連句

雪やちる笠の下なる頭巾まで　杉風
刀の柄に氷る手拭　芭蕉
唐がらし木ながら軒に打かけて　岱水
（以下略、一葉集）

などは此の時分のものであらう。

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店
けごろもにつゝみてぬくし鴨の足
瓶破るゝ夜の氷の寢覺かな
煤掃は己が棚つる大工かな

の句は今年冬の作か、一見平凡を寫したる如くにして、而かも芭蕉の心境が乗つた句である。最初の句は其角・支考が三唱三嘆したる句、次の句は去來が推賞を惜しまざる句である。

月代や三十日にちかき餅の音

年の暮にて騷がしき、賑はしき、忙はしき人の世、これに反して自分は草庵に閑を樂しんで考へてゐるといふ、熟〻此の句を考へて見ると、淋しい人生の末路を自覺した人の心に觸れるやうな氣がする。芭蕉行狀記（樋口功氏校註）を見ると、此の句を中心としての芭蕉翁が偲ばれるやうである。行狀記には先づ右の句を記して

「――ことしかぎり成べき敎なるべし。兼好法師身まかりぬべき前の月二十八日の夜の歌に

ありとだに人にしられぬ身のほどや
　　　晦日にちかきあけぼのゝ月

と侍りしとかや。兼好も終を伊賀國にとりて侍と傳へしに、此人やふたゝび世に生れて末の風雅を起しけんと、いとゞしたわるゝ。またいにしへより辭世を殘す事は誰々もあ

此の年行はれし俳諧

る事なれば、翁も殘し給ふべけれど、平生則辭世也、何事ぞ此節にあらんやとて、臨終の折一句なし。兼好法師もかゝる事侍しとかや。夫是思ひあはせければ、年の暮の句いとゞ身にしみて尊くぞ侍る。」

笈日記には「月代や」が「有明も」とある。

此年行はれたる俳諧に次の如きものがある。涼葉・千川・芭蕉・宗波・此筋・濁子・左柳の連句

野は雪に河豚の非をしる若菜哉　涼葉
　まだ黄鳥の啼きらぬ聲　千川
門番の寢貞にかすむ月を見て　芭蕉
けさむき初る前栽の柿　宗波

（以下略、一葉集）

孤屋・芭蕉・岱水・利牛の四吟歌仙に
　深川にまかりて
空豆の花咲にけり麥の緣　孤屋

芭蕉老境に入る

　　晝の水雞のはしる溝川　　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　　岱水
　そつと覗けば酒の最中　　利牛
　　　　　　　　　　（以下略、一葉集）

濁子・曾良・芭蕉・史邦・杉風・岱水・涼葉の連句に

十三夜曉やみのはじめ哉　　濁子
　小袖の糊のこはき薄霧　　曾良
燒飯に瓜の粕漬口あけて　　芭蕉
　荏胡麻のからに四十雀つく　　史邦
　　　　　　　　　　（以下略、一葉集）

此の他其角と芭蕉、毛紈・許六・芭蕉・木導と芭蕉、利牛・岱水・芭蕉、沾圃と芭蕉、芭蕉・沾圃・其角、杉風・孤屋・芭蕉・子珊・桃隣・利牛等の連句があつた。

身體の弱さを案じたせいもあつたかも知れないが、閑寂の境地を求めてゐた芭蕉は遂に旅らしい旅を爲なかつた。從つて旅に在る時の樣な奔放豪膽な作は見られなかつた。これ

此の年上梓された俳書

は何といふても年齢が年齢、人一倍老成の芭蕉だけに身體もさうであらうと思はれるが、氣持が非常に老い込んでゐるのではないかと思はれる。それは是非もあるまい。といふのは自分の俳諧が圓熟したことを充分自覺し、門弟に又俊才益〻多きを加へてゆくことを知つて、或る安堵を得たといふ氣持があつたかのやうに見られぬでもない。

本章に擧げた芭蕉を見ても感ぜられる様に、本年は野坡・孤屋・利牛等新顏の門人が、頻りに芭蕉庵を訪ふては連句をしてゐる。其の熱心さには芭蕉もいたく心を動かされたことであらうと思ふ。翌七年梓行の「炭俵」を刊行することなどの話が生れたのも成程當然であると思はれる。芭蕉は野坡・孤屋・利牛三名に、撰を勸める程それ程熱心と力量を認めたわけである。それと共に三人は大いに鼓舞されて、これが完成に力を盡し得たことである。

今年上梓された俳書としては、素堂が編したる有名な「俳諧深川」がある。これには元祿五年九月から六年二月まで芭蕉庵在住中催したる、洒堂と芭蕉・嵐蘭・杉風・曾良・岱水・桃隣・宗波・許六・嵐竹・北鯤等々の歌仙を收めてある。兀峰編の「桃の實」は、其角・兀峰・嵐雪の句合に凡兆・桃隣・史邦・曲翠・文隣等々の發句を收めてある。なほ蘭花編なる「この花」がある。これには蕉門の發句も可成り收めてある。

其角の父東順が他界したことは前に述べたが、其角は父の追善集「萩の露」を梓行した「萩の露」とは父の辭世句「死症には千草の露の驗もなし」から名付けたものか、其角は生前病臥の父に「萩の露はまぐり貝のくすりかな」の句を作つて慰めたといふ。此の集には芭蕉・嵐雪始め蕉門の歴々が美はしい心を傾けて追善してゐる。

# 第十五章　晩年の芭蕉（三）

（五十一歳　元祿七年　西暦一六九四年）

**元祿七年（五十一歳）**



深川の芭蕉庵にゐて歳旦を迎ひ

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

を詠んだ。此の句が六ヶ敷くて諒らないといふ人が尠くはない。それは餘りに考へ過ぎるから、眞意を探ぐることが出來なくなるのである。この句に就ては芭蕉が自解めいたことを云つてゐるから、去來抄の一節を掲げて見よう。「先師、深川より去來への文に、此句さまゝの評あり。汝いかゞ聞侍るやとなり。去來云、都又は古郷の便ともあらず。伊勢と侍るは元日の式の今やうならぬに、神代を思ひ出でゝ、便り聞かばやと、道祖神のはや胸中をさわがし給ふところ承り侍れと申す。先師返事に、汝が聞處にたがはず。今日神のかうゝしきあたりをおもひ出でゝ、慈鎮和尚の詞（筆者註、此春は伊勢にしる人音信て便

「梅が香に…の句」

うれしき花柑子かな）に便り、初の一字を吟じ、清淨のうるはしきを、蓬萊に對して結びたるなりと」あるによつて氷解してしまふ。繪詞傳に「元祿七戌のとし春立ちそむるより古鄕の方ゆかしとおぼしけむ」とあるが、思ふところ、此の句は春立ちて作られたものでなくて、年の暮に作られたものゝ樣な氣がする。大體伊勢と云へば元日の式といふ樣に、作意の多い句であるから、年の暮に作つて置かれたものであらうと思ふ。現在でもさうであるが、元日の句なぞは、年の暮のうちに作つて置くことが多いのである。殊に昔はさうした習慣が今日よりも多いといふことを聞いてゐる。

むめがかにのつと日の出る山路かな

も此の頃の作である。炭俵上卷の眞先に此の句を置いてある。これ野坡との連句である。野坡の脇句は

ところ〴〵に雉子の啼立　　野坡

（以下略）

熟し切つた蕉門俳諧の盡きぬ滋味を湛えてゐる。

はれ物に柳のさはるしなへかな

青柳の泥にしだるゝ潮干かな
春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏
顏に似ぬ發句も出よ初ざくら
花にねぬ此もたぐいか鼠の巣

などは此の春の作である。右のうち最初の句と最後の句が難解であるかも知れないが、最初の句は、風に吹かれてゐる柳の狀態が、たとへば腫物に觸はる時のやうに靜かに柔かであるといふだけのことであり、最後の句は、小鳥は花を愛しても花に寢ない、それとおなじく、鼠は何時も鼠の巣に寢て居らぬといふだけのことではあるまいかと思ふ。どちらかといふと、此の句は春の鳥の心を主として詠まれたものである。

上野の花見に誘はれて來たるに、人々打騷ぎ、小うたの聲さま〲賑はしく聞えて

四つ五器のそろはぬ花見心哉

の句を詠んだ。

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

は閏五月の作である。「別座鋪」の素龍が「贈芭叟餞別辭」に「――口たけて起侍るに、か

ゆは煮すぐしたれば、杉のはしかた〳〵づゝにてすゝりぬ。今年何、後のさつきを郭公知てわこたる夜頃にや。初音聞侍ずとかこちて、此ころの愚詠を、村雨やかゝる蓬のまろねにもたへて待るゝほとゝぎすかなと吟じつれば、折のよきにや、めでくつがへりて、ぬしも今宵句をさぐり得たりと、木隱て茶摘も聞や郭公　これなん住境に遊びて、奇正の間をあゆめる作とはしられけり――」以上の僧素龍の洩らすところによつて、此の句境を容易に味ふことが出來る。

## 「炭俵」成る

五月、「俳諧炭俵集」の撰集成つて梓行された。撰者は蕉門の野坡・孤屋・利牛の三人である。從つて師芭蕉は別として、野坡・孤屋・利牛の作品が此の集の骨子を成してゐるわけである。素龍が序文を書いてゐることは前章に於て述べた（其一節を引用）通りである。炭俵に對する批評は蕉門擧げて花實の完成を以てしてゐる。芭蕉の行かんとして漸く辿り得た「かるみ」に到達したので、これ一新風の開拓であると熱讃してゐる。蕉風の神髄或ひは集中の悉くを金科玉條として三拜九拜してゐる俳人は、元祿より今日迄絶えざるところである。

炭俵の特色

炭俵の眞價の低下せる原因

これは一言にして云へば、連句發句が非常にやさしくなつてゐるから、總ての人々に歡迎されたのであると思ふ。これが蕉風の本當の道であつたと云へば、私は甚だ躊躇せざるを得ない。猿蓑までは智識が多かつた、蕉風の俳諧が學問的であつたといふことも出來る併しそれでよいではないだらうか。それを研磨怠ることなく境地を掘下げて行つたならば必ずや確實なる一俳道を切り開いて行けたのであらうに。猿蓑は未だ消化の足らない堅さがあつたことは事實であるが、炭俵の低調よりは遙かに遙かに上位である。此の點蕉門の俳諧は猿蓑が絕頂であつたといふことを認めなければならぬ。

炭俵の眞價が低下してゐる原因は、旅によつて不知不識の間に進境を發見してゐた芭蕉が、旅を爲なかつたからでもあり、又老齡といふ程ではないかも知れないが、可成りに年を加へた芭蕉である――潑溂たる元氣を減じたので、動よりは靜、難よりは易を好むやうになつて來たのである。これを別の言葉で云へば、感情が硬化して來たのである。主觀より客觀へ傾いたのは、正にこれを裏書するものである。主觀的の作品が少なからずあるとは云ふものゝ、感情の躍動强きものよりは、一般的な感情に關る作品をより好む傾向を帶びて來てゐるかに思はれる。

又此處に見逃してならぬことは炭俵の撰者である。野坡は孤屋及び利牛より學問があつたかも知れないが、三人とも學問に深くなじまぬ人である。市井の商人だからといつて卑下するわけではないが、三人とも天才的のひらめきが全然ないといつてもよい。從つて作るところも、撰するところのものも、身邊的な興味にならざるを得ないのである。

私は炭俵を賞揚したくはない。責めるとすれば芭蕉を責めるよりも、野坡・孤屋・利牛の凡才を咥はなければならぬと思ふ。通俗なものゝ取材と手法に於て、蕉風を擴げたといふ功績は認めてやらなければならぬが、氣品を失ふたといふことを惜しまずには居られない。

「炭俵」中の句

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

煤はきは己が棚つる大工かな、　同

するが地や花橘も茶の匂ひ　同

長松が親の名で來る御慶かな　野坡

はき掃除してから椿散りにけり　同

盆の月ねたかと門をたゝきけり　同

こほろぎや箸で追やる膳の上　孤屋
朝めしの湯を片膝や庭の花　同
藪垣や馬の顔かく桃の花　同
鶯の一聲も念を入にけり　利牛
梅さくらふた月ばかり別れけり　同
扇屋の暖簾白し衣がへ　同

終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
（以下略）

算用に浮世を立る京住ひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ產ぶ　野坡
どたくたと大晦日も四ッの鐘　孤屋
無筆をたのむ狀の跡先　利牛
（以下略）

別座敷の餞別俳諧

などは其一例であつて、一見非常にわかり易くなつて來てゐるが、氣品も乏しく、詩趣も乏しくなつてゐることは云ふまでもない。

## しきりに旅を戀ふ

五月、道祖神の招きに逢ふたのか、芭蕉は旅に出かけることを思ひ立つた。故郷を尋ねようとする心がないとは云へないが、それが目的ではなかつたらしい。桃隣がいふところにも「――此度は四國にわたり長崎にしばし足をとゞめて、唐土舟の往來を見つ、聞馴ぬ人の詞も聞かんなどと遠き末を誓ひ首途せられけるを――」とある通りに、止むに止まれぬ長途の旅を追ふて出かけたのではあるまいか。この芭蕉の意中を知つた門人杉風・桃隣・八桑は子珊亭の別座敷に餞別の宴を張つた。來春頃迄歸庵せられぬことを一同打歎き、俳諧を尋ね、やがて歌仙を卷いた。此の當時芭蕉が俳諧に對する心境は「別座鋪」の子珊の序に表れてゐる。「扨俳諧を尋けるに、翁今思ふ體は、淺き砂川をみるごとく、句の形付心ともにかろき也、其所に至りて意味有と侍る、いづれも感入て、及ずも此たがれをしとふ折ふし――」と。支考が、句は淺き砂川の如くさら／＼と作るべしと云つてゐるのは、此の意を述べてゐるのである。晦澁を厭ふて、かるきに就き度いと思ふてゐることは、芭蕉の眞實

であつたかとも考へられる。此の時の四吟歌仙の卷頭を抄出すれば次の如きものである。

紫陽草（あぢさゐ）や藪を小庭の別坐鋪　　芭蕉
　よき雨あひに作る茶俵　　子珊
朔日に鯛の子賣の聲聞て　　杉風
　出駕籠の相手揃ふ起〱　　桃隣
（以下略、別座鋪）

**芭蕉庵を出る**

桃隣の新宅を祝ふて自畫（牡丹に杜鵑）賛を贈つてゐる。

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

桃隣は天野藤太夫と稱し伊賀上野の人であるが、芭蕉を慕ふて東上した。都て物事に屈託せず、命さへ天にまかせたといふ人であるらしい。

五月十一日、洛に赴かんとして深川の芭蕉庵を出た。其の時の句が

うぐひすや竹の子藪に老を鳴く

である。枯尾花の其角の序には「游子か一生を旅にくらしてはつと聞得し生涯をかろんし四たひむすひつる深川の庵を又立出るとて」とありて此の句が出てゐる。住み慣れた江戸

草庵を後にして、親しい蕉門の人々と別れて行く芭蕉の心持は、假令旅先に於て親しい人々に逢ふといふ嬉しさはあるかも知れないが、何とも云へぬ悲しさに包まれたことであらうと思ふ。殊に痔病のある五十一歳の芭蕉であることを考へると、淺漬も胸にしみわたるなれば、年の名殘も近づくにや、と心細いことをいふた芭蕉が泌々と思はれてならない。この邊の消息は路通の行狀記に詳細を盡してゐるから、左に掲げて見よう。

――深川の桃梨散り過れば、卯の花雲たちわたるまゝに、かんこ鳥の一聲二音そゞろに物なつかしきかたもおゝしとて、思ひ立旅心しきりにて、五月十一日江府そこ〳〵にいとま乞して、乙州が宿せし京橋の家に腰かけ、いざともに古郷かへりの道連せんなど、つねよりむづましくさそひ給へども、一日二日さわり有とてやみぬ、名殘おしげに見へてたちまどひ給ふ、弟子共追々にかけつけて、品川の驛にしたひなく、

麥の穗を便につかむ別かな

「別座鋪」のこと

此の句碑は今日まで川崎の小宮氏邸内に運ばれてあるが、先程井汲創舟・遠藤旭冠氏等の盡力により、市の名所舊蹟を物語る記念物として移轉されんとしてゐる。

扨て芭蕉の旅立に、門人各〻餞別した「別座鋪」の撰集は、やがて芭蕉が故郷伊賀に在

る時其處へ送つて、見て貰ふてから成つたのである。芭蕉の發句は先に擧げた「寒からぬ――」と「うぐひすや――」の二つが出てゐる。此の集で面白いことは、芭蕉庵近くに棲んでゐた淨求といふ僧が、非常に拙い句ではあるが、餞別の句をものしてゐる。此の僧は芭蕉庵の茶を煮ることが巧みであつたといふ。此の僧は非常に芭蕉を敬仰してゐたであらうと思はれるが、芭蕉も亦尠からず愛してゐたやうに思はれる。句を作つたことのない人が、他人が餞別の句を綴るといふことを聞いて、此處に加はつて作るといふ。この心は芭蕉の德の影響するところのものであると思ふて、私は暫らく芭蕉と此の僧を考へて見た。

この別座鋪に含まるゝ連句發句は、一度二度見たゞけではよくわからず、六度七度と讀みて始めて「かるみ」以來今までにない味を味ふことが出來るといつてあるが、大體に於ては炭俵と五十歩百歩、或ひは炭俵より劣るかとも思はれるやうである。併し杉風の作に多く接することは、非常に嬉しいことであり、心强いことである。杉風と云へば、非常に熱心であるにも拘らず、進歩が鈍いところからか、芭蕉なき後は俳諧上には餘り惠まれなかつた人である。

乙州に同行を求めたが、都合惡しく遂に一人の旅になつてしまつた芭蕉は、五月の三十

名古屋に入る

日箱根の關を越えて

　目にかゝる時やことさら五月富士

　するが地や花橘も茶の匂ひ

しどけなく道芝に憩ふての作に

　どんみりとあふちや花の花曇

五月十五日、大井川が氾濫して川留となつたので、島田の知人塚本如舟宅に逗留して

　ちさはまだ青葉ながらになすび汁

　さみだれの雲吹きおとせ大井川

尾張に入りては名古屋の荷兮の宅を訪ふて三日間滯在し、其間同地方の舊友と情を温めた。荷兮は「橋守集」といふ書を上梓して蕉風を嘲笑したゝめ、勘氣を蒙つたといふことであるが、此の時は芭蕉は總てを許し、温い心を以て訪ふたことであらうと思ふ。

名古屋にての作、小田の代掻く馬を見て自分の一生を顧りみたる時の感想であらう。

　世を旅に代かく小田の行戻り

名古屋の醬油問屋の主人なる野水が閑居せるを訪ふて

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉

美濃路を辿るころ、平田の李由へ文を贈りて

　ひるがほに晝寢せうもの床の山

床の山は彥根の東にある。此の句は貞享五年のものか判然しない。

大垣の藏田氏亭に遊びて

　柴つけし馬の戻りや田植樽（芭蕉翁全傳には「猿雖宅にて」とある）

此處から再び名古屋に引返した。名古屋の數珠師なる露川は別れを惜しんで佐谷まで送つて來た。佐谷の隱士山田素覽亭に泊りて、次の三吟歌仙を卷いた。

　水雞啼と人のいへばや佐谷泊　芭蕉

　苗の雫を舟になげこむ　露川

朝風にむかふ合羽を吹立て　素覽

　大手の內へはしる生もの　芭蕉

（以下略、笈日記）

**故鄕に着く**

落柿舍に宿る

是より伊勢路を辿つて、二十八日には故郷伊賀へ着いた。路通曰「故郷へ立寄、したしきかたへもいつ〳〵よりなつかしみ、命も數有、日數もへぬ」。故郷には翌月閏五月の十六日まで滯在してゐたといふことである。

涼しさや直に野松の枝の形

は上野の雪芝亭にて、松を植うるところを見て詠まれたものであるといふ。十七日には大津を訪ひ、十八日には膳所を訪ふてゐる。行くところ行くところに睦しき人が多いので、心の落着くまゝ語りもし、又泊りもしたことであらうと思はれる。二十二日には京都に出で嵯峨の落柿舍に去來を訪れた。

落柿舍に集り參ずる者、酒堂・支考・丈草・惟然、やがて俳諧が興行された。

閏五月二十二日落柿舍亂吟

柳骨離片荷はすゞし初眞桑　芭蕉
間引捨たる道中の稗　酒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
埒かけわたす手前石垣　支考

月残る川水ふくむ舟の端　　丈草
小いわしかれて砂に照つく　　惟然
（以下略、一葉集）

市庵集には惟然でなく、素牛になつてゐる。蕉門と云へば、江戸は其角、京都は去來。落柿舍に去來を訪ふて俳諧を談ずることの出來た芭蕉の悦びは、容易に筆舌の盡し得るところではない。其角が學問に造詣の深いことはいふまでもないが、京の去來の學者であることに、芭蕉は非常に力强さを感じてゐたやうである。芭蕉は文章などについては自信もなかつたので、去來を介しては訂正などを乞ふたことがある。

尙ほ難波から芝道が來たので、卽興の歌仙が卷かれた。浪化の「續有磯海」を見ると、去來芭蕉・之道の他惟然・丈草・支考・野明等が加つてゐる。

一枚のむしろに晝ね押あひて　　芭蕉
柄も小尻もふるき脇ざし　　惟然
（以下略、續有磯海）

落柿舍に旅の疲れを休められ、納涼せられつゝ作られた發句に

支考へ返事を書く

朝露によごれて涼し瓜の泥

がある。

嵯峨の野明が家に遊びては

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

此の頃下の京にゐた支考が芭蕉へ文を寄こしたので、芭蕉はこの返事を遣はした（寛日記）。

人々が集りて瓜の名所を案內したる時の作に

瓜の皮むいたところや蓮臺野

清瀧の水汲ませてところてん

後の句は野明亭近くを漫步せられる折の句であらうかと思はれる。「此の句を短冊に書つけたまひしが、いかゞ思はれけん引裂て捨られしとなり」翁略傳に云つてゐるのは、大井川浪に塵なし夏の月、の句が、白菊の目に立てゝ見る塵もなし、に似てゐるから取消さうとされたものを、泊船集の誤り傳へたまゝ受入れられたからであることは述べる迄もない。去來・支考の記すところに依つても、誤謬であることは明かである。

松杉をほめてや風のかほる音

六月や峰に雲をく嵐山

前句は小倉山の山院（常寂寺）に詣でられたる時の作、後句はいふまでもなく嵐山に遊びて、雄大なる光景を詠まれたものである。又東山に草菴を營んでゐた東華坊支考を訪はれたやうである。

我に似な二ッにわれし眞桑瓜

これは難波の商人伏見屋芝道と別るゝを惜しんで詠まれた作である。芝道は今度蕉門に入つた人で、後には諷竹と改號してゐる。諷竹は後に砂川集を編んだ程の熱心者であつたのだから、此の時と雖芭蕉の心には深く銘じたことであらうと思ふ。さもなければ、再會のあるやなきかを、斯くまでも強く云ひ表はされはしなかつたであらうから。

夕顏に干瓢むいてあそびけり

の他愛ない句は、此の頃詠み捨てられたものであるらしい。

曲翠亭に小宴をはる

それから無名庵に歸らるゝ途中、山中の夏景色を探ぐられ、兎角親しみ深き無名庵へと心は急がれたであらうが、琵琶湖の納涼に心惹かれて、遂に菅沼曲翠亭に落着かれた。此處には曲翠・芭蕉、それに支考・惟然坊・臥高の風流人五人が小宴を張つて興じた。時に

六月十六日、この時の模樣は支考の「今宵賦」に盡されてゐる。今それが一端を覗けば、――さすが澗水の納凉も忘れがたくて、また三四里の暑さを凌いで、爰に草鞋の紐をとゞむ、今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり、俗あり、俗にして僧に似たる者あり、その交の淡きものは砂川の岸に小松をひたせるが如し、（中略）――去年の今宵は夢の如く、明年はいまだ來らず、今宵の興宴何ぞあからさまならん、そゞろに醉てねぶる者あらば罰盃の數に水をのません、とたはぶれあひぬ」とありて次の五吟の歌仙が見えてゐる。

夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
　露ははらりと蓮の緣先　曲翠
鶯はいつその程に音を入て　臥高
　古き革籠に反故おし込　惟然
月影の雪もちかよる雲の色　支考
　しまふて錢を分る駕かき　芭蕉

（以下略、續猿蓑）

尚ほ曲翠亭滯在中の作には、次の發句及び連句がある。

大津に木節を訪ふ

飯あふぐ嚊が馳走や夕すゞみ　曲翠

菜種干すむしろの端や夕すゞみ
螢逃げゆく紫陽花の花　芭蕉

膳所の游力亭に遊びて次の二句があつた。

湖やあつさを惜む雲のみね

さゞ波や風の薫の相拍子

六月二十一日、大津に出でゝ、醫師木節(芭蕉の終焉に際して藥を盛りたる人)を訪ひ、主人と芭蕉、それに同行の支考と惟然を加へて四吟歌仙が卷かれた。

秋ちかき心のよるや四疊半　芭蕉
しどろに臥るなでしこの露　木節
月殘る夜ぶりの火影打消て　惟然
起ると澤に下るしら鷺　支考
(以下略、一葉集)

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢哉

も木節亭にての作と思はれる。路通は此の句を粟津の庵にての作であると云つてゐるけれども、同行の支考は木節亭にて作られたかのやうに云つてゐる。潮中は何等の理由を擧げずに「此句無名庵にての句作なるべし」と云つてゐるが、餘り當てにもならないやうである。先づ支考の云ふところに從ふことゝする。

木曾塚無名庵への道すがら

道ほそし相撲とり草の花の露

曾て住んだ無名庵を今更の如く眺めた芭蕉は、暫らく逢はないでゐた我子に逢ふた如く、言はんとする言葉もなく、嬉しさ懐しさと、庵を包む自然の偉容に茫然と佇んだことでもらうと思はれる。

この後彦根に許六を訪ふたといふことであるが、如何であるか。彦根に赴く途中山賊に遭難したといふことが隨齋諧話（乾）及び「芭蕉翁行脚怪談袋」に載せてあるが、果して事實かどうか。滿更噓といふ程でもあるまいが。

## 最後の歸郷

再び大津へ出て木節居に滯在してゐる折、郷里の兄半左衛門から消息があつた。盆會を

壽貞尼の死を悼む

營む爲なのである。七月十五日、愛染院に盆會を營みて

家はみな杖にしら髮の墓參

芭蕉は五十一歳である。早老の芭蕉は奥羽行脚の際既に白髮が多かつた樣であるから、今年の白髮は思ひやられる。芭蕉の兄は勿論、芭蕉が知つてゐる親戚の人々には、年老いてゐるため、白髮頭が多かつたことであらうと察せられる。

壽貞尼の死を聞いて「數ならぬ身となおもひそ玉祭」の句を作つたのは此の盆であるか。江戸の猪兵衞宛六月八日に書面を送つてゐるところを見ると、旅にゐて悲報に接したことは事實である。而して右の句は玉祭といふからには、壽貞を思ひ出しての新盆の感慨であつたらうと思ふ。前後を考へると、此の時は壽貞の子である次郎兵衞が伊賀へ歸つてゐて、共に墓參りをしたらしい。

次の二句は此の時分の作と思はれる。

稻妻やかほのところがすゝきの穗

稻妻や闇の方行五位の聲

先きの句は大津滯在中、丹野(本間主馬能太夫)の家に遊び、種々の骸骨が鼓や笛を弄し

て能樂を演じてゐる繪を見て、人生が全くこの髑髏の遊びと同じやうなものであることを感じて詠まれたものである。

郷里伊賀の藤堂玄虎子の庭園の半ば出來上らんとするを見て

　風色やしどろに植る庭の萩

猿雖亭の俳諧

七月二十八日、猿雖亭に俳諧が興行された。此の時は郷里の配力・望翠・土芳・卓袋・木白などが會合した。

　あれ〳〵て末は海ゆく野分かな　猿雖
　　鶴のかしらをあぐる粟の穗　芭蕉
　朝月夜駕に漸おひつきて　配力
　　茶のけぶり立暖簾の皺　望翠
（以下略、一葉集）

尙ほ、望翠・惟然・土芳・雪芝・猿雖・卓袋・九節との連句、

　つぶ〳〵と箒をもるゝ榎實哉　望翠
　　竹のはづれを初あらし吹　惟然

（以下略、一葉集）

も此の頃のものと考へられる。名月の夜、猿雖亭なる蓑虫庵にて俳諧のあつたことは前に掲げた通りであるが、其の夜は餘りに月のよく澄み照るがまゝに、山家を彷徨して左の二句があつた。

名月に麓のきりや田のくもり

名月の花かと見へて棉畠

十六夜は蓑虫庵に歸りて

今宵誰よしのゝ月も十六里

の吟があつた。芭蕉が家兄半左衛門氏の後園に、無名庵を營み建てたのはこの頃である。八月十五夜に入庵の小宴を張つた。この時の献立が「隨齋諧話」に載つてゐる。興味あるかに見えるから、參考までに記して置く。

無名庵に入る

八月十五夜

のつぺい

一煎物（せうが・ふ・こんにやく・ごばう・木くらげ・黒いも）　吸物（ゆ・つかみ豆腐・しめじ・めうが）

中猪口　もみうり・くるみ　しほり汁・すしやうゆ・すり山のいも

肴（にんじん・やき松茸）

くはし　柿

吸もの　松たけ

冷飯（とりさかな・一芋）　煮入・さけ

（註、のつぺいは佛事に用ふること多く、大根・にんじん・里芋等に油揚・豆腐を加へて煮、葛粉にて掻き交ぜたるもの）

　里ふりて柿の木もたぬ家もなし

は片野の望翠亭を訪れた際の作であるといふ。

九月三日支考が伊勢の斗從を伴ふて伊賀の新居無名庵を叩いた。支考は既に東山から伊勢山田へ移つてゐた。支考と斗從が芭蕉を訪ふたのは、師翁が難波地方を行脚せらるゝことを知り、出來得べくんば、伊勢へも迎へたいと思ふ心があつたからである。

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな

は此の時二人を迎へての句である。そしてもう一つ

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく

の吟があつたといふ(支考の說)。併し此の句は元祿五年の「忘梅集」に出てゐるといふことを積翠園が云ふてゐる。さうすると此の時の句でないことは明かである。此の句を立句として歌仙があつたであらうことは考へられないでもない。

松茸やしらぬ木葉のへばり付　　芭蕉
歌の日和は霜でかたまる　　元代
宵の月河原の道を中ほどに　　支考
ことしはきけば里のうり家　　雪芝
(以下略、一葉集)

此の時の參會者は右四人の他に猿雖・望翠・惟然・卓袋・荻子である。

其次の夜（四日）は支考・惟然を相手に發句を詠まれた。

　行秋や手を廣げたる栗の毬

九月八日、郷里を後にして難波へ旅立たれることゝなつた。何故急がれたかといふと、九月九日（重陽佳節）に舊都奈良へ着いて昔を偲ばうとされたからである。同行は支考・惟然と、七月伊賀へ來てゐた故壽貞の子次郎兵衞と都合四人である。見送る人々が多かつたが、其の中で芭蕉の兄半左衞門は甚だしくも老いた弟芭蕉の姿を見て、二度と相逢ふことが出來るかどうかとさへ心細く思ふて、弱い芭蕉を介抱して吳れるよう、連の人々に依賴されたといふ。老兄弟の別、これが永遠の別れになつてしまふとは神ならぬ身の知る由もないが、「背影の見ゆるかぎりはゐ給ひぬ」とあるやうに、段々と離れて小さく消えてゆく芭蕉の姿を眺めてゐる兄半左衞門の心中、これと同じ淋しさは芭蕉にもあつたことゝ思はれる。此の日は必ず奈良へ着かうと急いで、笠置より河舟に乘つて錢司を過りたる時、山一望蜜柑の畑があつたので、先夜の歌仙

　山はみな蜜柑の色の黄になりて

の句は「まさしく此所にこそ候へ」と支考が云ふと、芭蕉は笑ひ乍ら「あはれ吾腸を見せけるよ」など云はれたといふことである。左の句は前夜支考・猿雖・芭蕉・雪芝・惟然・卓袋・望翠等の七吟歌仙中のものである。

山はみな蜜柑の色の黄に成て　芭蕉
日なれてかゝる畑の露霜　支考

（一葉集抄出）

船を降りて歩くこと二里、猿澤池畔の宿に泊つた。殊に月はよく、鹿の聲も哀れ深く聞えるので、池の邊りを吟行したといふ。

ひいと啼く尻聲かなし夜の鹿

翌九日には

菊の香や奈良には古き佛達
菊の香や奈良はいくよの男ぶり

同じ日、くらがり峠にて

菊の香にくらがりのぼる節句かな

の句があつた。

次の句は伊賀から奈良へ向はれる途中の吟ではあるまいかと思ふ。

冬瓜やたがいにかはる顏の形

同九日、難波へ足を向け、先づ駕籠に乗られたが、難波近くなりて駕籠を捨てられた。といふのは、都の地にては乞食行脚の身を忘れてならぬと考へられたからである。生玉邊の日暮に逢ふて

菊に出て奈良と難波は宵月夜

酒堂亭を訪ふ

難波にては、醫師濱田酒堂（別名珍碩ともいふ）亭に旅裝を解かれた。或る夜酒堂の軒がきり〴〵すの聲に交つて賑えて來るので、芭蕉はこれを興がり

床に來て鼾に入やきり〴〵す

の句を詠まれた。此の句は九月二十五日正彥へ宛てた芭蕉の消息に書いてある句である。寒くなつた爲めか、此の頃又持病なる痔に惱まれたやうである。場所が大阪であるだけに、尋ねて來る人も次から〳〵と絕えない。落着けないので、數日は住吉や天王寺其他の名所へと出歩かれた。

十三日の夜、住吉の月を賞したが、此の日は晝のうち雨が降つてゐたゝめか、何となく氣が晴々しなく、夕暮よりは惡寒に惱まされたといふ。併し次の夜（十四日）は快さまゝに、長谷川畦止亭にて、前夜の名殘をつぐのふ俳諧に參られた。芭蕉・畦止・惟然・洒堂・支考・之道・青流の七人である。

升買ふて分別替る月見かな　芭蕉
秋のあらしに魚荷連立　畦止
家のある野は苅跡に花咲て　惟然
いつものくせにこのむ中眼　洒堂

（以下略、一葉集）

十六日の夜、去來・正秀より消息があつた。それによると、奈良の鹿の句が殊の外感じたので、皆鹿の句を詠んだと。

二十日頃か、其柳亭にて

秋もはやはらつく雨に月の形

これは「昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉」を更へられたのである。

車庸亭の俳諧

二十一日は雨天で靜かだつたから、湖江車庸亭にて、芭蕉・車庸・洒堂・游力・諷竹・惟然・支考等七吟の歌仙を卷いた。

秋の夜を打崩したる噺かな　　芭蕉
月まつほどは蒲團身に卷　　車庸
西の山二はな三はな雁啼て　　洒堂
しかゆる牛のよくうごく也　　游力

（以下略、一葉集）

面白き秋の朝寢や亭主ぶり

も車庸亭にて作られたものである。

泥足亭の俳諧

二十六日、清水の茶店四郞兵衞の家に遊び、泥足が集の俳諧があつた、芭蕉・泥足・支考・游力・諷竹・車庸・洒堂・畦止・惟然・亀柳の十人である。

所思

此道や行く人なしに秋の暮　　芭蕉
岨のはたけの木にかゝる蔦　　泥足

月しらむ蕎麥のこぼれに鳥のねて　　文考
　ちひさき家を出て水くむ　　游力
（以下略、一葉集）

　人聲や此道かへる秋のくれ

と、歌仙の立句なる「此道や」の二句を詠まれ、孰れがよいかと申されたので、「此道や」の句が上乘獨歩であることを申上げた。そこで「此道や」の句を取られたといふことである。

　松風の軒をめぐつて秋暮ぬ

は主人泥足の望みによつて書き與へられたさうである。

　此秋は何で年よる雲に鳥

芭蕉の旅懷である。西行の「賴むべき事も無き身を今日までも何にかゝれる玉の緒なるらん」の歌に通ふ意か。「此道や行く人なしに秋の暮」に就いては昔から異論百出してゐる。思ふに、表に秋の暮の寂莫を寫し、裏に正風俳諧道を行く人の寂寥を含められたるものではあるまいか。詳しくは句講の機に答へよう。

「白菊の目に立てゝ……の句」

二十七日、畦止亭に於て即興があつた。此の時芭蕉の發句は「月下送兒」と題して

月澄や狐こはがる兒の供

此の他、洒堂・支考・惟然・畦止・泥足・之道各ゝ題を附して一句づゝ詠んでゐる。

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

「是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし」と支考が云つてゐる。園女は勢州山田渡會の女であり、一有（渭川）の妻である。此の一句以て芭蕉と園女との關係を醜悪ならしめるのは餘りに非であらう。園女は「菊の塵集」を出してゐる程俳諧に熱心であつた。園女亭にて詠まれた此の句を立句として、園女・諷竹・渭川・支考・惟然・洒堂。舍羅・何中等によりて歌仙一卷が卷かれた。恐らくは九月二十七日であらうと思はれるが、二十八日といふ説もある。

園女亭

しら菊の目に立てゝ見る塵もなし　　芭蕉

もみぢに水をながす朝月　　園女

ひやくと鯛の片身を折わけて　　諷竹

何にもせずに年はくれ行　　渭川

(以下略、一葉集)

「秋深き隣……は」の句

二十八日、畦止亭に遊ばれて

秋深き隣は何をする人ぞ

芝柏の招きがあつたゝめに此の發句を送られ、明二十九日の夜行くことを約束されたのであつたが、園女が馳走した菌に中毒して遂に病臥せられた。右の句は自分が無き後の俳壇を喞ちたるものであらうと説く學者があるが、決してそんな堅い心構へから作られたものではなく、芝柏亭が人家立込んでゐるからであらうといふ句選年考(或僧の話)の説が正しく思はれる。

九月二十九日から永眠の日十月十二日までは、次章に略述する。

## 「續猿蓑」について

次に「續猿蓑」について一言する。元は三冊子(土芳編)や宇陀法師(許六編)に後猿蓑とあるので、或ひは後猿蓑が後に續猿蓑とされたのではあるまいかといふ説もある。この續猿蓑は、元祿七年芭蕉が伊賀の新庵なる無名庵にゐて、編成に力を入れられたために大體

續猿蓑の由來

出來上つたものであると云はれてゐる。そしてこの選集の企ては江戸に在つた時であらうといふが、それも確かではない。越人の如きは全く支考の僞書であると云つてゐる。この言は餘り非道すぎるが、恐らくは芭蕉も多少撰しかけてそのまゝになつたものを、支考が勝手に自分に都合の好い樣に纏め上げたものであらうと思はれる。

續猿蓑の卷末に同書の由來を記してゐる。

續猿蓑は芭蕉翁の一派の書也、何人の撰といふ事をしらず、翁遷化の後伊賀上野翁の兄松尾なにがしの許にあり、其懇望年を經て漸今歳の春本書をあたえ、世に廣むる事をゆるし給へり、書中或は墨けしあるひは書入等のおほく侍るは草稿の書なればなり、一字をかえず一行をあらためずその書其手跡を以て直に板行をなす物也、

元祿十一寅五月吉日　　ゐづゝ屋庄兵衞書

とある。併し此の言を全部信じることは出來ない。といふのは同蕉門に在る時の越人が「續猿蓑、かたはらいたき事……翁の作なりと汝が作りて入れたる句如何程かある」と云ひ「翁の作迹と僞る續猿蓑などに……」（不猫蛇）と支考に云つてゐるところ、如何に喧嘩とは云ひ乍ら根もないことを云へたものではない。師芭蕉を譏る越人の心であるとすれば、全然

噓を云つてるのではないと見なければならぬ。

同年江戸にて沾圃・芭蕉・支考・惟然等の歌仙

猿みのにもれたる霜の松露哉　沾圃

日は寒けれど靜なる岡　芭蕉

水かゝる池の中より道ありて　支考

篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

（以下略、一葉集）

のあつた沾圃を手傳はせて「續猿蓑」の撰に取りかゝられ、その稿を伊賀にて再び整理されたかの如く思はれないでもない。併し右の歌仙でさへ五吟歌仙であつたものが、改作されたと云はれてゐる。この撰集については、第一師芭蕉無き後であり、それに整理した人が利巧過ぎる若輩支考であつたが爲めに、疑惑に疑惑を生んで解決されようとはしないのである。或ひは支考に左袒する人、或ひは越人の說を採る人、或ひは共折衷を採る人等々。皆孰れも一理あることを說いてゐるが、餘りに煩はしく思はれるから省略する。

支考の再撰があつたからと思ふ爲めに餘計さう見えるのかも知れないが、先の「炭俵」

や「別座鋪」よりも未だ内容の貧弱を看取せざるを得ない。內容を歌仙・支考の今宵賦・四季の發句（菊は冬九月であるから冬之部に入れてある）・釋敎（附錄として、追善・哀傷がある）旅とに分類してある」今春夏秋冬の發句を卷頭五句づゝ抄出して、當時の蕉門の一班を窺ふ資とする。

続猿蓑中の發句

春之部

温石のあかるゝ夜半や初櫻　露沾
寢時分に又みむ月が初ざくら　其角
顏に似ぬ發句も出よはつ櫻　芭蕉
ちか道や木の股くゞる花の山　洞木
角(すみ)いれし人をかしらや花の友　丈草

夏之部

曉の雹をさそふやほとゝぎす　其角
ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草
しら濱や何を木陰にほとゝぎす　曾良

蜀魂啼や夜しろし朝熊山　支考

鳴瀧の名にやせりあふほとゝぎす　如雪

秋之部

名月の海より冷る田簑かな　洒堂

明月や西にかゝれば蚊屋のつき　如行

もの〳〵の心根とはん月見哉　露沾

ふたつあらばいさかひやせむ今日の月　智月

名月や長屋の陰を人の行　闇指

冬之部

この頃の垣の結目やはつ時雨　野坡

しぐれねば又松風の只をかず　北枝

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨またくづをるゝ日影哉　露沾

初しぐれ小鍋の芋の煮加減

尙ほ今年元祿七年に詠まれた連句には

餞　別

新麥はわざとすゝめぬ首途哉　　山　居

また相蚊帳の空はるかなり　　芭　蕉

〔以下略〕

浪化・去來・芭蕉による

參宮といへば盜もゆるしけり　　浪　化

につと朝日にむかふ横雲　　芭　蕉

（以下略、一葉集）

去來・浪化・芭蕉・之道・丈草・支草・支考・惟然・野童・野明による

葉がくれをこけ出て瓜の著かな　　去　來

野松に蟬の啼立る聲　　浪　化

步行荷持手振の人と噺して　　芭　蕉

駕とこ供のあはひとざるゝ　　之　道

爲有・芭蕉・惟然・野明による

夕がほや蔓に場をとる夏坐鋪　　爲有

西日をふせぐ藪の下苅　　芭蕉

（以下略、一葉集）

芭蕉・安世・支考・空芽・土龍・丹野・路通・葉文による

ひら〳〵と揚る扇や雲の峰　　芭蕉

青葉ほちつく夕立の朝　　安世

（以下略、一葉集）

雪芝・芭蕉・土芳・風麥・玄虎・苔蘇等による

殘る蚊に袷きてよる夜寒哉　　雪芝

餌畚ながらに見するさび鮎　　芭蕉

（以下略、一葉集）

惟然・土芳・猿雖・芭蕉等による

おもしろく噺す間に月暮て　猿雖
まだ入人なき次の居風呂　翁
（以下略、一葉集）

此の他土芳・猿雖・芭蕉による連句、芭蕉・浪化・去来の連句、洒堂・諷竹・芭蕉の連句、如舟の句へ芭蕉の脇句、雪芝の句へ芭蕉の脇句等がある。

# 第十六章　芭蕉の終焉

醫師木節を選ぶ

九月三十日、菌に中りたる芭蕉はしきりに腹痛を訴へ、此の夜より愈〻床に仆れ、泄痢も數回に及んだ。併しもともと胃腸の弱い芭蕉であるから、芭蕉自身も平常の腹痛位に考へもしたであらうし、傍の支考・惟然等も左程の病氣とは思はず、平素腹痛の折用ひらるゝ藥であるところの胃苓湯をすゝめた。けれども何らの效もなくて、苦しまれた儘夜が明けた。

十月一日、病勢は益〻募るばかり、下痢は激しく、御手足が氷るかのやうに冷えて來た。十月二日、支考の「笈日記」に「二日、三日の頃よりやゝつのりて、終に此愁とはなしける也。されば病中の間は、晉子が終焉記にくはしければ」云々とある。以下其角の「枯尾花」にある芭蕉翁終焉記と支考の笈日記」、それに乞隱文曉が編したる芭蕉談終焉之卷なる花屋日記等を參考までに述べて見たいと思ふ。併し花屋日記が後年の僞作であることは定評のあるところ、これについては最後に言及する折もあらう。

此の日は昨日に增して下痢が激しい。そこで支考と惟然は相談の結果、良醫を招き度き旨を師翁へ傳へた。芭蕉のいふには、生來虛弱な身體であつて、自分の身體を知らぬ醫者に

見せても無駄である。大津の木節が一番よく自分の身體を知つてゐるのだから、木節を呼んで貰はうと。そこで木節を呼ぶことに決めたが、去來にも相談すべきところがあるので大津の木節への消息をも持たせて、京の去來へと飛脚を向けた。このことは例の次郎兵衛の記すところとなつてゐるので、どの邊までが事實であるかは疑問である。此の時飛脚に依頼した去來宛の書簡は

飛脚便に申し遣候、老師一昨々夜より少し惡寒氣御座候ところ、起居不穩候、之道不勝手に候故、御不自由と存取計候而、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏座敷、奇麗閑靜に候間借受、之道請判にて先寓居と定候處、今朝は別而御氣分無心元御樣體に候、醫者呼申す筈に候得共、早ク木節ニ御樣體お見せ被成度との御事被仰候條、則木節ニ別紙遣はし候、此狀着次第貴雅にも早々御下り相待ち候、木節御同伴候樣に存候、隨分御急可被下候　　不一

十月二日　　惟然

支考

去來樣

尙々別紙急々木節ニ御届賴存候、以上

又此の夜惟然が去來へ送りたる書狀に

今朝の狀相違候哉と存候、老師御事昨夜より泄痢にて俄に一變、夜中廿餘度の通氣、これは頃夜園女亭にての菌の御過食故と相考候、一夜の中に掌を返すが如く、今朝より猶又通痢度數三十餘度、我等始之道手を握り候迄に候、此狀着次第木節御同伴にて急に御下り相待候、南久太郎町花屋仁左衞門と御尋早々御入可被成候、急々以上

十月二日夜子ノ時　惟　然

去　來　樣

尙々大津の衆其外何方へも手寄〳〵御申遣可被成候、木節は急に被參候樣御賴申候、伊賀えの常飛脚は無之、幸イ羅漢寺の弟子伊勢に赴候に、今朝狀賴遣候迄に候、若共方角より幸便も候はゞ、仰遣可被下候

右の書簡に據ると、芭蕉が花屋仁左衞門の別屋に移つたのは十月二日になる。然るに病床に侍つて看護した支考の記すところは、「十月五日、此朝南の御堂の前しづかなる方に病床をうつして」とある。師の傍にゐた支考の事であるから、まさか日を違へては居るまいと

思はれる。又芭蕉翁繪詞傳にも五日とある。さうすると前掲の書簡が後人の僞作かといふことになつて來る。次郎兵衛は「御堂前南久太郎町花屋仁左衛門と申者の裏座敷を借り受け、間所も數ありて亭主が物數寄に奇麗なり、諸事勝手よろし、その夜直に御介抱申て花屋に移り給ひけり、この時十月三日なり」と云つてゐる。或は十月二日に借受けることを決めて三日に移つたのであるか。先づ疑問のまゝに置く。

これで去來・木節、そして伊賀へ（書簡に示す）病狀を知せ得たのである。勿論これだけでも急報が出來たらば、それからそれへと人々の耳にも入る筈である。

十月三日、右の日順によると、この三日に去來・木節が病床に着いたことになつて、支考の說とは全く合はないものになつてしまふ、されば右に述べた芭蕉翁終焉之記は日取違ひか、さもなくんば僞作であるといふことが明かになる。かく思へば、去來宛の書簡なども巧みに拵へられたものであるかもしれない。尙ほ笈日記でない支考の日記 文曉編 には三日に去來が來り、去來到着するや否や飛脚を木節に遣したる爲め、夜分木節が來たといふてゐる。これなども總てがよく合ふ樣に、事實らしく作られたものと思へば思はれぬこともない。

支考の申すやうに其角の「枯尾花」、それに支考の「笈日記」を見て其の邊の消息を窺ふことが妥當であるかも知れない。芭蕉翁に最も接近してゐた人の言葉として、信じてゆけば疑問を挿し挾む餘地がないのである。

併し病中日記は日記として、支考・惟然・次郎兵衞、それから去來等が記したものであるか。さうしたこともあり得ないとは考へられない。其角が去來に宛てた「御終焉記の義被仰聞いかゝ可仕哉併し貴命の事に候ゆへ取懸り見申すべく候御病氣前よりの御樣體貴兒始め惟然・支考が覺書勿論御夜伽の發句等御書付御見せ可被成候且次郎兵衞日記共に御見せ可被成候」が事實とすれば、明かに病床の覺書が作成されてゐたといふことを云ひ得るわけである。同一人なる支考の覺書と支考の「笈日記」との日附の合はぬのは甚だ疑問でもあり、又遺憾な點でもある。或ひは取込中に記したる病床日記と、後日書き記したる「笈日記」との日附の合はぬは、兎角日時などを左程重要に思はぬ時代でもあり、且つ折々日時を間違へることのある支考の記すところであるから、その位のことは有つたものと云へばそれ迄でもある。

病床の覺書を集めたる芭蕉談「所謂花屋日記が當時世に出でないで、百數十年後に現れた

といふことが大いなる疑問を生んでゐる。併しこれとて見ように依つては、反故であるが爲めに誰か一人の手（魯町卯七のもとに）に渡つたまゝになつてゐるといふこともあり得無いとは云へないであらう。

花屋日記を僞作として主張するには、數々の不合理な個所を拉し來りて難詰することも出來やうし、又花屋日記を事實のものとして主張するにも、相當の根據や理由を舉げ得ることが出來やう。研究の未熟な筆者は、當時或ひは後年の書などを照合して、終焉の日附や記事などが餘りにも齟齬してゐるのを見て、孰れを是孰れを非とすべきかに躊躇してしまふ。終焉の記を述べやうとして、昔日の講釋に奔つてしまつたことは甚だ迷惑とされるであらうから、以下花屋日記の說も按配しながら、病床の詳細に筆をすゝめやう。

十月四日、車庸・舍羅・諷竹・畦止・何中等が師芭蕉翁の病氣であることを知らずに、之道亭に尋ねて來た。之道より師の病篤きを聞いた一同は愴惶として花屋に驅け寄つた。が病氣の不淨を憚つて居らるゝ芭蕉の意を察して、惟然は漫りに座敷へ通らぬ樣貼紙をしたといふ。今日は醫師木節の勸めで、朝鮮人參半兩・包香十五袋を取つた。園女よりは御菓子と水仙が贈られて來た。舍羅・呑舟は師翁の按摩をしてあげたといふ（次郎兵衛記）。翁略傳に

は九月二十九日より舍羅・吞舟が病床に在つて看護してゐたと記してあるが、次郎兵衞の記すところには、四日に舍羅・吞舟が來たといふのである。

十月五日、膳所・大津の間伊勢・尾張の親しい人々に文通、支考を召して、殊の外氣分がよいなどと申されたといふ(笈日記)。次郎兵衞の記に從ふと、朝丈草・乙州・正秀が尋ねて來た。曇天のためか寒冷も烈しくて、師も時々惡寒を催せらるゝ樣子、食慾なく僅かに湯素麵二箸だけ口にせられたといふ。下痢は五十餘回に及んだとか。

十月六日、昨日の暮より藥が利いたせいか、心持がよいからと云はれて自分から起きかへられ、白髮の樣子などを見せられたといふことを支考が云つてゐる。

去來の覺書に據ると、朝入麵三箸御とりになつてから、去來を近く召されて、先頃野明が方に殘し置いた

　大井川波に塵なし夏の月

此の句は大井川の夏景色を云ひかなつたやうに思つてゐたが、淸瀧にて

　淸瀧や波に散りこむ靑松葉

と詠んだ句は事柄は變つてゐるが、同巣の句であると他人より云はれるかも知れないから

大井川の句を捨てようと貴殿に云つたことがあつた。而して此の頃園女亭にて

　　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

と吟じた。これ又同案にて句の道筋が同じであるから、前の二句を捨てゝ此の白菊の句を殘して置かうと云はれた。去來は涙を浮べ、名匠の名を惜しみ道を重ぜらるゝことの有難さ尊とさに感じ、三句とも別々であつて、同巣でないことを種々の例を引いて申上げた。そこで師翁も機嫌よくうなづかれたといふやうな意のことを云つてゐる。支考に此の句のことを云はれたのは九日であると「笈日記」に云つてゐる。さうすると三日違つてゐることになる。尙ほ花屋に移された日も、去來・木節へ消息された日も三日違ひになつてゐる。これは孰れの間違ひか、支考の輕率も全然無いとは保證されない。支考の說「笈日記」に從つた人々は、支考のいふ日附を正當として傳へて來てゐる。孰れが正しいかは私の速斷を以てすることが出來ない。

十月七日、膳所から夜船に乘つて來た正秀が此の朝着いた。何といふことなしに芭蕉は只涙を流して泣くだけであつた。さうこうしてゐる間に京都から去來が來た。夕方は乙州・木節・丈草それから平田の李由も尋ねて來た。孰れも代る／＼看護を盡したが、去來は一刻

鬼貫見舞に訪ふ

蕉風の將來を戒しむ

も病床を離れず、親のやうに仕へた（笈日記の意）。枯尾花「あつまる人々の中にも去來京より馳くるに膳所より正秀、大津より木節・乙州・丈草・李由・平田の李由つき添て支考。惟然と共にかゝるなげきをつぶやき侍るもとよりも心神の散亂なかりければ不淨をはゞかりて人々近くも招かれず折々の詞につかへ侍りけるたゞ壁をへだてゝ命運を祈る」と。

惟然の記すところを見れば、園女よりお見舞として菓子が贈られた。珍らしくも鬼貫が見舞に訪ふて來た。だが去來は折角ではあるが師翁に面會の出來ない旨を鬼貫に傳へて、鬼貫を返したといふ。園女・可中・渭川等が來場したので、去來や支考が出でゝ會釋をした夜分一としきり靜かになつたところを見て、乙州・正秀は心配あり氣に、若し師翁が還くなられたならば「其の後の俳諧はどうなるかと去來に尋ねた。去來も此の事は非常に氣になつてゐたので、只今師翁の御氣分宜しきを幸ひと思ふて御教導を願つた。その時の御言葉は一俳諧の變化きはまりなし。しかれども眞行草の三ッをはなれず、その三ッよりして千變萬化す。我いまだその轡をめぐらさず、汝等此の以後とても地をはなるゝ事なかれ、地とは心は杜子美が老を思ひ、さびは西行上人の道心をしたひ、調は業平が高儀をうつし、いつまでも我等世にありと思ひゆめ／＼他に化せらるゝ事なかれ」であつたといふ。それも

旅に病ての句あり

病苦しき師翁が喘ぎながら申されたので、呑舟は早速御口を潤し、次に御藥を參らせたといふことである。我無きあとの蕉風の淋しさを案じて申された師翁の御言葉、さもあることであらうが、これを靜聽してゐた去來始めあまたの門弟は何を感じたか、心中如何に泣いたか、私が此處に長言を費す迄もないことである

十月八日、之道は住吉神社に參詣して、病氣平癒と師翁の延命を祈願した。深夜、夢より醒めたるやうな面持にて、呑舟を呼んで硯の墨を磨らせられたる後

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

と書かせられた。その後、なほかけ廻る夢心、といふ句を作られ、どちらがよいかと支考に尋ねられたが、御病中を苦しめまゐらせてはと思つて、此の句少しも劣つて居りませんと申上げたといふことである、此の際の芭蕉の心境を支考が笈日記に述べてゐるのを見れば「はた生死の轉變を前におきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちに今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへす〳〵悔み申されし也」と。

此の夜の病氣平癒祈願の發句は

賀會祈禱の句

落つきやから手水して神集め　木節

凩の空見なほすや鶴の聲　去來

足かろに竹の林やみそさゞひ　惟然

初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀

神のるす賴み力や松のかぜ　之道

居上ていさみつきけり鷹の貌　伽香

起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉　支考

水仙や使につれて床離れ　呑舟

峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈草

日にまして見ます顏也霜の菊　乙州

並居る各〻は師の麻の衣が餘りに垢ついて居るのを見苦しく思ふて、よき衣に着更へて貰ひ、又夜具の薄いのを心苦しく思ふて、錦繡のよきものに調へてやつたといふことである

（枯尾花による）。

支考の覺書に據れば、木節は心を盡して藥餌に努めたが一向効驗が現れない、そこで治法を他醫に求められんことを去來に請ふた。早速去來はこのことを芭蕉に申し傳へた。芭蕉のいふには、天業を如何ともすることが出來ない、我れは生命の在る間木節の神方に服して行かうと。人を信じて、徒に藥や醫法に走らぬ芭蕉の偉大さが見えるではないか。

支考と乙州が師翁に辭世の句欲しき旨を、去來に申し出でた。去來は師翁の機嫌宜しき折を見て、一句を御殘しあれば諸門人の望みが足ると慫慂した。芭蕉は「きのふの發句はけふの辭世、今日の發句はあすの辭世、我生涯言捨し句々、一句として辭世ならざるはなし。若しわが辭世は如何にやと問人あらば、此の年頃いひ捨おきし句、何れなりとも辭世なり」と息つゞく限り語られたといふことである。以上は支考の記してゐるところのものである。

惟然の記を見れば、此の夜嵯峨の野明・爲有より柿が贈り屆けられた。思へば二日夜故郷伊賀へ事附けをして、師翁の病氣を知らせてあるにも拘らず、未だに音信がない。使ひを頼まれた羅漢寺の僧は途中病氣の爲め十二日に屆けたといふ。そこで去來と乙州は相談の結

果、再び故郷へ飛脚を向けようとして師翁に伺つた。芭蕉の云ふには、自分は隱遁の身として旅に出てゐるのであつて、而かも親族中が止めるのも聞かずに出て來たものである、旅の身空の苦しみは自分の過ちである。假令どんなことにならうとも知らして下さるなと。死期に垂んとして猶且人情の厚きこと深きこと、各〻の者唯感服するだけであつたといふ驚いたことには下痢の度數が六十回に及んだとか。

十月九日、藥を召されて後支考に申さるゝには、此の事は去來にも語つたことであるが、

大井川浪に塵なし夏の月

は園女亭にて詠んだ白菊の句と似てゐて無き跡の妄執となるから

清瀧や波にちり込む青松葉

と直し度いとのことであつた。

去來の覺書に從へば、古き衣裳や垢付きたる夜具を、人々の取計ひでよき衣に召しかへまゐらせ申したところ、われ邊地波濤のほとりに草を敷寢塊を枕として終りをとるべき身のかゝる美々しき褥の上にしかも未來迄の友どちにぎ〳〵しく鬼錄に上らん事受生の本望なり、と云つて喜ばれたといふ。そして丈草を召されて、昨夜吞舟に書かせて置いた。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

「枯野をめぐる夢心」ともしたが、いづれがよいか各〻評をし給へと仰言つた。生死の一大事を前に置いて、風神の名章を唱へ給ふこと、諸門葉の喜び、他門の聞え末代の龜鑑であると、丈草は鼻すゝり泪を流したといふ。

此の日より殊の外衰弱なされ、下痢の度數は計ることさへ出來なかつたといふことである。

十月十日、夜明方より時雨れてゐる。昨夜より病勢俄かに革りたる模樣、下痢益〻激しく、時折譫言を云はれるので、木節は危機と知りて芍藥湯を盛つた。翁は夢中に梨の實を欲せらる、木節は堅く制したけれども、止むことなく欲せらるゝので、唯一と切を差上げた。木節は愈〻死期近きことを秘かに傍の人々へ告げた。此の日は誰一人も食事を採るものが無かつたといふ。それでも夕刻は幾分快くなられたものか、人心地を得られたやうであると。右は惟然の記すところである。

### 芭蕉の遺書

支考の笈日記に據ると、夜去來を召して何か話し、後支考を召して遺書三通を認めさせられた。外に伊賀の兄へ贈る一通は自分で認められた。これは後日正秀が預つて、木曾塚

の舊庵に歸つたといふ。
芭蕉自筆の遺言は芭蕉歿後十六日の夜、曲翠亭に會して各〻開き見たといひ、「伊賀への文はたゞ何事もなくて、先だち給へる事のあさましう、おぼゆるよし、かへす〲申殘されしなり」（笈日記）とある。左に掲げてみる。

御先ニ立候段、殘念に可レ被ニ思召一候、如何樣とも又右衞門便ニ被レ成、御年被レ寄御心靜ニ御臨終可レ被レ成候、こゝに至可ニ申上一事無ニ御座一候、市兵衞、次右衞門、意專老をはじめ不レ殘御心得奉レ賴候、中ニも十左衞門殿、半左殿、右之通ニ候、ばゝ樣およしカ落し可レ申候、以上

十月十日　　桃青

松尾半左衞門樣

新藏ハ殊に骨被折忝候

として支考に代筆させた遺言三通とは次のものである。

一伊兵衞ニ申候、當年ハ壽貞事ニ付、還〲御骨折面談ニ御禮と存候所、無ニ是非一事ニ候、殘り候二人之者共、十方を失ひうろたへ可レ申候。好齋老など御相談被レ成可レ然

了簡可㆑有候、

一好齋老、よろづ御懇切生前死後難㆑忘候、

一榮順尼、禪可坊、情ふかき御人〳〵、面上ニ御禮不㆑申殘念之事ニ存候、

一貴樣病起、御養生隨分御勉可㆑有候、

一桃隣へ申候、再會不㆑叶可㆑被ニ力落一候、彌、杉風、子珊、八草子、よろづ御投かけ、

兎も角も一日暮と可㆑存候、

元祿七年十月

支考此度、前働驚深切實を被㆑盡候、此段賴存候、庵の佛ハ則出家之事ニ候へば遣し候、

以上

はせを判

支考云、前後の後の字落なるべし、命終の近さに落字却て殊勝なりと、おの／＼涙をこぼせしと云々、

遺物覺

伊賀に有

一三日月日記

一發句少書本　　　　同　所

一埋　木　　　　半殘方に有

一新式書入

是は杉風へ可レ被レ遣候、落字等有レ之本寫にて可レ被レ考候、支考も可レ被レ寫候、

一文章、反故等、

右は杉風方に有レ之候、文章之草稿は支考可レ被レ爲ニ點檢一候、

一羽州岸本氏之發句、炭俵集に粉入候、公羽と翁との違にて可レ有レ之候、杉風より斷頼入候、

一猿蓑のうち、座頭の句弓直し、

一古今の序傳、百人一音祕聞抄、是は支考へ可レ被レ遣候

元祿七年十月　日　　　はせを判

---

一杉風へ申候、久〻厚志死後迄難レ忘存候、不慮なる所ニ而相果、御暇乞不レ致段、互に存念無ニ是非一事に存候、彌俳諧御勤候而、老後の御樂ニ可レ被レ成候、

一甚五兵衛殿へ申候、永〻御厚情ニあつかり、死後迄も難レ忘存候、不慮なる所而ニ相果、御暇乞も不レ致、互ニ殘念、是非なき事ニ存候、彌俳諧御勤候而、老後はやく御樂可レ被レ成候、御内室樣之不ニ相替一御懇情最後迄も悦申候、

一門人方其角は此方へ登、嵐雪を始として不レ殘御心得可レ被レ成候、

元祿七年十月　　　はせを　朱印

右支考代筆の三通悉く「はせを」の文字は自筆である。

この十日の夜更頃、多くの門人は師の枕の左右に侍りて、今後の俳諧が如何になるかを尋ねた。されば此道の吾に出て後三十餘年にして百變百化す、しかれどもそのさかひ眞草行の三をはなれず、その三が中にいまだ一二をもつくさゞる」(笈日記)よしを、唇をうるほし〳〵申されたので、俳諧道の神の如く感じ入りて、一座の人々は涙に袖を絞つたといふことである。

十月十一日、突然に江戸の其角が來た。其角は大勢の人々と伊勢參宮に參り、和州・紀州・泉州から難波へ這入つたところ、師の病氣であることを耳にするや、愴惶として花屋の病床を訪れたのであつた。其角は病に痩せ老いた師の御顏を拜して、逢へた喜びも束の

間、歎き悲んで只落涙するばかりであつた。去來・丈草・支考其の他の人々が其角を次の部屋に呼んで、師の病狀を詳しく傳へた。

夜分、芭蕉は元氣な子が寢醒めたやうに粥を望まれたので、皆々は大喜びで勸め參らせた。兎に角、十月一日以來初めて食事を採られたのであるから、並居る人々の喜びは、暗夜に光りを得た如くに明るい嬉しい心となつたに違ひない。去來は嬉しさの餘り、土鍋から粥を移しておし頂き

病中のあまりすゝりて冬籠

の句を卽吟し、師を慰める爲めに一同卽吟しようぢやないかと告げた。

惟然と正秀は、昨夜一つの蒲團をこつちへ引きあつちへ引きして、終に夜を明したことを思ひ出して笑ひ

引はりて蒲團に寒き笑ひ哉　　惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠り　　正秀

の句を作つて一同を笑はせたので、師も亦笑顏を見せられたといふ。

支考は兼てから、師の發句を一集に纏めて見度い心があつたので、今日の機嫌よき折に

申し出でゝ見度いと去來に相談した。これを聞いた去來は、名聞を好まれぬ師の心を知つてゐるので、若輩の支考をかん〴〵に怒り付け、此の座を去れとまで荒く追立てた。面目丸潰れの支考、句が出來たからと惟然に清記を依賴した。

しかられて次の間に立つ寒さかな　支考

尙ほ丈草・木節・乙州・其角の句は

うづくまる藥の下の寒さかな　丈草

闇とりて菜飯たかする夜伽かな　木節

皆子なりみのむし寒く鳴盡す　乙州

吹井より鶴を招かむ初時雨　其角

である。惟然が一々讀み上げたところ、もう一度丈草の句をと所望された。芭蕉は丈草の句を、何時もながらにさびしをりの調ふた句であると褒めた。一座は師の好機嫌に喜色靄々たるものがあつたけれども、木節獨り悲しんでゐる。其角は不審に思ふて其の理由を問ふた。木節の云ふには、絕食中のところ、俄に食が進んだのは死期遠からぬ證であると。果して夜半から惡寒烈しく來り、打つて變つた病狀となつてしまつた。

といふ。以上この十一日の記は土芳・卓袋の物語に據るものである。

其角が枯尾花に記してゐるのも、大體は右の說明と大同少異である。

支考の笈日記には同じく其角の來訪を記し、夜の明けんとする頃木節に「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず、たゞねがはくば、老子が藥にて最後までの脣をぬらし」云々。と木節を賴み、左右の人を退けて不淨を浴し、香を燒いて物をも云はずに安臥されたといふことである。

十月二十日、土芳と卓袋の物語に據ると、今迄閉ぢ籠めてゐた病床の障子や襖を取りはづし、穢れを憚つて近づかないやうに傳へてから行水を乞はれた。木節は側にゐて制したが聞かれなかつたから、止むを得ずに湯を參らせた。やがて身を淸めた芭蕉は、木節の致れり盡せりなる醫術を有難く謝し、それから其角・丈草・去來を近くに呼び寄せ、乙州と正秀を左右に居らせ、支考と惟然に遺言をこまごまと筆記させた。其の聲が段々と細くなるばかりなので、次郎兵衞は慌てゝ素湯を運んで口を潤してやつた。さうしてゐると思ひ出したやうに去來に向つて、「先頃賓永阿闍梨より路通が事を仰あり、其後汝が丈草・乙州等に迸りし

消息、露霜とは聞捨ず、併し少しいみはゞかる事ありて雲井のよそには成し侍りぬ、彼が數年の薪水の勞、努々わすれおかず、我なきあとには、およそに見捨て給はず、風流交り給へ、此事賴置侍る、諸國にも傳へ給はれかし」の意を云ひ終りて合掌され、觀音經を唱へられながら、次郎兵衞に寄りかゝつたまゝ永眠された。時に元祿七年十月十二日申の中刻（午後四時ごろ）であつた。行年五十一歲である。

## 芭蕉の送葬

其の夜早速不淨をきよめ、遺骸を白木の長櫃に納め、京へ荷物を送る樣にして、其角・去來・丈草・乙州・正秀・木節・惟然・支考・之道・呑舟・次郎兵衞の十一人が川船を傭ふて伏見に運び、十三日巳の時過には乙州の宅に著いた。十四日、芭蕉の遺言に從ふて義仲寺に葬ることゝし、義仲寺の住職眞愚上人を導師として、義仲寺の木曾塚の右に埋葬した時は眞夜中であつたといふ。其のうちから芭蕉の葬式に集り來た人は、實に三百餘人の大勢に達したと云はれてゐる。當時三百餘人の會葬者があつたといふだけでも驚異に價するが、近鄕はいふに及ばす、所々方々より集り來た老若男女が、芭蕉を惜しみ泣いたといふに至つては、これ唯の俳人芭蕉ではなくて、實に芭蕉の德の至すところと見なくてはならないと思ふ。

葬儀の盛大なる模様は略して、芭蕉の人と爲りを窺ふために、遺物を掲げて此の章を終りたいと思ふ。

遺物

一、出山佛　一體　御長一寸一分
一、鐵如意　一本　佛頂禪師ヨリ附與、長サ押延テ凡ソ一尺九寸位、頭ヲ蔦ノ葉形ニ、金箔シ、木曾寺ニアリ、(丈草ニ附與)
一、觀音經　小本一部
一、紙縷袈裟　佛頂禪師ヨリ附與　(惟然ニ附與)
一、被風　(惟然ニ附與)
一、銅鉢　一口　(惟然ニ附與)
一、木硯　樫ノ木ニテ旅硯也　(惟然ニ附與)
一、古今集序說　一部
一、百人一首(書入有)　一部
一、新式　一部
一、奥之細道　一部

一、御　　笠　　一　蓋　（惟然ニ附與）
一、菅　　簔　　一　枚　（惟然ニ附與）
一、御　　杖　　一　本　（惟然ニ附與）

右ニヨリ袈裟ヨリ以下七品ハ、兼而惟然ニ御附與之御約諾之由ニ候故、直ニ惟然ニ附與

一、御　頭　陀　一

この中のものを便宜上左に列記すれば、

一、杜子美詩集
一、山　家　集
外ニ後猿簔ト題アリテ歌仙三卷、發句四五十吟、書捨ノ反故、紙ニ卷キタル布切（五寸ニ六寸許ニシテ、上包ニ狭ノ細布ト有、進上清風ト有）、和歌ノ古短冊二枚、松岸蚶潟ノ繪二枚、

以上は去來の記すところとして花屋日記に擧げてあるものであるが、寃日記に支考のいふことゝは一致しないものがある。出山の尊像は支考が貰つたといつてゐる、或ひはさうかも知れぬ。けれども支考は遺物中に「三日月日記」のあつたことを記してゐる。その代り事

實遺されたらしく思はれる種々のものを逸してゐる。思へば玄旨法師より紹巴、紹巴より貞德、貞德より貞室、貞室より季吟、季吟より芭蕉へと傳はつた鳥羽文臺一脚も遺物となつてしまつたわけである。

支考の「笈日記」が先に上梓されたといふ理由ばかりでなしに、支考が書いたものとして歷史的な價値を認めなければならぬ。そこへゆくと後年文曉の手によつて上木された所謂「花屋日記」は非常に損な立場に在る。併し乍ら、確かに當時手記されたものがそのまま殘つて忘れられてゐたとするならば、或ひは誇張を、或ひは誤謬を可成含んでゐる支考の「笈日記」よりは「花屋日記」が數等眞價を有するといふことになる。これは未だ研究の餘地があらう。

# 芭蕉雜考

## 芭蕉の戀愛について

故郷出奔を女性關係に結び付ける說

芭蕉と女、日本が生んだ大俳人芭蕉であるだけに誰しも穿鑿して見たくなるのが人情であらう。昔に於ても、殊に現代に於ては、尙ほ更この方面の考察が多く行はれてゐる。曾て筆者もこれに關する考證論說を蒐集して、徒らに想像を逞しうしたことがあつた。併し甲論乙駁、畢竟するに聖者たらしめんとして女性關係を否定するものと、これと正反對に遊蕩人芭蕉を畫かんとしての曲筆だけであつて、其の眞相を極めてゐない。それもその筈、正確な證據がないのであるから、止むを得ないものであると云はなければならないかも知れない。

先づ第一に論難されてゐるものに、故郷出奔を女性關係に結び付けられてゐるものがある。

一、十九歲の時、主蟬吟公夫人の侍女と通じたといふ寃罪を負ひ、憤慨して主家を去つ

たと（錦江の芭蕉翁傳）

二、蟬吟公歿後繼嗣爭ひの際、芭蕉は夫人を助けて遺兒を奉じ忠勤を勵んだ爲めに、夫人との醜聞を傳へられた（伊賀の傳說）

三、兄嫁（半左衛門の妻）との醜聞を傳へられた爲めに出奔したといふ（伊賀の傳說）

四、花見の際、芭蕉の袴の破れてゐるのを侍女某が縫ふて呉れた。それが同僚に怪まれて侍女が入水した、芭蕉は侍女の死を悲しんで故鄕を出奔したのであるといふ（冠山侯芭蕉傳、樋口功氏芭蕉硏究より引く）

右に擧げた記錄がある爲めに、芭蕉は隨分と迷惑を蒙つてゐるでもあらうし、又人間的に親しく見られてゐるとも云はれやう。今日までそれらの遺聞を是非する證據を提へ得ない爲めに、全く好事家の僞作に過ぎないものだといふて一蹴されてゐるかと思ふと、火の無い所に煙の立ちやうがない、從つて明言は出來ないが、さうした女性關係が、卽ち右の中の或一つのものが事實あつたのではないかと云はれてゐる。私などもどちらへ左袒をしてよいか、唯迷はざるを得なかつた。成程諸說を尤もらしく信じてゆけば、さもあつたやうに思はれないでもない。又それに對して有利なる樣彼の行動を結び付けるといふことも出

來ないではない。さうかと思ふと諸說を全く揑造であると否定しても好都合である。五里霧中とはこのことか。何れの書にも見飽きたが、さればといつて反證を得る程の硏究にも進めないでゐた。此處に計らずも芭蕉硏究の第一人者勝峰晋風氏より色々とお話を承つて都てが氷解した如く感じ、悅びに堪へなかつた。氏より借りて來た新聞中これに關する記事を轉載して讀者にお傳へしたい。

――寬文六年の亡命說を否定するには何かそこに理由がなければならぬ。それがある。その新事實が發見されたのである。新七郞家の二代良精は良忠所生嫡孫良長、新之助）が當歲であつたので家督相續權を豫約するのを憚つて、その次男で良忠の舍弟になる良重（五郞左衞門）を蟬吟に代つて嫡子とし、良長の母である蟬吟の未亡人を良重に再婚せしめたことが判然したのである。

蟬吟の死は悲しい。主人の情誼としてそれよりも關心されるのは當歲の遺孤の運命である。舍弟良重を嫡子としてその後に蟬吟の遺子良長を据ゑる默契を以て（事實延寶二年九歲で祖父を假父として新七郞家を相續した。これが後の探丸である）未亡人の再婚ともなつたであらうからその間に介在して芭蕉の殉死も遁世も斷念せねばならなかつた

事情は察しられる。かうして芭蕉は寛文十二年の正月「貝おほひ」を選する頃伊賀に在國して新七郎家の扶持を受けてゐたと解するのが頗る自然の成行であらねばならぬ。が蟬吟亡じていつまでも近習である筈がないから、芭蕉は勘定部屋に廻つて責任ある一役を持つことになつたのであるらしい。芭蕉自筆の野菜物買入帳があつてそれを見た曰人が芭蕉を新七郎家の料理方と傳へてゐる事で推察される。然るに蟬吟の後繼者良重は寛文十二年十二月二十二日卒去した。享年二十二であつた。寛文十二年は芭蕉の江戸下向を確定する年次なので良忠、良重の二代の嫡子を見送つて主家を放任したとすれば甚だ都合がよいのだが、江戸下向はその年の春を定說とするので時日の喰違ひがあつて良重死後となす譯にいかない。芭蕉の出奔とその動機を女性と交渉させる傳說はその一、主家の侍女との寃罪、その二、蟬吟未亡人との醜聞、その三、阿嫂との濡衣である。新七郎家屋敷の見取圖で見ると勘定部屋と女中部屋とはすぐ隣室になつてゐる。その噂は立たないではなかつたらうが、寛文二年とする說は年代的に辻褄が合はない。蟬吟未亡人との仲を中傷され激昂して主家を脫した說は遺子良長の問題を巧に取入れてはゐるが、未亡人は城代釆女家から寛文二年蟬吟の後妻に入嫁したので、たとへ歿後とは云へ假にもそ

壽貞尼を芭蕉の妾であつたとする說

んな事が人の口に上つたとすれば舍弟良重との再婚は成立しないであらう。後人の脚色である。嫂は長兄半左衛門の妻であるが夫婦に子なく芭蕉を相續人に呼ぶ爲めの手紙の返事と思はるゝものに、何と云つても固辭する決意を述べたものがあり、遂に末の妹のよしが半左衛門の養女となつた系圖から考へて頗る見え透いた作り事である。考證は略して結論的にこれまで述べた新事實と云ふは伊賀上野の菊山、村治兩氏が舊城代采女家の系圖を入手し、更に菊山氏が新七郎家の系圖の一部をその後裔藤堂熊之助氏から抄錄を許されたものを對照硏究した結果である。又曰人の手記は大阪の森繁夫氏の許で一覽した事をついでながら書添へておく。云々(七・七・一四時事新報、芭蕉を探る、發見された新事實)

これに依つて蟬吟公未亡人との醜聞及び嫂との醜聞は、僞傳であるといふことが完全に證明されたわけである。只怪しいと思はれるのは、勝峰氏も云はれる樣に女中との關係があつたとすればある位なものである。侍女との關係といふが、役目が大分懸隔れてゐるので、さうした關係の起りやう筈がないと云はれてゐる。

芭蕉が後年非常に交涉を持ち、遺言らしい言葉迄殘してゐる女性に壽貞尼がある。壽貞

尼が芭蕉の妻であるとかないとか、兎に角非常に關係の深い女性、只の交際ではなく女色關係が結ばれてゐたであらうと推考されてゐるものは、野坡の門人なる風律の「小ばなし」に野坡の談ずるところとして「壽貞は翁の若き頃の妾にしてとく尼になりしなり」とあるからである。併しこれが事實かどうかは疑はしいものである。これを若し本當とすると、何故壽貞が尼になつてゐるか、そして芭蕉が生涯壽貞の事を心配してゐるか、尼になつたならば俗人芭蕉との交渉を續けないのが當然ではないか、といふ疑問が湧いて來る。然るを芭蕉が旅に出てゐる留守の芭蕉庵を守つたりしてゐるのは、愈〻不思議ではないかといふことになる。それのみか、壽貞を假りに芭蕉の妾であるとすると、かの次郎兵衛の申す「次郎兵衛物語」なるものが全く嘘のものになつてしまふ。

次郎兵衛は壽貞を母と呼んでゐるのであるから、確かに次郎兵衛は壽貞の子であると云へる。次郎兵衛は芭蕉と同年輩であり、母は芭蕉の乳母であると明言してゐるのが次郎兵衛である。これは勿論「次郎兵衛物語」を中心に述べてゐることであるが、斯くして想像に想像を加へてか、次郎兵衛は芭蕉と壽貞が産んだ子供であうといふ說さへ出てゐる仕末である。これはちと氣を廻し過ぎた嫌ひがあるであらう。餘りに酷ど過ぎる考察であつて値

壽貞尼を芭蕉の乳母であつたとする説

聽するには馬鹿々々しいと思はれる。どう考へて見ても、次郎兵衞が芭蕉の子供であるならば、芭蕉は親としての態度を一再ならず示すのが當り前である。それと共に次郎兵衞も若し芭蕉を自分の親であると知つたならば、子らしい態度を以て芭蕉に接するのが當り前である。それにも拘らず芭蕉は次郎兵衞と凡そ三十年間も交渉してゐながら、それに相應はしい情愛を披瀝したと思はれる節がないではないか。次郎兵衞は芭蕉の臨終迄、主家に仕へる如き敬虔な態度を以てしてゐる。又芭蕉は乳母の子に對する如き溫情を以て次郎兵衞の面倒を見てゐるのである。

壽貞が芭蕉若き頃の乳母であつたとするならば、何故に壽貞の生涯を案じ且つ其子なる次郎兵衞とも深い關係を續けて行つたか、これを裏書する有力なる材料を三四擧げることが出來るのである。

元祿七年、芭蕉が上方遊杖の時(句選年考)、甥なる松村伊兵衞(猪兵衞も同じであらう杉風の手代である)へ宛てた手紙に

壽貞無仕合もの、まさ、おふう同じく不仕合とかく難申盡候、好齋老へ別紙可申上候へ共急便候間、此書狀一所に御覽被下候樣ニ賴存候、萬事御肝煎御精御出しの段〻先書にも

中來拙ミ辱誠のふしぎの縁ニにて此御人頼置候もケ様ニ可有端と被存候、何事も／＼夢まぼろしの世界一言理くつは無之候、ともかくも能様に御はからひ可被成候、理兵へもうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ取亂し不申様ニ御しめし可被成候、以上、六月八日猪兵衞様　桃青（眞蹟集）

理兵衞は壽貞の父、おふうは母、まさは壽貞の姉妹であるらしい。右の手紙は芭蕉が旅舍に在りて、壽貞の死を聞くや悲しみ慌てゝ猪兵衞に宛てたものである。好齋老は深川の隱者で芭蕉の知人であるらしい。芭蕉は不取敢右の悔みの消息をおくり、後伊賀で一尼壽貞が身まかりけると聞て」と前書おいて

數ならぬ身となおもひそ玉祭

の句をものしてゐる。これを考へて見ても、壽貞の死を知つた芭蕉は如何に力を落してゐるか、容易に察せられるところである。されぼこそ、いろ／＼と噂も立つことになるのである。同じく元祿七年五月十一日付を以て杉風に宛てた消息が次の如きものである。

（前文略）猪兵衞病氣桃隣無御油斷被仰付可被下候、折ゝ深川へ御なぐさみニ御出あれかしと存候、され共壽貞病人之事ニ候へバしか／＼茶をまゐるほどの事も得致まじくと存

候、これらが事共など〻必御事しげき中萬御苦勞ニ被成被下まじく候、猪兵衛桃隣指圖に而ともかくも留守相守り、火の用心能仕候樣ニ被仰付可被下候、此度所〻狀數有之候間重而具ニ可申進候、以上、五月十一日杉風樣、はせを（後文略）（芭蕉翁眞蹟拾遺）

右は旅中膳所に遊び、京に出でゝは去來と語り、嵯峨等へも遊んだといふことを杉風に知らせた消息中の一節である。これを見れば元祿七年芭蕉の留守中、深川の草庵に壽貞尼が留守してゐたといふことが明かである。留守中芭蕉庵に御出で下さつても壽貞が病氣で臥てゐるから、お茶さへ差上げられないであらうと恐縮がり、且つ草庵のことどもを心配して杉風に依賴してゐるのである。この邊は壽貞を一寸女房扱ひにしてゐる口吻が窺はれる。杉風が芭蕉のことを悉知してゐるからこそ、芭蕉は氣を置かずにこうしたことまで云ひ送つてゐるのであらうか。

して見ると次郎兵衛物語中次郎兵衛が「天和元酉十二月二日に伊賀を立、同く十二日に深川着、同二年四月迄滯り居候處、母壽貞病氣のよし申參、四月十五日に伊賀にかへりければ、母長病にて養生叶はず、七月十二日に相果候」と云つてゐることは全く噓でしかないといふことになる。これは芭蕉が猪兵衛に又杉風に宛てた消息より押し考へても眞實

なものではないといふことを確言出來るわけである。それに餘りにも謬言と思はれるのは、江戸でなく伊賀で死んだといふことで、次郎兵衛日記なるものが如何に出鱈目であるかといふことを暴露してゐる。

元祿七年か或はそれ以前のものか、どちらにしても壽貞生存中猪兵衛へ宛てられた書狀が一つある。

（前文略）理兵へ細工無之時分せめて頭不申樣ニ御氣を可被付候、有之通壽貞ニも御申きかせ可被下候、おふう夏かけて無事ニ候哉、樣子具ニ御申越可被下候（以下略）六月三日

猪兵衛樣、　桃青

これで見ると壽貞の父理兵衛は細工などを業として渡世してゐた者らしい。この手紙に依ると京・大阪あたりより寄こされたものであらう。壽貞一家のことを非常に氣に掛けてゐるのである。一見妻の父におくる手紙であるかに見える。併し壽貞一家が有名な俳諧師芭蕉を賴りにしてゐたと云へば、何のことはなく濟むわけであるが、唯疑へば疑へるだけの餘地を持つてゐるといへるのである。もう一つ遺言めいた一節に（支考の書取つたもの）

伊兵衛ニ申候、當年ハ壽貞事ニ付、還／＼御骨折面談ニ御禮と存候所無是非事ニ候、殘

り候二人之者共十方を失ひうろたへ可申候、好齋老なと御相談被成可然了簡可有候、（芭蕉翁眞跡集所載）

壽貞の死んだ後のことを心配して遺言に迄心を致すとは、些か以て諒解に苦しむところがないではない。以上の如き事情からして、沼波瓊音氏は妾說を主張し、大野洒竹氏は出奔當時關係ありと噂された婦人を後の壽貞尼であるかの如く推考せられた。藤井紫影氏は壽貞は妾に非ずして乳母であると主張せられる。樋口功氏は右とも左とも就かず疑問のまゝである。內田魯庵氏は女性との關係を全然否定して論を進めて居られる。尙ほ樋口功氏は芭蕉研究」に於て、「藤堂家時代に、或侍女との噂を朋輩などの間に立てられ、それを厭うて身を晦ましたが、其の女も其れが爲めに奉公を止めて剃髮し、家も豐かでなかつたので芭蕉の世話か何かで一家江戶へ出で、芭蕉も氣の毒に思うて其の女を妾ともつかず、女中ともつかずに出入させた。それが壽貞である。といふやうなことであつたかも知れぬ」と云はれる。成程これは面白い見方であり、且又さう考へられぬでもない。この說を更に强調して太鼓を叩いてゐるのが西谷碧落居氏である。

併し右の說くところは確固たる根據がなく、徒らに揣摩憶測したるものである。而かも

前に引用して置いた樣に、勝峰晋風氏の新たなる發見に依りて、侍女郎壽貞尼の説は全く覆へされてしまつたわけである。云へば、芭蕉が勘定方をしてゐた際の小間使女が後年の壽貞かといふことになる。だがこれは可成芝居がかつてゐるところのものとなり、信憑するには資料に乏し過ぎるといふことを云はざるを得ない。依つて壽貞尼は芭蕉の乳母であるといふことが、一番平穩であり自然である。

芭蕉の樣な人であるからこそ、若き頃噂を立てられた女性（即ち後年の壽貞尼）と一生離れずに交渉してゆくのが當然であり、尚ほ云へば、芭蕉に限つて相手の女性を變へるやうな事は斷じて無いところであるといふ説を樹てる人が多い。これは非常に道德的に偏した考察であつて、正鵠を得たものではないと思ふ。斯樣な説を成す人は、半僧生活に入つた後年の芭蕉に視點を置くから、謬つた觀察に陷るのであらうと思ふ。私は卑近な例より推考するのではないが、芭蕉の如き感情家、詩人素質を多分に持つてゐた芭蕉であるから、以上の説とは正反對に、若し女性と關係を續けたとすれば、決して一人の女性を護つてゆくといふことはないであらうと思ふ。勿論強いて變へることはしないであらうが、熱情と共に異性と交渉を持つてゆくのではなかつたかと思ふ。こうした觀察よりしても、壽貞尼が若

き頃侍女であり或ひは女中であつたといふことは、一寸信じられさうもなくなるのである。私は此處で壽貞尼と女中との問題に就いて云つてるのであつて、單獨なる芭蕉の女性關係ではない。出奔說に就いては壽貞尼とは全然關係なしに、女性殊に女中との關係などに原因したのではないかと考へてゐる一人である。

芭蕉の獨身生活にまつはる推論

孰れにせよ、芭蕉が獨身生活をもつて終つてゐるといふことが、種々の問題を孕むだけである。これは本人芭蕉に探つては、只心の向ふがまゝに任せたものであつたかも知れないが、其の眞相を誰も極め得ない爲めに、或ひは考察に依つてより有利な場合に立つこともあらうが、多くは不利な立場に置かれるではないだらうか。何故ならば現代の如き社會に在りては、斯かる問題を暴露せんとすることを好み、恒に不純に推論する傾向があるのである。芭蕉の獨身說に確固たる論證の擧がらない限りは、芭蕉もさうした毒矢に見舞はれることが多いといふことになるわけである。

四十歲以降の芭蕉は藝術の進展と共に超俗的な心境を獲たゝめに、自然妻帶の必要などを感じなかつたであらうといふことも考へ得られる。これに附隨して俳諧生活環境が非常な影響を與へてゐるので、更に獨身生活を强いたやうにも見うけられるのである。尙ほ佛

閉關說と芭蕉

頂和尚を知つてからの芭蕉が、確かにこうした意識の强くなつたことは、爭はれぬ事實であらう。それから西行の影響、又宗祇の影響などと數へて見ても、第一は芭蕉自身の心情がさうさせたものであるから。後世の人がどう考へても調べても推考に終るだけである。本人芭蕉の心に尋ねて見ない限りは、明かなる解決が與へられないのである。第二は芭蕉の性情もさることながら、時代精神といふものが如何に芭蕉の心に大きな影を與へてゐるか、これを見逃しては、芭蕉の獨身說も表を見て裏を見ざることになりはせぬか。

木石ならぬ芭蕉は神でも佛でもなければ、矢張り慾望あり野心ある人間である。伊賀出奔當時の芭蕉に就てはしばらく措くとして、青年時代の芭蕉は情も戀もよく知つてゐる否知り盡してゐるかとさへ思はるゝふしがある。これらは例へば前にも觸れるところがあつたやうに、吉原の揚屋を詠んだ俳諧、或ひは遊里の材料を巧に詠み入れてゐるところを見ても點頭かれるところである。大野洒竹氏が芭蕉は遊び拔いた人であるとさへ云つて居られるのも、全然否定するわけにはゆくまい。但し酒色に耽り、女が出來たゝめに官金を費ひ果して出奔したといふ樣な說は、恐らくは作りごとに過ぎないものであらうと思ふ。

四十九歲の芭蕉、或ひは他人を戒る言葉であるかも知れないが、色や情に考ふるところ

がありて、

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〳〵もおほかるべし、人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關ももる人なくば、いかなるあやまちをか仕出てむ、あまの子の波の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど、老の身の行末をむさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也、はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし、五十年、六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したる、ね覺の分別、なに事をかむさぶる、おろかなる者は思ふことおほし、煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝物なり、是をもて世のいとなみに當て、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて、生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ、人來れば無用の辨有、出ては他の家業をさまたぐるもうし、尊敬が戶を閉て、杜五郎が門を鎖むには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頑夫

自書、自禁戒となす

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　はせを

右は元祿五年栖去之辨と芭蕉を移す詞と共に記し殘したる有名なる「閉關說」である。言ふ迄もなく、芭蕉は道學者でもなければ宗教家でもない。それなのに、何故かやうに嚴格なる心の掟を定めたであらうか。若しも情慾、物情より超然たる芭蕉であつたならば、斯樣な自己反省の文字の不必要であることは論を俟たない。こういふからには、煩惱に執着あるといふことを明かに證明してゐるのではあるまいか。而かも右の閉關說は餘りに功利的な言辭ではあるまいかと思はれる。高僧名僧の訓戒の言辭を借りて、以て自己をよりよく價値づけようとしてゐる箇所を發見するに難くはない。併し半僧半俗の芭蕉、無一文の芭蕉には一向不自然に聞えない。此の點芭蕉は非常に有利な立場にある。以上は穿鑿に過ぎた私の觀察であるかも知れないが、再讀三讀右の禁戒を芭蕉の生涯より檢討する時に考へ及ぼさるゝところである。

芭蕉獨り心中に秘めて禁戒して行けばよいと思はるゝものを、何故門人に示し、世に殘してゐるか、我々は閉關說を一讀すると共に、思ひを此處に致さねばなるまい。此處に俳

人芭蕉が蕉風の總帥として樹つ所以がある。それは卽ち宗匠としての俳諧的地位である。それが爲めには師として、自分の性行と一致せざることも、時には云はなければならなかつたかもしれない。

「女性の誹友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬ事なり、此道に親炙せば人を以て傳ふべし、惣じて男女の道は詞を立るのみなり、流蕩すれば心慾一ならず、此道は主一無適にて成就す、己を省るべし」

と嚴然孔子の如く多くの門人達に敎へ說いてゐながら、芭蕉自身は未亡人の園女と親しみ園女に俳諧を敎へてゐる。園女と云へば、伊勢山田の醫師斯波一有（渭川も同人）の妻であつたが、若くして夫を失ひ後江戶へ出て眼科醫を業としてゐた。芭蕉とは渭川も俳諧をしてゐたのであるから、園女は夫の死後は殊更熱心に俳諧に身を入れたものであらうか。園女が芭蕉との關係を怪しまれる程不貞な婦人でないことは、芭蕉自身も云ひ、いろ〳〵な書も之を錄してゐる。園女が「わが道に入りしは元祿二年の冬なり、あけの年の如月かの翁とこゝの人等良友などひきゐきたらせしにしか〴〵とつげりければ翁よろこびてゝいかならんことをもつゞりてよとおせりたるに……」（菊の塵）と云つてゐる。一有と渭川を同人

とすると、元祿七年九月二十七日園女亭にて俳諧を催した時には、園女の夫渭川も加はつてゐることになる。此の考證は此の處では觸れない。

芭蕉は元祿七年浪花なる園女の家にて

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

の句を詠んでゐる。そして園女の心からなる葦の御馳走に依つて遂に他界したのである。蕉門の俳人には「女性の誹友にしたしむべからず」云々を云つて置き乍ら、芭蕉は女性の俳友にて大往生を遂げたのである。勿論妻も無い子もない放浪詩人であつたのだから、何處の地で落命しようと、本人も心には懸けてゐなかつたであらうけれども、自分の家の如くに園女の家に安心して逝去し終つた芭蕉は、解く事の出來ない大きな謎を我々に永遠に與へて置くであらう。「女性の誹友にしたしむべからず――」の言葉が無ければ問題はないのであるが、此の言葉があるので、芭蕉の心を解剖する事が出來ないと云へるのである。併し私は、此の言葉も宗匠として地位維持の爲めに云はなければならなかつたものと解し度いのである。これを見是を考へると、私達は芭蕉を責めずに同情しなければならぬ。何時ぞや川島つゆ女史もこれに就いて云つて居られた。「……女性の誹友にしたしむべからず、

師にも弟子にもいらぬことなり云々の條は、ひどく不自然に聞える。人格の圓熟域に達してゐた芭蕉の口から筆から果してあゝいふ言葉が發せられたるものであらうか、容易に首肯し兼ることである。戀の附句にあれほど巧手を見せて居る人がそんな石佛のやうなことを云ふ筈がないと思はれた。それに識者間に行脚の掟は疑はしいといふことを云はれて居ると聞いて、私は一も二もなくあれは嘘だと極めて了つて居た。猶事實に於て芭蕉は園女とか智月とかを初め、相當深い交渉を持つた女性、芭蕉の崇拜者といふやうな女性の多くを持つて居たやうである。私は尊敬すべき師でありよいお父樣であるやうな芭蕉から、そんなにつれなく扱はれやうとは一寸想像つかないことであつた……以下略」と述べて居られる。女性の評論だけに參考になる見方であると思うて此處に掲げた。

芭蕉をして女も知らぬ戀も知らぬ人であるといふのは、彼の全幅を知らぬ人の言葉であつて、芭蕉に對しては却つて非禮に失する言葉ではないかと思はれる。俳聖化するのも結構であるが、彼の全人間を觀察して始めて彼の偉大なる藝術的事業を賞讚するのが穩當であらう。

女も知らぬ戀も知らぬ人であつたならば、如何に藝術家であり詩人であつても、深刻な

る戀情に就いての觀察及び批評はなし得ぬものではなからうかと思ふ。芭蕉は戀に就いて如何なる感想を持つてゐたか、彼の遺語中より二三を覗いて見ることにしやう、

土芳戀のことを問しに、翁曰、むかしより二句結ざれば用ひざるなり、昔の句は詞を兼て集め置、其詞をつゞり句となして心の戀の誠をおもはざるなり、今思ふ所は無別して大切のことなり、なすに安からずそのかみ宗砌宗祇の頃まで一句にて止てと例なきにもあらず、此後所々門人ども談して一句にて置べきところもあらんかとなり、又或時曰、前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある時は必戀の句を付て前戀ともに戀になすべしとなり。是には此句のみにてつゞいて戀にも及ぶべからず、新式にも此沙法あるよしなりしかれども戀のことは分て其座の宗匠にまかすべし

又

翁曰、季にて戀をつゝむこと、戀の句にて季をつゝむこと〻むかしはきらへども、今は苦しからず

又、虚栗の跋に「芭蕉洞桃青鼓舞書」として

——李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る、これに仍而其句、見るに遙にして聞に遠之、

佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也、戀の情つくし得たり、昔は西施がふり袖の顏、黄金は鑄ニル小紫ニ一ヲ上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也 ―― 以下略

等々戀に關聯しての言葉は隨所に現れてゐる。尙ほ戀情やら女性の艷色などを詠んだ俳諧・發句は數多くある。此處には煩はしさから一々揭げることを省く。斯樣に異性を對象とし或ひは戀愛めいた句を作つてゐるからと云つて何の不思議もない。實際當然過ぎることであるのだ。それが不自然に見られ、變に思はれるといふのは、芭蕉を普通の人間扱ひにしないからである。此處に本人芭蕉よりも却つて鑑賞者側に不自然が橫はつてゐるわけである。

芭蕉が居ないから聞かれもしないし、芭蕉が自分の內心をこま〴〵と記しもしなかつたから、それに接することも出來ない。叉知人及び門人達に、自分の內心をさらけ出して云ひもしなかつたであらうから、詳しく心狀を探知する事も出來ない。何時の時代に於ても、誰にあつてもさうしたことが當り前である。世間並のことや、芳しくない過去のことなどを語る人があるとすれば、それは例外といふべきであらう。併し誰にも語るまい、云ふまいと思つてゐることでも、何時の間にか自作の中に織り込まれ、叉消息文の中などに顏を出す

こともあるものである。

支考が「露川責」に「――むかし西行宗祇など兼好も長明も今日の芭蕉も酒色の間に身を觀をじて風雅の道心とはなり給へり」と云つてゐるが、評者が支考だけに餘り信じられない言葉ではある。

酒色に身を觀じて悟入した芭蕉であつたならば、實に偉大なる芭蕉ではないか。釋迦に近く日蓮に近しとはこのことではないか。凡夫であるならば、生涯女色を去り得ず、妻子の情愛にも戀々たるものが普通といふべきではなからうか。青年時代、或ひは女色に迷ひ、或ひは遊蕩に身を委ねた芭蕉と觀ることは事の眞僞に拘らず、芭蕉の生涯をしてより光輝あらしめることになるであらう。そんな事は全然無からうと思はれるが、假りに芭蕉が生涯女性を知らず情を知らずとしたならば、人間芭蕉の價値は數段と低下して評價せられるであらう　何故ならば一生清淨なる芭蕉とすると、其處には煩惱を脱却する尊き悟入もなかつたといふことになるのである。

蕉風樹立に於て見ても、若し木石頑迷の芭蕉であるとすれば、遊蕩三昧を恣にしたる彼の傑物、其角を相容れる事が出來なかつたであらう。又還俗したる路通をも放逐してしまつた

であらう。然る時は蕉風の陣容如何。支考の言あながち排すべきものでもなからう。

扨て以上を要約して云へば、勿論如上の史實を基として想像するより致し方はないのであるが、只今私の考ふるところを述ぶれば、伊賀藤堂新七郎家へ奉仕時代、女との問題を惹起し、痛く心に感ずるところがあつて、子無き兒の家を嗣ぐことさへ辭したのであらう。かくて生涯半僧半俗の生活を以て世に處してゐる所以のものは、今いふた女性問題と西行宗祇の生活を理想としたこと、これに次いで禪道の影響等を舉げることが出來る。江戸へ出て未だ俳諧的地位の確立せざる、所謂放浪時代から俳諧修行時代は、俳諧を弄ぶ江戸の人々(多くは通人か)と交渉あるまゝ、紅燈の巷に足入れしたと見るのが適切のやうである。かうしたことは彼の放浪性のさせたことであらうと思ふ。併し遊びも彼の放浪性の爲め、俳諧へ旅へと轉向させてゐるのであるからおもしろい。門人多くなりて彼の俳諧的位置漸く高まる頃、我が爲めばかりでなく、蕉門にも思ひを致してか、禁慾に努めたやうである。芭蕉は俳諧的地位を守るばかりでなく、年と共に宗教意識を加味することによつて人生を深めて行つてゐる。藝術と切り離しても、此處に彼の偉大さがあると云へやう。妻帶せざることを唯彼の放浪性によるものと云つてしまへばそれまでゞあるが、さう簡單にも片付

けられまい。

壽貞尼は矢張り芭蕉の乳母として置くことが穩當ではあるまいか。壽貞に傾けた情愛は乳母であるといふ温き情より出でたものであると見ておきたい。閨女・智月尼等への交渉は、門人を愛する温情が流れたまでのことゝ見ておかう。

芭蕉と起居を共にした愛弟子路通のいふところであるから、芭蕉に就いての眞を語りさうなものであるが、實際はこれと反對である。門人が師匠の美點を誇張することはあつても、短所を公にすることは門人の採るべき道でないから。かゝる意味よりして路通の「芭蕉行狀記」中に書かれたる芭蕉禮讃は、半面の眞相を傳へてゐるだけであつて、全部を信じるわけにはゆくまい。

ともあれ、生涯現實苦の數々と鬪ひ惱み、遂に其等を克服して心境を深め、以て俳諧の大業を完成し得たことは實に偉とすべきである

# 芭蕉の性格について

審に其の人と爲りを見ようとする時、總ての人に於てもさうであるが、特に芭蕉の性格を窺ふて見るならば、實に多面的な人格の所有者であることに、驚異の眼を瞠らずには居られない。此の點芭蕉は變人でもなければ、又天才でもないといふことを云ひ得るのであると思ふ。上に對し、同等に對し、下に對してもよく心の行き屆いた人であることは、前章の傳記に於ても略考察せられたことではあるまいかと思ふ。

私が芭蕉を尋常一樣な世人に接近せしめようとして、說き擧げるのが本稿の目的ではない。人物論は往〻にして筆者の手加減により、或ひは神人たらしめ、或ひは愚人たらしめることが極めて容易である。勿論評論そのものに多分の主觀の加はることは、止むを得ないものではあるが、芭蕉に關する多くの方面を眺めて、彼の全貌に幾分なりとも近き肖像畫を作り上げたいと思ふのが著者の念願である。

## 平穩なる感情家

芭蕉の感情は生きとし生けるものに、均しき質と量をもつて働きかけてゐる。而かも物質に對しても、それを擬人化したるものゝ如く、矢張人に對すると同じ量が注がれてゐるところは珍らしいと思ふ。此處を突き詰めて考へると、芭蕉の性情が極端に鈍敏であるところはないが、それと共に愚鈍でなかつたことは明かである。此の點又考へると、政略家に通ふた性格、即ち清濁併せ飮むといふ人格に似たやうな節がないでもないと云はれるかも知れないが、併しそれとは餘程趣を異にした人格であることを見出し得るであらう

唯社交上手、今日いふところの社交家には、非常に不純な智慧と世故に長けてゐる行爲態度を有つた人をいふてゐるが、さういふ耳障りの悪い意味でない社交上手な人であつたかに思はるゝ點は、少なからずにあるやうである。これはどちらかといふと、當時の社會の風潮の影響も可成あることであるが、そればかりでなく、俳諧的事業(事業は妥當でないか)遂行の然らしむところも與つて支配したものではあるまいかと思ふ。

話が前に戻つて、總ての人に同量の感情を注いでゐるといふことは、感情の色分けをしてゐないといふことで、換言すれば富貴の人に對しても、或ひは下賤の人に對しても、同じ心をもつて接觸してゐるといふことである。或時は仕官出世を美望し、又大學者にならうと

し、又華かなる流行作家（最初の「貝ほひ」の上梓なぞは此の色彩を帶びてゐる）にならうと心を躍らしたことさへあるのだから、階級意識が全然無かつたと否定する事は出來ないが、やがて高僧に對しても、大學者に接しても、町人に接しても、山賊に接しても、物乞ひに接しても、又先輩後輩に接するにしても、親兄弟に接しても、其處に何等感情を粉飾することなく、何時も變らぬ心をもつて接觸し得たといふことは、凡人には到底爲し能はざるところである。これは芭蕉の性狀が先天的のものでなくて、俳諧に遊び、修養を積み、遂に自然と人生の深遠境を辿るに從つて、益〻性狀の圓滿性が深められたであらうと見るのが穩當ではあるまいか。

三十歲の頃より、甚だしきは二十三歲故鄉伊賀出奔の頃より、大偉人の性格を具備したものであると速斷するが如きは、餘りにも芭蕉を神格化したる偶像崇拜の甚だしきものと云はなければならぬ。それでは却つて芭蕉も迷惑であらうと思はれる。

貞門、談林の俳風未だ根强く、且つ伊丹に鬼貫が俳諧のまことを說き唱へつゝある世に蕉風を開拓するといふ難事業、これを考へて見てさへも、一派の主將となるものは、如何に多くの敵を持たなくてはならぬか、私の言を俟つまでもない。それにも拘らず、芭蕉には

敵といふ敵がないのである。勿論表面上の敵はあつたにせよ、心敵がなかつたのである。それといふのは芭蕉が猥りに異を樹てゝ他流を陥れ、人を誹り人を謗ることを心よしとしなかつたから、自然蕉風に賛同し得ない人でも蕉風を敬仰したわけである。

斯様な次第にも依ることであらうが、一度蕉風に遊んだ人は、芭蕉の温和な心情に接して芭蕉を憎むことが出來ない。何人も芭蕉を知る人は、芭蕉を仰ぎやがて芭蕉に從ふのみである。若し蕉風から去つたものがあるとすれば、常道を逸した人、例へば芭蕉を利用しやうとか、又は芭蕉に對して顔向けならぬことを仕出かしたから自ら蕉風を離れたと、いふまでのことである。後人の流布で虚構の説としか思はれぬが、凡兆去り、越人・木因・野水・路通其他蕉門より破門されたと誤傳されてゐる人々にさへ、芭蕉は生涯慈愛を注いでゐるではないか（師弟の關係參照）。これは正しく芭蕉の慈父にも似たる心情の發露であることは否めない事實であるが、芭蕉の生れ乍らの性質が延長したものではなしに、知らず識らずの間に、俳諧の地位獲得、及びそれが地位擁護といふ樣な心づかひが働いて、芭蕉獨自の博愛心情が構成されたものではないだらうか。これは私の臆斷するところのものであつて非常に危險な觀察であるやも知れない。

俳諧的地位獲得や俳諧的地位擁護云々といふやうなことは、芭蕉の言葉と芭蕉の生活行動との稍一致せぬものが、ちよい〳〵あるところから考察したものであつて、私の揑造ではないのである。例へば「女性の誹友にしたたしむべからず、師にも弟子にもいらぬことなり……」（俳諧說）と云ひ乍ら、園女の家にて「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」と詠み、且つ園女の家にて逝去してゐる。これなどは唯結果より見たる一面に過ぎないものであるが社交上手な芭蕉の生活の一端を洩らしてゐるものと云へやう。

藝術は藝術、學問は學問、訓戒は訓戒、生活は生活と全く別々でよい當時の社會にあつては、自らは如何に猥らなる生活をしてゐやうと、高遠なる學問藝術を敎へる師は、學者藝術家として偉くもあり、弟子も亦師を畏敬したであらうが、私は芭蕉を言行一致の人であると信じて、以上の如き評をしたのであることを附言する。

芭蕉の性格を疑はふとするものではないが、在世中、感情及び生活に技巧らしい技巧の痕跡を見せてゐないところを推測するならば、誰しも芭蕉の社交人的手腕を是認したくなるではなからうか、この性狀を形づくり、そしてこれを圓滑に助長せしめ得たものは、實に半僧半俗の生活であつたと云へるだらう。半僧半俗の生活は、或時は芭蕉の生活を美化し、

或時は芭蕉を疑問の人たらしめることもある。

## 物慾

芭蕉が物慾に淡く、淸貧に生きた人であると見るのは、芭蕉の生涯の結果より見たる考察、殊に元祿七年九月難波に向ふ途中、乞食行脚の身を忘れない樣に駕籠より下りたといふことや、深川八貧や終焉の遺物などより推考したゝめではあるまいか。これは芭蕉の性情の推移に思ひを致さゞるの甚だしきものである。若い折は相當物慾の多かつた人ではあるまいか。藤堂家の野菜勘定方を勤めてゐたことも、物の勘定や取締などに相當關心あることを物語つてゐるやうである。蟬吟公の死に逢ふて、芭蕉の將來に大變化の來したことは事實である。その功名心、これを分折すれば地位と物慾である。

富裕でない家に育つた芭蕉が、目指すところはよき役人であつたらう、それは取りも直さず家名を擧げることゝ、裕福に世を渡り得るといふこと、芭蕉のみに限らず誰にもさうした志望があつたであらうとも思はれる。蟬吟公の死に逢ふて頓挫した芭蕉の生き方は、蒲柳の質と季吟に俳諧を學んだといふやうなところから、遂に俳諧に向はしめたのではあるまいか。最初は・宗祇・貞德・季吟等の名家に目標を置いてゐたが、西行や杜子美を理想の

のは後年人生が研磨されてからに屬する」

當時俳諧宗匠并に流行作家の地位の囂々たること、それが如何に若人の功名心をそゝったか、此處で私が詳細を盡すまでもない。未だ俳諧に熱心でない時、故郷を出でゝ間もなき頃、黄表紙作家にならうとしたやうな態度すら窺はれるのである。芭蕉が俳諧に熱心の度を加へるに從つて、愈〻物慾を離れ貧を守ることに平氣になれたといふ一面を捉へて以て、俳諧的地位を有利に收め得るといふ意識を持つやうになつたものであると思惟するならば、當然現代者流の謬察に陷ることゝなる。私は思ふ。俳諧に沒頭するあまり自然物慾に疎くなつて來たところへ、偶〻佛頂和尚より禪を學んだので、更に物慾を離れ、或時の如きは、富豪は志卑しきものと見えたことさへあつたかもしれない。

人間として物慾に心を奪はれてゐる時、大自然の幽玄境にも心を碎きたのしむといふことは、いふべくして行はれるものではなからう。芭蕉が自然の風物を無二の親友として旅を續けて行くところには、蕉風の俳諧的勢力の扶植――譬へば歌の西行の如き名聲は欲してゐたかも知れない(時々さうした心の表れに似たものを見ることがある)が、それと同時に物に對する執着が次第々々に薄らいが行つたことは事實である。

今日と違つて、心の向くまゝ足の向くまゝに旅を試み、久句を詠みながらも、程度の差こそはあれ、割合に弛かな生活をなし得たといふ時代の影響もあることながら、先人の生活行狀を照し見ても、何とか生きて行けるものとの見通しを得て、其處に幾分なりとも落着いた自己を發見し得たものであらうと思ふ。芭蕉もやがては、僧が物を乞ふ如く、他人より施しを貰つて生活してゆくこと、そのものが正しい自己の生活であると考へたもの〻樣に思はれる。結果よりの觀察で正鵠を期し得ないが、芭蕉が獨身で半僧半俗の生活を終始したことは、如上の生活方法を尤も有利ならしめた好條件である。これを立證するものに何が欲しいから吳れるやうにと、門弟の誰彼に平氣で云つてゐることが尠くないのである。若し芭蕉に妻子があつたならば、貧に苦しむからと云つて、平氣で何を吳れ彼にを吳れと、而かも再三ならず言ひ遣ることも出來なかつたであらうし、又遠慮して云ひもしなかつたであらうと思ふ。吳れる人も同じことで、芭蕉が一人でゐるのだからと思へばこそ氣輕に進上することが出來たのである。妻子ある師に對してならば、其處には又別な感情が働くので、物を遣るにも色々と心を配り、二度遣るところは一度になり、五度遣るところは二度になりして、段々疎遠になる傾きがあるやうである。此の點蕪村や一茶とは貧苦の

惱み方が自ら異るものである。

芭蕉は氣輕に物を乞ふてゐるから、左程有難がらぬかと云へばさうではない。一寸した食べ物を貰つたゞけでも慇懃な禮をいふてゐる。それが當然であることには違ひないが、芭蕉の場合は、物そのものに淸淨化した心がふり注がれてゐる。物を貰ふこと、物を貰つた御禮のこと、金を借りること、金に對する考へ等を覗いて見るのも、亦芭蕉の内面的な心情に接する好材料ではあるまいかと思ふ。

一、近日芳野行脚存立候間金子二分御かし可給候押付もらひため返濟可申候されど吾等事に候へばなすまじく候以上（貞亭三年去來宛）

一、――せり賣の十錢生涯かろきほど我世間に似たれば感慨不少候――（元祿四年小春宛）

一、――鹿笛も木曾より貰ひ申候時鳥笛も御座候はゞほしき物に候水雞笛作る人は作るべくと存候御面倒ながら是も御聞可被下候出來候はゞ御賴可被下賴入申候何にても相應望の物細工人へ謝禮致すべく候殺生の道具ながら水雞笛鹿笛も只吹はおかしく候――籠をならべてこれは二兩の駒鳥なりこれは五兩の黄鳥なりと云て摺餌に小袖の肌おしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人武林連中には有ものに候（元祿五年一笑宛）

一、新麥一斗笄三本油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり、蕎麥粉一重小遣錢二百文忝ぞんじ候(杉風宛)

水油なくて寢る夜や窓の月

一、津山より飛脚參候よし、歸り之時分何日御知らせ可被下候、若者に候間金子被遣候御無用〳〵

以上金子に關係ある書簡を擧げて見たが、次に物を貰ふ依賴の書簡を調べて見ることにしやう。

一、上方邊繪色紙いまだ調ひ不申由重て可申遣候將亦此度右摺大色紙四枚被懸御意忝折節屛風入用にて別て喜び申候五老井の小豆も日やけにあひ可申候煎茶下被下よし遲てもくるしからず候能便宜に少々可候懸御意候頃日あへ茶にも給飽申候（元祿二年十月九日許六宛）

覺

一もち米　升一　　一里豆　一升

一あられ見合

右今夕會之夜食に成申候間御いらせ傳吉にもたせ御こし可被下候茶は三井寺より澤山もらひ申候貴樣にも早々御出まち入候（喜人宛）

一、昨日は渡紙澤山御恵辱存候然處昨夜惟然一宿例之むだ書剩筆の先棒になし因入申候今四五枚申請度候此人に御こし可被下候（杉風宛）

一、只今田舍より僧達二三人參候俄に出し可申貯無之候さぶく候故にうめんし可申候そうめんは澤山有之候酒二升御こし賴入候さかなはつぶ納豆茶碗に入貴樣御出候て世話賴入申候其次手に引合せ可申はや〳〵御出まち入候以上（かふしや茂作宛）

一、扨〳〵大雪にて御座候炭一俵御こし賴入候以上（一見屋喜六宛）

一、御庭のつゞし盛候由明後日可參候むぎめし可然候間賴入候（靑山宛）

一、昨日は御入來共節御約束之炭一俵只今賴入候

一、新春目出度存候早々ながら米二三升只今御こし賴入候（梅石宛）

一、明日岩戸へ可參候つもりに御座候栗二三升みやげに致度候間賴入候（梅石宛）

一、殊外はい出申候甚うるさく御座候間もち少々賴入候（梅石宛）

一、今晚でんがく被致候よしかたく御やき賴入候出來次第御遣可被下候（梅石宛）

一、今朝も殊に寒く御座候紙子羽織今日中賴入候（梅石御内もじ）

一、初なすび十五被下忝存候五つはとめ置殘りは其方に御つけ置可被下候以上（梅石宛）

一、とうふ汁よろしく候間今晩は賴入候出來次第に遣可被下候（梅石宛）

一、先日之かけどうふ殊外味ひよろしく御座候又々賴入候（梅石宛）

一、昨日は御法事相濟一段候其節之油あげ殊外好味わすれかね候御座候はゞ少々御もらひ申度候以上（梅石宛）

一、暮歲いそがしく存候明後日もちつきに御座候よし出來次第賴入候（梅石宛）

一、橋普請に而道遠くなり申候間四五日之内に參り可申候間鹽つけ置候へよろしく御座候此段賴入候（梅石宛）

一、いも頭七つばかり只今御こし賴入候

一、まんぢう七つあぶら上げ五つからし三文御こし賴入候

一、遠江殿被參候間酒少々只今遣被可被下候賴入候（大雲寺納所宛）

一、青のり八

あぶらあげ五枚

とうふ一丁味噌少々よく摺
右之通只今御こし頼入候以上
はつ雪に松も(以下脫字)
一、もち出來候時分に御知らせ可被下候(大松寺宛)
一、霜雨晴やらず扱〳〵淋しく御座候米五合斗むぎも五合斗只今御こし頼入候(梅石宛)
等々枚擧に遑がない。此の他物を貰ふたる人々に對しての感謝狀は數多く殘つてゐる。昨今も金子借受の書簡などもぽつりぽつり發見されつゝある。右は卽ち如何に多くの物を貰ひ仰いでゐたかといふことの一面を如實に語るものである。

芭蕉は困却して金子を借り、物を乞ふ場合にも案外平氣であつたかに思はれる。これ金子そのもの、物そのものも有難いことはいふまでもないが、これを借して吳れる志、與へて吳れる志を物質以上に有難く感じてゐたゝめに、相手に依つて平氣で借り、乞ふことが出來たものとしか思へない。物を貰ふことに氣兼をしない芭蕉は、物を他人へ遣ることに於ても平氣な態度を以てしてゐる。苦しんで得たものでないだけに遣るに惜しくないのが人情であると云へやうが、自分が困つて貰ふのであるから、困つてゐる人には容易に與へ得る

ことが出來るのである。人からは決して捨てられる性分でないが、確かに貧乏性分である。例へば「此方京大阪貧乏弟子かけあつまり日々宿を喰つぶし大笑ひ致しくらし申候」と云つてゐるあたりは、芭蕉の這般の心情があからさまに出てゐるものである。

先の書簡にある樣に、新麥一斗や酒五升は富貴の限りであつて、二百文の小遣で充分だと告白し、尙ほ奥羽行脚の歸途萬子が餞別として白衣一つと金三兩を師芭蕉に呈上せんとした處、それを拒絶して遂に受取らなかつたといふことなどは、物慾恬澹な芭蕉の一面を漂はしてゐるものである。貰ふて喰ひ飢餓僅かに逃れて――日出度き人の數にもいらん年の暮、と自懷してゐるやうに、外面上、形こそは違つてゐるが、乞食と變りないものであると自覺してゐたやうである。乞食路通を救ひ出し、卑下する態度一つ見せず薫陶したといふのも宜なる哉と思はれるところがある。

芭蕉が終焉まで物慾に恬澹として行けたといふのは、私淑せる西行其他の先人の生活行狀と、自分が得た宗教觀、道德觀に或基礎を有してゐたことなど、否定することの出來ない實相であるが、これに尙ほ物を物として見捨てず、人の志を尊く感ずるといふ心が絶えず働いてゐたからであらうと思ふ。物慾に強き芭蕉の半面と、物を悅び人を敬ふ厚き心の

ある芭蕉の半面を、それぞれの書簡がよく實證してゐるものと見て差支ないであらう。若し芭蕉にして、注意の行屆かぬ所謂物質無慾者であるならば、かくも鄭重な書狀を認めもせず、わからず屋として社會の落伍者となり終つたかも知れない。

私が芭蕉を無慾恬澹な人であると云つて來たのは、物に使驅されて物を求めないといふ意であつて、必要であるものを求めることには努力もし、苦心もしてゐたやうである。多分鄉里の家を救ふ爲めか其邊は判然としないが、思ひも寄らぬ大金を曲翠から借りるやう書狀を發したことさへあるといふ。

これは芭蕉の趣向の然らしむるところであつて、贅澤といふことは暴言過ぎるが、常に木綿などを身に纒はず、澁い着物を好み、羽織は茶色でなければ被なかつたらしい。又行脚用の笠は到底吾々の想像を許さぬ立派なもので、頭のつくところへは眞綿を入れ、麻で絎るといふやうな凝つた作り方である。笈なども却々立派な蒔繪を施してあるのだから、誰も持てる様な安物ではないのである。奥羽行脚以前の芭蕉は、生活にも左程の餘裕などを持たぬやうに思はれるが、其後は可成豊かな生活をしてゐたものゝやうである。獨身ではあつたが、常に四五人の人を生活させてゐたばかりか、時折は故鄉伊賀の兄へも送金など

するこゝがあつたかとさへ思はれるのである。旅へ出て路銀に苦しんだといふことは全くなく、馬子に與へ船頭へ與へる餘裕も、他人よりは尠くはなかつたと思はるゝところを見ても、成程用意がよく、且つ親切な芭蕉であることが點頭けるではないだらうか。晩年の芭蕉を、所謂貧乏な俳人であるかの如く眺めたならば、とんでもない誤謬である。無慾と貧乏とは別である。芭蕉は無慾であつたけれども、決して貧乏で終つた人ではない。

## 情　慾

芭蕉の情慾の方面については、揣摩憶說定まるところを知らぬ狀態である。獨身生活、而かも半僧半俗の生活は、遂に芭蕉を聖人たらしめてゐる。併し其の半面には、疑問に疑問を生んで、遂に不品行なる芭蕉を世に叫ばしめるやうになつてゐる。何れが眞で何れが僞であるか、正確な記錄を殘さなかつた芭蕉は、幸か不幸か何れとも解決を與へる事が出來ない。一般の如き夫婦生活をせぬ人、更に半僧生活をした人に至つては、往々凡人以上に見られるといふ有利な地位に置かれるものである。然るにその半面には、實證のない限り、如何なる風說を試みられても甘受しなければならぬといふ立場に置かれてある。斯樣な方面に關しての芭蕉を解剖せんとするならば、何故に獨身生活を繼續したか、何故に半僧半俗の生

活を維持したか、何故に放蕩の其角を愛したか、壽貞尼の本性、園女の邸にて「白菊の」句を作つたこと、色を戒める俳諧掟を立てゝゐること等々を詳細に研究して行かねばならぬ。それらの詳細については別章「芭蕉と戀愛について」に於て觸れたつもりである。

## 神佛に對する心情

世人はよく芭蕉の發句を、禪に悟入せるものであるといふ。これは芭蕉にとつて非常に迷惑なものではあるまいかと思ふ。「禪卽發句也」といふのと同じく偏頗的な解釋である。勿論純粹の日本藝術としては、尠からず禪に通ふところのあるを是認しなければならぬが、元來發句は宗教でない。芭蕉は佛頂和尚に禪を學んで安心立命の境地を體得した。それが偶〻芭蕉の作風に影響を及ぼした程度のものである。

西行・宗祇などの影響もあることであるが、敬神・敬佛・偉人崇拜の念に强かつた芭蕉を致る處に見出すのである。野晒紀行に於ては、外宮參拜・常盤の墳・二上山當麻寺・後醍醐帝の御廟・桑名本當寺・熱田神宮・二月堂・伏見西岸寺等。又鹿島紀行に於ては、只管に鹿島神社の神靈を感じて止むところを知らず、やがて佛頂和尚に思ひを移して根本寺などを尋ねてゐる。又吉野紀行に於ては、俊乘上人の舊跡・護峰山新大佛寺・故蟬吟公を追憶し。尙

伊勢神宮・初瀨・葛城山・勝尾寺・紀三井寺・奈良・須磨寺等々、又更科紀行に於ては、途中逢ふたる寺僧のことゞもを記して善光寺に終つてゐる。又奥之細道に於ては室の八島・二荒神社・東照宮・玉藻の古墳・八幡宮。那須與一・雲岸寺。藤中將實方の塚・松島瑞岩寺・中尊寺・山形の山寺。羽黑。月山。湯殿の山形三山・千滿珠寺・太田神社・丸岡天龍寺・仲哀天皇の御廟等々、又嵯峨日記に於ても。以上は唯紀行などに現れた一部分を列擧したものに過ぎない。神社佛閣を訪ひ歩くことを目的とさへしてゐる位であるから、有名ならざる佛寺・祠社舊跡等を如何に多く探し當てゝ參詣し、昔を偲んでゐることか、凡そ測り知れないものがある。

敬神敬佛の發句に至つては、餘りに多くして一々此處に錄することを許さない。感動して措く能はざる芭蕉の敬虔な心情の一端を覗つて見るならば、

高野の奥に登れば靈場さかんにして法の燈消ゆる時なく坊舍地を占めて佛閣甍をならべ一卯頓成の春の花は寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲、鳥の啼聲にも腸を破るばかりにて御廟を心靜かに拜み骨堂のあたりに彳みて倩々思ふやうあり、此處は多くの人のかたみのあつまれる所にして我が先祖の鬢髮をはしめ親しき懐しき限りの白骨もこのうちにこそおもひこめつれと袂をせきあへずそゞろにこぼる涙をとゞめて

父母のしきりに戀し雉の聲

又

往時此御山を二荒山と書しを空海大師開基の時日光とあらため給ふ、千歳未來をさとり給ふにや、今此御光り一天にかゞやきて恩澤八荒にあふれ四民安堵の栖おだやかなり、猶はゞかりおほくて筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉わか葉の日の光り

これ芭蕉のみが取り別けて神佛崇拜の念に深かつたのではなく、又半僧生活故にさうさせたものでもないやうである。これについて、私は次の三つの事由が原因したのではあるまいかと思ふてゐる。その一つは、若くして蟬吟公を失ふたこと、次は私淑する西行・宗祇などが一段と神佛敎行の人であつたこと、最後に時代の影響が支配したことである。かくて不知不識の間に神ながらの日本民族精神が、濃厚に培養されて行つたのではあるまいかと考へられてならない。

櫻花が朝日に匂ふやうな淡白な心が、日本精神の本然であるにも拘らず、さうした心で世をわたることの出來なかつたのが當時の社會である。後年芭蕉が櫻花のやうな心を以て

世に處し得たといふのは實に偉いことであり、それは俳諧の御陰であり禪の御陰である。

### 子供や他人に對する心情

芭蕉は多感な性質の所有者であつただけに、時には非常に嚴格なこともあつた。或時俳諧の座に於て、徒然なるまゝ爪に文字などを書いてゐる者がゐたので、それを酷く叱り付けたといふことがある。これは氣短かな焦しい氣持がなかつたとはいへぬが、俳席の不眞面目になるのを虞れた餘り敢てした行爲であらう。

元來が丈夫な人でないから、總ての點に愼しみ深い性質の表れるのは當然なことである。その爲めに非常に親切な心があちこちに表れてゐる。例へば、茶屋女の乞ふまゝに句を書いてやり、露沾侯の御前にては好きな煙草を遠慮したり、俳諧の席にては、下座でよいからといつて上座に坐らなかつたり、伊勢へゆく越後の遊女に同情して旅の安堵を計つてやつたり、晩年の行脚に於ては、到着地の前にて駕籠を下りたり、越後の某寺に於ては、門前拂ひをされたにも拘らず、更に憤る色なく戸外で夜を明かしたりしてゐるが如きそれである。又子供に對しては、良寛程多くの逸聞に接してはゐないけれども、野晒紀行に於ては

富士川のほとりをゆくに三ばかりなる捨子のあはれげに泣くあり、此川の早瀬にかけて

浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん小萩がもとの秋の風、こよひやちるらんあすやしをれんと袂よりくひ物なげて通るに

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝ちゝに惽まれたる歟母にうとまれたる歟、ちゝは汝を惡にあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして汝が性のつたなきをなけ——

通り一ぺんの同情を以てしては、斯くも深刻な心情を吐露することが出來るものではない

### 芭蕉の涙

多くの文人は喜怒哀樂の感情を極めて安易に用ふる傾向がある。人間は感情の動物であるから、實際の感情がなければ、其の態度にまで現れるものではない、と云へばそれまでゝあるが、一般を見渡すところ、案外つまらぬことに泣いたり笑つたりしてゐるやうである。これを芭蕉について見ると、宗鑑・貞德の流れも殘つてゐるが爲めに、洒落な風格を具へてゐぬとはいへぬが、芭蕉の涙に至つては、全く宗鑑や貞德流のものとは違つてゐる。芭蕉のは人間本然的なものであると云ひ得るのである。恐らくは、靜・淡・時といつたやうな境遇上よりの影響も手傳ふてゐるであらうが、作品はしばらく措いても、人一倍涙脆い性格

の人であつたやうに察せられる。

俳諧、發句はさて措いて、紀行文を展げても或時は哀愁に泣き、或時は有難さに泣き、或時は嬉しさに泣いてゐる。普通だつたら人間生活的なものに關しての落涙であるものを芭蕉は人事にも自然にも等しい涙の感情を灑いでゐる。それが一二の例でないのであるから、單に感情の嬌飾として見放すことは到底許されまいと思ふ。故郷を訪ふては、

――何事も昔にかはりてはらからの鬢白く眉皺寄て只命ありてとのみ言て詞はなきに兄の守袋をほどきて母の白髪拜めよ浦島が玉手箱汝が眉もやゝ老いたりと暫泣て

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

又奥の細道行脚に於ては、

――行脚の一德存命の悦び羈旅の勞をわすれて涙落るばかりなり」

と云ひ、又

――國破れて山河あり城春にして草青みたりと笠打ち敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

又吉野紀行にては

——黄昏の氣色にむかひ有明の月の哀れなるさまなど心にせまり胸にみちて或は攝政公の眺めに奪はれ西行枝折のまよひかの貞室が是は〳〵と打なぐりたるに我いはん言葉もなくいたづらに口をとぢたるいと口惜し

と如何ともすべからざる感情の高潮を物語つてゐる。

**芭蕉の膽力**

芭蕉は病弱者共通の多感な人であつたが、意外に膽力が坐つてゐたと思はる點がないではない。これは芭蕉その人も然ることながら、交通が不便で危險の多い當時、自然を無二の友として到る處に行脚を爲歩いたのであるから、自然の偉靈なる氣に養はれて、吾々の想像を許さぬ程度胸ある人となつて來たのであるかも知れない。尙ほ僧侶の生活・心境を希求しつゝ身を風雲に任せてゐたゝめに、自ら知るとなく、大膽な精神を養ふことが出來たものであると思へぬでもない。逸話として(芭蕉翁行脚怪談袋)語り傳へられてゐるものであるから、其の眞僞の程は保證出來ないが、備中より備前へ赴く途中森山に於て、俄かに來襲した風のために頭巾を谷川へ落としてしまつた。芭蕉は大いに慌てたが、いろ〳〵と

苦心をして漸くに之を取ることが出來た。そして一と安心をして彼方の森を眺めて見たら首は三尺許り身の丈は六七尺もあらう大きな猴子が現れ、芭蕉を見るや直ちに追驅け出した。芭蕉は、最早運命もこれまでと觀念しつゝ、夢我夢中、岡山迄六里餘の徑を急いで歩いた、恐らくは、その猴子は谷に墜ちて消え失せたであらうか、遂にその姿を見せなかつたとか。やがて嘉山を經て、宿屋に身を横へた芭蕉が、驚いた樣子も見せず、遭難の話をしたところ、宿の亭主は、芭蕉の膽力の坐つてゐるのに色を變へて驚いたといふことである。

又これはしばしば引例される逸話であるが、彦根の許六を尋ねようとして山路を歩いてゐた時、物凄い山賊に逢ふた。併し少しも驚かず、平然として布子を一枚與へた。それから二三日後のこと、盜まれた其の布子を、或少年が芭蕉の許へ屆けたので、不審に思ふて其の由を訪ふたら、盜んだ山賊は大神五郎といふ大惡賊であるが、芭蕉に逢ふた折どうしても氣おくれがして討つことが出來なかつた。而かも其の人が芭蕉翁であることを彦根の人より聞いたので、「成程さうであつたか」と驚き、少年を遣はして御詫びかたがた布子を持たせて寄こしたといふことである。

又岡山在の或川の渡し場の茶屋で、大勢の雲助より三百文の酒代を無心されたので、容

易に其の場を立ち去る事が出來ず、若し三百文を與へてやらなければ、宿の主人へも如何なる迷惑を掛けるかも知れない。そこで明日を約して船頭共を安心させて其處を立去つた併しそれまではよいが、翌朝芭蕉はひそかに渡舟へ乘らんとしたところ、生憎昨夜の船頭に逢ふた。船頭等は怒るまいことか、芭蕉の襟首を捉へて懷中の品々を奪はんとした。芭蕉は一寸閉口したが、「まあ待たれよ、今日の晝頃岡山から役者が二人金五百兩を所持して此の渡舟に乘ることになつてゐる。だからそれを殺して奪つた方がよいではないか、俺のやうな貧乏和尙より三百文を取るよりは餘つ程增しだ」と敎へたので、船頭達は成程これはいゝ事を敎へて吳れたと合點して、芭蕉に御禮をさへ述べた。晝頃案に違はず、二人の男連が來たので、先刻の岡山の役者と思ひ込み、むんづと首を抑さへて懷中に手を入れんとした、そのと端「無禮者何をするッ」と怒鳴られた。この二人といふのは、岡山家中にて有名な相澤又七郞米澤氏部だつたので、忽ち船頭等は處罰されてしまつたといふことである。これは芭蕉の頓智を裏書するものであるが、又物に少しも動ぜぬ心膽を如實に表してゐるものと云へやう、かやうな逸話は數限りなくあるけれども、此の位に打切つて、次は嗜好物より芭蕉の性格の一面を推考してみたいと思ふ。

## 嗜好物より見たる芭蕉の性格

芭蕉の嗜好物としては酒・煙草・獨活・蒟蒻・野老・豆類などを殊に愛してゐたやうに、彼の俳諧もさび味を徹底させようとしてゐたのであるから、總て濃厚なものは好まなかつたらしい。これは、他人より胃腸が弱かつたゝめに原因するものであると見てよいと思ふ。

芭蕉が淡白な食物を好くといふことは、取りも直さず自分の性格をあからさまに反映してゐるものである。食べ物に關しては、凡そ自由な否我儘な態度をさへ表して來たのであつたが、唯酒だけには思慮深い性質が可成働いてゐたものゝやうに思はれる。曰く「好んで酒を飲むべからず、饗應により固辭し難くとも微醺にして止むべし」と。又其角の大酒を戒めもしてゐる。これらは酒そのものを惜まず、酒を下手に用ふると、如何なる事を爲るかも知れぬといふ注意より、一つは己を戒め、以て人々へも言ひ含めたまでのことである。大三十日に飲み過ぎて、元旦を寢過ごしてしまつたといふこともあるのだから、芭蕉は温かい人間であると云はれもするであらう　併し芭蕉が酒の爲めに失敗をしたといふことは、未だ聞かぬところである。どちらかと云へば、酒に對しての愼しみは養生といふよりは、俳諧的地位の自覺より留意したものと見られる。何故ならば、胃腸が惡かつたから當然食心

棒であつたわけである。食心棒であることは、御馳走に對する禮狀、又旅で喰ふた嗜好物に、一再ならず思ひを馳せてゐるのを見ても明瞭である。例へば乙州の東武に行くを餞しては、駿河の鞠子の宿のとろゝ汁にのみ心を埋めてゐるではないか。それよりもなほ驚くべきことは、園女の邸にて御馳走の茸を好むまゝに喰ふたゝめ、遂に痢病に罹つて終命したのではないか。好きなものならいくらでも喰ふといふ、これが卽ち詩人芭蕉であつて、偉大なる俳諧的仕事を完成出來たわけである。食心棒と云へば聞きよい言葉ではないが、私は決して芭蕉を貶してゐるつもりではないのである。

食物に「抑へる」といふことの出來なかつたのは芭蕉の性格であり、運命でもあつたとは云へ、確かに早世させた一大原因であらねばならぬ。酒はいふに及ばず、食物の味覺が句をなしてゐるものは實に夥しい。

花に浮世我が酒白く食黑し

賴むぞよ寢酒無き夜の紙衾

川舟やよい茶よい酒よい月夜

こうして視ると、常人と變らぬ趣好が食物方面に見うけられることになる。否喜捨に依つ

て生活してゐたのであるから、どうしてもつと恬澹な心が食物に働いてゐないだらうかと不思議に思はれる方がないでもあるまい。現代流に解して、贅澤と云へば贅澤としなければならぬかも知れぬが、此處が芭蕉の性格であつて、嫌なものならどうしても食べない、好きなものなら幾らでも食べ度いといふ――この芭蕉の異色ある性格を誤つてはならないと思ふ。この性格は食物ばかりでなく、着物にも亦作家にもあらはれてゐる。

### 自作に對する思慮

芭蕉が何事によらず細心の注意を拂つてゐたことは、略察せられる通りであるが、他人と俳諧・發句を談ずる場合に於けると同樣、自分の作品に對する場合も、注意怠ることがなかつたといふことを知り得る。赤草紙に

「から鮭も空也の痩も寒の内

此句師曰、心の味を言ひとらんと數日腸をしぼるとなり、骨折りたる句と見え侍る」と。自分の作であれば後日推敲することが當然のやうにも聞えるが、芭蕉のやうに骨身を削つて苦心する人は確かに稀である。これを熟く考へて見れば、芭蕉の場合、自己の作故に熱愛するといふ單一な考察を以て解決を與へることが出來ない。私に云はしむれば、正風と

いふ一派を樹立した自分だけに、絶えず俳諧上の蕉風そのもの丶地位と、己れの存在を考慮してゐたから、その氣持も十分に加味されてゐるものと考究したいのである。

芭蕉の臨終を巧みに描いた花屋日記（詳細は終焉のところで述べた）の一節は、這般の消息を實によく記したものであると思ふ。僞作であると傳へられるけれど、當らずとも遠からず芭蕉の風丰を把握して餘すところがないから、右の心的考察の證左として、掲げて見る。花屋日記の原文其儘を採錄するよりも、故沼波瓊音氏が小說風に書き下ろしたる、「芭蕉の臨終」の一節の方が面白いから、それを借用することゝする。

芭蕉はふいと目を開いた。ほうと溜息を吐いた。ふと彼は氣に懸ることを思ひついた。

「去來や、去來や」

と呼んだ。

すはこそと去來は、如何なる大事ぞと胸を轟かしながら、枕許に進んだ。

「先頃、野明の所へ

大堰川波に塵無し夏の月

と云ふ句を殘して置いた。あまり景色過ぎて居るが、まア大堰川の夏景色は言ひかなへた

積りで居たが、清瀧で作つた

　清瀧や波に散り込む青松葉

と云のと同巣ぢやと人が云はうも知れぬ故、大堰川の句は捨てようといつか其方に言うたが頃日園女の所で

　白菊の目に立てゝ見る塵も無し

と吟じたがの、今思へば、この三つは皆同じ道筋ぢや、この白菊の句だけ殘して前の二句を捨てようと思ふがどうであらう」

「あゝ僅か句一章に、さまで千辛萬苦を遊ばしまする。御病惱の中に御骨折何とも尊く存じまする。この三句は決して同案同巣とは私は存じませぬ。前の二景の御句には、必非ニ絲與ㇾ竹、山水有ニ清音一の語、青苔厚自無塵の詞も思はれまする。白菊の御句には陌上桑の趣がよく顯はれて居りまする。いづれもお棄て遊ばされぬが然るべきかと存じまする」

「さうかな」

斯う云つて芭蕉は又寢入つた。

と。此の心境には如何なる俳人と雖、自ら頭の下らざるを得ないものがある。

## 師弟關係について

事の序に師弟の關係に一言及んで見たいと思ふ。先に申述べたことを繰返すまでもないが、芭蕉は門人の職業や社會的地位の上下を問はず無差別に敬愛した。許六がいふ、路通荷兮・野水・越人・木因等は勘當の門人なり云々は、それ程嚴格な勘當を意味してゐるものではないのである。

門人の旅立に際しては我ことのやうに喜び、門人(一笑)の忌日に遭ふては

塚も動け我が泣く聲は秋の風

と慟哭し、其角の大酒を憂ひては、わざわざ飲酒一枚起請を寫し來りて之を贈り、婉曲に大酒の無用を說いてゐる。又金澤の俳席に於ては、身に餘る饗應に接して風雅に御馳走の不用を說き、輕い訓戒をさへ與へ、門人の俳諧を問ふに接しては、各〻其の人の個性を尊重して、これを啓蒙せしめんと努めてゐる。又恩人杉風の聾に同情して、一生聾の句を作らず、尙ほ且つ聾のことを口にさへしなかつたと蓼太が云つてゐる。

兎角俳人は我流を守ることに孜々たるものが多いのに、芭蕉は他門と交るも苦しくないが、唯博奕や盜人などと交るなと門弟に說いてゐる。或時は流人杜國を二十五里も遂戻り

して訪ひ、そして舊情を溫めてゐる。後年杜國の死を聞くや、夢に杜國のことを云ひ出して熱淚を流してゐるのである。芭蕉に誰を餘計に愛するといふやうな偏心を持つてゐなかつた。若輩凡兆をして「猿蓑」の選に當らしめてゐるなぞは全くその一つである。

度々輕薄の行爲をしたゝめ、門人達より痛く排斥されてゐた路通が、大阪で還俗したといふことを聞いた芭蕉は、昔の乞食よりも增しであると云つたゞけで、些かも憤怒の色を示さなかつたといふことである。そればかりか、花屋日記の記すところに據れば「――貧永阿闍梨より路通が事を仰有り、其後汝か丈草・乙州等に交りし消息露霜とは聞捨てず、併少し忌み憚事ありて雲井の餘所にはなし侍りぬ。彼が數年の薪水の勞、努々忘れ置かず我なき跡にはおよそ見捨たまはず風流交り給へ、此事たのみ置はべる、諸國にも傳へ給はれかしと言ひ終りて餘言なく合掌」云々と。これは晚年の芭蕉が門人を思ふ愛情にして、一般人の行狀とは自ら異るものがある。

神格化したる芭蕉に關する逸話寓話は、孔子や基督の如く發生して底止するところを知らない。芭蕉の性格考察として此處に見逃してならぬ一つは、容貌の研究である。併し數ある芭蕉像と雖、孰れも記憶や想像的印象によつて畫かれ、彫られたものであるから、眞實

に近きものを傳へて吳れるといふことは出來ない。古人の畫いた芭蕉像を凡百幅に達する程集めて見たといふ旭眞翁の話を聞いたが、これは他日相當の論據を得た上で述べることとしたい。

# 伊賀五庵

兄半左衛門の無名庵

特殊なる事情がある場合は別であるが、凡そ人として故郷を愛さぬものは無からうと思ふ。芭蕉も故郷を愛した人である、若い頃はさうでもないやうであるが、後年は屢々郷里を訪ふて、實家の人々や郷里の知人と親しみ、又故郷の自然を熱愛してゐる。芭蕉は歸郷する毎に兄半左衛門の家に厄介になつたであらうと思はれるが、郷里の知人、殊に俳諧に遊ぶ人々の家々を泊り歩いてゐたやうでもある。風流を愛する芭蕉だから、又芭蕉を理解する周圍の人々の好意があつたからでもあらうが、自ら庵號を附けて殊に愛した草庵に、兄の建てた無名庵、苔蘇の瓢竹庵、土芳の蓑虫庵、猿雖の東麓、西麓庵等の五庵がある。

貞享元年の秋無名庵が成り、芭蕉は此處に冬籠りして

冬籠まづ寄り添はん此柱

の句を詠んだ、貞享四年の年の暮には、猿雖・土芳・風麥其他郷里の親しい人々と酒宴を張つて心を慰め、遂に元朝を寢過ごして「二日にもぬかりはせじな花の春」と詠んでゐる。尙

此の句には「空の名殘をしまんと舊友の來りて酒興しけるに元旦の晝まで臥して曙見はづして」（或ハ餅喰ひ外してトアリ）の前書がある。無名庵に於ける禪人芭蕉の面目が躍如としてゐる。歿年なる元祿七年秋には、家兄や郷里の俳人等と親しく語りつゝ此の庵を愛したのであつたが、支考に誘はるゝまゝ奈良に向ふて、永遠の別れとはなつてしまつたのである。伊賀實錄の示す「無名庵」を左に揭げて見ると、

> 舍弟松尾半左衞門の後園に建て、折々古郷に來り給ふ時はこゝに頭陀袋を掛けられたる庵なり、斗從に蕎麥の花をもてなされたる處なるべし、遷化後二三年も過たりけん、城南愛宕山大福密寺の境內へ移す、住侶法印も俳號東耕とて翁の門なるゆかりあはれなり、それを五年以前戌の春几右叟へ送る、是を白舌君聞し召て別墅に移し建つ、此時再形庵と改む、勿論古き材木その儘にして手斧鉋を遣はず、殊勝の事にぞ有ける、白舌雅君別に一室を建て什物を藏す、翁の眞跡あまたあり、その中に長物たるうしろ向の像「蓑虫の音を聞に來よ草の庵」是は蓑虫庵より移す、翁の机にかゝり給ふ畫あり、江都蚊足が筆なり。

岡本苔蘇の瓢竹庵には一本の櫻があつた。芭蕉は此の櫻をこよなく愛したのである。

花を宿にはじめ終りや二十日ほど

は此の庵で詠まれたものであり、又「此ほどを花に禮いふ別れかな」も此處で詠まれたものである。此の庵は次にいふ土芳の蓑虫庵より三十歩程しか離れて居ない。此の庵の跡は芭蕉が歿し、「吾蘇が歿しても馥郁たる香りを放ち明治二十年まで存在してゐたのであつた。

伊賀實錄の記すところに依れば

東日向町今に存す、吾蘇其子之峯その子孝魚三代に及ぶ、爰に萬菊丸を同道して滯留し給ふは芳野行脚の比也　はじめ終と花に禮云ふ廿日ほど」とありし自筆の短尺を本尊とす

服部土芳の蓑虫庵はもと些中庵と稱されてゐたのであるが、元祿元年三月芭蕉が無名庵にて達磨面壁の圖に

蓑虫の音を聞きに來よ草の庵

の句を書き込んで些中庵の土芳に與へた。土芳は喜びのあまり「蓑虫」の字を貰つて、蓑虫庵と改稱したものであるといふ、庵主土芳は、師翁を慕つて多くの句を詠んでゐるばかりか、蓑虫庵集五卷をも編んでゐる。後年風雨に晒されたが安永年間樹雨が再興し、猪來又これに手を加へて遂に今日まで傳へらること〻なつたのである。

服部土芳の蓑虫庵

窪田猿雖の
東麓、西麓
二庵

伊賀實錄の記すところに依れば、

西日向町の端に舊地あり、六十載の前池魚の災にかゝりけるをすみやかに杜若再興す、又十年前燒失して畠となれり、是は土芳がはじめ桑樞をもふけたる時、翁自畫讃の一輪をふところに入れて、庵のことぶきとて芳子へ給りしもの也、再形庵の什物となりぬ。

窪田猿雖（意專）の別業たる東麓・西麓二庵は、古來名ばかりのものであると見られてゐるやうである。それは伊賀實錄の東麓・西麓兩庵を物語るところに「東西ふたつの庵は、此所に建て名を呼たらんはよかるべしともの好せられけるが、終に果さず名のみを記念として其地をみるのみ」に起因するのである。併しこれを覆す證據に、元祿五年十二月三日猿雖宛の書簡に

七月頃いづ方やらの便りに御狀到來忝ゝ御無事に御入被成候哉卓袋が赤味噌のとろゝ汁も懷かしく相成候京屋ぬき味噌くはるゝ時節に相成候於客人殿息災に御座候哉御噂賴候車坂屋上の方に草庵御結被成候に付號可申よし則存寄候同書付申候

東の方藪際の古家　　東麓庵

新庵定而西之方に付可申候卜是　　西麓庵

でかしたる樣に覺え申候土芳に御物すき御究させ可被下候御氣に不入候はゞ又改可申候

俳諧いかゞ被成候哉土芳無油斷被勤候樣に御傳可被成候

聲枯て猿の齒白し峰の月　　其角

只今愚庵に居候

鷄や榾燃夜の火のあかり　　珍碩

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店　　愚句

取紛候て早筆卓袋參候はゞ御かたり可被下候さてゝ人にまぎらされ心隙無御座候

極月三日　　はせを

意專樣

がある。これによつて芭蕉が東麓・西麓兩庵の名付親であるといふことを判然と云へるのではなからうか。加之元祿七年一月二十日芭蕉が意專へ宛てた書簡には「又々東麓庵の櫻の比はと漸々旅心もうかれ候」とあり、元祿八年意專の意に應じてものしたる土芳の庵記に「猿雖が別業に東麓庵・西麓庵といふもの二所あり此の號は亡師の附けられし跡なり」云々とある。又芭蕉歿後の元祿九年には東麓庵月見として句さへ詠まれてゐるのである。

それから事實かどうかは疑はしいが、「續猿蓑」は東麓庵・西麓庵等に於て師翁が撰されたものであると、支考が云つてゐるのである。それにしても「伊賀實錄」のいふ、鳥醉に三老人が物語したといふことは、確かに正鵠を得てゐない。併しそれは丁度折惡しくも、東麓庵西麓庵の兩庵が再築されず、無い時であつたが爲めに、さうしたことを云ひ傳へたものであるかも知れない。志田素琴翁もさう云つて居られるやうである。

此の庵にての作と思しき俳諧に

稲妻に額かゝへる戶口かな　　土芳

畑境にのびる唐黍　　猿雖

清水出る溝の小草に秋立て　　芭蕉

わすれごろなる醉ほのかなり　　芳

又おきて有明ほそき家の霜　　雖

松風こもむ山の中だん　　蕉

（一葉集）

がある。

# 水鶏笛

芭蕉が水鶏笛・鹿笛・時鳥笛や木魚などの妙なる響を愛したことは、世間周知のことである。一人居のつれ〲なるまゝ、殊に退屈で仕様の無い時は、これを吹いてたのしみ、雨の降る日など淋しさに堪へられぬ時は、これを吹いて慰めてゐたやうである。尙ほ旅に出かける時は、始終これを頭陀袋の中に入れて愛してゐたといふ。水鶏笛が欲しいからといつて、熱心に賴んでゐるかと思ふと、欲しがる人があれば容易くこれを與へてゐる。或時は子供達が寄つてたかつて芭蕉に水鶏笛を吹いて與れといふ。其の時芭蕉は喜んでこれを吹いてやる。何と童心に滿ち滿ちた芭蕉であることよ。

竹二坊の「芭蕉翁正傳」に從へば、水鶏笛は靑茶色の陶器にして舟形をなし、亘り寸餘に及ぶもので「靈極」と銘があるといふ。「冬扇一路」には

竹人老人所持

木魚　是は東奥羽松島瑞岩寺支院の衲子惠たるものとぞ、ウロ、コト銘す

水鷄笛　これは江州游刀がおくれるものなりとぞ、靈極と銘す。

とある。

「今日まで水鷄笛は一つしか無いものゝやうに思はれてゐるが、私はさう思はない。竹人の「芭蕉翁全傳」に據ると、元祿二年大津の旅中配刀亭にて句を詠み「此時水鷄笛と名付しものを頭陀袋よりとり出して配刀に附與、近江の人の餞別の具とかきこゆ」とある。併し元祿五年二月十六日、芭蕉が一笑宛の書簡に

然らば、御約束之水雞笛贈給恭珍重存候此さとの人々聞馴ず女子共も集り我を藝者の樣に申をかしく候行脚先國所により一向音をしらぬ人御坐候吹て聞せ申可と悦び申可鹿笛も木曾より貰ひ申候時鳥笛も御坐候はゞほしき物に候水雞笛作る人は作るべくと存候御面倒ながら是も御聞可被下候出來候はゞ御賴入申候何にても相應望の物細工人へ謝禮致すべく候殺生の道具ながら水雞笛も只吹はおかしく候(以下略)

鶯や餅に糞する緣の先

二月十六日　　芭蕉庵

一笑樣

とある。右の「鶯や――」一句のが元祿五年であるところより推すと、書簡が元祿五年か若しくはそれ以後のものであることは疑ふ餘地がない。さうすると元祿二年に水鷄笛を醒刀に與へ、「同五年水雞笛を依賴してゐるのであるから、二つ以上あつたといふことが云へるではなからうか。因に右の書簡は加賀の小杉一笑宛のものではない。何となれば加賀の一笑は元祿元年十一月に死んでゐるのであるから。此の當時は、伊賀には保川一笑、加賀には小杉一笑、津島には若山一笑、淡路には飛田一笑、甲斐にも一笑、大阪にも一笑と稱する人がゐたといふことである（寥々氏の芭蕉庵雜考に依る）。

芭蕉は晩年水鷄笛と木魚を伊賀蓑虫庵主服部土芳に與へたさうである。これを蓑虫庵に保存して師翁を偲んでゐたといふことである。木津碩堂氏の言葉によると、後世伊賀上野町萬町川口氏の手に移り、明治六年其の舊藩主なる藤堂家へ呈上したといふことである。

# 蜀山人の芭蕉翁傳

殊更芭蕉翁傳でもないが、是非は別として蜀山人の「一話一言」の一節を掲げてみる。

芭蕉庵桃青、幼名は松尾金作、後甚七郎と改、藤堂和泉殿家來也、目白臺下上水堀割の時甚七郎其事をつかさどりしとぞ、其後日光御普請の事をつかさどりし時、何やらんあやまちありて

道ばたの木槿は馬にくはれけり

といへる句をして仕官の望をたちとしぞ、又藩中を亡命せし時の句とて、人のつたへしは

さまく〵の事思ひ出す櫻かな

今も松尾半左衛といへるはその弟の家筋也といふ。

# 惺庵西馬の芭蕉翁略傳

惺庵主人著すところの「一翁西哲集」中の略傳であつて、別に詳しいわけでもなく、正確であるわけでもない。その點何等參考になるところもないかも知れないが、極めて簡單に略傳してあるところが面白いと思ふて、此處に掲げる次第である。

桃青翁松尾氏名宗房伊賀阿拜郡柘植村人寛文二年藤堂新七郎良精嫡良忠に仕ふ、同六年良忠蟬吟早世さる、よつて同秋仕を辭し洛に登り、和學を北村季吟に學び、儒を田中桐江に學び、書を北向雲竹に學ぶ、在京七年寛文十二年東武に下り、延寶四年薙髮し玉ひ其後深川に卜居して芭蕉庵と號す、同所臨川寺佛頂和尚に參禪し、大悟の後正風の體裁を定め玉ふ、又畫を許六に學ぶ（サレド延寶中ノ自畫賛アリ、初ヨリ畫キ玉ヒシナルベシ）貞享元年甲子紀行、同四年鹿島紀行又卯辰紀行、同五年更科紀行、元祿二年奥細道同三年幻住庵記・嵯峨日記等あり、諸書に釣月軒・風羅坊・泊船堂・瓢竹庵・冉彬庵・栩々齋・天々軒・無名庵・蓑虫庵・杖錢子・蕉花老人猶數號あり、略す、元祿七年甲戌歳壬五月深川首途し、九月の末大阪に於て重病にかゝり、十月十二日花屋仁右衛門が宅に遷化し給ふ享年五十一、遺命によりて近江粟津の義仲寺に葬し奉れり、

# 久夢日記の芭蕉

たゞに俳諧ばかりでなく、大名やら役者などにも言ひ及んであるところがおもしろいから、此處に參考として掲げることを許されたい。

貞享元甲子年この時節俳諧ことのほか世上にはやりて、芭蕉おこなはるゝ、この芭蕉は藤堂和泉守殿家來松野源七郎といふものなり、芭蕉は山崎宗鑑、貞德、荒木田神主、宗祇等を俳友とせり、これらのるゐは、吉田兼好のながれ連歌なり、芭蕉もんていに其角元鬼角、後麒角、嵐雪兩人より、はいかい下品になりといへども、おもしろく口舌にていひまわしてより世上にはやる、これを五色ずみと申は、點配を五色の墨をもつてなすゆへなり、芭蕉もん人沾德、沾洲、青蛾、一晶、これはべつりう、そのほか三夕、これにすぐれたるよし、およそ十餘人、享保のころ素人に百里、白雲、連之、只尺等ありて、これらはすへ〳〵の宗匠よりはるかにまされり、享保すへより大名小名にも、この道このむ人多かりける、町人、百姓、芝居者、くつわ等にも、また上手できたり、くつわにはつる蔦

屋の蘭洲といふ、もつとも風流なるものなり、芝居ものには市川團十郎（後海老藏といふ俳名三升と云のち栢莚といふ）澤村宗十郎俳名斗子いとふ、兩人ともに上手なり、これらは享保末より延享のころまでまなぶ、

大名には內藤備後守、安藤對馬守べつして上手なり、御はたもと衆大勢あり、

芭蕉翁の墓、江州粟津義仲寺、木曾義仲廟のうしろにあり、

風羅翁芭蕉桃青居士

芭蕉石碑の句

木曾殿と後合の寒かな

芭蕉多年の俳德の御ほうびして、碑によつて雲上よりくだし給はる號、飛音明神となりそのもとに、

古池や蛙飛込水の音

# 萬菊丸鼾の圖について

貞享五年吉野行脚の折、同道した杜國こと萬菊丸が大鼾をかいて寢てゐるので、芭蕉は鼾が耳障りになつて遂に寢就くことが出來ず、戯れに萬菊丸の鼾を畫いて、これを萬菊丸に見せたといふことは、餘りにも有名な話である。この話は百明房の「伊賀實錄」、竹人の「芭蕉翁全傳」、竹二坊の「芭蕉翁正傳」、士朗の「枇杷園隨筆」にも出てゐる。尙ほ聽雨の「花は櫻」にも出てゐるといふ。

この圖は伊賀の猿雖の宅にて畫かれたといふことであるが、猿雖へ文通された時に送られたといふ(後にいふ)ことであるとすれば、猿雖亭で畫かれたものではなくして、京にて畫かれたものであるらしい。參考に「芭蕉翁全傳」の一節を掲げて見れば

瓢竹庵に萬菊と旅ねして、此國田井の庄兼好の古跡を尋ね、よし野、須磨明石、京に出て、五月廿日美濃鵜飼あり(京より猿雖が方へ交通の時萬菊が鼾の圖たはぶれに出來る今其家にあり、猶其時の書翰奧に記す)直に武江に歸庵也、萬菊は京よりひとり伊賀に

歸り、猿雖がやどに四五日足休して、（以下略）

其の書簡とは、煩はしいけれど事の序でに擧げておく（芭蕉の行動を知る點に役立つことあれば一讀せられたし）。

翁在京猿雖への返書

大阪迄御狀忝拜見、此度南都の再會大望生々の樂ことはにあまり、離別の恨み筆に不ㇾ被ㇾ盡候、我たのもし人にしたる奴僕六にたに別れて、彌おもき物打かけ候而、我等一里來る時は、人々一里可ㇾ行也、三里過る時は各今や三里可ㇾ行也、いまたしや、梅軒何かしの足の重きも道連の愁たるへきと、墨實かおかしかりしなとも云々、石の上有原寺井筒の井の深草生たるなと尋て、布留の社に詣、神樣なと拜みて、こゑはかりこそむかしなりけれと詠し郭公の比にさへなりけれと、おもしろくて瀧山に昇る、帝の御覽に入たる事古て、集に侍れは、猶なつかしきまゝに、貳拾五丁わけのほる、瀧の景色言葉なし、丹波市やキと云ふ所耳なし山の東に泊る、ほとゝきす宿かる頃の藤の花と云々、なほおほつかなきたそかれに、哀なるむまやに到る、今は人々舊里にいたり、妻子より僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなとして、大佛の法事のはな

しとり〳〵なるへき、市兵衛は草臥なから、梅額子へ巻ひけらかしに可ㇾ被ㇾ行、梅軒子は孫とのにみやけねたられておはしけむなと、草のまくらのつれ〳〵に、ふたりかたり慰て、十二日竹の内いまか茅舍に入、うなき汲入たる水瓶もいまた殘りて、わらのむしろの上にて茶酒もてなし、かの布子うりたしと云けん萬菊のきり物のあたひは彼におくりて過り、おもしろきおかしきもかりのたはふれにこそあれ、實のかくれぬものを見ては身の罪かそへられて、萬菊も暫落涙おさへかねられ候、當麻に詣て、萬のたつときもいまをみるまての事にこそあなれと、雨降出たるを幸に、そこ〳〵に過て、駕籠にて太子に着、譽田八幡にとまりて、道明寺藤井寺をめくりて、つの國大江の岸にやとる、いまの八間屋久左あたりなり

　杜若語るも旅のひとつかな　　愚句

　　山路の花の殘る笠の香　　一笑

　朝月夜紙干板に明初て　　萬菊

三十四句にてやむ、

十九日あまか崎出船、兵庫に夜泊、相國入道の心をつくされたる經の島、わたのみ崎、

わたの笠松内裏やしき、本間か遠箭を射て名をほこりたる跡なときゝて、行平の松風村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡、かなしけに過行、西須磨に入て幾夜ね覺ぬとかや關屋の跡も心とまり、一の谷逆落し、鐘懸松、義經の武功おとろかれて、てつかひか峯に昇れは、須磨あかし左右にわかれ、あはち嶋丹波山かの海士か古里田井の畑村なとめの下に見おろし、天皇の皇居はすまの上のと云り其代のありさま心に移りて、女院おひかゝへて舟にうつし、天皇を二位とのゝ御袖によこ抱いきき奉りて、寶劍内侍所あはたゝしくはこひ入れ、或は下々の女官は、くし箱油つほをかゝへて、指くし根卷を落しなくら、緋の袴にけつまつき、臥轉ひたるらん面影さすかに見るこゝちあはれなる中に、敦盛の石塔にて淚をとゝめ侍候、磯近き道のはた、松風のさひしき陰に物古たるありさま、生年拾六歲にして戰場にのそみ、熊谷に組ていかめしき名を殘し侍る、其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速君わするゝ事なかれ、此一言梅軒子へも傳度し、須磨寺のさひしさ、口を閉たるはかり也、蟬折こま笛料足十疋見るまてもなし、此海見たらんこそ、物にはかへられしと、あかしよりすまに歸りて泊る、廿一日布引の瀧に登る、山崎道にかゝりて、能因のつか、金龍寺の入相の鐘を見る、花

に散けるといひし櫻も、わか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衞とのゝ宗鑑かすかたを見れは餓鬼つはたと遊しけるをおもひ出て、

有難きすかた拜まんかきつはた

と心のうちに云て、卯月廿三日京に入る、

である。芭蕉が右の長い書簡と共に斬の圖を送り、これが萬菊丸の斬の圖であるといふてゐるところを見ると、どうしても京にて畫かれたとしか察せられない。

猿雖の宅で畫かれたといふてゐる「伊賀實錄」も參考の爲め記して見よう。

斬の圖といふものあり、予丙寅行脚の比、大津の驛菊峰亭にして支考其圖を模寫したるを見る、翁斬の圖伊賀にありと斗書るを寫して、おかしきまゝにはいかい斬の圖といふ一集を出せり、是や翁のふとんにても着て旅寢し給ふ姿かいぶかしかりけるが、此地へ來て聞くに、彼圖にいさゝかも違はず、端書に萬菊殿斬の圖とありて、圖の上にこゝは車を引如し、こゝは何〳〵といろ〳〵戯書し給ひて、甚めづらしきもの也、斬に姿をつけ給ふ處古今にあらずと感じ得る、是は猿雖が宅にて萬菊が斬の高さに寢兼給ひて、夙く自かゝせ給ひけるとなむ、今桃雫といへる風士秘藏すとぞ、

これによつてこれを見ると晝寢でない樣に思はれる。併し今日其の時の模樣を察すれば、夜の眠りよりも晝寢の方がより適切であるかに思はれる。といふのは旅に疲れて時をかまはず寢たといふことが、何となく萬菊丸にふさはしい樣に思はれるからである。これを畫いた芭蕉も、夜よりは晝とした方がより親しみが出るではなからうか。これはたゞ私の氣持であつて何も根據に出でてはゐないから、或ひはこの說は撤回しなければならぬかも知れない。併し時代的に眺めて見ると、烏醉が竹人や其他の人から聞いたといふてゐるよりは、竹人自身のいふところがより確かであることを認めなければならぬのである。そこでこの圖は確かに晝寢の鼾を寫されたものであるといふことを云ひ得ると思ふ。これに就ては伊賀の竹二坊も「芭蕉翁正傳」に於て晝寢といつて居られる。今圖と文字を記せば、

鼾の圖、萬菊丸晝寢の折から翁戲れに書れしよし、

口本一寸二分

中ほど廣さ四尺壹寸

此由利車長持のごとし

とある。これに類する戯畫が芭蕉以前になかつたことは、伊賀實錄の示す通りである。こうしたところに芭蕉の自由奔放な獨創力と、天眞爛漫さと洒脫味とが遺憾なくあらはれてゐるのである。もとよりこんな繪を畫いて見ようと思へば、何ともないことであるが、何の企てもなくして此の圖を得てゐる芭蕉――芭蕉其人の顏や心が恰も水の草を潤すが如く髣髴として來るではないか。芭蕉が慕はれてならない。此の圖が猿雖の宅に傳はり、猿雖の後裔なる內神屋に傳はつたといふことは、猿雖の宅で畫いたといふものでなく、京より猿雖へ送つたといふことによつても明かに想像さるれところである。勿論何人かの手によつて寫しが取られたのであるから、其の圖に多少の變化を見るのは、又止むを得ないものであると見なければならない。

# 芭蕉の舊蹟「東盛寺」

東盛寺について面白い隨筆が「甲子夜話」にあるから、左に揭げて見る。

予が隱莊の北隣は東盛寺なりその後に小篁ありこの處嘗て俳人芭蕉の棲し跡と云、曰人（仙臺侯の中の人、前に其人の事を出せり）の俳道にて傳聞せしは芭蕉盤珪禪師に參禪して專ら禪理を問ひしと云是に由て予思ふ此頃正眼國師（盤珪の勅號）は天祥公の爲めに天祥庵に往來ありしかば芭蕉も隣をトして棲しなるべし天祥庵は卽今不動堂の處にしてかの小篁と相去ること纔に二十餘步又今東盛寺の中に芭蕉の像をおく小堂あり是篁中の舊庵を移せしと云所又桃青（芭蕉の名世人多所レ知）の號を後に東盛に改しとも云へり（桃青東盛方音通ずればなり）

# 芭蕉翁書簡

「一話一言」に左の書簡が出てゐる。珍らしいから此處に掲げる。

頃日は御世話にて御座候隱居より發句參候間是にて埒明申巻頭に

春　賀

うしの年どこから春を牽出すぞ

いの字に花のひらく國の名　　　見　龍

此通に賴入候宮川賊の并彼是取ませ候て可然御ならべ可被下候併渡舟田樂と申事宮川の巻頭にても可有事と存候巻軸は猿思山神可然候半かそれとも御見合候てどちらへも可被成候題者高下にはあるまじく候

吞舟句は

長閑さに馬子に問ふたりや元日や

此句望のよしに候

大晦日　　　　　　　　　　　　　　　　見　龍

一　由　樣

五三日中伊賀舊里に引越候二月下旬又々此邊京都出申候身の行衞吹風にまかせ候へば慥に難申進し候越路の雪漸々消かたに成候はゞ先づ上京願申事に御座候是非今一度再會之上は風雅御究可被成候御捨なく候段則西行能因が精神世外之樂此外有間鋪候

正　月　三　日

# 瓜の硯

花屋日記にも、硯一面、墨一挺、水入小刀などとあるけれども、芭蕉が生前瓜の形の硯を愛用してゐたといふことは、今日餘り知られてゐないやうである。この瓜の硯は代々美濃派に傳つたものであり、最近迄は畸人で明治畫壇の雄なる佐藤旭眞翁（現住、山形縣東村山郡長崎町文右衞門新田　服部文右衞門方）が永く秘藏して居られたが、それも偶然誰かの手に渡つてしまつたので、今はその行衞さへわからぬ有樣である。私はこの事を島田筑波氏より聞いて旭眞翁を訪れ、瓜の硯の大いさ、色其の他詳細にわたつて問ふた。翁は早速快諾されて、硯の原色圖を送られ、且つ其の大いさ等を詳報された。それに從ふと石の丈五分位、長さ五寸位、幅三寸位であるといふ(圖に示す通りの恰好であるさうな)。

瓜の硯については、師芭蕉を記念する爲めに、翁歿後百年卽ち寛政五年に「瓜の硯」といふ芭蕉追憶の句集が上梓されたのである。今各〻の句を擧げることは煩はしいから、他日に讓り、卷頭及び卷末の序跋だけを抄出して「瓜の硯」をしのぶことゝしやう。

物いえば唇さむしと、よく其ひとりを愼み其德をかくす、されば孤ならず必隣あり、白骨は朽といふ共、百年の今に美名はなほ薫しく、五嶽も高きとせず、其道を學、其德を仰ぐもの四海にみちて、啼かぬ鳥の聲をしたひ、見ぬ世のむかしをなつかしめ、□□まくらは活きて出けむの筆跡長く傳はる蔓の瓜の硯は、翁より晋仲に讓、山只にわたり、將宗瑞家の珍たりけるを、今清心院(二代宗瑞後室)なるうてゐより我庵の六物にくはへよと給ふにぞ、杉風が畫たる翁の像をうつし、法會を營めば、昔を今に人々そゞろ心に句を吟じ備たりしを、東溟美溪の輩終小册となし、瓜の硯と題し、長く此のみちの榮をいのるなりけらし、于時寛政いつゝのとしうしの應鐘十二日臥龍庵東園述

瓜の硯の壽年を以かぞふれば其主の翁の亡後も今百年也いそのかみ實植せし世の此瓜の始をしらねば其蔓の行末はなほ限しられず相似たりや祖翁の始共師をしらねば此道のさか行末は三國を廣しとせずいはじな釋迦に發句きかねば老子に附合もなし君みずや五千餘卷の佛經こと

〳〵く虛に居て實に遊ぶ八萬四千の儒書皆三句目の轉あり當世五七五をよくつらぬるをのみ風流と思ふ言篇の誹諧師は率頭持を宗匠とあふぎて連歌の下にうづくまる五七五は滑稽を學ぶあしゝろなるをしらずや親子兄弟の交に三句の轉を用ひて下の尊卑悉俳意を學ばゝ必訴なからしめんか書は悉紙魚に喰るゝとも道に背く人なく經は皆鼠の巢に引るゝとも佛果を得ざるなし仰べし蕉風の俳尊むべし祖翁の敎演の眞砂さゞれ石のいはをとなりて苔無壽まで此道の廢れる期はあらじと九拜するのみ

騶山人松家瑞竹道跋

# 跋

私は芭蕉傳の編述者として、選ばれた適任者ではないかもしれない。併し、私は未來への藝術道を拓かねばならぬといふ燃ゆる心から、芭蕉の研究を思ひ立つたのである。そこへ偶〻天來書房の主人が來て「芭蕉傳」を刊行したいから、一兩年のうちに是非書いてくれるようにと慫慂された。とはいふものゝ、人一倍忙しい私であり、且つ淺學菲才の私である。初めは引きうけたやうな、又引きうけぬやうな返事をしてゐたが、度々の督促に動かされ遂に蕪才を顧みず、傳記の研究と集成に盡力したのである。

如何なる藝術家も生活と切り離しては、其の人の藝術が生れない。そればかりか、眞に其の人の藝術を味はうとするには、先づ其の人の生活を見なければならぬ。私は人間としての芭蕉の偉大さに觸れようとして、絶えずこの方面にのみ力を注いで來た。芭蕉は私たちと變らぬ人間でありなが

ら、あれだけの偉業と藝術の深遠境を掘り下げたかと思ふと、手を拱いて三嘆するよりいたし方がない。

昨年五月から凡そ半ヶ年間といふものは、一ッ時たりとも芭蕉が私の頭を去らぬので、深更まで筆を採つて來た。不思議なことには芭蕉を頭の中に描いて執筆したのではなかつたが疲れ切つて床に入り、書齋に身を横へると、必ず夢の中に芭蕉が出て來て、私にいろいろと話しかけるのである。或時なぞは芭蕉が「そんなことはなかつた。自分は斯う考へてゐたのである」と口をきかれることもあつた。そして旅裝の芭蕉と、その自然の光景がまざまざと展開するのであつた。そこで自然夢の中の對面と多くの傳記等を綜合對照して筆を進めたことも可成多かつたことゝ思ふ。夢の中で芭蕉と對面した翌日は、常に少しの疲れもなくて徹夜が出來た。想へば不思議でもあり、有難いことでもあつた。

本書が尨大であるばかりで、その割に拙いものであることは、早々と纏め上げたことゝ、學に淺い私であるところから止むを得ないものであらう。

併し本書が幾分なりとも世を稗益するところがあるとすれば、それは私の力ではなくて、私の接した數々の著書と、直接御助力を仰いだ諸賢の御陰であると確く信じてゐる。一々是等諸氏の芳名や書名を擧げることは煩雜に亘るから、今は省略して只管感謝の意を表する次第である。

終りに臨み、山本信哉博士より序文を賜つたことは私の無上の光榮である。又勝峰晋風氏よりは眞蹟寫眞其他について種々御助力を、知友松本義一氏よりは序文を、別宮茶史氏には年表を、渡邊刀水氏にはその御秘藏になる眞蹟借覽の便を、尙柴田常惠、島田筑波、山本一信、箕浦子陽、鈴木葭汀、松村清三郎氏等の御助力大いなるものがある。此處に謹んで鳴謝して止まざる次第である。

昭和九年七月一日夜半

紫　舟　識

# 芭蕉年表

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 天皇 | 後光明(110代) | | | | | |
| 西紀 | 1644 | 1645 | 1646 | 1647 | 1648 | 1649 |
| 年號 | 正保(甲申) | 2(乙酉) | 3(丙戌) | 4(丁亥) | 慶安(戊子) | 2(己丑) |
| 將軍 | 家光(3代) | | | | | |
| 芭蕉年譜 | (一歲)〇松尾芭蕉、伊賀國上野に生る〇父は與左衞門といひ手蹟師匠、母は四國伊豫の人といふ | (二歲)〇(確らしい幼名及俗名に、金作・甚七郎・忠左衞門・宗房等あり) | (三歲)〇母の病歿後、後の壽貞尼なる次郎兵衞の母を乳母として養育せらる | (四歲)〇(松尾家は寶曆年間三代にして流行病のため斷絕す) | (五歲) | (六歲)〇伊賀國上野の城代藤堂新七郎の子良忠(蟬吟と號す)の近習として召出さる |
| 刊行俳書目 | 底ぬけ臼(幸和)〇宗祇法師祕傳〇犬子集(重頼) | 毛吹草(重頼)〇連歌初心抄(了意) | 氷室守(貞室)〇鵜鷺千句(幸和)〇古保里(正式) | 大原三吟(宗祇・宗長・其佐〇花火草(立圃〇追福千句(齋齋)〇毛吹草追加(重頼) | 天水抄(貞德)〇正章獨吟千句(貞德判〇山の井(季吟) | 久流留(西武〇花月千句(立圃)〇立圃句集(立圃)〇師走の月夜(季吟)〇望一千句(望一) |
| 備考 | 十二月廿三日改元〇江崎幸和歿 | 北村季吟、玉津島の廟祝となる〇僧澤庵寂す〇佐倉宗五郎刑せらる | 小堀宗甫歿〇貞德花咲亭に俳式を定む | 齋藤德元歿(年八九)〇宗因浪花に向榮庵を結ぶ〇鯉屋杉風生る | 二月十五日改元〇守武百回忌を行ふ〇中江藤樹歿す(年四一) | 木下長嘯子歿 |

| 後西(111代) | 後光明 (110代) | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1655 | 1654 | 1653 | 1652 | 1651 | 1650 |
| 明暦(乙未) | 3（甲午） | 2（癸巳） | 承應(壬辰) | 4（辛卯） | 3（庚寅） |
| 家綱（3代） | | | | | |
| （一二歳） | （一一歳） | （一〇歳） | （九歳） | （八歳）○手習を初め、筆勢却々優れてゐたと傳へらる | （七歳） |
| 俳諧師奥儀（貞徳）○紅梅千句（貞徳）○新版毛吹草（重頼） | 萩集（西武） | 俳諧獨吟集（正章）○河船徳萬歳（立圃） | 守武千句（守武）○若狐（友直） | 御傘（貞徳）○崑山集（良徳） | 野狂集（定室）○片言なほし（貞室）○望一後千句（望一）○伊勢山田俳諧集（望一・孝晴等） |
| 四月十三日改元○貞室芳野吟行「これは〳〵とばかり花の吉野山」の吟あり○非阪春清歿 | 服部嵐雪生る | 松永貞徳歿（年八三） | 九月十八日改元○向井去来・[illegible]生る○貞室點業を許され、花の本二世を僭す○別木庄左衛門等の陰謀あり | 宗鑑百五十回忌行はる○里村昌俔歿○由井正雪反す | 里村玄的歿（年五八）○幡随院長兵衛殺さる○岩佐又兵衛歿 |

| 後西（111代） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1661 | 1660 | 1659 | 1658 | 1657 | 1656 |
| 寛文(辛丑) | 3（庚子） | 2（己亥） | 萬治(戊戌) | 3（丁酉） | 2（丙申） |
| 家綱（4代） | | | | | |
| （一八歳） | （一七歳）○蟬吟公は初め松永貞徳に從ひ、その歿後北村季吟に就て俳諧を學ぶ芭蕉またその文學的感化を受けしこと少なからず） | （一六歳）○（仕官の役目は料理勘定兼近習として蟬吟公に從ふてゐたらしい） | （一五歳）○元服して名を半七郎と改名し二人扶持並に品物金子等を藩侯より頂戴したと云はれる | （一四歳）○初めて「いぬとさるの世の中よかれ酉のとし」の句を作る | （一三歳） |
| へちま草（道甘）○初元結（是誰）○水車集（隨流）○烏帽子箱（立以） | 新續犬筑波集（季吟）○懐子（重頼）○晝空言（加友）○木間さらひ（常辰）○慕綮集（常辰） | 御傘（貞徳）○仙臺紀行（有次）○鉋屑集（胤及）○和歌竹（由雪） | 牛飼（燕石） | 砂金嚢（西武）○十種千句（玄札） | 祇園奉納俳諧連歌合（季吟）○玉海集（貞室）○口眞似草（梅盛）○花火草（立圃）○崑山土塵集（今徳） |
| 四月廿五日改元○上島鬼貫・榎本其角・内藤丈草相續いで生る | 立圃、重頼と爭ひて絶交す○遊女高尾歿 | 岩田凉菟生る | 七月廿三日改元○松井宗丹歿（年八一） | 林道春歿（年七五）○松永尺五歿 | 宗因菅公七百五十年祭に因み大阪天滿の社頭に萬句を興行す○森川許六生る |

| | 1662 | 1663 | 1664 | 1665 | 1666 | 1667 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 天皇 | 後西（111代） | 霊元（112代） | | | | |
| 西暦 | 1662 | 1663 | 1664 | 1665 | 1666 | 1667 |
| 年号 | 2（壬寅） | 3（癸卯） | 4（甲辰） | 5（乙巳） | 6（丙午） | 7（丁未） |
| 将軍 | 家綱（4代） | | | | | |
| 芭蕉 | （一九歳 ○天性蒲柳、多感の芭蕉が、朝夕伊賀の風光から新鮮な詩的刺戟を與へられたことと考へらる） | （二〇歳） | （二一歳） | （二二歳） | （二三歳）○四月、藤堂蟬吟公の夭折に遭ひ、芭蕉の悲嘆限りなし○六月、高野山の報恩院に蟬吟公の遺髪を納む | （二四歳）○二月、僚友城孫太夫の許に「雲とへだつ友かや雁の生別れ」の句を遺して故郷を出奔す |
| 俳書 | 俳集良材（政由）○身楽千句（元隣）○花の露（資甘）○落葉集（是誰）○伊勢正直集（如五） | 埋草（成安）○落髪千句（玄世）○木玉集（梅盛）○増山の井（季吟）○千句等抄竹（一雪）○蔵尾集（良保） | 神子の舞（立圃等）○蠅竹（貞恕）○雨吟集（季吟等）○佐夜中山集（重頼）○歳時故實（道允） | 雪千句（季吟等）○小町踊（立圃）○俳諧談（盤斎）○十会集（季吟） | 類字假字遣（盛澂）○洗濯物（一雪）○阿波千句（一雪）○獨吟千句（正友）○歌仙そろへ（元隣）○獨吟集（重徳）○發句帳（宗甫等）○名所方角抄（宗祇） | 玉海集追加（貞室）○新續犬筑波集（季吟）○小相撲（立圃）○續山井（湖春）○奴俳諧（可徳）○百八十句（重以）○人間世（元隣） |
| 事項 | 宗因江戸に遊ぶ○重頼正式と争ふ○堀立庵歿 | 志田野坡生る○此頃山鹿素行の學術大いに行はる | 里村玄俊歿（年五〇） | 田中常矩、貞徳風にあき談林に移る○各務支考・水間沾徳生る○里村玄陳歿（年七五） | | |

| 靈元（112代） | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1668 | 1669 | 1670 | 1671 | 1672 | 1673 |
| 8（戊申） | 9（己酉） | 10（庚戌） | 11（辛亥） | 12（壬子） | 延寶 癸丑） |
| 家綱（4代） | | | | | |
| （二五歳）○（故郷出奔の原因は、蟬吟公の死よりも女性關係に求めらる） | （二六歳）○（亡命後、京都に出て季吟に俳諧・和歌を學び、また伊藤坦庵に漢籍を學ぶ） | （二七歳）○（生計不如意のため、京に、東山に、故郷に或ひは西國に、その居所一定せず） | （二八歳） | （二九歳）○一月、伊賀上野の天滿宮奉納三十番發句合せの判をなし「貝おほひ」を上梓す○九月、江戸に出て小澤卜尺の家に宿り、程き近き所に住む鯉屋杉風とも交る | （三〇歳）○（小石川水道修築の官吏を勤めたといふ） |
| いせ踊（加友）○宗長千句（西順）○難波草（宜休） | 一本草（未琢）○藻鹽草○便船集（梅盛） | 形見草（立圃追善）○詩友集（種寛）○天水抄（貞德）○發句帳（立圃）○大和巡禮（正辰） | 新百人一句（重以）○芳野山獨案内（周可）○落花集（以仙）○寶藏（元隣）○新獨吟集（重德） | 時世粧（維舟）○鷹塚（重德）○諸國獨吟集（元隣）○晴小袖（一雪）○武藏野（意行子）○牛刀毎公編（季吟序）○續大和巡禮（正辰） | 生玉萬句（西鶴）○公界集（重山）○埋木（季吟）○用意風體（季吟）○旅心集（友意）○西翁十百韻（宗因） |
| 鬼貫八歳にして「こ〱いと云へど螢がとんで行く」の吟あり○高島梅盛、幕府の召に應ず | 石田未得歿（年八三）○野々口立圃歿（年七一） | 其角十歳、大圓寺に入り詩を學ぶ○談林の流行に伴ひ言水・幽山等の貞門新人動搖す | 伊達騷動鞠問さる | 山岡元隣歿○季吟幕府の命にて江戸に出づ | 九月廿一日改元）室原貞室歿（年六四）○鬼貫十三歳にて維舟門に入る○季吟源氏物語湖月抄六十卷を著す |

| 1679 | 1678 | 1677 | 1676 | 1675 | 1674 |
|---|---|---|---|---|---|
| 靈元 (112代) | | | | | |
| 7（己未） | 6（戊午） | 5（丁巳） | 4（丙辰） | 3（乙卯） | 2（甲寅） |
| 家綱 (4代) | | | | | |
| （三六歳）○二月、涅槃會の東叡山に參詣次郎兵衛と對面す○市村座にて宗因と會ふ○杉風との百韻、杉風・仙風・龜・惣代・杉化・兩已、執筆等との八吟表八句、冬には千春・信德吟との三吟歌仙あり | （三五歳）○「江戸三百韻」三卷完成さる○秋、四友亭に似春と四友との三人にて連句興行○その他、松島歌仙雨吟百韻等の撰集に梓さる | （三四歳）○山口信章（素堂）及び伊藤信德と芭蕉との連句「江戸三百韻」一卷二卷成る○信章との合作「江戸兩吟集」成る | （三三歳）○濱島氏を訪ひ、中坊秀時氏の文庫に厄介になると傳へらる。これを芭蕉庵といふ○一時故郷に歸り、再び東上俳諧に對する自信漸く固し○此の頃宗房を桃青と改號す | （三二歳）○松倉嵐蘭（年二十八九歳）入門す○關口に五月雨塚を建てしと云ふ | （三一歳）○榎本其角（十四歳）入門す○談林の俳風に心醉す○此の頃剃髪して素宜と號す |
| 江戸蛇の鮓（言水）○近來俳諧風躰抄（惟中）○仙臺大矢數（三千風）○杉[illegible]集（西鶴）○十百韻（山水）○新玉海集（貞恕）○太郎五百韻（惟中・西鶴・宗因）○坂東太郎（才丸）○破邪顯正（隨流） | 京三吟（信德等）○宗祇[illegible]中鈔（宗祇）○江戸新道（言水）○江戸八百韻（幽山）○物種集（西鶴）○當流籠拔（宗旦）○三ツ物揃（不武・季吟等）○宗因七百韻（宗因） | 大矢數（西鶴）○三部抄（惟中）○唐人踊（立圃）○蛙之助五百韻（常矩）○難波千句（益翁）○大長刀（水雲）○玉江草（卜琴）○備俳諧百韻（閑竹） | 續連珠（季吟）○惟中獨吟十百韻（宗因判）○廿會集（季吟）○天滿千句（宗因）○談林十百韻（松意）○類船集（梅盛）○俳諧師手鑑（西鶴）○武藏野（維舟）○懷子（重頼） | 智義理記（宗信）○俳諧繪合（高政）○大阪獨吟集（宗因判）○花千句（季吟）○明鏡（立圃）○新續獨吟集（重頼）○俳諧蒙求（惟中）○絲屑（重安） | 大井川集（維舟）○俳諧無言抄（信淨寺梅翁）○後撰犬筑波集（[illegible]）○小川千句集（貞竹）○信德十百韻（信德）○藤枝集（維舟） |
| 前句附この頃より始まる | 山本西武歿（年七三）○鬼貫十八歳にして[illegible]能録を刊す○名妓夕霧歿 | 岡西惟中備前より大阪に出て宗因門に入る○早野巴人生る | 神野忠知自刃す○鬼貫談林風に入る | 平澤重光歿 | 鷄冠井令德歿 年六八）○天守教徒嚴禁 |

| 靈元（112代） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1680 | 1681 | 1682 | 1683 | 1684 |
| 8（庚申） | 天和（辛酉） | 2（壬戌） | 3（癸亥） | 貞享（甲子） |
| 綱吉（5代） | | | | |
| （三七歳）○兄半左衛門、乳母壽尼と共に芭蕉の健在を喜ぶ○四月、其角・杉風等の「延寳二十歌仙」成る○八月、其角の「田舍の句合」成りこれに判詞を下す○九月、杉風の「常盤屋句合」に判す○枯枝の句なる | （三八歳）○晩秋、深川の元杉風の別墅に草庵を營む、これ芭蕉庵なり○七月、「次韻」上梓さる○屢々臨川寺の佛頂和尙を訪ひ、參禪したと傳へらる | （三九歳）○千春、其角等と共に「武藏曲」完成す○十月、揚水芭蕉庵を訪ふ○この頃、雨笠など作りてしきりに行脚を思ふ○十二月、江戸の大火に芭蕉庵燒失す | （四〇歳）○正月、二本榎の上行寺へ避難し、後甲州の六祖五平宅に止り、五月江戸に歸る○素堂芭蕉庵再興の寄附を募集す○五月、其角の「虛栗」上梓さる | （四一歳）○七月、千里、芭蕉を訪ふ○八月野ざらし紀行にたつ○九月伊賀に着き無名庵を結ぶ○十月、大垣の木因亭に宿る、如行・荊行等入門す○十一月、名古屋に入り、尾張五歌仙興行され、「冬の日」成る○十二月、一非亭・桐葉亭にて俳諧興行○尾州の杜國を訪ひ、再び伊賀へ向ふ |
| 江戸辨慶（言水）○安樂音（似船）○太夫櫻（違舟）○誹枕（幽山）○江戸宮笥（心友）○投盃（一體）○行事板（一笑）○破邪顯正返答（惟中）○軒端の獨活（松意）○洛陽集（自悅） | 大矢數（西鶴）○釋教俳諧（宗因）○雛巾（常矩）○東日記（言水）○山の端千句（宗因）○おくれ双六（淸風）○詠句大概（曙舟）○それ〳〵草（友悅） | 後樣姿（言水）○松島眺望集（三千風）○犬の尾（蛇鱗）○家土産（幾音）○眠寤集（一翠子） | 金澤五吟（友琴）○一時隨筆（惟中）○空林風葉（自悅）○新二百韻（其角等）○筑波紀行（宗祇）○白水郎紀行（惟中）○芝肴（似春） | 五百三歌仙（如雲）○花島集（子英）○蠹集（其角）○引導集 |
| 松江維舟歿（年七四）○椋梨一雪歿（年六〇） | 九月廿九日改元○高井立志歿○池田宗旦維舟に學ぶ談林に入り伊賀流の一派を起す○西鶴の繪入好色一代男刊行 | 田中常矩歿○西山宗因歿（年七八）○山崎闇齋歿（年六五）○日光山東照宮建立 | 足代弘氏歿（年四四）○季吟新玉津島に居す | 二月廿一日改元○其角大阪に行き去來と對面す○丈草武門を辭して剃髮す○鬼貫、誠の外に俳諧なしと悟る○西鶴好色二代男を著す |

| | | |
|---|---|---|
| 霊元 (112代) | | 東山 (113代) |
| 1685 | 1686 | 1687 |
| 2 (乙丑) | 3 (丙寅) | 4 (丁卯) |
| 綱吉 (5代) | | |
| (四二歳)○二月奈良に来る○京に三井秋風を訪ふ○千那入門す○三月、伏見の任口上人を訪ふ○大津にて尚白・青亜入門す○水口驛にて土芳に逢ふ○桐葉亭に俳諧興行、熱田三歌仙成る○四月、伊豆の雲水僧より大顛和尚の遷化を聞く、知足亭の俳諧○五月、江戸へ歸る○六月、清風亭の俳諧○九月、其角芭蕉庵を訪ふ○この頃芭蕉庵に閑居し酒を愛す | (四三歳)○正月、俳諧興行され、「初懐紙」成る○三月、「古池や」の句なる○四月、本間自準に醫術を學ぶ○六月、素堂と和漢の俳諧興行○八月、「春の日集」上梓さる○冬、深川八貧なる○季下の妻を悼む○嵐雪の妻より紙衣を贈らる | (四四歳)○三月、去来江戸へ来る○四月、其角の亡母の追福俳諧行はる○嵐雪、庵を訪ふ○八月、其角と月見にゆく○曾良・宗波と鹿島紀行に出る○佛頂和尚・自準を訪ふ○九月、歸郷を決心し、所々に送別俳諧興行さる○十月、吉野紀行に發つ○十一月、尾州鳴海の安信亭・知足亭・寛言亭に歌仙をまく○三河の杜國を訪ふ○桐葉に簑を與ふ○其角の「續虚栗」上梓さる○十二月、一井亭の俳諧○故郷を訪ひ、父母なきを歎く○「四季之句合」出づ |
| 宗祇諸國物語○彼岸櫻(豊流)○明烏(一有)○星合集(輪雪)○白根嶽(調賞)○新山家(其角)○一星(調和等) | 漢和三五韻(由的)○春の日(荷兮)○一つ橋(清風)○蛙合(仙花)○丙寅紀行(風瀑)○貞京三ツ物(梅盛)○庵櫻(西吟) | 鹿島詣(芭蕉)○京日記(言水)○孤松(尚白)○丁卯集(一品)○野梅(宗旦)○吉原源氏(其角)○三月物 |
| 大顛和尚幻吁歿(年五七)○俳士常長歿○山鹿素行歿(年六四)○狩野安信歿 | 亀賀東武に赴く○其角本間自泉に逢ふ○任口歿○古澤鷺勤歿(年二二)○内藤風虎歿(年六七) | 河村瑞軒、淀河疏通の功を賞せらる○百三十年間廢せし大嘗會を行ふ |

| 東山 (113代) | | |
| --- | --- | --- |
| | 1688 | 1689 |
| | 元祿(戊辰) | 2(己巳) |
| 綱吉 (5代) | | |
| | (四五歲)○一月、伊賀の新大佛寺を訪ふ○二月、伊勢山田に來る○松坂に於て俳諧興行○三月、伊賀に歸り、探丸侯に招かる○杜國と吉野の花見に旅立つ○高野山に登る○四月、再び奈良に着く○須磨・山城・大津と遊ぶ○六月、美濃にて惟然と會ふ○岐阜の宜白亭に宿る○賀島落梧に招かれ「十八樓記」をものす○七月、知足亭・長虹亭に俳諧興行○八月、越人等と「更科紀行」に發つ○九月、深川の庵に歸る○素堂亭に重陽の宴を張る○十月、道圓の追善俳諧を興行○年の暮、盜人に遭ふ | (四六歲)○二月、芭蕉庵を賣すて杉風亭に宿る○三月、荷兮の「曠野」上梓○曾良と奥羽行脚に發つ○四月、日光・那須・白河・二本松から福島に出る○五月、飯塚より仙臺・松島・平家の中尊寺それから秋田の淸風亭・山形の風流亭・一榮亭を訪ふ○六月、羽黑山の呂丸、更に重行亭・令道亭を訪ひ象潟に出る○七月、酒田より新潟に入り聽心寺に俳諧興行、高田・市振の關を經て金澤に入る○八月、曾良・北枝と別れを福井の等裁を訪ひ、敦賀に入る、これより路通同行し、美濃に入る○九月、大垣の如行亭に宿る、更に伊勢へ向ふ○十月、伊賀にて「初時雨猿も云々」の句あり○十二月落柿舍に去來を訪ふ |
| | 五節句(順也)○四季題林後集(蛙子)○信天措(等躬)○日本歲事記(好古)○續の原(不卜)○靑むしろ(除風) | 其角十七條(其角)○前後園(吉水)○隅田川紀行(杉風)○せみの小川(晩翠)○花虛木(露川)○丁斧屑(如泉) |
| | 九月卅日改元○金子楚常歿(年二六)○小杉一笑歿(年三六)○里村昌程歿 | 季吟幕府の召にて歌所の總裁となる○高島玄札歿○岡田野水歿○生類憐みの令發せらる |

| 東山（113代） | | |
|---|---|---|
| 1690 | 1691 | 1692 |
| 3（庚午） | 4（辛未） | 5（壬申） |
| 綱吉（5代） | | |
| （四七歳）〇一月、膳所に新年を迎へ、「伊勢に出て國女を訪ふ〇二月、故郷を訪ふ〇三月、近江の珍碩を訪ひ「洒落堂記」をものす〇四月、國分山の幻住庵に入り、「閑居す〇凡兆・去來等の俳諧興行〇珍碩の「ひさご」出づ〇鬼貫、庵を訪ふ〇八月、無名庵に移る〇十六夜湖上に舟を浮べ「既望賦」をものす〇九月、乙州來る〇冬、京の景桃丸亭に俳諧興行 | （四八歳）〇無名庵にて持病に苦しむ〇三月、乙州の餞別俳諧行はる〇四月、京に遊び落柿舎に宿る〇五月、去來・凡兆の「猿蓑」出づ〇落柿舎を出て、大津に遊び、膳所の正秀亭に歌仙をまく〇十月、支考・桃隣と江戸へ發つ〇熱田の俳諧、三河の白雪亭の歌仙あり〇十一月、江戸に着き、橘町に假住ひをする | （四九歳）〇四月、不卜追善の俳諧興行〇五月、芭蕉庵再興さる〇森川許六蕉門に入る〇「閉關説」を作る〇九月、俳諧深川集成る〇十月、許六亭の俳諧興行〇素堂亭に忘年會開かる |
| 日本行脚文集（三千風）〇新三百韻（其角等）〇いつを昔（其角）〇丈居士（鬼貫）〇其袋（嵐雪）〇花摘（其角）〇都曲（言水）〇誰が家（其角）〇武津島（園水）〇假橋（明水） | 雑談集（其角）〇勧進牒（路通）〇寛永千句（正方・宗因）〇五の戯言（信徳）〇渡し舟（順水）〇焦尾琴（其角）〇小松原（只丸）〇遠隈鏡（良詮）〇百人一句（江水）〇卯辰集（北枝）〇新花鳥（好春） | 己が光（車庸）〇きさらぎ集（李範）〇葛の松原（支考）〇けし合（嵐蘭）〇誹林一字幽蘭集（沾徳）〇あしそろへ（只丸）〇千句前集（一晶）〇剣酒（友琴）〇すり火打（如泉）〇北の山（句空） |
| 坪井杜國歿〇鬼貫福島に移る〇越人[illegible]に歸參す〇近松門左衛門大阪にて著作す | 福田露言歿（六二）〇岡村不卜歿〇安川落梧歿〇熊澤蕃山歿（年七三）〇土佐光起歿（年七五） | 岡西惟中歿〇水戸黄門湊川碑を建立す |

| 東山（113代） | |
|---|---|
| 1693 | 1694 |
| 6（癸酉） | 7（甲戌） |
| 綱吉（5代） | |
| （五〇歳）〇二月、洒堂、京へ歸る〇三月、僧專吟を送る一文を稿す〇露沾侯に召さる〇五月、江戸を去る許六を惜み「柴門辭」を草す〇八月、嵐蘭の死を悼み「嵐蘭誄」を稿す〇「東順傳」を書く〇十月、素堂亭に重陽の宴をはる〇老齢の芭蕉、庵に閑居す | （五一歳）〇五月、野坡・孤屋・利牛の「俳諧炭俵集」上梓さる〇旅を思立ち、子珊亭に、餞別俳諧行はる〇佐谷の素覽亭の歌仙〇翌閏五月、伊賀へ着く〇落柿舍に宿り俳諧興行さる〇六月、曲翠亭に小宴をはる〇大津の木節を訪ふ〇七月、再び故郷へ歸り、壽貞尼の死を悼む〇猿雖亭の俳諧行はる〇八月、無名庵に入り、小宴をはる〇「續猿蓑」を編む〇九月、鄕里を去り、難波へ旅立つ〇洒堂亭に宿る〇畦止亭・車庸亭・泥足亭に俳諧興行さる〇十月十二日花屋仁左衛門の別屋にて歿す |
| 流川集（露川）〇萩の露（其角）〇深川（洒堂）〇阿羅野後集（荷兮）〇俳風弓（壺中）〇奈良土産（菊子）〇此花集（常牧）〇霜月歌仙（壺中）〇年々草（不角） | 枯尾花（其角）〇句兄弟（其角）〇或時集（嵐雪）〇寢轉草（丈草）〇別座鋪（子珊）〇二十五ヶ條（桃青）〇市の庵（洒堂）〇ひるねの種（荷兮）〇藤の實（素牛）〇童子教（順水） |
| 井原西鶴歿（年五二）〇松倉嵐蘭歿（年四七）〇榎本東順歿（年七二）〇松井宗且歿（年五六）〇其角雨乞の句をなす | 壽貞尼歿す〇卑猥の著作出版禁止〇杉山和一歿（年八二） |

昭和九年七月二十日印刷
昭和九年七月二十五日發行

定價四圓五十錢

著作權所有

著者　加藤紫舟
東京市澁谷區千駄ケ谷五丁目九〇二

發行者　石塚綱茂
東京市麴町區土手三番町二九

印刷者　谷口熊之助
東京市麴町區土手三番町二九

印刷所　谷口印刷所

東京市澁谷區千駄ケ谷五丁目九百二番地

發行所　天來書房
振替口座東京七二一二九番